松江市文化財調査報告書　第80集

西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

- 遅倉横穴墓群
- 米坂古墳群他

1999年3月

松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書　第80集

西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う

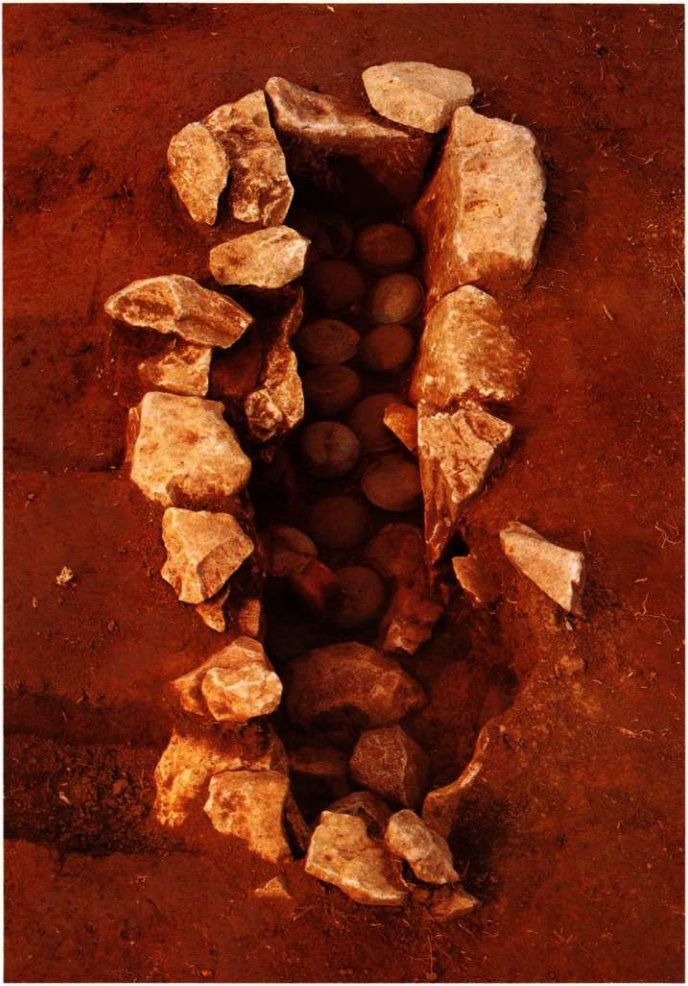
埋蔵文化財発掘調査報告書

- 遅倉横穴墓群
- 米坂古墳群他

1999年3月

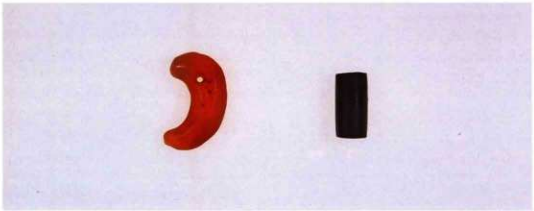
松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団



米坂古墳群埋葬施設D

米坂古墳群埋葬施設C（棺中央の左端に勾玉、右端に管玉）



埋葬施設C出土の玉

岩汐峠礫石経塚

経　石

例　　言

1．本書は、平成5年度から平成9年度にかけて松江市教育委員会および財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した、西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業にかかる発掘調査報告書である。なお、関連事業として実施した、大井2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業にかかる発掘調査の成果も掲載した。

2．本書で報告する発掘調査は、島根県松江農林振興センターから松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施したものである。

3．調査組織は下記のとおりである。

依頼者　島根県松江農林事務所（平成2年度～平成5年度）
　　島根県松江農林振興センター　農村整備部　農道整備課

主体者　松江市教育委員会

・平成2年度
（藤谷A・B遺跡発掘調査、蓮台横穴墓群試掘調査）
〈事務局・実施者〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	文化財係長	岡崎雄二郎
教育次長	北村　悦男	主事	昌子　寛光（調査担当）
社会教育課長	杉原　精訓	主事	寺本　康

・平成4年度（安蔵主遺跡試掘調査）
〈事務局・実施者〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	主事	昌子　寛光（調査担当）
生涯学習部長	松尾　光浩	主事	寺本　康
文化課長	中西　宏次	嘱託員	富田　茂雄
文化財係長	岡崎雄二郎		

・平成5年度（米坂遺跡試掘調査）
〈事務局〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	文化課長	村松　栄
生涯学習部長	中西　宏次	文化財係長	岡崎雄二郎

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長	吉岡　俊雄	調査員	瀬古　諒子（調査担当）
事務局長	口高　稔夫	嘱託員	北島　和子
調査係長	中尾　秀信		

・平成6年度（米坂遺跡発掘調査）
〈事務局〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	文化課長	中林　俊

生涯学習部長　中西　宏次　　文化財係長　岡崎雄二郎

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長　大塚　雄史　　調査員　江川　幸子（調査担当）

事務局長　佐藤千代光　　嘱託員　井上　修一

調査係長　中尾　秀信

・平成７年度（寺倉横穴墓群発掘調査）

〈事務局〉松江市教育委員会

教育長　伊藤　博之　　文化財係長　岡崎雄二郎

文化課長　中林　俊　（～６月）

柳原　知朗（７月～）

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長　大塚　雄史　　調査員　江川　幸子（調査担当）

事務局長　佐藤千代光　　嘱託員　宮本亜希子

調査係長　中尾　秀信

・平成８年度（米坂古墳群発掘調査）

〈事務局〉松江市教育委員会

教育長　諏訪　秀富（～４月）　文化財室長　岡崎雄二郎

原　敏　（５月～）　文化財係長　中尾　秀信

教育次長　石田　博

生涯学習課長　松本　修司

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長　大塚　雄史　　調査員　江川　幸子（調査担当）

事務局長　板垣　信治　　嘱託員　松下　剛

調査係長　瀬古　諒子

・平成９年度（米坂古墳群・柴尾遺跡発掘調査）

〈事務局〉松江市教育委員会

教育長　原　敏　　文化財室長　岡崎雄二郎

教育次長　田中寿美夫　　文化財係長　中尾　秀信

生涯学習課長　谷　正次

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長　大塚　雄史　　調査員　江川　幸子（調査担当）

事務局長　板垣　信次　　嘱託員　藤原　堅

調査係長　瀬古　諒子

・平成10年度（報告書作成事業）

〈事務局〉松江市教育委員会

教育長	原　敏	文化財室長	岡崎雄二郎
教育次長	田中寿美夫	文化財係長（主幹）	吉岡　弘行
生涯学習課長	谷　正次		

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長	宮岡　寿雄	調査係長	瀬古　諒子
専務理事	北村　悦男	調査員	江川　幸子
事務局長	柳浦　孝行	嘱託員	藤原　堅

なお、大井2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業にかかる発掘調査の調査体制は、下記のとおりである。

依頼者　島根県松江農林事務所

・平成2年度（岩汐峠遺跡試掘調査）

〈事務局・実施者〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	文化財係長	岡崎雄二郎
教育次長	北村　悦男	主事	昌子　寛光（調査担当）
社会教育課長	杉原　精訓	主事	寺木　康

・平成4年度（岩汐遺跡発掘調査）

〈事務局・実施者〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	主事	昌子　寛光（調査担当）
生涯学習部長	松尾　光浩	主事	金山　正樹
文化課長	中西　宏次	嘱託員	富田　茂雄
文化財係長	岡崎雄二郎		

・平成5年度（岩汐峠遺跡発掘調査）

〈事務局〉松江市教育委員会

教育長	諏訪　秀富	文化課長	村松　榮
生涯学習部長	中西　宏次	文化財係長	岡崎雄二郎
文化課長	村松　榮		
文化財係長	岡崎雄二郎		

〈実施者〉財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長	古岡　俊雄	調査員	江川　幸子（調査担当）
事務局長	日高　稔夫	嘱託員	伊藤　巌
調査係長	中尾　秀信		

4．発掘調査の実施および報告書作成にあたっては、下記の方々より多大なご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略、順不同）。

渡部貞幸（島根大学法文学部教授）、井上貴央（鳥取大学医学部教授）、西尾克巳（島根県埋蔵文化財調査センター）、内田律雄（島根県埋蔵文化財調査センター）、足立克巳（島根県埋蔵文化財調査センター）、丹羽野裕（島根県埋蔵文化財調査センター）、広江耕史（島根県埋蔵文化財調査センター）、錦田剛（島根県埋蔵文化財調査センター）、椿真治（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、深田浩（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター主事）、中原斉（鳥取県埋蔵文化財センター）、木原光（益田市教育委員会）、入江強一（西尾農免農道期成同盟会会長）、中村唯史

5．井上貴央氏（鳥取大学医学部教授）には遅倉横穴墓出土の人骨取り上げををお願いして、貴重な稿をいただき、本書に掲載した。

6．本書の作成には下記の者が携わった。

（遺物実測）荻野哲二（松江市教育委員会嘱託員）、遠藤正樹、井上、藤原、江川

（表作成）　三代梨沙、青山悦朗

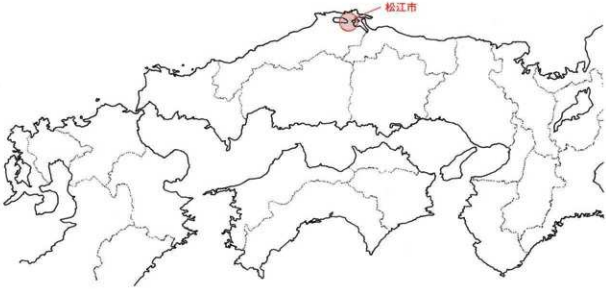
（浄　書）　青山、藤原、江川

（拓　本）　荻野、藤原、江川

7．本書に掲載した遺物写真は、島根県埋蔵文化財調査センターの撮影場を借用し、石川崇の指導を得て江川が撮影した。

8．本書の執筆、編集は江川がおこなった。

9．出土遺物は松江市教育委員会生涯学習課文化財室で保管している。



目　　次

カラー図版

第1章　調査に至る経緯と経過……1

第2章　位置と環境……3

第3章　調査報告……6

・遅倉横穴墓群……7

遅倉2号横穴墓出土の人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座　井上貴央……55

・藤谷A遺跡・藤谷B遺跡……69

・安蔵主遺跡……71

・米坂遺跡……75

・米坂古墳群……96

・柴尾遺跡……162

・岩汐遺跡……167

・岩汐峠遺跡……186

第4章　結　　語……206

図　　版

報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　松江市位置図 …… 1
第２図　調査遺跡位置図 …… 4
第３図　屋倉横穴墓群位置図 …… 7
第４図　横穴墓の呼称 …… 8
第５図　屋倉横穴墓群調査成果図 …… 9
第６図　１号横穴墓遺構実測図 …… 10
第７図　１号横穴墓壁面工具痕拓影 …… 11
第８図　１号横穴墓墓道セクション図 …… 12
第９図　１号横穴墓閉塞および遺物出土状況図 …… 13
第10図　１号横穴墓玄室内出土土器実測図 …… 14
第11図　１号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図 …… 14
第12図　１号横穴墓屍床土器実測図（１） …… 15
第13図　１号横穴墓屍床土器実測図（２） …… 16
第14図　１号横穴墓墓道出土土器実測図（１） …… 17
第15図　１号横穴墓墓道出土土器実測図（２） …… 18
第16図　１号横穴墓墓道出土土器実測図（３） …… 19
第17図　２号横穴墓遺構実測図 …… 20
第18図　２号横穴墓壁面工具痕拓影 …… 21
第19図　２号横穴墓墓道セクション図 …… 22
第20図　２号横穴墓閉塞および遺物出土状況図 …… 23
第21図　２号横穴墓玄室内出土土器実測図 …… 25
第22図　２号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図 …… 26
第23図　２号横穴墓墓道出土土器実測図 …… 26
第24図　２号横穴墓墓道出土耳環実測図 …… 26
第25図　２号横穴墓墓道下斜面出土土器実測図 …… 26
第26図　祭祀状遺構実測図 …… 27
第27図　祭祀状遺構出土土器実測図 …… 27
第28図　１、２号横穴墓間出土土器実測図 …… 28
第29図　１、２号横穴墓周辺出土土器実測図 …… 28
第30図　３号横穴墓遺構実測図 …… 29
第31図　３号横穴墓壁面工具痕拓影 …… 30
第32図　３号横穴墓墓道セクション図 …… 30
第33図　３号横穴墓閉塞および遺物出土状況図 …… 31
第34図　３号横穴墓玄室内出土土器実測図 …… 32
第35図　３号横穴墓屍床土器実測図 …… 33
第36図　３号横穴墓墓道出土土器実測図 …… 34
第37図　４号横穴墓遺構実測図 …… 35
第38図　４号横穴墓壁面工具痕拓影 …… 36
第39図　４号横穴墓墓道セクション図 …… 36
第40図　４号横穴墓閉塞および遺物出土状況図 …… 37
第41図　４号横穴墓閉塞石下の排水溝蓋検出状況図 …… 38
第42図　４号横穴墓玄室内出土土器実測図 …… 39
第43図　４号横穴墓墓道出土土器実測図（１） …… 40
第44図　４号横穴墓墓道出土土器実測図（２） …… 41

第45図　5号横穴墓遺構実測図 …… 42
第46図　5号横穴墓壁面工具痕拓影 …… 43
第47図　5号横穴墓墓道セクション図 …… 44
第48図　5号横穴墓閉塞及び遺物出土状況図 …… 45
第49図　5号横穴墓玄室内出土土器実測図（1） …… 46
第50図　5号横穴墓玄室内出土土器実測図（2） …… 47
第51図　5号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図 …… 48
第52図　5号横穴墓墓道出土土器実測図（1） …… 49
第53図　5号横穴墓墓道出土土器実測図（2） …… 50
第54図　落とし穴遺構実測図 …… 51
第55図　落とし穴壁面工具痕拓影 …… 51
第56図　T－1出土土器実測図 …… 52
第57図　T－2出土土器実測図 …… 52
第58図　T－3出土土器実測図 …… 53
第59図　T－4出土土器実測図 …… 53
第60図　藤谷A・B遺跡位置図 …… 69
第61図　藤谷B遺跡出土土器実測図 …… 70
第62図　安蔵主遺跡位置図 …… 71
第63図　安蔵主遺跡T－1平面図 …… 72
第64図　安蔵主遺跡T－1出土土器実測図 …… 72
第65図　安蔵主遺跡トレンチセクション図 …… 73
第66図　米坂遺跡位置図 …… 75
第67図　米坂遺跡試掘トレンチ配置図 …… 76
第68図　米坂遺跡試掘トレンチセクション図（1） …… 77
第69図　米坂遺跡試掘トレンチセクション図（2） …… 78
第70図　米坂遺跡T－5出土土器実測図 …… 79
第71図　米坂遺跡本調査成果図 …… 80
第72図　米坂遺跡東区遺構検出状況図 …… 81
第73図　米坂遺跡西区遺構検出状況図 …… 82
第74図　SX－01遺物出土状況図 …… 83
第75図　SX－02遺物出土状況図 …… 84
第76図　SD－01周辺遺物出土状況図 …… 84
第77図　SD－02周辺遺物出土状況図 …… 85
第78図　SD－03周辺遺物出土状況図 …… 85
第79図　SD－04周辺遺物出土状況図 …… 86
第80図　SX－03遺物出土状況図 …… 87
第81図　SX－04遺物出土状況図 …… 88
第82図　SX－05遺物出土状況図 …… 88
第83図　米坂遺跡東区出土土器実測図 …… 89
第74図　米坂遺跡西区出土土器実測図 …… 90
第85図　米坂遺跡出土砥石実測図 …… 91
第86図　米坂遺跡出土玉実測図 …… 91
第87図　米坂遺跡出土石器実測図 …… 92
第88図　米坂古墳群位置図および古墳分布図 …… 96
第89図　米坂古墳群調査前地形測量図 …… 98
第90図　米坂古墳群調査成果図 …… 100
第91図　1号墳検出状況および遺物出土状況図 …… 101
第92図　1号墳セクション図 …… 102
第93図　1号墳周溝出土遺物出土状況図 …… 103
第94図　1号墳周溝出土土器実測図 …… 103

第95図　1号墳周溝出土鉄製品実測図……103
第96図　1号墳墳丘下出土土器実測図……103
第97図　2号墳検出状況および遺物出土状況図……104
第98図　2号墳セクション図……105
第99図　2号墳周溝出土土器実測図……106
第100図　2号墳南側平坦面出土鉄製品実測図……106
第101図　3号墳検出状況および遺物出土状況図……107
第102図　3号墳セクション図……108
第103図　3号墳主体部および遺物出土状況図……109
第104図　3号墳主体部出土土器実測図……110
第105図　3号墳周溝出土土器実測図……110
第106図　4号墳検出状況および遺物出土状況図……111
第107図　4号墳セクション図……112
第108図　4号墳主体部実測図……113
第109図　紡錘車実測図……113
第110図　5号墳検出状況図……114
第111図　5号墳セクション図……115
第112図　5号墳主体部実測図……116
第113図　5号墳主体部出土土器実測図……116
第114図　6号墳検出状況および遺物出土状況図……117
第115図　6号墳セクション図……117
第116図　7号墳検出状況図……118
第117図　7号墳セクション図……119
第118図　7号墳主体部実測図……120
第119図　8号墳盛り土観察場所……121
第120図　8号墳セクション図……121
第121図　9号墳検出状況および遺物出土状況図……122
第122図　9号墳セクション図……123
第123図　9号墳周溝遺物出土状況図……124
第124図　9号墳周溝出土土器実測図……124
第125図　9号墳主体部実測図……125
第126図　9号墳南西平坦面出土土器実測図……126
第127図　10号墳検出状況および遺物出土状況図……126
第128図　10号墳セクション図……126
第129図　10号墳周溝出土土器実測図……126
第130図　11号墳検出状況図……127
第131図　11号墳セクション図……128
第132図　11号墳主体部実測図……128
第133図　12号墳検出状況および遺物出土状況図……129
第134図　12号墳セクション図……130
第135図　12号墳主体部実測図……131
第136図　12号墳周溝出土土器実測図……132
第137図　12号墳周辺出土土器実測図……132
第138図　埋葬施設A遺構実測図……133
第139図　埋葬施設B遺構実測図……135
第140図　埋葬施設C・D・E遺構検出状況図……136
第141図　埋葬施設C遺構実測図……137
第142図　埋葬施設C出土土器実測図……138
第143図　埋葬施設C出土玉類実測図……139
第144図　埋葬施設D遺構検出状況図……140

第145図　埋葬施設D埋土セクション図……140
第146図　埋葬施設D出土土器実測図（1）……141
第147図　埋葬施設D出土土器実測図（2）……142
第148図　埋葬施設D出土土器時速図（3）……143
第149図　埋葬施設D出土土製実測図……143
第150図　埋葬施設E遺構実測図……145
第151図　埋葬施設E供献土器実測図……146
第152図　埋葬施設E床面出土土器実測図……146
第153図　埋葬施設E出土鉄製品実測図……146
第154図　埋葬施設F遺構（蓋石）実測図（1）……147
第155図　埋葬施設F遺構（蓋石下）実測図（2）……148
第156図　埋葬施設G遺構実測図……149
第157図　埋葬施設H遺構実測図……151
第158図　9号墳墳丘下の土壙実測図……152
第159図　米坂古墳群出土石器実測図……153
第160図　2号墳北東の古墳測量図……156
第161図　柴尾遺跡位置図……162
第162図　柴尾遺跡調査区地形測量図……163
第163図　柴尾遺跡トレンチセクション図（1）……164
第164図　柴尾遺跡トレンチセクション図（2）……165
第165図　岩汐遺跡位置図……168
第166図　岩汐遺跡トレンチおよび調査区配置図……169
第167図　岩汐遺跡トレンチセクション図……170
第168図　岩汐遺跡G－1平面図……171
第169図　岩汐遺跡セクション図（1）……172
第170図　岩汐遺跡セクション図（2）……173
第171図　岩汐遺跡T－1出土遺物実測図……174
第172図　岩汐遺跡T－2出土遺物実測図……175
第173図　岩汐遺跡T－3出土遺物実測図……175
第174図　岩汐遺跡T－4出土遺物実測図……175
第175図　岩汐遺跡1G出土遺物実測図……176
第176図　岩汐遺跡2G出土遺物実測図……177
第177図　岩汐遺跡3G出土遺物実測図……178
第178図　岩汐遺跡4G出土遺物実測図……179
第179図　岩汐遺跡5G出土遺物実測図……179
第180図　岩汐峠遺跡位置図および調査区……187
第181図　岩汐遺跡経塚周辺の地形図……188
第182図　経塚平面図……189
第183図　経塚セクション図……190
第184図　経塚出土土器実測図……190
第185図　経塚出土古銭拓影……191
第186図　経石実測図（Ⅰ）……192
第187図　経石実測図（Ⅱ）……193
第188図　経石実測図（Ⅲ）……194
第189図　経石実測図（Ⅳ）……195
第190図　経石実測図（Ⅴ）……196
第191図　経石実測図（Ⅵ）……197
第192図　経石実測図（Ⅶ）……198
第193図　岩汐峠遺跡A区出土土器実測図……200
第194図　岩汐峠遺跡東端調査区ピット検出状況図……201

図 版 目 次

図版1 （上）遠倉横穴墓群遠景（南より）
（下）遠倉横穴墓群近景（南西より）
図版2 （上）遠倉横穴墓群調査後全景
（下）1号横穴墓（左）と2号横穴墓（右）の位置関係
図版3 （上）3号横穴墓（左）と4号横穴墓（中）と5号横穴墓（右）の位置関係
（下）作業風景
図版4 （上）1号横穴墓閉塞石出土状況
（下）1号横穴墓玄室検出状況
図版5 （上）1号横穴墓墓道遺物出土状況
（中）1号横穴墓墓道完掘状況
（下）1号横穴墓墓道セクション
図版6 （上）1号横穴墓閉塞部
（中）1号横穴墓玄室左側遺物出土状況
（下）1号横穴墓玄室完掘状況
図版7 （上）2号横穴墓閉塞石出土状況
（下）2号横穴墓玄室右奥遺物出土状況
図版8 （上）2号横穴墓墓道土器出土状況
（中）2号横穴墓墓道耳環出土状況
（下）2号横穴墓セクション
図版9 （上）2号横穴墓玄室遺物出土状況
（中）2号横穴墓人骨出土状況
（下）2号横穴墓玄室甕片出土状況
図版10（上）3号横穴墓墓道遺物出土状況
（下）3号横穴墓玄室遺物出土状況
図版11（上）3号横穴墓閉塞石出土状況
（中）3号横穴墓墓道セクション
（下）3号横穴墓墓道完掘状況
図版12（上）3号横穴墓玄門遺物出土状況
（中）3号横穴墓玄室右側遺物出土状況
（下）3号横穴墓玄室左側遺物出土状況
図版13（上）4号横穴墓墓道遺物出土状況
（下）4号横穴墓玄室遺物出土状況
図版14（上）4号横穴墓墓道セクション
（中）4号横穴墓墓道遺物出土状況（玄室より写す）
（下）4号横穴墓墓道完掘状況
図版15（上）4号横穴墓閉塞石出土状況
（中）4号横穴墓閉塞石下の排水溝蓋
（下）4号横穴墓閉塞部完掘状況
図版16（上）4号横穴墓玄室遺物出土状況
（中）4号横穴墓奥壁の抉り込み
（下）4号横穴墓玄室完掘状況
図版17（上）5号横穴墓墓道遺物出土状況
（下）5号横穴墓玄門太刀出土状況
図版18（上）5号横穴墓閉塞石出土状況
（中）5号横穴墓墓道遺物出土状況
（下）5号横穴墓墓道完掘状況
図版19（上）5号横穴墓太刀出土状況
（中）5号横穴墓玄室遺物出土状況
（下）5号横穴墓玄室左側遺物出土状況
図版20（上）5号横穴墓玄門部ノミ痕
（中）5号横穴墓天井部の形状
（下）5号横穴墓玄室完掘状況
図版21（上）祭祀状遺構検出状況
（下）落とし穴検出状況
図版22（上）1号横穴墓出土土器集合写真
（下）2号横穴墓出土土器集合写真
図版23（上）3号横穴墓出土土器集合写真
（下）4号横穴墓出土土器集合写真
図版24（上）5号横穴墓出土土器集合写真
図版25 1号横穴墓玄室出土遺物
図版26 1号横穴墓墓道出土遺物
図版27 1号横穴墓墓道出土遺物
1号横穴墓玄室出土須恵器床大甕
図版28 2号横穴墓玄室出土遺物
図版29 2号横穴墓玄室出土遺物
2号横穴墓墓道出土遺物
図版30 2号横穴墓玄室出土甕片接合状況
図版31 祭祀状遺構出土遺物
2号横穴墓墓道下斜面出土遺物
1・2号横穴墓周辺出土遺物
図版32 1・2号横穴墓周辺出土遺物
図版33 3号横穴墓玄室出土遺物
3号横穴墓玄室出土須恵器床大甕
図版34 3号横穴墓墓道出土遺物
図版35 3号横穴墓墓道出土遺物
図版36 4号横穴墓玄室出土遺物
図版37 4号横穴墓玄室出土遺物
4号横穴墓墓道出土遺物
図版38 4号横穴墓墓道出土遺物
図版39 5号横穴墓玄室出土遺物
図版40 5号横穴墓墓道出土遺物
図版41 5号横穴墓玄室出土遺物
図版42 5号横穴墓玄室出土遺物
図版43 1号横穴墓玄室出土鉄製品X線写真
2号横穴墓玄室出土鉄製品X線写真
図版44 5号横穴墓玄室出土太刀X線写真
図版45 5号横穴墓玄室出土太刀・刀子X線写真
図版46 2号横穴墓出土人骨
図版47（上）藤谷A遺跡調査前近景
（下）藤谷A遺跡完掘状況
図版48（上）藤谷B遺跡遠景
（中）藤谷B遺跡近景
（下）藤谷B遺跡T－1完掘状況
図版49（上）安蔵主遺跡遠景
（下）安蔵主遺跡近景

図版50（上）安蔵寺遺跡Ｔ－１完掘状況
（下）安蔵寺遺跡Ｔ－２完掘状況
図版51（上）米坂遺跡西側遠景
（下）米坂遺跡東側遠景
図版52（上）Ｔ－１完掘状況
（中）Ｔ－２完掘状況
（下）Ｔ－３完掘状況
図版53（上）Ｔ－４遺構検出状況
（中）Ｔ－５遺物出土状況
（下）Ｔ－６完掘状況
図版54（上）米坂遺跡全面調査前近景（東より）
（下）米坂遺跡東区完掘状況
図版55（上）米坂遺跡西区完掘状況
（下）作業風景
図版56（上）ＳＸ－01完掘状況
（中）ＳＸ－01遺物出土状況
（下）ＳＸ－01坏出土状況
図版57（上）ＳＸ－02完掘状況
（中）ＳＸ－02坏出土状況
（下）ＳＤ－01完掘状況
図版58（上）ＳＤ－02完掘状況
（中）ＳＤ－02遺物出土状況
（下）ＳＤ－03完掘状況
図版59（上）ＳＤ－03内傾竈検出状況
（中）ＳＤ－04、ＳＤ－05完掘状況
（下）土師器甕出土状況
図版60（上）ＳＸ－03遺物出土状況
（中）ＳＸ－03遺物出土状況
（下）ＳＸ－04完掘状況
図版61（上）ＳＸ－05遺物出土状況
（中）ＳＸ－０５完掘状況
（下）作業風景
図版62　米坂遺跡Ｔ－５出土土器
米坂遺跡東区出土土器
図版63　米坂遺跡東区出土土器
米坂遺跡西区出土土器
図版64　米坂遺跡西区出土土器
図版65　米坂遺跡出土砥石
米坂遺跡出土玉
米坂遺跡出土石器
図版66（上）米坂古墳群調査前遠景（東より）
（下）米坂古墳群調査前近景
図版67（上）伐開後全景
（中）調査前の３～８号墳
（下）調査前の１、２号墳
図版68（上）米坂古墳群残丘検出後全景（南西より）
（下）尾根上の残丘検出状況
図版69（上）１号墳周溝検出状況
（下）２号墳残丘検出状況
図版70（上）３号墳残丘・主体部検出状況
（下）４号墳残丘・主体部検出状況
図版71（上）５号墳残丘・主体部検出状況
（下）６号墳残丘検出状況
図版72（上）７号墳残丘・主体部検出状況
（下）９号墳残丘・主体部検出状況
図版73（上）１０号墳周溝検出状況
（下）１１号墳残丘・主体部検出状況
図版74（上）１２号墳残丘・主体部検出状況
（下）重機を利用した北西斜面の調査風景
図版75（上）１号墳墳丘南北セクション
（中）１号墳周溝西側セクション
（下）１号墳周溝内遺物出土状況
図版76（上）２号墳墳丘東西セクション
（中）２号墳周溝西側セクション
（下）２号墳周溝内遺物出土状況
図版77（上）２号墳周溝内遺物出土状況
（中）３号墳周溝西側セクション
（下）３号墳周溝内土器出土状況
図版78（上）３号墳主体部遺物出土状況
（中）３号墳主体部平面プラン
（下）３号墳主体部完掘状況
図版79（上）４号墳墳丘南北セクション
（中）４号墳主体部検出状況
（下）４・５号墳間周溝内紡錘車出土状況
図版80（上）５号墳墳丘東西セクション
（中）５号墳墳丘南北セクション
（下）５号墳周溝西側セクション
図版81（上）５号墳主体部の石、遺物散乱状況
（中）５号墳主体部と石の出土状況
（下）５号墳主体部完掘状況
図版82（上）６号墳周溝南側セクション
（中）７号墳墳丘南北セクション
（下）７号墳周溝南側セクション
図版83（上）７号墳主体部検出状況
（中）８号墳墳丘
（下）１～７号墳墳丘除去後全景
図版84（上）９号墳墳丘南北セクション
（中）９号墳周溝内遺物出土状況
（下）９号墳主体部完掘状況
図版85（上）10号墳周溝セクション
（中）11号墳墳丘南北セクション
（下）11号墳主体部完掘状況
図版86（上）12号墳墳丘南北セクション
（中）12号墳墳丘東西セクション
（下）12号墳周溝東側セクション
図版87（上）12号墳主体部の石材出土状況
（中）12号墳主体部の石一次除去後
（下）12号墳主体部白色粘土検出状況
図版88（上）12号墳主体部完掘状況
（中）12号墳周溝内遺物出土状況
（下）埋葬施設Ａ検出状況
図版89（上）埋葬施設Ｂ蓋石検出状況
（中）埋葬施設Ｂ完掘状況
（下）埋葬施設Ｂ完掘状況（北西より）
図版90（上）埋葬施設Ｃ・Ｄ・Ｅ検出状況（東より）
（下）埋葬施設Ｃ・Ｄ・Ｅ検出状況（北より）

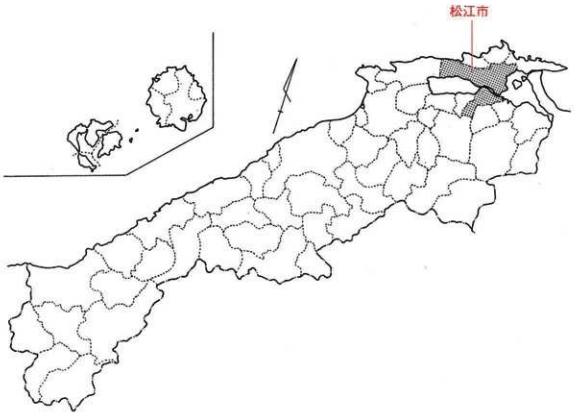
図版91（上）埋葬施設C蓋石検出状況
（中）埋葬施設C蓋石一次除去後
（下）埋葬施設C蓋石・須恵器床除去後
図版92（上）埋葬施設C石棺内遺物出土状況
（下）埋葬施設C石槽基礎石
図版93（上）埋葬施設D検出状況
（下）埋葬施設D玉類出土状況
図版94（上）埋葬施設D壺出土状況
（中）埋葬施設D西側側石
（下）埋葬施設D東側側石
図版95（上）埋葬施設E供献土器出土状況
（下）埋葬施設E蓋石検出状況
図版96（上）埋葬施設E蓋石以下の土層
（中）埋葬施設E小口石と平面プラン
（下）埋葬施設E床面遺物出土状況
図版97（上）埋葬施設F蓋石検出状況
（中）埋葬施設F蓋石一次除去後
（下）埋葬施設F床石検出状況
図版98（上）埋葬施設F掘り方検出状況
（下）埋葬施設G検出状況
図版99（上）埋葬施設H蓋石検出状況
（中）埋葬施設H石槨内セクション
（下）埋葬施設H完掘状況
図版100（上）米坂古墳群作業風景
（下）現地説明会風景
図版101　1号墳周溝出土遺物
2号墳周溝出土遺物
2号墳南側平坦面出土鉄製品
3号墳主体部出土遺物
図版102　3号墳周溝及び周辺出土遺物
5号墳主体部出土遺物
4・5号墳間出土紡錘車
9号墳周溝出土遺物
図版103　9号墳南西平坦面出土遺物
9号墳南西平坦面出土鉄鉾
図版104　10号墳周溝出土遺物
12号墳周溝出土遺物
12号墳周辺出土土器
埋葬施設D出土遺物集合写真
図版105　埋葬施設C主体部出土遺物
埋葬施設D屍床土器
図版106　埋葬施設D屍床出土器
図版107　埋葬施設D屍床土器（上より）
図版108　埋葬施設D屍床土器（上より）
図版109　埋葬施設D屍床土器（上より）
埋葬施設D出土玉類
埋葬施設D出土土器
図版110　埋葬施設E主体部床面出土土器
埋葬施設E供献土器
埋葬施設E主体部床面副葬の刀子
米坂古墳群出土石器
図版111　米坂古墳群出土鉄製品X線写真
図版112（上）柴尾遺跡遠景
（下）柴尾遺跡近景
図版113（上）T－1完掘状況
（中）T－1セクション
（下）T－1セクション（一部）
図版114（上）T－1杭出土状況
（中）T－2完掘状況
（下）T－2セクション
図版115（上）T－3完掘状況
（中）T－3セクション
（下）柴尾遺跡トレンチ配置状況
図版116（上）岩沙遺跡遠景
（下）岩沙遺跡近景
図版117（上）T－2完掘状況
（中）1G完掘状況
（下）1G西壁セクション
図版118（上）T－1西壁セクション（部分）
（中）2G完掘状況（北より）
（下）2G完掘状況（東より）
図版119（上）2G西壁セクション
（中）3G完掘状況（東より）
（下）3G完掘状況（西より）
図版120（上）T－2西壁セクション（部分）
（中）3G西壁セクション
（下）4G西壁セクション
図版121　岩沙遺跡T－1出土遺物
岩沙遺跡T－2出土遺物
図版122　岩沙遺跡T－2出土遺物
岩沙遺跡T－3出土遺物
岩沙遺跡1G出土遺物
図版123　岩沙遺跡2G出土遺物
図版124　岩沙遺跡3G出土遺物
図版125　岩沙遺跡4G出土遺物
岩沙遺跡5G出土遺物
図版126（上）岩沙峠遺跡遠景（東より）
（下）岩沙峠遺跡近景（西より）
図版127（上）礫石経塚検出状況（南より）
（下）礫石経塚検出状況（西より）
図版128（上）経石出土状況
（中）経石の遺別作業風景
（下）D区完掘状況
図版129　礫石経塚出土中世土師器
礫石経塚出土古銭
礫石経地塚出土経石集合写真
図版130　経石（Ⅰ）
図版131　経石（Ⅱ）
図版132　経石（Ⅲ）
図版133　経石（Ⅳ）
図版134　経石（Ⅴ）
図版135　経石（Ⅵ）
図版136　経石（Ⅶ）
図版137　岩沙峠遺跡A区出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

島根県松江農林振興センターでは、昭和61年度において朝酌町から西尾町をつらぬき西川津町に至る農道建設として「西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」を計画した。これにともない松江市教育委員会が、昭和61年、62年度、平成２年度に建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査及び試掘調査を実施した結果、古墳群、横穴墓群、遺物散布地など合計７カ所の遺跡を発見し、それぞれ「藤谷Ａ遺跡」、「藤谷Ｂ遺跡」、「遅倉横穴墓群」、「安蔵主遺跡」、「米坂遺跡」、「米坂古墳群」、「柴尾遺跡」と呼称することとした。

その後の協議の結果、遺跡の現状保存が困難であることから工事着工前に発掘調査を実施することとなり、工事の進度にあわせながら平成２年度の「藤谷Ａ・Ｂ遺跡」を始めとして平成９年度の「柴尾遺跡」まで、実質６年間の歳月をかけて発掘調査を実施した。なお、現地における発掘調査は平成４年度までは松江市教育委員会が実施し、平成５年度以降は財団法人松江市教育委員会が実施した。以下、簡単に概略を記す。

平成２年度の「藤谷Ａ・Ｂ遺跡」調査では若干の土器片が出土したのみで遺構は検出できなかった。同年度の「遅倉横穴墓群」調査では、須恵器が表採されたためトレンチ調査を実施した結果、横穴墓群が存在することが明確となった。その後、電気探査調査により、建設予定範囲内に約16穴の横穴墓が分布している可能性が指摘されたため、島根県松江農林振興センターと協議をおこなった結果、工



第１図　松江市位置図

事の設計変更をおこない、斜面の上半分を現状保存し、下半分について全面調査を実施することに決定した。

平成4年度の「安蔵寺遺跡」調査では、砕片化した土器片がまとまって出土したが、明かな遺構は検出されなかった。土層観察の結果、遺物は客土層の中から出土していることから、トレンチ調査のみで調査を終了した。

平成5年度の「米坂遺跡」調査では、地表面における土器片の散乱が著しく遺構の存在がほぼ確実であったため、トレンチ調査を実施して遺跡の広がりを確認して本調査の範囲をしぼり込むことを目的とした。

平成6年度の「米坂遺跡」調査では、前年度調査の結果を受けて全面調査を実施した。その結果、古墳時代後期初頭から半ば頃の住居跡を検出した。

平成7年度の「遅倉横穴墓群」調査では、平成2年度の調査結果をふまえて開発斜面全面調査を実施した。その結果、出雲地方横穴墓導入期の横穴墓を含む5穴の横穴墓を検出した。そこで、さらに島根県松江農林振興センターと協議した結果、再度工事の設計変更をして2穴が保存されることとなった。

平成8年度の「米坂古墳群」調査では、当初6基の古墳調査を予定していたが、実際に伐開をおこなったところ9基の古墳が確認されたため、西側半分は次年度にまわし、東側半分について全面調査を実施した。また、墳丘半分が開発範囲にかかっていた1基については、協議の結果、設計変更をおこない保存することとなった。調査の結果、古墳時代中～後期の古墳6基と墳丘を持たない埋葬施設7基を検出した。

平成9年度の「米坂古墳群」調査では、前年度に残した西側半分について調査を実施した。その結果、古墳時代中～後期の古墳3基を検出した。また、「柴尾遺跡」調査では、最初におこなったトレンチ調査で土層を観察したところ農道予定地内に遺跡の存在を示す状況が認められなかったこと、流れ込みの遺物も皆無であったことから全面調査には至らなかった。

以上が、「西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」にかかる発掘調査の経緯と経過である。7遺跡について発掘調査を実施したわけであるが、農道設計段階から埋蔵文化財包蔵地をできるだけ避け、発掘調査の開始直後や終了後においても最大限に遺跡を現状保存するように協議をおこない、実現化できたことはたいへん喜ばしいことであった。

なお、本書では、上記の農道整備に先だって実施した「大井2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」にかかる発掘調査の成果も掲載した。これは島根県松江農林振興センターが昭和59年度に策定した農道整備事業で、平成2年度に松江市教育委員会が埋蔵文化財の分布調査を実施し、「岩汐遺跡」「岩汐峠遺跡」の2カ所の遺跡を発見し、発掘調査を実施したものである。

「岩汐遺跡」は、松江市教育委員会が平成4年度に発掘調査を実施し、遺構は検出されなかったが、古墳時代を中心とする大量の遺物が出土している。

「岩汐峠遺跡」は、財団法人松江市教育文化振興事業団が平成5年度に発掘調査を実施し、経塚を検出したものである。

第Ⅱ章　位置と環境

「西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」による農道建設は、朝酌町から西尾町を経て西川津町へ続くもので、和久羅山南麓のこのルートは、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』に記載のある、朝酌渡から島根郡家に続き隠岐国へ至る通路、「枉北道」と一部並走し、一部重なっていると推定される。[1]「枉北道」は律令時代に官の道として制定されたものであるが、隠岐国は黒曜石の産地であり、先土器時代から本土との交流があったこや、地形上の制約から考えてもその道ははるか昔から人々に利用されてきた道であったに違いない。

今回の調査に協力していただいた作業員の１人から、「幼少時に持田町に住んでいた頃、米坂越えを歩いて矢田の渡しで舟に乗って、武内神社（八幡町）にお詣りしていた。車が無かった頃はそれが当たり前だったよ」という話しを聞いた。なんと「枉北道」が20世紀半ば迄主要道として利用されていたとは、驚きであると共に改めて歴史の面白さを痛感した次第である。

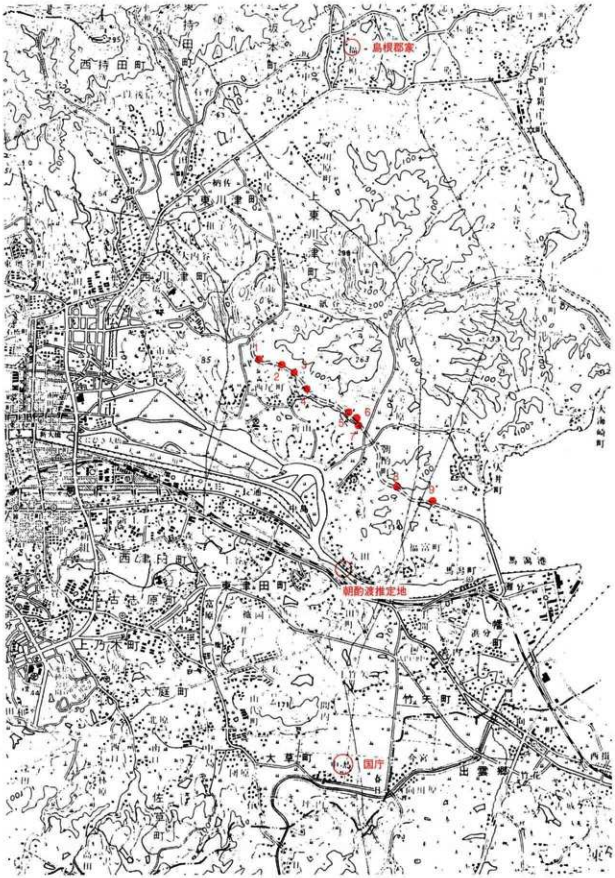
さて、西尾町は、和区羅山から派生する多数の低丘陵とその間の谷からなる、おだやかな地形を呈している。低丘陵や緩斜面、適度な平地、南面する大橋川は人間の生活にとってたいへん好都合な場所と思われる。

周知の遺跡は廟所古墳と観音山古墳（いずれも一辺30mの方墳）２基と少ないが、それはこの場所がこれまで大きな開発にさらされていないという好運のせいであろう。今回の調査によって古墳時代中期から後期後期半ばにかけての住居跡、古墳群が発見されたように、地面下に埋もれている遺跡数はまだまだ多いと推察される。

朝酌町は西尾町の東隣に位置する。南北に細長い谷が走り、平地部分は少ないが、そのわりには古墳時代後期後葉から律令時代を中心とする周知の遺跡数が多い。

現時点で知られている集落跡は少なく、遺物散布地として西尾町との町境付近の新山遺跡、松カ崎遺跡程度だが、これは氷山の一角であろう。一方、古墳の数は多く、特に横穴式石室を内部主体に持つ古墳が非常に多い。大橋川沿いの丘陵上には全長62mを測る前方後円墳の魚見塚古墳[2]が位置するほか、墳丘は失っているが、整美な石棺式石室を内部構造に持つ朝酌岩屋古墳が、首長墓的な存在で、古墳時代後期における大豪族の存在を物語っている。

また、小規模古墳の数が非常に多く、谷の西に位置する廻原丘陵には廻原古墳群があり、30余基の古墳が分布していたと伝えられている。[3]戦後の開墾によってほとんどが消滅しているが、現在でも石棺式石室を持つ古墳１基、天井石が露出している古墳２基が確認できる。開墾時に出土した遺物や丘陵上に散乱する土器片から、古墳時代後期後葉以降に群集墳的に築かれたものと推察される。周辺には朝酌小学校校庭古墳や朝酌小学校前古墳がある。また、遅倉横穴墓群の北東100mの丘陵上には、５基からなる九日宮古墳群が築かれている。３基については内部主体が石棺式石室であることが知られている。さらに、これらの古墳とは谷を挟んで東側丘陵には３基からなる荒神谷古墳群、２基からなる朝酌上神社古墳群、三王谷古墳が分布している。朝酌地区の古墳で特徴的なことは、内部主体に石棺式石室を持つものが多いということであろう。



第２図　調査遺跡位置図（SCALE　１／25000）

大井町は朝酌町の東隣に位置する。近年の干拓によって平地が広がっているが、それまでは中海に面する丘陵と丘陵間の谷地形がほとんどを占めていた。

ここは、『出雲国風土記』にも「大井浜。……又、陶器を造れり。」と記されているように、古代における出雲地方の代表的な須恵器生産地で、特に6世紀後半から奈良期にかけては、出雲地域の須恵器生産をすべてまかなう大生産地であった。現時点で須恵器窯として知られている遺跡は7カ所で、窯数がわかっているのは3遺跡、合計9基を数えるが、発見されていない窯数はかなり多いものと推測される。また、須恵器工人に関係が深いと思われる住居跡がイガラビ遺跡や岩沢A遺跡、別所遺跡で見つかっている。古墳の数も多く、別所古墳、8基からなるイガラビ古墳群[注(1)]、2基からなる池ノ奥古墳群、5基からなるイズキ山古墳群などが知られている。いずれも、古墳時代後期以降の横穴式石室を内部主体に持つ小規模古墳である。

ここで興味深いことは、大井町と朝酌町ではほぼ同時期の小古墳が多数分布しているのに、朝酌町に多く見られる石棺式石室を内部主体に持つ古墳が、大井町では少ないということである。どういうわけか、石棺式石室を持つ古墳は大庭町周辺、朝酌町周辺、持田町周辺に集中して分布しており、これらの地域は、「枕北道」の道筋と一致するのである。少々道筋からそれたようだが、このことは朝酌地区を語るうえで重要な意味をもつものと考える。

以上では今回の調査場所全域を対象とした、おおまかな位置と環境を記した。詳細は各遺跡ごとに後述することとする。

註(1)服部旦「朝酌地区と『出雲国風土記』」『島根の古代文化第1号」島根県古代文化センター(1993年)
(2)「魚見塚古墳」『八雲立つ風土記の丘』No140島根県立八雲立つ風土記の丘(1996年)
(3)東森市良「朝酌みの古墳文化」『松江市立女子高等学校研究紀要第1号』(1970年)
(4)「イガラビ遺跡」『島根県松江市松江東工業団地内発掘調査報告書』(1990年)

1	柴尾遺跡	4	安蔵主遺跡	7	藤谷A遺跡
2	米坂古墳群	5	藤谷B遺跡	8	岩汐峠遺跡
3	米坂遺跡	6	遅倉横穴墓群	9	岩汐遺跡

(番号は第2図に対応する)

第Ⅲ章 調査報告

「西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業」にかかる事前発掘調査として、遅倉横穴墓群、藤谷A遺跡、藤谷B遺跡、安蔵主遺跡、米坂遺跡、米坂古墳群、柴尾遺跡について調査を実施した。その結果として、横穴墓群、遺物散布地、住居跡、古墳群といった多彩な遺跡の調査成果を得ることができたので、報告する。

また、前記の事業に先立つ「大井2期地区農林漁業用用揮発油税財源身替農道整備事業」にかかる事前発掘調査として、岩汐遺跡、岩汐峠遺跡について発掘調査を実施しており、その結果、遺物散布地、礫石経塚の調査成果を得ているので、これらについても報告する。

ここに報告する調査成果は、大井町から朝酌町を経て西尾町まで、『出雲国風土記』に記された朝酌郷を、大橋川とほぼ平行に横断して調査をおこなったもので、この地域に関して良好な考古資料が得られたと確信している。この資料を様々な面で活用していただけることを願っている。

調査遺跡一覧表

遺跡名	遺跡の種類	時代	備考
遅倉横穴墓群	横穴墓	古墳時代後期	5穴調査。 山陰初現期タイプの横穴墓検出。
藤谷A遺跡	散布地	古墳時代・現代	遺構は検出されなかった。
藤谷B遺跡	散布地	古墳時代・現代	遺構は検出されなかった。
安蔵主遺跡	散布地	古墳時代中期～現代	客土中から遺物が出土。 遺構は検出されなかった。
米坂遺跡	住居跡	古墳時代中期～後期	掘立柱建物の住居跡検出。
米坂古墳群	古墳群	古墳時代中期～後期	古墳12基と墳丘を持たない埋葬施設8基を検出。
柴尾遺跡			調査区内に遺跡は存在しなかった。
岩汐遺跡	散布地	古墳時代後期～平安	遺構は存在しなかった。灰原関係の遺物を含む多量の遺物が出土。
岩汐峠遺跡	経塚	戦国時代末期	礫石経塚を検出

遅倉横穴墓群

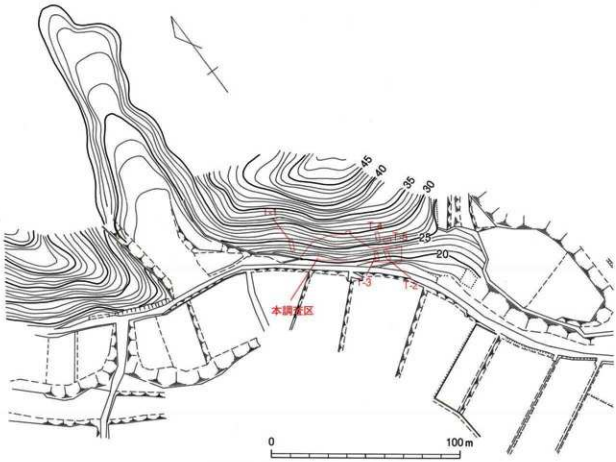
位置と環境

遅倉横穴墓群は、松江市朝酌町字遅倉1173－1に所在する。

そこは和久羅山から派生する低丘陵先端部の南面する急傾斜地で、調査前は雑木林であった。遺跡の南側は東西に細長い谷になっており、現在は水田耕作がおこなわれている。

朝酌町一帯の土質は赤土主体で、これまでは横穴墓は存在しないだろうと言われてきたが、今回の調査で初めて大横穴墓群が存在することがわかった。

遅倉横穴墓群周辺の遺跡を概観すると、古墳時代後期を中心とする遺跡、とりわけ小古墳の数が非常に多い。遅倉横穴墓群から谷を挟んで200m南方の丘陵上には廻原古墳群があり、現在は３基しか残っていないが、かつては30基を越える古墳が分布していたという。また、北方100mの丘陵上には九日宮古墳群があり、５基の古墳が分布している。両古墳群とも７世紀代の古墳と推測されており、遅倉横穴群よりやや新しい築造であるが、遅倉横穴墓群はこれらの古墳群の先駆け的存在で、７世紀代にはいると、遅倉横穴墓群周辺は一大墓域の様相を呈しているのである。これらの一大墓域を築いた人々の居住地域については明確となっていない。



第３図　遅倉横穴墓群周辺地形図

調査の概要

運倉横穴墓群は、分布調査をおこなった際に凹状地形が見られたため、平成２年度に試掘調査および電気探査調査を実施した結果、横穴墓群の存在が明確となったものである。

調査は、平成７年４月25日から同年10月19日まで、実質80日間をついやして、開発区域全面の約500㎡について実施した。調査地は、急勾配の斜面である上、南面する道路は往来のある農道で、農道の向こうは耕作中の田圃であった。したがって、廃土は上方から少しずつ慎重に道路上に落とさねばならず、その都度重機で廃土を遠隔地へ運び去る作業を繰り返し、廃土処理の面で非常に神経を使う調査となった。

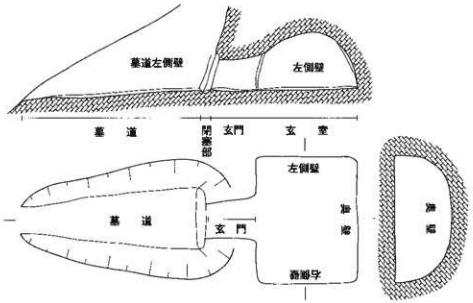
調査は、まず存在が確認されていた１号横穴墓周辺から開始した。１号横穴墓は玄門部から玄室まで天井部がすべて大きく崩落しており、崩落土の除去作業には１週間を費やした。１号横穴墓の墓道検出時に、東側で２号横穴墓の墓道堆積土や遺物が確認された。２号横穴墓は比較的玄室内の流入土が少なく、調査区内では唯一人骨が遺残する横穴墓であった。

１号横穴墓の西側上方と、２号横穴墓東側にも、横穴墓の墓道特有の弓なり状黒色土が検出されて横穴墓の存在がわかったが、開発範囲からわずかに外れていたため調査は実施しなかった。

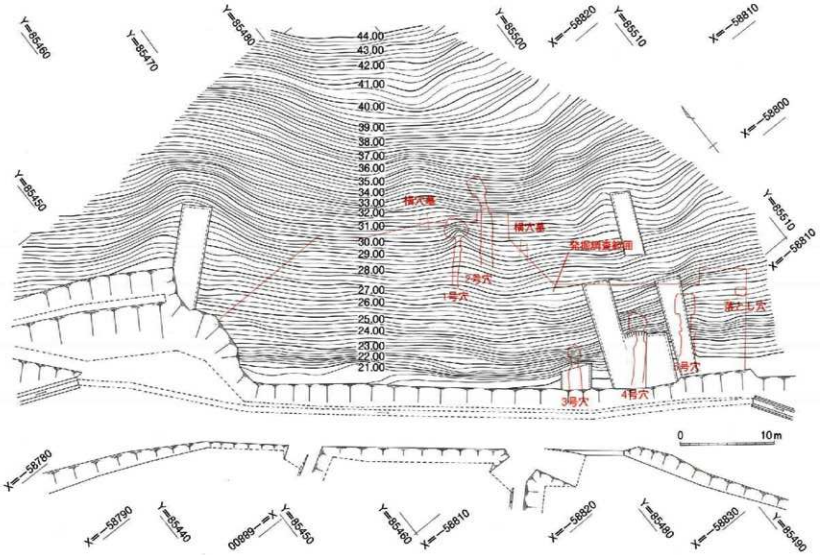
調査区の上方では、１、２号横穴墓の２穴について調査をおこない、少しずつ地山検出を下方に広げていった。その結果、電気探査で４カ所の空洞が推定されていた調査区西側半分からは遺構は検出されず、調査区東側で試掘調査の結果でその存在がすでにわかっていた３、４、５号横穴墓についての発掘調査を実施した。

調査区の地山は、軟石を多く含む赤土で、２号横穴墓を除いては天井部の崩落が著しく、残念ながら遺構の残存状況はきわめて悪かったが、反面、横穴墓掘削者の高い技術力に敬服した次第である。

なお、本書での横穴墓部分名称は、第４図のとおりとする。



第４図　横穴墓の呼称



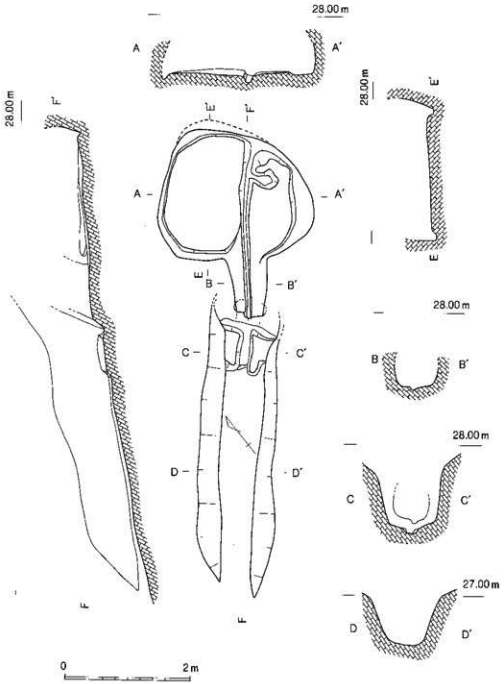
第５図　遅倉横穴墓群調査成果図

1号横穴墓

1号横穴墓は調査区のほぼ中央上方に位置しており、標高は26～27mを測る。玄室の天井が落盤して空洞ができていたため、分布調査の時点でその存在が確認されていた。

・墓道（第6図）

墓道は狭長で、幅は前端側で50cm、中央部で60cm、閉塞側で75cm、長さは4.4mを測る。高さは墓道奥壁の残存部分で1.5mを測り、床面は閉塞部に向かって高く傾斜している。



第6図　1号横穴墓遺構実測図

閉塞部直前では、地山を長さ65cm、高さ12cmに小高く削り残しており、中央部には閉塞部から続く排水溝を設けている。

・墓道内の土層（第８図）

地山直上には、軟質の地山石を多量に含んだ濁褐色土層（27層）が、かなり広範囲に広がっている。この層に含まれる石は大小様々であるが、大きいものでは80cmをこえ、一次閉塞に利用されていたものと考えられる。閉塞部付近では、27層の上にふかふかした褐色土（22層）や明褐色土（21層）が盛られている。これらは二次閉塞時の盛り土であろう。その上には黒色土（19層）が堆積している。この黒色土中からは土器類が多数出土した。黒色土より上の土層は自然堆積によるものであろう。したがって、１号横穴墓は、初葬後少なくとも１回は開口があったものと考えられる。

・閉塞部（第６図）

主軸に対して直交する方向に溝が掘られている。溝幅は30～40cmで、深さは20cm前後である。閉塞材は現存しなかったが、墓道の21層、22層の閉塞部側の端が斜めにきれいにそろっていることから、板材のような有機物が利用されていたと思われる。

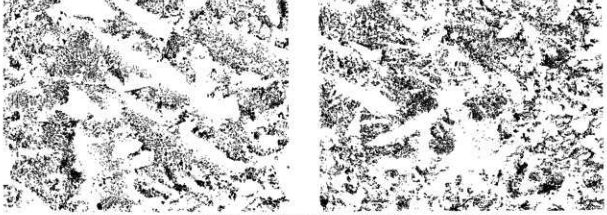
・墓道遺物出土状況（第９図）

墓道床面直上から出土した遺物は、14－５、６、７、２の須恵器の蓋坏で、いずれも閉塞部に近い場所から出土した。そのほかは、50～60cm上方の黒色土中からの出土した。完形で出土したものは少なく、15－１は口縁部をドーナツ状に欠損しており、故意的に割られたような状況であった。

・玄門部（第６図）

羨道部は無く、玄門のみで墓道と玄室を繋いでいる。

玄門部は墓道より１段高く作られており、長さ90cm、幅は閉塞部側で45cm、玄室側で60cmを測る。天井が崩落しているので高さは不明である。断面は丸みを帯びた加工で、床面と壁面の境界は明瞭でない。床面中央部には玄室から閉塞部へ続く排水溝が掘られている。排水溝は、幅約10cm、深さ約５cmを測る。



（玄室左側壁）　第７図　１号横穴墓壁面工具痕拓影　（玄室右側壁）

・玄室（第６図）

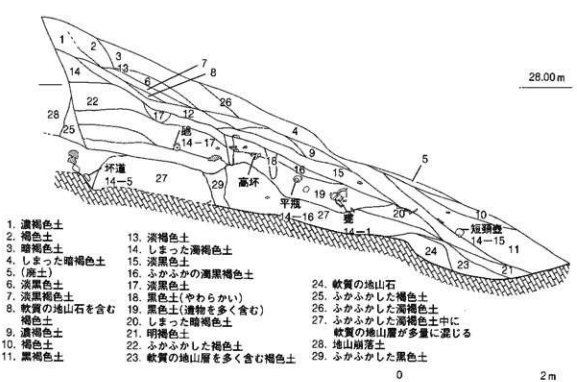
玄室の平面は不整形で、左側が角丸方形、右側が半円形を呈し、奥行き2.1m、最大幅2.4mを測る。天井は崩落しており高さは不明であるが、床面から立ち上がる稜線は無く、おそらく低いドーム状であったと思われる。床面はやや奥壁側が高いが水平に近い。周縁には排水溝が巡り、主軸上にも左右を分かつように排水溝が掘られている。

この玄室は、明らかに左側の屍床を重視した作りで、左側の屍床は角丸方形を呈し、奥行き1.8m、最大幅1.2mを測る。これに対し、右側の屍床は楕円形を呈し、排水溝の作りも粗雑で、奥行き1.5m、最大幅0.7mを測る狭い不整形な作りである。

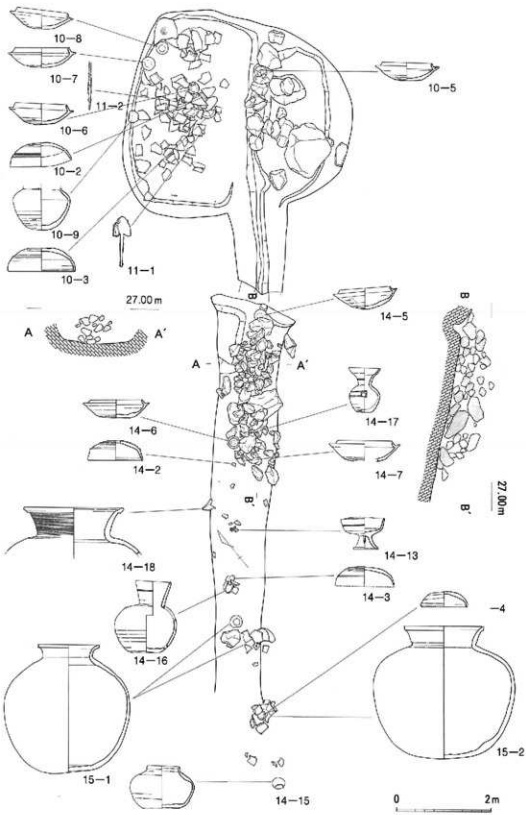
玄室掘削時の工具痕を観察すると、刃先がコの字形の工具を使用し、刃先全面ではなく刃先の約半分を壁面に押し当てて、引っ掻くように掘削した痕跡がうかがえる（第７図）。それは、この横穴墓が掘られた場所の土質が、水分を多く含有する赤土の中に大量の軟質池山石を含んでいるため、力任せに軟石を砕きながら横穴を穿とうとした結果と推察される。

・玄室内遺物出土状況（第９図）

左側屍床は、須恵器の甕片がまばらに敷かれた須恵器床である。この甕片を復原すると２個体の大甕（12図、13図）が使用されていることがわかったが、口縁部分は屍床には使われてはおらず墓道周辺から散在して出土した。また、短頸壺（10－９）も出土したがこれも口縁部分は故意的に打ち欠かれていた。葬送時に器物の口縁部を欠くという行為は、一般的に見られるが、この横穴墓では屍床大甕の口縁部についてもこだわっていたようである。蓋坏は、蓋は正位置で、坏はすべて上下逆位置で出土した。



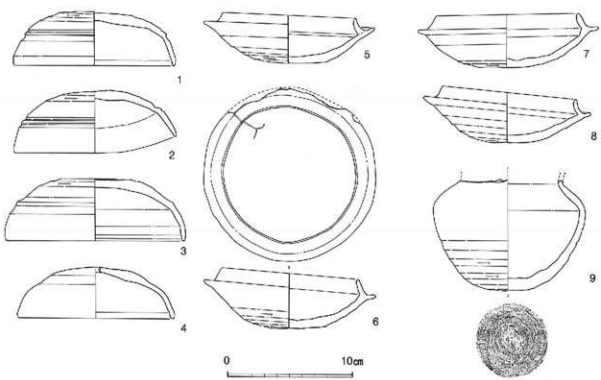
第８図　１号横穴墓墓道セクション図



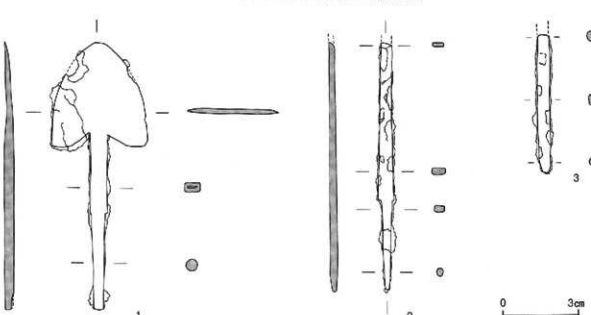
第9図　1号横穴墓閉塞および遺物出土状況図

坏の10－７、８は、位置が多少不自然であるが、枕として利用されていたものと考えられ、二時開口の時に移動されたと思われる。屍床のほぼ中央部分からは鉄鏃３点が出土した。

右側屍床は、床面直上から巨大な石を含めて多数の地山石が床面直上から出土した。これらの石は中央部の排水溝の上にも位置していることから、一次閉塞後に天井から崩落したものと思われる。二次開口時にはこれらの石は除去せずに、周囲の土砂のみを除去したのであろう。また、この崩落石の



第10図　１号横穴墓玄室内出土土器実測図

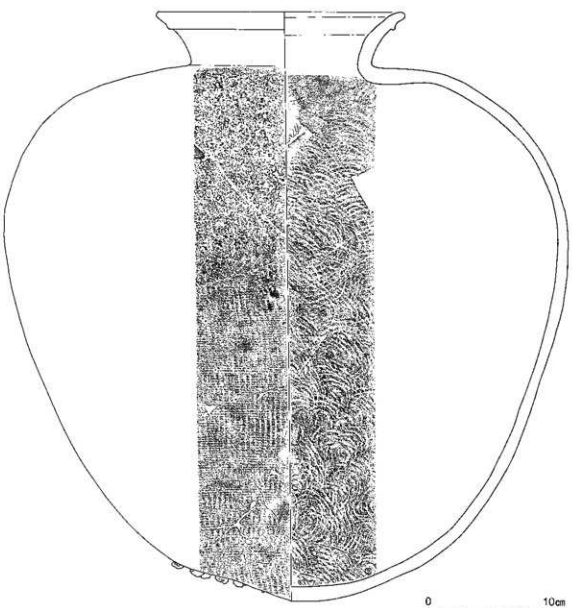


第11図　１号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図

直上からは坏1点（10－5）が、上下逆位置で出土していることから、これは二次開口の時に左側屍床から移動されたものと考えられる。崩落石の下からは遺物は出土しておらず、ここが屍床として利用された痕跡は見られない。

・遺物

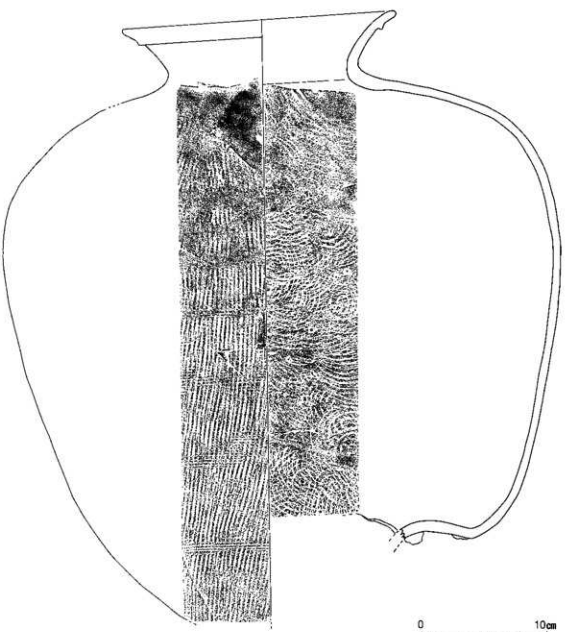
横穴墓からの出土遺物としては古いタイプの須恵器が多い。玄室内から出土した蓋坏の蓋は、口縁端部の内面に若干段の痕跡が残り、天井部は明瞭な回転ヘラケズリを施している。坏は、立ち上がりが内傾するが、やや高めで、底部は丁寧な回転ヘラケズリを施している。墓道床面直上から出土した蓋坏もほぼ同様である。これらが初葬時の副葬品であろう。



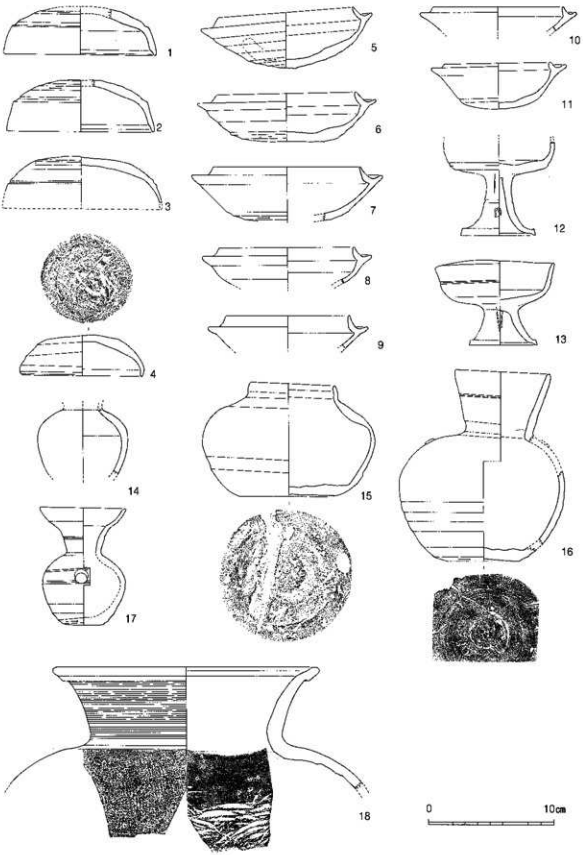
第12図　1号横穴墓屍床大甕実測図（1）

また、少し新しいタイプの須恵器も出土しており、玄室出土の10図4や墓道出土の14図4、10、11、16などがそれにあたる。

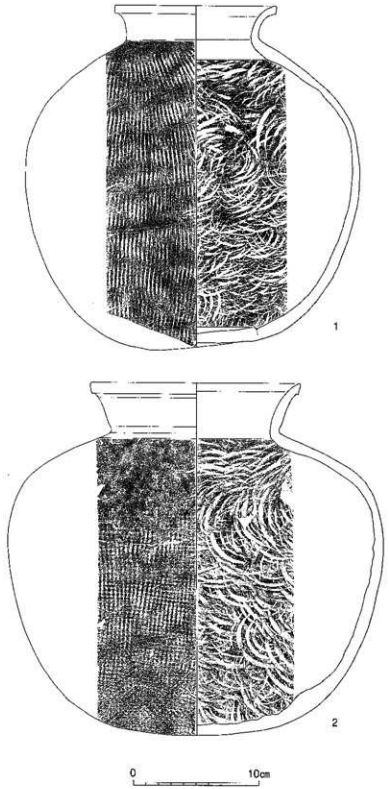
屍床に使われた大甕は、2点とも口縁の立ち上がりが短いものである。窯の中では正立させたまま底部を3点で支えて焼成したらしく、2点とも底部には等間隔に3カ所のくぼみが見られる。13図の大甕は底部の変形やひび割れが著しく、実用品ではなかったと思われる。



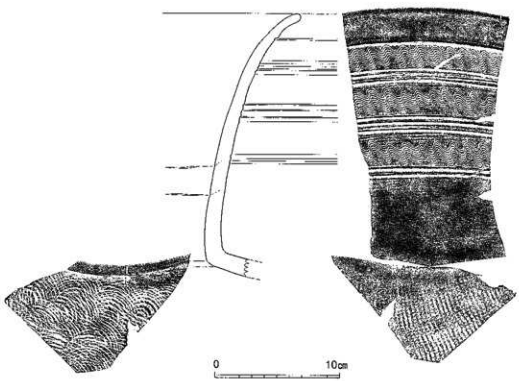
第13図　1号横穴墓屍床大甕実測図（2）



第14図　1号横穴墓墓道出土土器実測図（1）

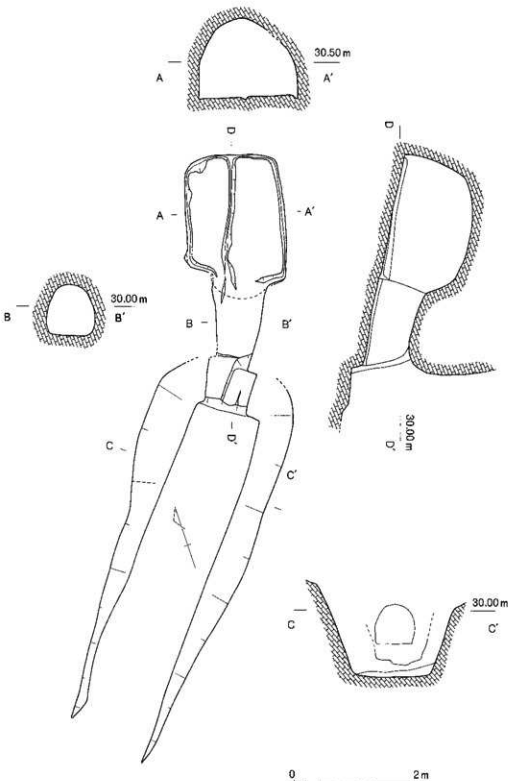


第15図　1号横穴墓墓道出土土器実測図（2）



第16図　1号横穴墓墓道出土土器実測図（3）

2号横穴墓



第17図　2号横穴墓遺構実測図

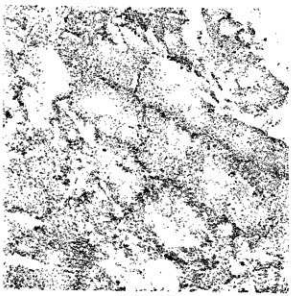
2号横穴墓は1号横穴墓の墓道東側の肩部の検出時に、東に広がる黒色土層を確認して初めてその存在がわかったものである。1号横穴墓との位置関係は、墓道肩部を一部共有するように東接しているが、墓道前端部で比べると、2号横穴墓の方が1.5m高い位置に作られており、標高は28.50mを測る。

・墓道（第17図）

1号横穴墓に比べて幅広で長く、平面は前端部がやや開く長方形を呈している。幅は前端部で1.2m、閉塞側で1m、高さは2.4mを測る。床面は閉塞部に向かってやや高く傾斜している。

・墓道内の土層（第19図）

縦断セクションを観察すると、層位関係から見た初葬後の閉口の痕跡は判然としないが、横断セク



（玄室左側壁）

（奥壁の小動物の爪跡）

（玄室右側壁）

第18図　2号横穴墓壁面工具痕拓影

ションを観察すると、初葬後の開口状況がよくわかる。

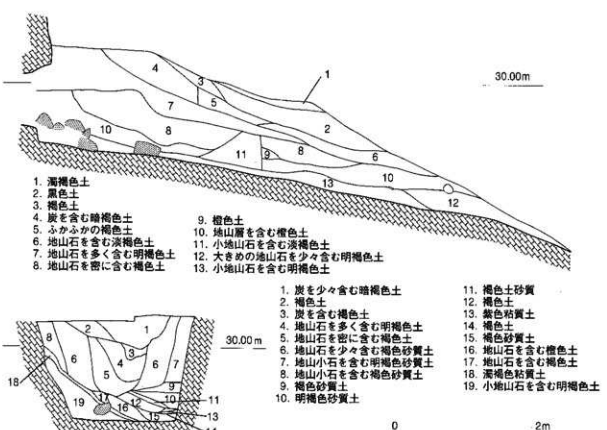
横断セクションの7層、8層とそれ以降の番号の層が初葬時の埋土である。二次開口の際に掘った部分は6層を含めてそれより小さい数字の層である。そして6層と6層に挟まれた部分を一旦埋め戻しており、3次開口のために掘られた部分が、3～5層である。当然、三次開口後に埋め戻した層は1～5層ということになる。したがって、2号横穴墓は、初葬後に少なくとも2回は開口されていると思われる。

・墓道遺物出土状況（第20図）

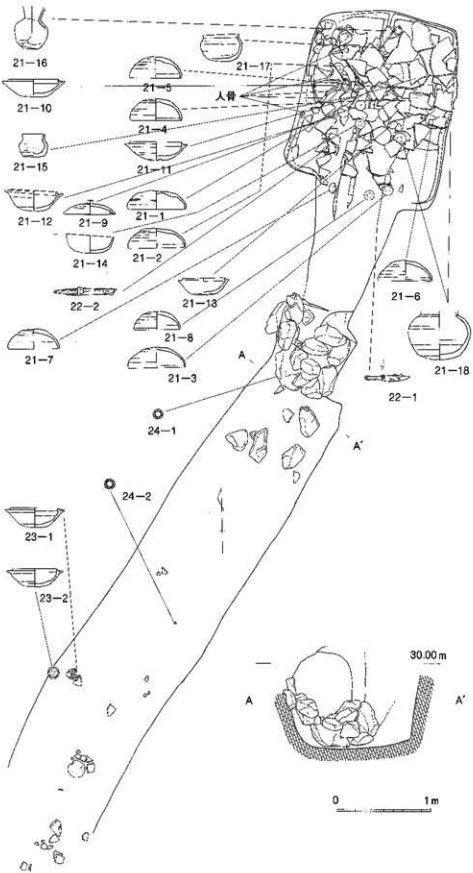
墓道から出土した遺物は少なかった。床面直上からは坏2点（23－1、2）が正位置で出土し、これらが初葬時の供献遺物であろう。床面より少し浮いた位置からは耳環（24－2）が出土した。追葬時の掻き出し遺物であろう。墓道前端付近では甕片等がかなり浮いた位置から出土しており、追葬時の掻き出しか、もしくは供献遺物と考えられる。

・閉塞部（第17図）

墓道と羨道入り口の間に閉塞部が設けられている。溝状の掘り込みは無かったが、墓道と羨道の高低差を25cmと高くすることによって、閉塞材の固定を助けている。大きめの白然石が羨道内に流れ込むような状況で出土しているが、数量の面からしてこれらの石材だけで閉塞ができたとは考えられないので、まず板材のような有機物で閉塞した後、さらに石材で固定をはかったと推察される。そして、有機物の閉塞材が朽ちた段階で石材が羨道部に流れ込んだのが発掘時の状況であろう。



第19図　2号横穴墓墓道セクション図



第20図　2号横穴墓閉塞および遺物出土状況図

・羨道部（第17図）

墓道より20cm高くなっている。幅は閉塞部側で約60cm、玄門側で80cm、奥行きは最長部で70cmを測る。天井は一部崩落しているが、残存部の高さは70cm弱を測る。床面は墓道部側にやや高く傾斜しており、墓道部右端から閉塞部中央にかけて、左側が高くなる段差が設けられている。前述したが、羨道内には閉塞石が散乱しており、その下からは24－1と対になると思われる耳環（24－1）が出土した。

・玄門部（第17図）

墓道と羨道の主軸は玄門部入り口で西方に12度曲がっている。

玄門部は羨道よりやや高くなっており、幅は羨道側で60cm弱、玄室側でやや広がり90cm、奥行きは1.3m、高さは80cm弱を測る。床面は玄室側に高く傾斜しており、玄室から続く排水溝の端が一部かかっているが、玄門部としての施設は見られない。

玄門部の土質は、地山内の軟質の礫が少なく、工具の刃先全面を利用して比較的スムーズに掘り進んだようである。主軸の方位が変化したのは、この土質を追ったためかもしれない。

・玄室（第17図）

玄室の平面は、主軸方向に長い角丸長方形である。幅は玄門側で1.6m、奥壁側で1.5m、長さは2mを測る。床面は奥壁側が高く傾斜しており、周縁と主軸上には幅10cm、深さ5cm前後の排水溝を掘り、左右に屍床を作り出している。天井はアーチ形で最高部は1.25mを測る。床面から壁面に立ち上がる稜線は無い。

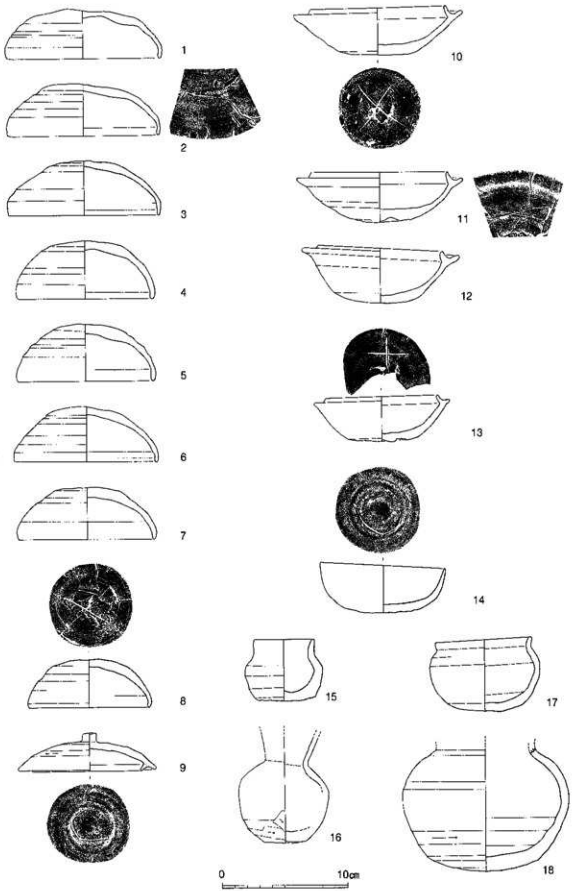
玄室内はさらに加工し易い土質で、刃先がコの字形の工具を、下半部では斜め方向に、上半部では上下方向にスムーズに操って加工している痕跡が認められる。

・玄室内遺物出土状況（第20図）

玄室内は足の踏み場に困るほど、大量の須恵器、須恵器片が出土した。右側の屍床は基本的には須恵器床であろうが、須恵器床にしては大きすぎる甕片が二重、三重に重なって出土した。また、それらの甕片の隙間から21－1、4、10、12の須恵器が出土した。埋葬時の様子を想像すると、壁に立て掛けられた甕片が1点見られたことから、周囲の壁に甕片を立て掛けていたことも考えられるし、甕片を掛け布団状に利用していたことも考えられる。また、追葬時に邪魔なものとして集積されたことも考えられよう。ただ、壁面に小動物の爪痕が残っていたので、遺物の在り方は埋葬時とは若干異なっているという目をもって全体を見なければならない。

左側の屍床も基本的には須恵器床であろうが、右側に比べてやや甕片が少ない。ここには人骨が遺残していたが、下顎骨のすぐ近くに大腿骨が位置しており、小動物の仕業であろうか、大きく原位置を動かされた状況であった。

玄室内には左右を問わず、多量の須恵器の器物が出土した。21－14、18は口縁部を打ち欠かれた状態であった。須恵器以外では、刀子が2点出土した。

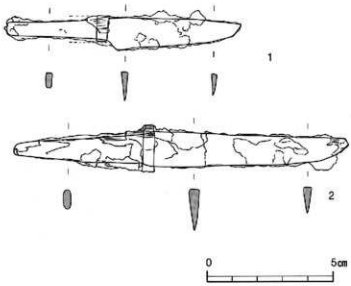


第21図　2号横穴墓玄室内出土土器実測図

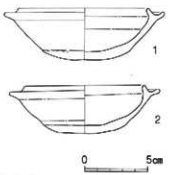
・遺物

玄室から出土した蓋坏は、3形式に分かれる。第21図を見ると、1、2、3、10、11が1グループ、4、5、6、7、8、12、13が1グループ、9、14が1グループである。遺物のみからみても、初葬後2回以上開口したことがうかがえる。

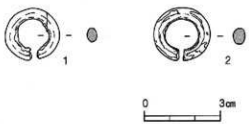
さて、玄室から大量に出土した甕片を接合してみたところ、甕の形状を呈さず(図版30)、窯内で大きく焼き歪んで使いものにならない不良品を利用したことがうかがえる。



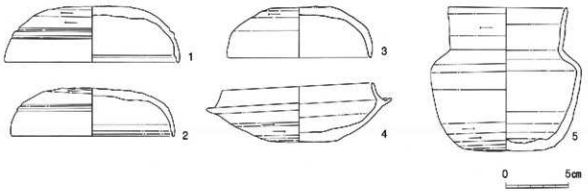
第22図　2号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図



第23図
2号横穴墓墓道出土土器実測図



第24図
2号横穴墓墓道出土青銅製品実測図



第25図　2号横穴墓墓道下斜面出土土器実測図

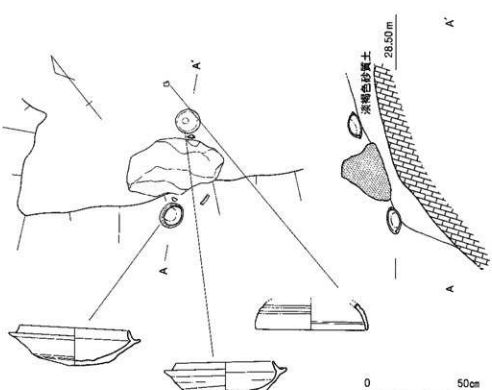
祭祀状遺構（第26図）

2号横穴墓の東の標高28.70mには、東西2m、南北1mを測る平坦面があり、約50cmの石を挟んで蓋坏が出土する場所があった。平坦面の存在から、祭祀状遺構としてとりあつかう。2号横穴墓にともなうものか、その東に位置する未発掘の横穴墓にともなうものかは不明であるが、遺物（第27図）を観察した限りでは2号横穴墓掘削以前のものと考えられる。

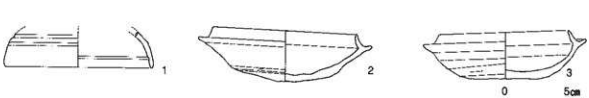
1、2号横穴墓周辺について

1、2号横穴墓の周辺からは多くの須恵器が出土した（第29図）。1、2号横穴墓関連の土器も多く混じっていると思われるが、1、2号横穴墓東西の未調査区に位置する横穴墓に関連する土器も混じっていると思われる。

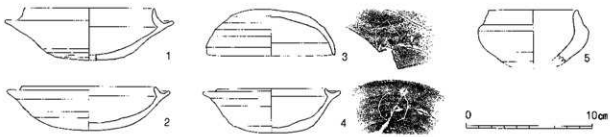
したがって、1、2号横穴墓周辺出土土器として図面を掲載する。個々の遺物についての詳細は後頁の遺物観察表を参照されたい。



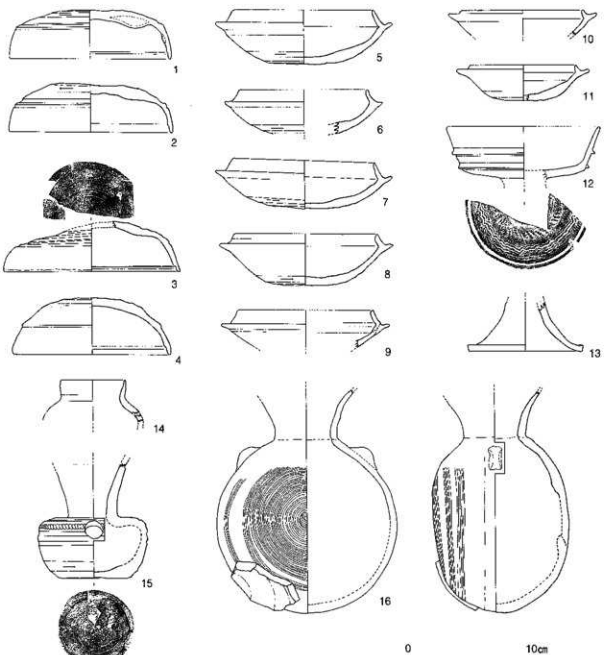
第26図　祭祀状遺構実測図



第27図　祭祀状遺構出土土器実測図



第28図　1、2号横穴墓間出土土器実測図



第29図　1、2号横穴墓周辺出土土器実測図

3号横穴墓

3号横穴墓は1号横穴墓より7m低い標高19.00mに位置する。工事用の道を作る際に、切り通しで弓なり状の黒色土が観察でき、遺物も出土していたため、分布調査の時点でその存在は確認できていた。

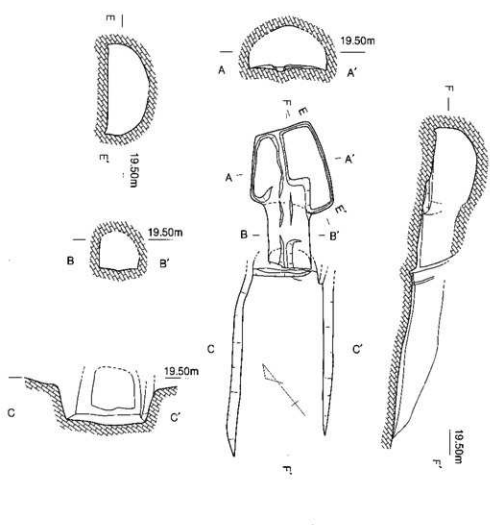
・墓道（第30図）

工事用の道により、前端部分は失っている。

残存する墓道の幅は、先端部分で1.4m、閉塞部側で1.1m、長さは2.9mを測る。墓道奥壁の高さは1.5mを測る。閉塞部の手前20～30cmの地点では、右側の壁がカギ状に10cm入り込んで、疑似羨道部のような形状を呈しているが、左壁には見られないため、墓道の一部として扱う。床面は、閉塞部に向かってやや高く傾斜している。

・墓道内の土層（第32図）

単純で、セクションからは二次開口の痕跡は認められない。



第30図　3号横穴墓遺構実測図

第31図　3号横穴墓壁面工具痕拓影

・墓道遺物出土状況（第33図）

遺物はたくさん出土したが、床面直上からは出土しなかった。

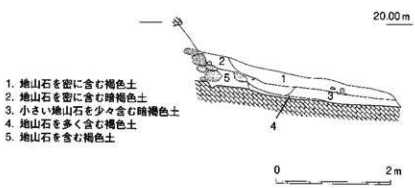
遺物は、床面より20～30cm上方の、地山石を少々含む暗褐色土の上面から出土した。蓋坏は無かったが、それ以外のバラエティーに富んだ器種の須恵器が出土した。須恵器は転倒はしていたが、36－3、7、9で顕著に見られるように、原位置を動いていないかのような出土状況であった。これらの土器を供献して祭祀をおこなった直後に、盛り土で覆ってしまったのであろうか。

・閉塞部（第30図）

主軸と直交する方向に、幅10cm、深さ5cmの溝を掘っている。閉塞物を立て掛けるための溝と考えられるが、検出できた閉塞物は高く積まれた大小の自然石のみであった。これらの石だけでも閉塞は可能と考えられるが、上部に若干の隙間が見られる。閉塞部に溝が掘られている以上、積み石は、板材等の有機質の閉塞物を固定するものであったと思われる。なお、有機質の閉塞物が消滅していても、石積みは崩れることなく形状を保って現存していた。

・玄門部（第30図）

玄門部の幅は、閉塞側で70cm弱、玄室側で70cm弱、長さは85～90cm、高さは60cmを測る。数値からもわかるように、天井が非常に低く、調査時は四つん這いで出入りをした。床面は墓道より一段高くなっており、玄室側にやや高く傾斜していた。排水溝は主軸上に掘られているが、中央部分で一旦途切れている。



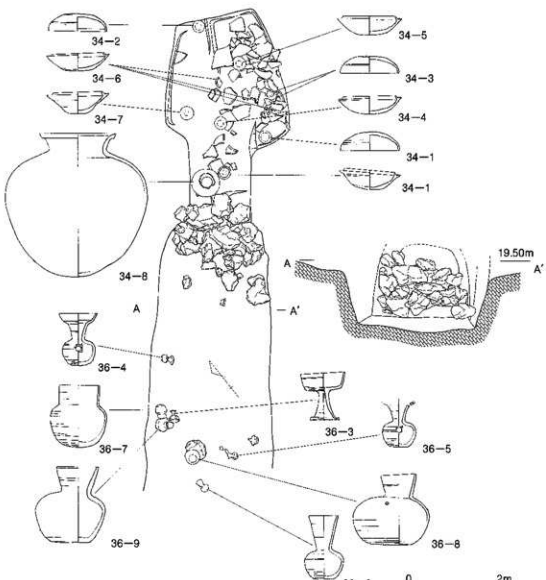
第32図　3号横穴墓墓道セクション図

・玄門部遺物出土状況（第33図）

閉塞部から30cmの場所に、下に大甕片を敷いた甕が、正立した状態で左壁に接するように置かれていた。甕の口縁部は打ち欠かれている。また、その右奥には坏が正位置で置かれていた。甕や坏の中には酒や食物が入れて供えられていたのであろう。

・玄室（第30図）

土質の影響か、玄室の平面形は実に不整形である。幅は、玄門側で1.3m、奥壁側で0.9m、長さは最長部で1.5mを測る。周縁と主軸上には、幅10cm、深さ5cm前後の溝が掘られているが、明らかに右側の屍床に重点を置いた作りで、左側は溝の掘り方も粗雑である。右側の屍床は、幅60cm、奥行き1.4m強を測るが、玄門側の左角はカギ状に掘り下げられている。この掘り下げ部分は、玄門部の延長線上に当たるため、玄門部をここまで掘り進んだ段階で、後方に下がって右側壁を掘り広げて玄室



第33図　3号横穴墓閉塞および遺物出土状況図

を形成したものと推察される。左側屍床は、幅40cm、奥行き90cmを測る。天井はドーム形で、高さは70cm弱を測る、玄門部に続いて非常に低い作りである。

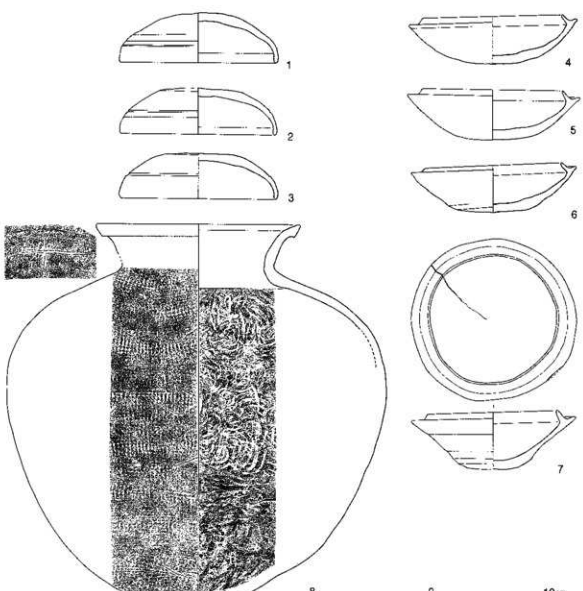
玄室は玄門部同様、凝石を多く含んだ赤土という掘りにくい土質であるため、工具痕は顕著に残っていない。赤土を崩さないように、軟石をこつこつと砕きながらゆっくりと掘り進んだのであろう。

・玄室内遺物出土状況（第33図）

右側の屍床は、基本的には須恵器床であろうが、すき間が多い雑な敷き方である。遺物は須恵器の蓋坏のみで、いずれも口縁部を下に向けて置かれていた。

・遺物

玄門部と玄室から出土した須恵器は、第34図7が若干新しい様相を呈しているが、ほぼ同時期と考えて良いだろう。

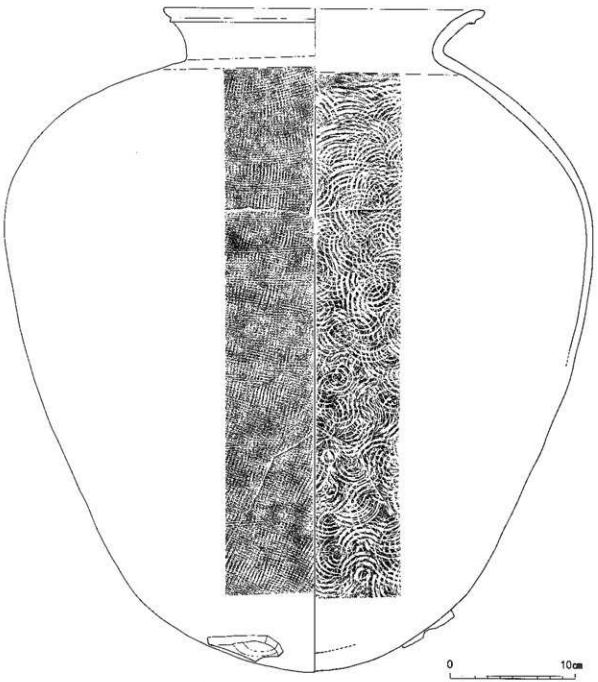


第34図　3号横穴墓玄室内出土土器実測図

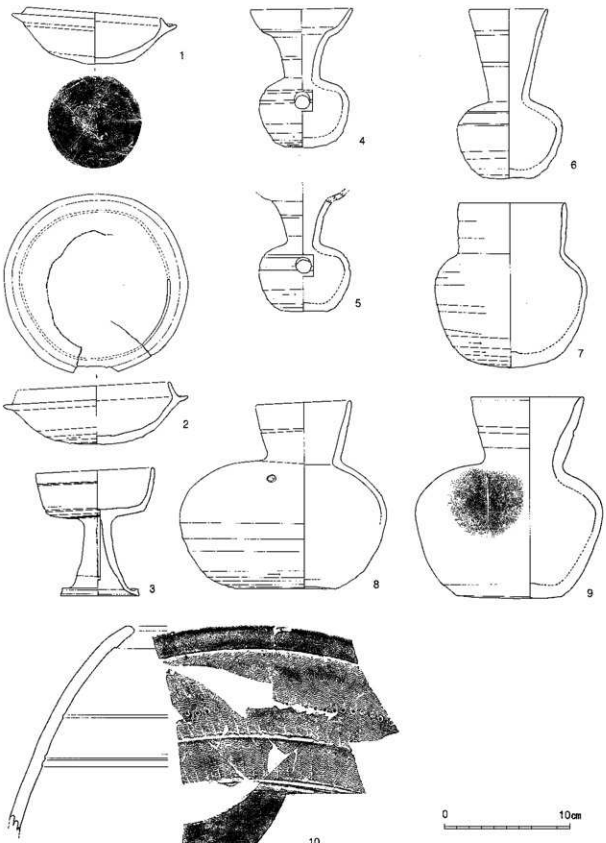
玄室の屍床に使われた甕片を接合すると、ほぼ1個体ができあがった。この横穴墓では1号横穴墓とは異なり、口縁部も屍床の材料として使っていたようである。

なお、第36図2の坏は、他の土器と比べてやや古い様相を呈しているが、かなり高い位置から出土したもので、3号横穴墓と直接結びつくものではないと思われる。

個々の遺物に付いては、後頁の出土遺物観察表を参照されたい。



第35図　3号横穴墓屍床大甕実測図



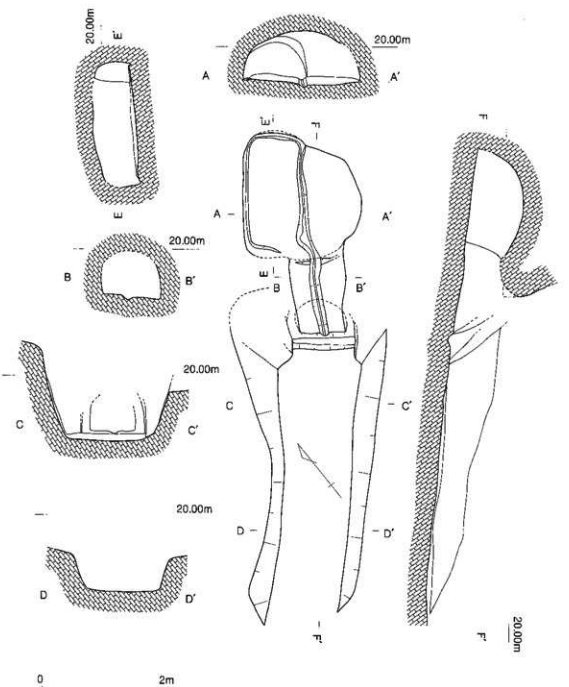
第36図　3号横穴墓墓道出土土器実測図

4号横穴墓

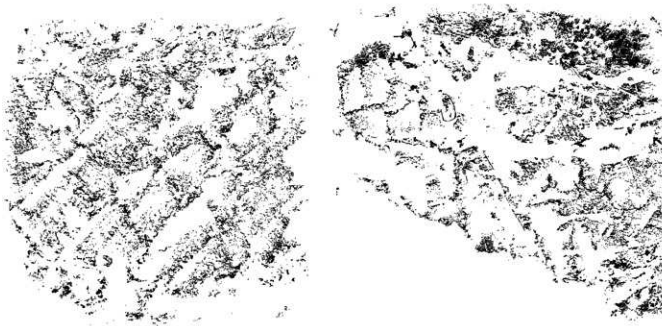
4号横穴墓は表土を剥いで初めてその存在がわかった横穴墓で、ちょうど3号横穴墓と5号横穴墓の中間に位置している。レベルもほぼ同じで、標高は墓道前端部で18.50mを測る。

・墓道（第37図）

墓道の幅は、前端部で1.1m、閉塞部の40cm手前で1.3m、閉塞部側で0.95m、長さは4.2mを測る。墓道奥壁の高さは2.3mを測る。3号横穴墓と同様、閉塞部の40cm手前でカギ状に右側で15cm、左側で25cm入り込んで、羨道部のような形状を呈しているが、奥行きが40cmしかないため墓道として扱う。床面は、閉塞部に向かってやや高く傾斜している。



第37図　4号横穴墓遺構実測図



（玄室左側壁）　　第38図　4号横穴墓壁面工具痕拓影　　（玄室右側壁）

・墓道内の土層（第39図）

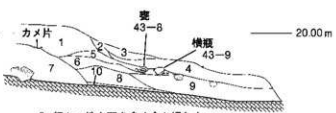
7層は閉塞部を安定させるために、まず最初に盛られた層であろう。順次8、9、6層と盛り土していった状況が見られ、セクションからは二次開口をおこなった痕跡はみられない。

・墓道内遺物出土状況（第40図）

遺物は、すべて6、7、9層の上面から出土した。出土位置はどういう理由か、43－5、7が閉塞部手前の左肩から出土しているのを除けば、すべて主軸ライン上から出土である。いずれも須恵器で、器種はバラエティーに富んでいるが、坏は無い。大きめの器種が目立ち、墓道前端付近から提瓶が3点出土した。43－5、7以外は口縁部が打ち欠かれており、43－9の横瓶は胴部の一端が丸く穿孔されていた。

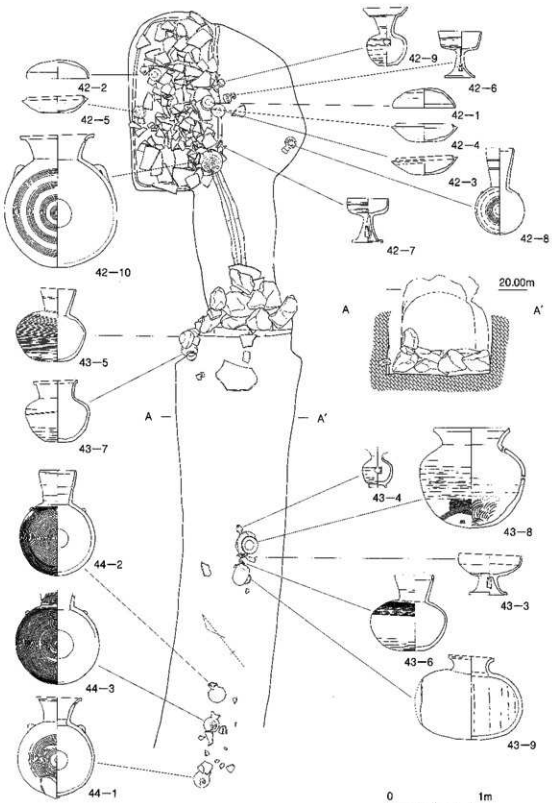
・閉塞部（第40・41図）

閉塞部には、主軸に直交する方向に幅20cm、深さ10cm弱の溝が掘られている。閉塞物を立て掛けるための溝と考えられるが、玄門部に石がなだれ込んでいる様子から、板材等の有機物で閉塞した後、



1. 地山石を多く含む暗褐色土
2. 褐色土
3. 赤褐色土
4. 暗褐色土
5. 大きめの地山石を多く含む褐色土
6. 小さめの地山石を多く含む褐色土
7. ふかふかした褐色土
8. 細かい地山石を多く含む褐色土
9. 細かい地山石を少々含む褐色土
10. サラサラした褐色土

第39図　4号横穴墓墓道セクション図



第40図　4号横穴墓閉塞および遺物出土状況図

さらに石材で固定したと推察される。そして、有機質の閉塞材が朽ちた段階で、石材が玄門部になだれ込んだものと思われる。

石材を除去したところ、玄門部から閉塞部に続く排水溝上に、甕片を奥の方から順番に少しずつ重ねて並べた溝蓋が出土した。

・玄門部（第37図）

玄門部は、盛道より一段高くなっており、幅は閉塞側で70cm、玄室側で90cm、長さ130cm弱を測る。床面は玄室側にやや高く傾斜しており、主軸上には玄室から続く排水溝が掘られている。閉塞部側で溝蓋を検出したのは上記のとおりである。天井部は崩落が著しいが、高さは約70cmである。断面は、床面と壁の境界が明瞭で、カマボコ状を呈している。

・玄室（第37・38図）

玄室は、1号横穴墓によく似た不整形な形状で、左側が角丸方形、右側が半円形を呈し、最大幅2.1m、最大奥行き2mを測る。天井は、高さ約80cmと非常に低いドーム形である。

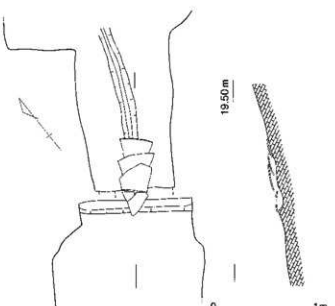
この玄室は、明らかに左側屍床のみを意識して作られており、幅10cm前後の排水溝は主軸上と左側周縁に限って掘られており、右側周縁には見られない。また、屍床の奥行きを延ばすために、左側だけ奥壁を断面カマボコ状に掘り進めている。左側の屍床は、幅75cm、奥行き1.7mを測る。

玄室の工具痕は、1号横穴墓のものと近似している。

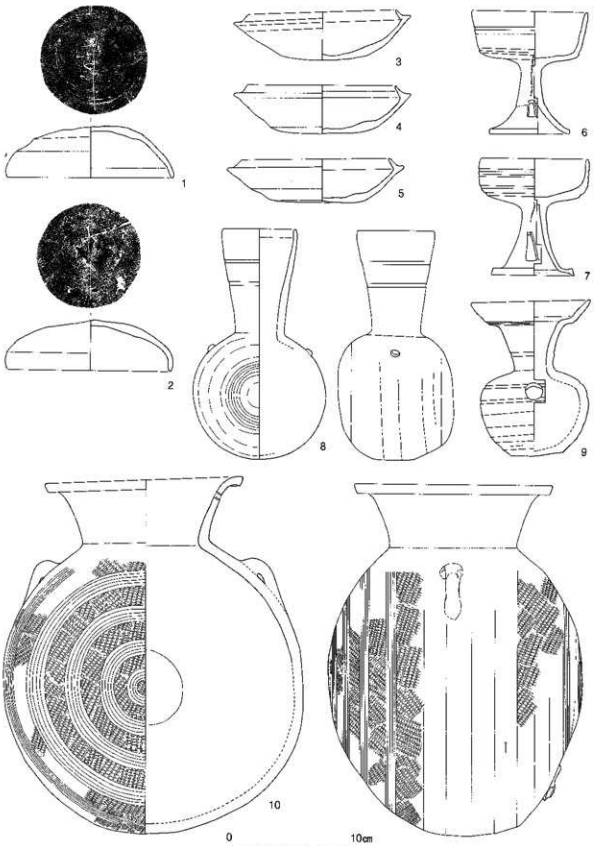
・玄室内遺物出土状況（第40図）

左側屍床は須恵器床である。42－1、4は坏に蓋をした状態で出土したが、その他の蓋坏はすべて口縁部を下にした状態で出土した。屍床の玄門側には、口縁を打ち欠いた大きめの提瓶が倒れており、その右奥には高坏が倒れている。中央付近の溝を挟んだ右側からは甕と高坏が倒れて出土したが、これらは左屍床の被葬者にともなう供献品であろう。

右側からは、42－8の長頸壺1点が倒れて出土した。



第41図　4号横穴墓閉塞石下の排水溝蓋検出状況図



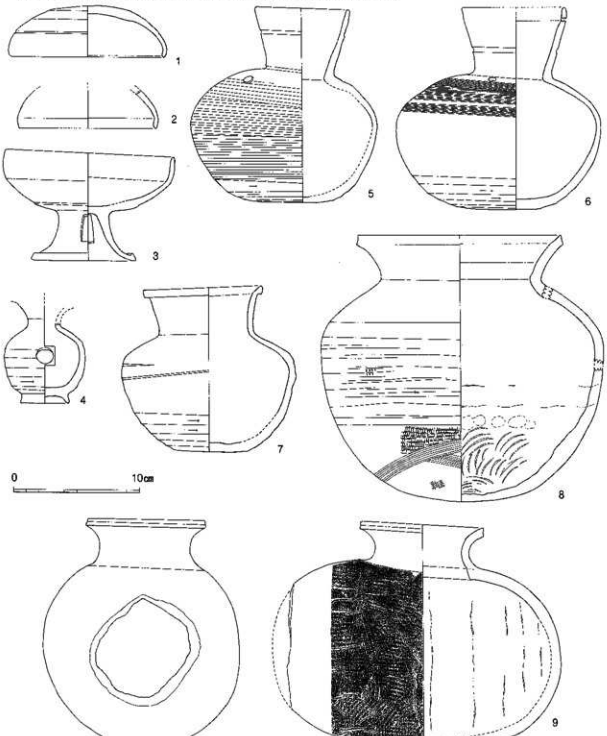
第42図　4号横穴墓玄室内出土土器実測図

・遺物

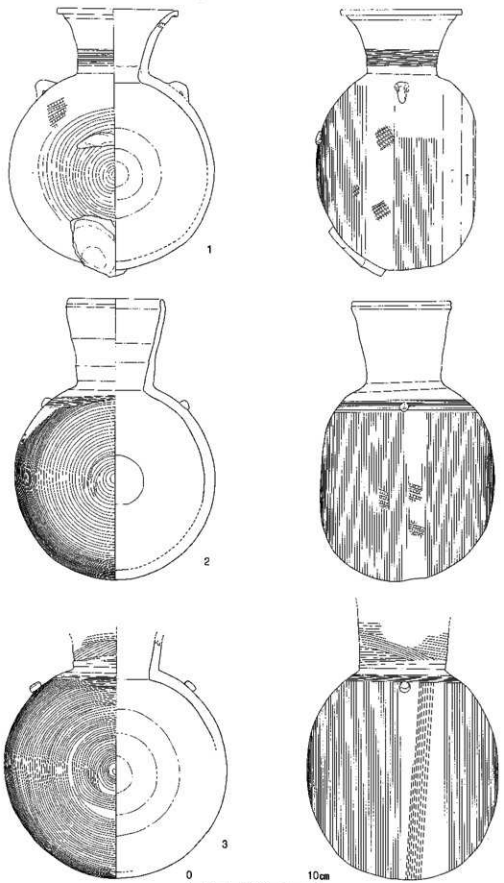
須恵器の蓋を見ると、すでに肩部の稜線が消えかける時期のもので、玄室と墓道から出土した土器に時期差は見られない。

屍床の甕片は、数個体の大甕の一部分ずつを持ち寄ったらしく、復原はできなかった。

個々の遺物に付いては、後頁の出土遺物観察表を参照されたい。



第43図　4号横穴墓墓道出土土器実測図（1）



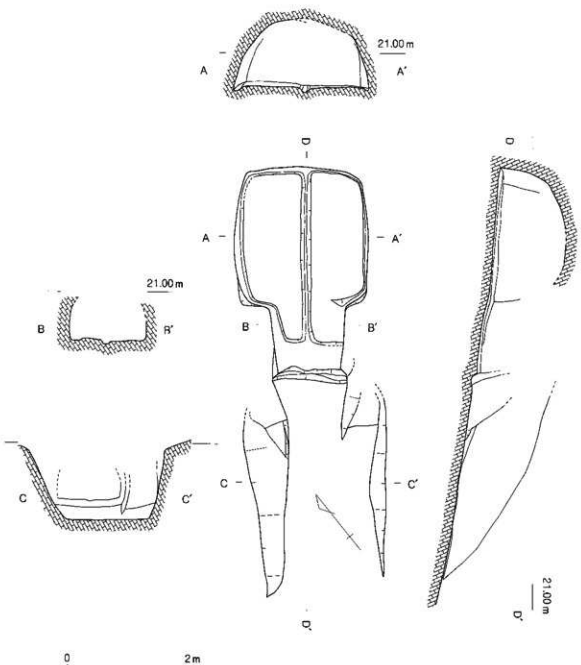
第44図　4号横穴墓墓道出土土器実測図（2）

5号横穴墓

5号横穴墓は4号横穴墓の東に位置する。試掘調査の際に墓道の土層が検出され、大量の要片が出土した。標高は4号横穴墓よりやや高く、墓道前端部で19.50mを測る。

・墓道（第45図）

墓道は、幅広で短い。幅は、前端部で1.8m、閉塞部の約1m手前で右壁がカギ状に入り込み、また左側も自然に入り込んで狭くなり0.85m、閉塞側で1.1mを測る。長さは3.2mを測る。墓道奥壁の高さは1.8mを測る。床面は閉塞部に向かってやや高く傾斜している。



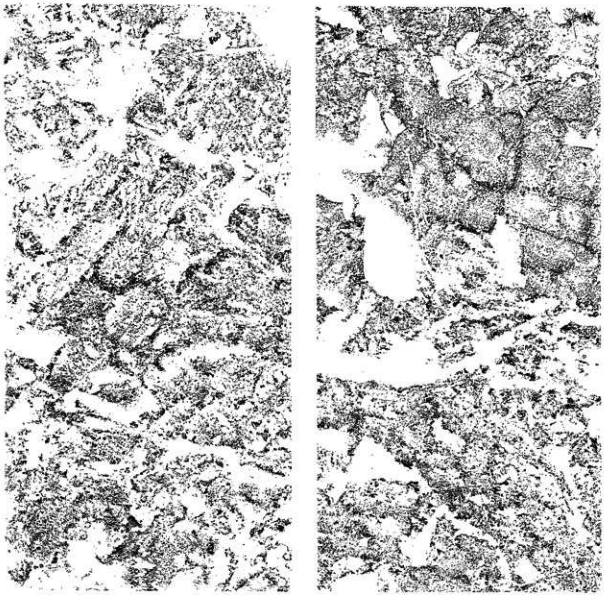
第45図　5号横穴墓遺構実測図

・墓道内の土層（第47図）

閉塞石が地山に近いレベルでかなり手前まで散乱している様子から、あまり埋土をしていない時点で2度目の開口をしたと考えられる。2度目の開口後の埋土は、3～7、12層であろう。また、2層がそれより下の層を切って斜めに玄門部へと下がっていることから、これが3度目の開口の痕跡であり、2層が開口後の埋土と思われる。したがって、5号横穴墓は、少なくとも初葬後2回は開口があったものと判断される。

・墓道内遺物出土状況（第48図）

閉塞石が散乱している周辺から、多数の土器が出土した。おそらく初葬時の遺物であろう。この中で注目したいのは、52－11、12の土師器の甕である。墓道から土師器の甕が出土したのは今回の調査



（玄室左側壁）　**第46図　5号横穴墓壁面工具痕拓影**　（玄室右側壁）

では初めてで、炭も出土したことから、墓前祭祀がおこなわれていたことがうかがえる。

また、2層の下面近くからは、須恵器の甕片が大量に出土した（図版24(ｲ)）。

・閉塞部（第45図）

閉塞部には主軸と直交する方向に幅20cm前後、深さ5cm強の溝が掘られている。閉塞物を立て掛けるための溝と考えられるが、閉塞物は板材等の有機物であったと思われ、現存しなかった。閉塞物を固定するために大きめの石材を利用していたらしいが、石材は二次開口時に墓道面へ投げ散らかした状況で出土した。

・玄門部（第45図）

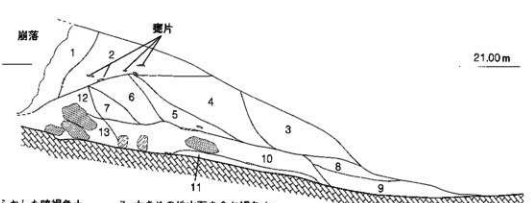
玄門は、墓道より一段高く作られている。幅は閉塞部側で1m、玄門側で1.2m、長さは1.1m弱を測る。天井は崩落しており、高さ、形状とも不明である。この玄門部の床面は、玄室側にやや高く傾斜しており、玄室の屍床の一部が延びて約70cm玄門部に入り込み、屍床部が途切れた地点で排水溝も終結している。屍床が入り込んでない玄門部の奥行きは40cmを測る。

・玄門部遺物出土状況（第48図）

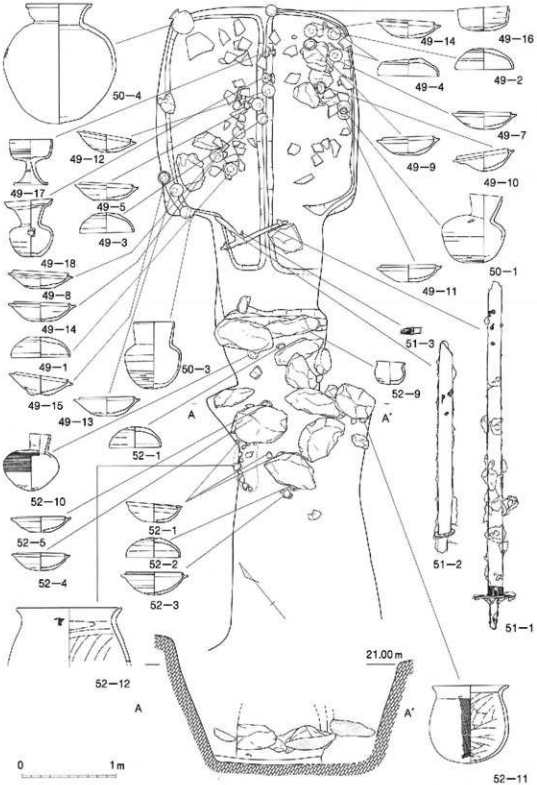
玄門部の屍床上からは鉄製品が出土した。左側屍床の上には52－2の太刀が主軸に対して45度の角度で刃先を玄室左側に向けて置かれており、51－1の太刀が51－2の太刀と交差するように、主軸に対して20度の角度で鍔側を左側屍床に刃先を右側屍床の玄室側に向けて置かれている。両者が交差する地点には51－3の刀子も置かれている。以上の3点は、地山直上に無造作に置かれたような状況で、互いに錆着していた。

・玄室（第45図）

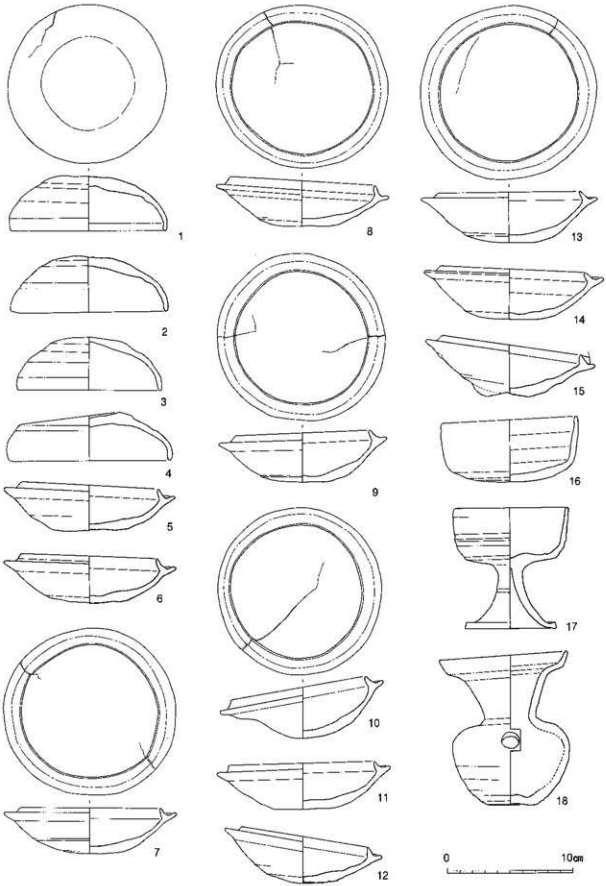
玄室の平面はほぼ正方形で、幅は玄門側で2m、奥壁側で1.9m、奥行きは2.2mを測る。床面は奥壁側にやや高く傾斜しており、周縁と主軸上には幅20cm前後、深さ5cm前後の排水溝を掘っている。屍床は右側と左側に作られているが、前記したように、両屍床とも主軸側が舌状に玄門部に張り出す



第47図　5号横穴墓墓道セクション図



第48図　5号横穴墓閉塞及び遺物出土状況図



第49図　5号横穴墓玄室内出土土器実測図（1）

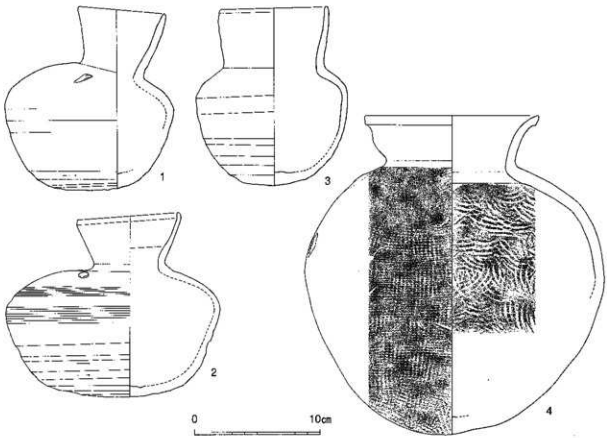
特異な形状を呈している。右側屍床は、幅0.85m、奥行きは張り出し部分で2.65m、玄室内部分で2mを測り、左側屍床は、幅0.9m，奥行きは張り出し部分で2.65m、玄室内部分で2mを測る。天井は一部崩落しているが、高さ1.15mを測るドーム形である。玄室の四角からは稜線が立ち上がるが、高さ70cm前後で消滅している。

玄室内の土質は、おおまかに表現すると下半部が岩で、上半部がやや軟質の赤土主体になっている。掘削時の工具痕を観察すると、右側壁では、下半部は岩をこつこつと砕いており、上半部では刃先がコの字状の工具でスムーズに掘削した様子がうかがえる。また、左側壁では、下半部と上部の岩をこつこつと砕き、その中間の軟質の赤土掘削には、刃部がやや丸い鋤先状の工具を利用している様子がうかがえる。このことから、横穴墓掘削時には、少なくとも2種類の工具を使用していたことがわかる（第46図）。

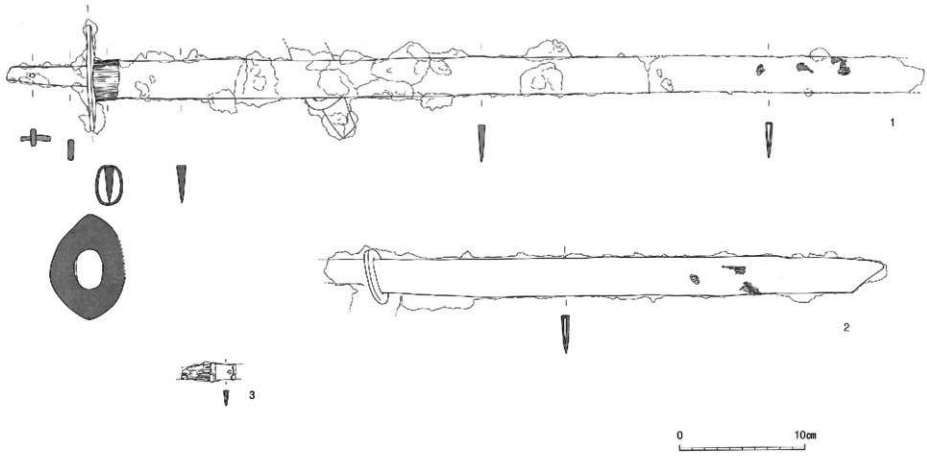
・玄室内遺物出土状況（第48図）

両屍床とも須恵器床であるが、甕片の敷き方は実にまばらである。墓道の2層下面付近から大量の甕片が出土したのは、模換は無いが須恵器床の甕片を運び出したものかもしれない。

須恵器の器物は大量に出土したが、原位置を確実に保つものは50－4の甕くらいであろう。床面には天井から落盤した石も多く、二次開口以降の際には、その石を除去せずに、落石の上にも須恵器を置いたようである。



第50図　5号横穴墓玄室内出土土器実測図（2）

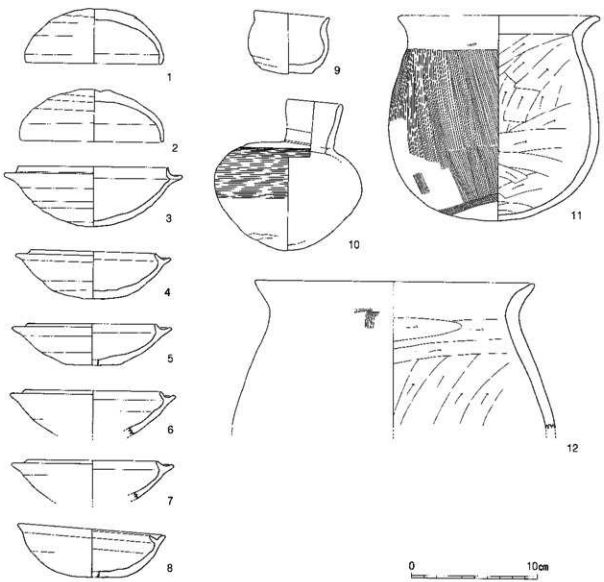


第51図　5号横穴墓玄室内出土鉄製品実測図

・遺物

玄室内から出土した須恵器は、第49図の16が新しい様相を呈しているほかは、あまり時期差が認められなかった。須恵器床の甕片は、多数の甕の破片を少量ずつ使用したらしく、ほとんど接合できなかった。

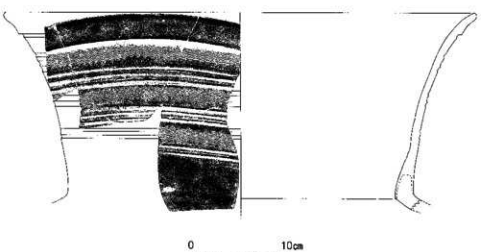
第51図１の太刀は、刃先を少々欠損するが残存長73.2cmを測る。両端がやや尖った楕円状の鍔や、長さ2.4cmの目釘も残っていた。刃部には木質が錆ついて残っており、木製の鞘におさめられていたことがわかる。２の太刀は、中子を欠損するが、刃部の長さは39.5cmを測る。鍔は１の太刀と銹着しており、細かい観察はできなかったが、X線写真を見た限りでは環状を呈していた。



第52図　５号横穴墓墓道出土土器実測図（１）

墓道から出土した須恵器には若干の時期差が認められたが、あまり幅広くはない。土師器の甕2点は両方とも煤が付着していた。

個々の遺物については、後頁の遺物観察表を参照されたい。



第53図　5号横穴墓墓道出土土器実測図（2）

落とし穴

調査区の東端ぎりぎりの場所で、標高24.00mの急斜面から落とし穴を検出した。

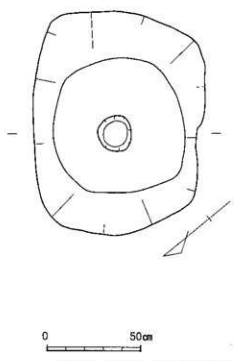
・遺構（第54図）

残存部での上場は、1.2m×0.9mを測る角丸方形で、下場は径0.7mを測る円形を呈している。深さは一番深いところで、1.1mを測る。底面の中央には円形の掘り込みがあり、上場で径19cm、下場で13cm、深さは40cmを測る。

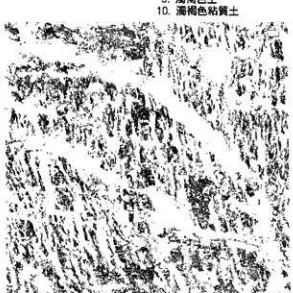
軟石主体の一部赤土が混じる地山に掘られており、壁面には細い工具で上下方向に削られた加工痕が残っている（第55図）。

・遺物

出土しなかった。



第54図　落とし穴遺構実測図



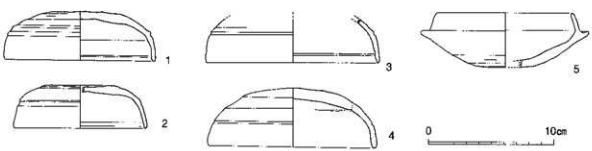
第55図　落とし穴壁面工具痕拓影

試掘トレンチ出土遺物

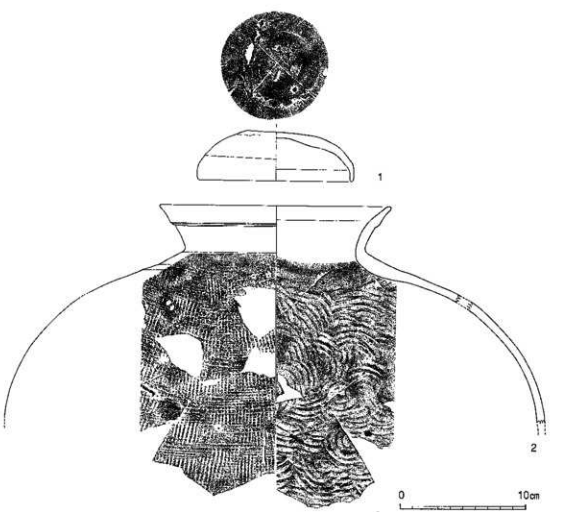
平成2年度に実施した試掘調査の結果、4カ所のトレンチから須恵器が出土した。

T－2は5号横穴墓の墓道にかかっているため、5号横穴墓関連の遺物が出土したと思われる。また、T－3は4号横穴墓に接しているため、4号横穴墓関連の遺物が出土している可能性が高い。

T－1、T－4は調査区外に設定したトレンチである。



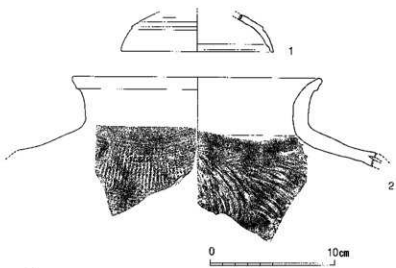
第56図　T－1出土土器実測図



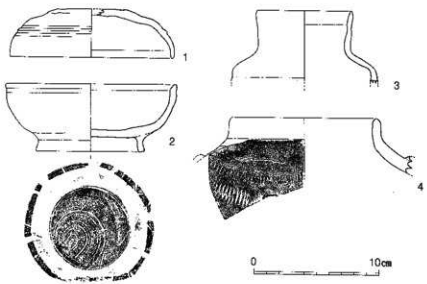
第57図　T－2出土土器実測図

T－1は調査区の西のはずれ下方で、出土遺物を観察すると（第56図）、須恵器蓋の口縁端部内面に段の痕跡を残すものが3点あり、坏は立ち上がりがやや高めで内傾している。

T－4は4号横穴墓の上方で、出土遺物を観察すると（第59図）、糸切り底に高台をもつものが見られる。このことから、調査区範囲外にも横穴墓が分布していることがわかり、現時点で出土遺物のみから判断すると、少なくとも7世紀後半までは追葬もしくは墓前祭祀がおこなわれていたことがうかがえる。



第58図　T－3出土土器実測図



第59図　T－4出土土器実測図

小結

遅倉横穴墓群で、調査を実施した5穴の横穴墓が営まれた時期は6世紀後半から7世紀初頭までであった。横穴墓としては比較的早い時期に造られ、短期間で追葬が終わっている。造営順序は、出土遺物から判断して、1→3→4→5→2号横穴墓の順である。

一番古い時期の1号横穴墓は、墓道が狭長で、玄門部も長い。玄室は平面が不整楕円形で、左側屍床しか使用されていない。天井は低いドーム形を呈している。初葬は6世紀後半の比較的早い時期と思われる。このタイプの横穴墓は、北谷ヒナ横穴墓群（島取県江府町（註1））の3号横穴墓や中竹矢1号横穴墓（松江市（註2））などに類例があり、山陰地方における横穴墓初現期の形態といわれている。その分布状況は出雲地方東部の各地に点々と見られるため、このタイプの横穴を掘削する専門工人が、需用に応じて各地に出向いて穿ったことがうかがえる。

3号横穴墓は墓道にやや広がりが見られ、玄室は実に不整形で、右側屍床しか使用されていないような形状である。天井はドーム形で低い。初葬時期は6世紀末で、追葬の痕跡は見られない。

4号横穴墓は玄門部が長く、玄室は左側だけに屍床を設けた作りで、天井はきわめて低いドーム形である。玄室の形状だけを見ると1号横穴墓とよく似ている。初葬時期は3号横穴墓に続く6世紀末で、追葬の痕跡は見られない。

5号横穴墓は墓道が広く、墓前祭祀の痕跡を残している。玄室はほぼ正方形で、4隅からは天井に向けて稜線が立ち上がっている。屍床は左右対称で一部玄門にまで張り出す特異な作りを呈している。墓道に張り出した屍床の上には、太刀がクロスして置かれていた。初葬は4号横穴墓に続く6世紀末で、少なくとも2度の追葬があったと思われる。

2号横穴墓は、5穴の内では唯一羨道が作り出されている。玄室は縦長の整った方形で、左右対称に屍床が作られている。天井はアーチ形で、他の4穴に比べて高い。初葬時期は4号横穴墓に続く6世紀末で、少なくとも2度の追葬があったと思われる。

以上に記したとおり、5穴の横穴墓の内部構造は非常にバラエティーに富んでいるが、基本的には、（a）初現期タイプの系統を引く天井が低いドーム形で、玄室の平面形が不整形なものと（b）出雲地方で盛行する整形なものとに大別できよう。aは1、3、4号横穴墓で、玄室の半分だけに屍床を設けるという点でも共通している。bは2、5横穴墓である。2、3、4、5号横穴墓の初葬にはあまり時期幅はないと思われるのだが、明確に違う2タイプの内部構造が見られて興味深い。

5穴の横穴墓の共通点としては、天井の崩落が著しく残存状況が悪いこと、屍床がすべて須恵器甕片を敷いた須恵器床であること、須恵器以外の副葬品が少ないことがあげられよう。

最後に、遅倉横穴墓群の被葬者の性格について述べるならば、2号横穴墓の内部施設で顕著に見られるように焼き損じた須恵器の不良品を多用していること、須恵器の副葬品が多いわりに須恵器以外の副葬品が少ないことから、須恵器生産と密接な関係があった人々であったと思われる。

註（1）江府町教育委員会『北谷ヒナ横穴群』（1990）
（2）島根県教育委員会「中竹矢遺跡」『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』（1983）

遅倉横穴墓群2号横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座

井 上 貴 央

遅倉横穴墓群2号横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第二講座
井上貴央

1．はじめに

松江市の遅倉2号横穴墓から数片の人骨が検出された。人骨検出の報を受け、現地に二回赴き、骨の取り上げを行った。取り上げられた骨は脆弱であったので、パラロイドによる保存処理を行った。骨の保存状況は良好ではないが、得られた所見について報告する。

2．骨の検出状況

骨の出土状況を図に示した。玄室内には須恵器の破片が散布してあり、いわゆる須恵器床をなしていた。玄室内には玄門から流入した土砂が玄室の前方約半分に堆積していた。玄門から見て左側から4点の人骨片が検出され、これらをNo.1～No.4として取り上げたが、No.1とNo.2の骨は流入土砂の下から検出されたものである。No.3とNo.4の人骨は流入土砂の被覆はまぬがれていたが、須恵器床の上には5.6cmの厚さの土砂が堆積しており、その上面から検出されたものである。これらの骨はバラバラに散布しており、埋葬当時の原位置をとどめていないことは確かである。

3．検出人骨

No.1

長管骨であり、上腕骨遠位端のように見受けられるが、部位を確定できない。

No.2

右側大腿骨の近位骨頭から骨体にかけての部分であるが破損が大きい。骨端線は閉じているようであり、成人骨であることは間違いない。骨質は薄く、華奢であることから判断して、女性骨である可能性が高い。

No.3

下顎骨で左の第三大臼歯相当部より後部を欠くが他はほぼ完存している。右側では中切歯～第二小臼歯、左側では中切歯、側切歯、第二大臼歯が脱落しており、これらの歯槽は開存している。その他の歯牙は下顎骨に釘植している。右第三大臼歯は萌出しているが、前方転移をきたしている。歯牙の咬耗はあまり進んでおらず、Martinの1～2度である。下顎骨は全体が華奢で女性骨である可能性が強い。

No.4

左側脛骨の近位端から骨体部にかけての後面ないし内側面の部分である。骨質は薄く、華奢である。近位骨端は残存しておらず、骨端線の閉鎖状況は明らかではないが、全体的な大きさから判断して、成人女性骨の可能性が高い。

4．検出人骨の検討

本横穴墓から検出された人骨は4片にすぎない。これらの人骨片が同一人物のものかどうかについては、人骨が原位置をとどめていないので判断が難しいが、骨の風化の程度、4片とも華奢な骨であること、すべての骨が玄室左側から比較的まとまって検出されていることを考えると、同一人物の可能性が高い。

骨の特徴や歯の萌出状況、歯の咬耗具合から判断すると、今回検出された人骨は壮年女性のものと推定される。

5．おわりに

稿を終わるに当たり、遅倉横穴墓群の人骨の調査の機会を与えて頂いた財団法人松江市教育文化振興事業団の関係各位、発掘調査の実務を担当し、骨の取り上げに協力いただいた江川幸子氏、骨のクリーニング及び保存処理に協力いただいた鳥取大学医学部解剖学第二講座の影岡優子氏に厚く御礼申し上げる。

遥倉2号横穴墓人骨出土状況図

1号横穴墓玄室出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
10－1	須恵器	蓋	口径13.0 器高4.3	0.5mm程度の石灰粒を少々含む	良好	(内、外、断) 濃灰色	右回転	
10－2	須恵器	蓋	口径13.0～11.2 器高5.1	長石微粒を多く含む 表面ザラザラ	良好	(内、外、断)灰色 外面の一部に自然釉	右回転	焼き歪みあり
10－3	須恵器	蓋	口径14.2 器高5.0	長石微粒を わずかに含む	悪い	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
10－4	須恵器	蓋	口径12.6 器高4.1	長石微粒を 多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
10－5	須恵器	坏	口径10.6　受部径13.7 器高4.0	長石微粒を 少々含む	やや軟	(内)褐色、(外)濃灰色 (断)褐色と濃灰色が半々	右回転	
10－6	須恵器	坏	口径11.0　受部径13.8 器高4.8	雲母、石英、長石微粒をわずかに含む	底外面が特に軟	(内、外、断) 灰～淡灰色	右回転	
10－7	須恵器	坏	口径11.3　受部径14.4 器高4.4	石英、長石微粒を わずかに含む	悪い	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
10－8	須恵器	坏	口径10.8～9.7　受部径13.4 器高4.5	1mm前の礫、石英粒を多く含む 表面ザラザラ	良好	(内、外)灰色 外面は一部自然釉	右回転	
10－9	須恵器	短頸壺	胴径8.3　胴部最大径12.0 頸部高8.5	長石微粒を 密に含む	良好	(内、外、断) 濃灰色	右回転	ヘラ記号「Ⅱ」あり

1号横穴墓玄室出土鉄製品観察表

図面番号	種類	法量(cm)	備考
11－1	鉄鏃	全長10.6　茎長7　刃長4.1 刃厚0.2　茎厚(上)0.6(下)0.5～0.4	完存
11－2	鉄鏃	残存長9.9　茎長3.0	茎部のみ残存
11－3	鉄鏃	残存長5.5	茎部のみ残存

1号横穴墓屍床土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
12	須恵器	甕	口径　頸径14.5 器高　胴部最大径45.1	長石微粒を わずかに含む	良好	(内、外、断) 灰～濃灰色	右回転	
13	須恵器	甕	口径22.0（推定）胴径16.0 胴部最大径44.6	長石微粒を 多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	底部の焼き歪みが著しい

1号横穴墓墓道出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
14-1	須恵器	蓋	口径12.2	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、断)灰色 (外)黒色～灰色	右回転	
14-2	須恵器	蓋	口径11.8(推定) 器高4.0	石英、長石微粒を多く含む	良好	(外)黒灰色 (内、断)淡灰色	右回転	
14-3	須恵器	蓋		長石、石英微粒を少々含む	良	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
14-4	須恵器	壺の蓋	口径7.6(最大径10.0) 器高3.3	緻密だが長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 淡灰～灰色	右回転	ヘラ記号「×」あり
14-5	須恵器	坏	口径10.3 受部径13.7 器高4.9	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
14-6	須恵器	坏	口径11.0 受部径14.7 器高14.0	大きめの長石をところどころに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
14-7	須恵器	坏	口径11.8 受部径15.3 器高不明	長石、石英微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
14-8	須恵器	坏	口径10.8 受部径13.5(推定)	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
14-9	須恵器	坏	口径9.9 受部径12.8	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
14-10	須恵器	坏	口径10.5 受部径12.6 器高不明	長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)外側半分が褐色	右回転	
14-11	須恵器	坏	口径8.4 受部径10.75 器高3.75	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
14-12	須恵器	高坏	底径5.9	長石微粒を多く含む	良(やや軟部あり)		右回転	
14-13	須恵器	高坏	口径9.5～8.7 底径5.4 器高6.55	長石微粒を少々含む	良好	(内、外)濃灰色 (断)赤褐色	右回転	坏部は焼き歪みが顕著
14-14	須恵器	壺	胴部最大径7.2 頸径3.0(推定)	長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	不明	
14-15	須恵器	短頸壺	口径6.2 胴部最大径13.8 底径7.6 器高9.1	緻密	底部が特に悪い	(内、外、断) 淡灰褐色	不明	ヘラ記号「×」あり
14-16	須恵器	平瓶	口径7.5 底径5.6 脚径5.4 器高15.3 胴部最大径13.2(推)	長石微粒を多く含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	右回転	ヘラ記号「×」あり
14-17	須恵器	壺	口径6.8 底径3.2 器高9.5 胴部最大径6.6	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)濃灰色 (内)灰褐色、(断)赤褐色	右回転	
14-18	須恵器	壺	口径21.3 頸径15.5	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外)灰色 (断)淡褐色	右回転	
15-1	須恵器	甕	口径12.8 胴部10.6 器高27.2	長石、石英微粒をわずかに含む	良	(内、外、断) 灰～淡灰色	不明	
15-2	須恵器	甕	口径16.8 頸径13.4 器高28.0 胴部最大径30.1	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
16	須恵器	甕		長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)淡灰色	右回転	

2号横穴墓玄室出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
21-1	須恵器	蓋	口径12.2 器高4.0	2mm前の石英少々 石英、長石微粒を含	良好	(内、外) 灰色 (断) 淡赤褐色	右回転	
21-2	須恵器	蓋	口径12.3 器高4.2	石英微粒を 多く含む	良好	(内、外) 灰色 (断) 褐色	不明	ヘラ記号「廾」あり
21-3	須恵器	蓋	口径11.9 器高4.4	石英微粒を 多く含む	良好	(内、外) 灰色 (断) 褐色	右回転	
21-4	須恵器	蓋	口径10.6 器高4.6	長心微粒を 少々含む	やや 軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
21-5	須恵器	蓋	口径11.0 器高4.6	石英微粒を わずかに含む	やや 軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
21-6	須恵器	蓋	口径11.5 器高4.4	長石微粒を わずかに含むのみ	やや 軟	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	
21-7	須恵器	蓋	口径12.8 器高4.2	長石微粒を わずかに含む	やや 軟	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	
21-8	須恵器	蓋	口径9.9 器高3.8	長石微粒を 少々含む	良好	(内、外) 淡灰色	右回転	ヘラ記号「×」あり
21-9	須恵器	蓋	口径11.0 かえり径8.6 器高3.1	石英、長石微粒を わずかに含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	ヘラ記号「○」あり14とセット
21-10	須恵器	坏	口径10.7 受部径13.5 器高3.9	微~やや大3.6 長石、石英を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	ヘラ記号「×」あり
21-11	須恵器	坏	口径10.8 受部径13.2 器高4.0	石英微粒を 少々含む	良好	(内、外) 灰色 (断) 褐色	右回転	
21-12	須恵器	坏	口径9.9、受部径12.5 器高4.7	長石微粒を 少々含む	やや 軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
21-13	須恵器	坏	口径8.9 受部径10.8 器高3.7	石英、長石の 微粒を少々含む	良好	(外) 灰色 (内、断) 褐色	不明	ヘラ記号「×」あり
21-14	須恵器	坏	口径10.0 器高4.05	長石微粒を 密に含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	ヘラ記号「○」あり
21-15	須恵器	小壺	口径4.9 器高4.9 底径4.7	1mm前の石英を 少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
21-16	須恵器	長頸壺	頸径3.4 底径3.3 胴部最大径7.2	石英、長石の微 粒 を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	不明	
21-17	須恵器	短頸壺	口径7.7 頸径7.4	石英、長石微粒を 密に含む	やや 軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
21-18	須恵器	短頸壺	頸径8.9	長石粒を 少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

2号横穴墓玄室出土鉄製品観察表

図面番号	種類	法量(cm)	備考
22-1	刀子	全長9.2 刃長5.2 茎長4 刃部最大幅1.25 刃部最大厚0.25 茎最大厚0.35	完存
22-2	刀子	全長13.3 刃長8.0 茎長5.3 刃部最大幅1.4 刃部最大厚0.4 茎最大厚0.3	完存

2号横穴墓墓道出土土器観察表

図面番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
23－1	須恵器	坏	口径10.3 受部径12.7 器高4.2	長石微粒を少々含む	やや軟	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	
23－1	須恵器	坏	口径10.3 受部径12.7 器高4.2	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	

2号横穴墓墓道出土耳環観察表

図面番号	種別	法量(cm、g)	備考
24－1	耳環	上下2.1 左右2.1 断面0.4×0.55 重さ2.6	青銅に金ばく張り
24－2	耳環	上下2.1 左右2.25 断面0.5×0.65 重さ5.2	青銅に金ばく張り

2号横穴墓墓道下斜面出土土器観察表

図面番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
25－1	須恵器	蓋	口径14.0 器高4.5	石英、長石微粒を密に含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
25－2	須恵器	蓋	口径13.0 器高3.85	長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	右回転	
25－3	須恵器	蓋	口径11.6 器高4.1	長石微粒を少々含む	一部軟	(内、外、断) 淡褐色	右回転	
25－4	須恵器	坏	口径12.0 受部径14.8 器高4.7	1mm前の石英長石微粒が密	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
25－5	須恵器	壺	口径9.5 頸径8.9 器高11.5	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 淡灰色	右回転	

2号横穴墓南東祭祀遺構出土土器観察表

図面番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
27－1	須恵器	蓋	口径11.7	長石微粒を少々含む	悪い	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
27－2	須恵器	坏	口径11.6 受部径13.9 器高4.3	長石微粒を少々含む	良一部やや軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
27－3	須恵器	坏	口径10.4 受部径13.1 器高3.9	石英、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

1・2号横穴墓間出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
28－1	須恵器	坏	口径10.3 受部径13.5 器高4.0	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
28－2	須恵器	坏	口径10.7 受部径13.0 器高3.55	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外)灰色 (断)灰色～褐色	右回転	
28－3	須恵器	蓋	口径10.2 器高3.75	緻密、長石粒を少量含む	底の一部少々軟	(内、外、断)淡～褐灰色	右回転	ヘラ記号「○」あり4とセット
28－4	須恵器	坏	口径8.6 受部径10.9 器高3.6	緻密、長石微粒を少々混入する	底部のみ軟	(内、外)淡灰色 焼きの悪い底は白灰色	右回転	ヘラ記号「○」あり3とセット
28－5	須恵器	短頸壺	口径7.2 胴部最大径7.8	長石微粒を多く含む	良	(内、外)灰色 (断)淡褐色		

1・2号横穴墓周辺出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
29－1	須恵器	蓋	口径12.8 器高3.9	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断)淡灰色 断面やや褐色がある	右回転	
29－2	須恵器	蓋	口径13.1 器高3.9	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断)淡灰色	右回転	
29－3	須恵器	蓋	口径14.1 器高4.0	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	杉(天井)の歪みが著しい。ヘラ記号「ノ」あり
29－4	須恵器	蓋	口径12.6 器高4.5	長石粒を少々含む	軟	(内、外、断)淡灰色	右回転	
29－5	須恵器	坏	口径11.2 受部径14.1 器高4.3	長石微粒をわずかに含む	良(やや軟)	(内、外、断)淡灰色	右回転	
29－6	須恵器	坏	口径10.3 受部径12.6	長石微粒をわずかに含む	やや軟	(外)灰色 (内、断)淡灰褐色	右回転	
29－7	須恵器	坏	口径11.3 受部径14.1 器高9.05	長石粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	右回転	
29－8	須恵器	坏	口径10.4 受部径13.8 器高4.1	長石粒を少々含む	やや軟	(外)淡灰色 (内、断)褐色	右回転	
29－9	須恵器	坏	口径10.7 受径部13.4	長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)淡灰色	右回転	
29－10	須恵器	坏	口径9.7 受部径11.8	長石粒を少々含む	良(やや軟)	(内、外、断)淡灰色	右回転	
29－11	須恵器	坏	口径8.5 受部径10.6 器高2.8	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断)淡灰色	右回転	
29－12	須恵器	高坏	口径12.2(復元)	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色		
29－13	須恵器	高坏	底径9.1	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
29－14	須恵器	短頸壺	口径5.2 頸径5.3	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色		
29－15	須恵器	甕	頸径4.0 胴部最大径8.7 底径5.5	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)濃灰色	右回転	ヘラ記号「×」あり
29－16	須恵器	提瓶	頸径5.0 胴部最大径14.3×10.8	長石粒を少々含む	良好	(内、外)黒灰色 (断)淡灰色	右回転	火ぶくれあり

3号横穴墓玄室出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
34－1	須恵器	壺	口径12.6 器高4.0	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
34－2	須恵器	壺	口径12.3 器高3.7	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
34－3	須恵器	壺	口径12.5 器高3.6	長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
34－4	須恵器	坏	口径11.3　受部径13.5 器高3.95	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
34－5	須恵器	坏	口径11.2　受部径13.8 器高4.05	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
34－6	須恵器	坏	口径11.0　受部径13.3 器高4.0	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
34－7	須恵器	坏	口径10.4　受部径13.2 器高4.75	石英、長石微粒を少々含む	悪い	(内、外) 淡灰褐色	右回転	焼成時のひび割れあり
34－8	須恵器	甕	口径16.2　頸径12.1 器高30.3　胴部最大径30.0	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	ヘラ記号「＋」あり

3号横穴墓玄室屍床土器観察表

図面番号	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
35	須恵器	甕	口径25.6　頸径20.5 器高52.5　胴部最大径47.0	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	底３ケ所に焼き台の痕跡あり

3号横穴墓墓道出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
36－1	須恵器	坏	口径10.7　受部径13.5 器高4.5	石英微粒を少々含む	悪い	(内、外) 灰色	右回転	ヘラ記号「×」あり
36－2	須恵器	坏	口径12.0（推定） 器高5.0　受部径14.6	長石、石英微粒を多く含む	悪い	(内、外、断) 灰色	右回転	ひび割れあり
36－3	須恵器	小型高坏	口径9.4　底径6.2 器高10.2	石英微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
36－4	須恵器	鉢	口径8.1　頸径2.7 器高11.1　胴部最大径7.1	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
36－5	須恵器	鉢	頸径2.1　底径3.7 胴部最大径7.2	石英、長石の微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
36－6	須恵器	長頸壺	口径6.3　頸径3.2　底径4.0 器高13.5　胴部最大径8.3	石英粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
36－7	須恵器	壺	口径8.5　頸径8.5 器高13.5　胴部最大径12.05	長石、石英微粒を多く含む	良好	(外)灰褐色 (内)灰色（断）褐色	右回転	
36－8	須恵器	平瓶	口径7.6　頸径5.8　底径8.0 器高15.0　胴部最大径16.4	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
36－9	須恵器	平瓶	口径8.9　頸径6.2　底径8.3 器高16.0　胴部最大径14.9	緻密わずかに長石微粒を含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	ヘラ記号「／」あり
36－10	須恵器	壺		長石粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

4号横穴墓玄室出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
42－1	須恵器	蓋	口径13.4 器高4.15	石英微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	ヘラ記号「／」あり
42－2	須恵器	蓋	口径13.0 器高4.1	1mm前後の石英微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	ヘラ記号「／」あり
42－3	須恵器	杯	口径11.8　受部径14.2 器高4.2	0.5mm前後の石英微粒を多く含む	良好	(内、外)灰色、外面に緑色自然釉を厚くかぶる	右回転	
42－4	須恵器	坏	口径11.9　受部径14.2 器高3.9	石英微粒を密に含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
42－5	須恵器	坏	口径11.8　受部径14.2 器高3.6	長石微粒をわずかに含む	良好	(外、内) 灰色	右回転	
42－6	須恵器	高坏	口径9.2　底径6.4 器高9.9	石英微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
42－7	須恵器	高坏	口径8.6　底径6.5 器高9.4	石英微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
42－8	須恵器	長頸壺	口径6.0　頸径3.9 器高18.3　胴部最大径10.6	石英微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
42－9	須恵器	壺	口径9.5　頸径3.1　底径4.1 器高12.5	石英微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
42－10	須恵器	提瓶	口径15.8　頸径10.2 器高28.4　胴部最大径24.0	長石微粒を密に含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

4号横穴墓墓道出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
43－1	須恵器	蓋	口径12.2 器高4.1	長石粒を多く含む	良 (やや軟)	(内、外、断) 灰色	右回転	
43－2	須恵器	蓋	口径11.0	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
43－3	須恵器	高坏	口径13.4　底径8.3 器高8.8	石英、長石微粒を多く含む	良 (やや軟)	(内、外、断)灰色、坏見こみに径8cmの淡灰色円形施	右回転	
43－4	須恵器	壺	頸径2.55　底径3.85 胴部最大径6.45	石英、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
43－5	須恵器	平瓶	口径7.05　頸径5.5 器高15.5　胴部最大径14.8	石英、長石微粒を多く含む	良好	灰色	右回転	
43－6	須恵器	平瓶	口径8.2　頸径6.1 器高16.0　胴部最大径16.3	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
43－7	須恵器	短頸壺	口径9.4　頸径7.5　底径5.7 胴部最大径13.8　器高13.2	長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 濃灰色	右回転	
43－8	須恵器	壺	口径16.4　頸径12.7 器高21.1	長石微粒を多く含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	右回転	
43－9	須恵器	横瓶	口径9.7　頸径7.4 器高17.95　胴部最大径23	石英微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	不明	胴部を丸く打ち欠いている。
44－1	須恵器	提瓶	口径9.7　頸径5.7 器高21　胴部最大径16.4	石英微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼き台の痕跡あり
44－2	須恵器	提瓶	口径7.6　頸径6.1 器高22.4　胴部最大径16.0	微密長石微粒を少々含む	良好	(外)黒～灰色 (内、断)灰色	右回転	
44－3	須恵器	提瓶	頸径6.8 胴部最大径17.8	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	不明	

5号横穴墓玄室出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
49－1	須恵器	蓋	口径12.3 器高4.4	長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れあり
49－2	須恵器	蓋	口径12.5 器高4.5	石英、長石を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
49－3	須恵器	蓋	口径11.4 器高4.25	長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
49－4	須恵器	蓋	口径13.0 器高3.9	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	火ぶくれ、焼き歪みあり
49－5	須恵器	坏	口径10.9　受部径13.6 器高3.95	石英、長石微粒を密に含む	良好	(内)灰 (外)灰灰色、灰色斑あり	右回転	
49－6	須恵器	坏	口径10.8　受部径13.7 器高3.7	石英、長石微粒を密に含む	良好	(内、外)灰色 外面に褐色付着物あり	右回転	
49－7	須恵器	坏	口径11.1　受部径13.7 器高3.7	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外)灰色	右回転	焼成時のヒビ割れあり
49－8	須恵器	坏	口径11.5　受部径13.7 器高4.0	長石、石英粒(1㎜前後)を多く含む	良好	(内、外)灰色	右回転	焼成時のヒビ割れあり
49－9	須恵器	坏	口径10.7　受部径13.4 器高4.2	石英微粒を少々含む	良好 火ぶくれあり	(内、外)灰色 (底)褐鉄色の自然釉付着	右回転	焼成時のヒビ割れあり
49－10	須恵器	坏	口径10.8　受部径13.2 器高50	石英、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼き歪みが著しい 焼成時のヒビ割れあり
49－11	須恵器	坏	口径11.6　受部径13.8 器高3.85	石英、長石微粒を少々含む	堅い 歪み	(内、外) 灰色	右回転	
49－12	須恵器	坏	口径12.7　受部径12.7 器高4.5	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
49－13	須恵器	坏	口径11.3　受部径14.1 器高4.1	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れあり
49－14	須恵器	坏	口径11.5　受部径14.3 器高4.25	1㎜前後の長石、石英粒を多く含む	やや軟	(内)灰褐色 (外)灰色	右回転	
49－15	須恵器	坏	口径11.1　受部径13.7 器高4.95	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	火ぶくれが著しい
49－16	須恵器	坏	口径10.9 器高5.2	石英、長石微粒を密に含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
49－17	須恵器	高坏	口径9.1　底径7.3 器高9.65	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
49－18	須恵器	逸	口径10.2　脚部最大径9.3 器高12.2　底径4.0	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右改訂	
50－1	須恵器	平瓶	口径7.0　頸径5.1 器高14.6　胴部最大径13.45	長石、石英微粒を密に含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
50－2	須恵器	平瓶	口径8.2　頸径5.7 器高14.7　胴部最大径17.1	石英、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
50－3	須恵器	壺	口径8.7　頸径8.0 器高14.1　胴部最大径12.1	長石微粒を少々含む	良好	(内、外) 淡灰色	右回転	
50－4	須恵器	壺	口径13.9　頸径10.3 器高25.4	石英微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	火ぶくれ、焼き歪みあり

5号横穴墓玄室出土鉄製品観察表

図面番号	種類	法量（cm）	備考
51－1	大刀	全長73.2　刃長不明　茎長7　目釘長2.4　茎幅0.45 刃厚（棟）0.5　関上下8.4　たすき6.0　厚0.3	目釘残る。２つの大刀と鞘着。
51－2	大刀	刃長39.5	
51－3	刀子	残存長4.3　刃幅1.2 棟厚0.4	

5号横穴墓墓道出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
52－1	須恵器	蓋	口径10.8 器高4.4	石英、長石微粒を多く含む	良好	（内、外、断） 灰色	右回転	
52－2	須恵器	蓋	口径11.4 器高4.2	石英、長石微粒を少々含む	良好	（内、外） 灰色	右回転	
52－3	須恵器	坏	口径12.0　受部径14.2 器高4.8	長石微粒を少々含む	良好	（内、外）灰色 （断）褐色	右回転	
52－4	須恵器	坏	口径10.0　受径部12.4 器高3.9	石英、長石微粒を少々含む	良好	（内、外） 灰色	右回転	
52－5	須恵器	坏	口径10.2　受部径12.8 器高3.3	長石微粒を少々含む	良好	（内、外） 灰色	右回転	
52－6	須恵器	坏	口径10.9　受部径13.2 器高不明	長石微粒を多く含む	良好	（内、外、断） 淡灰色	右回転	
52－7	須恵器	坏	口径10.4　受部径13.0 器高不明	石英微粒を少々含む	良好	（内、外、断） 灰色	右回転	
52－8	須恵器	坏	口径9.3　受部径11.8 器高4.2	長石微粒を多く含む	良好	（内、外、断） 灰色	右回転	焼き歪みが著しい
52－9	須恵器	小壺	口径6.0 器高5.1	石英、長石の微粒を密に含む	良好	（内、外） 灰色	右回転	
52－10	須恵器	平瓶	口径4.5　胴部最大径11.8 器高12.1	石英、長石微粒を多く含む	良好	（内、外） 灰色	右回転	
52－11	土師器	甕	口径16.1　頸径13.8 器高16.5	石英、長石微粒を多く含む	やや軟	（内、外、断） 淡明褐色		ススの付着あり
52－12	土師器	甕	口径22.4　頸径19.9	石英、長石粒を密に含む	やや軟	（内、外、断） 淡褐色		ススの付着あり
53	須恵器	甕	口径50.6　胴径37.0	長石微粒を少々含む	良好	（内、外、断） 灰色	右回転	

T－1 出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
56 1	須恵器	蓋	口径12.2 器高3.9	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
56－2	須恵器	蓋	口径10.8 器高3.4	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
56－3	須恵器	蓋	口径14.0（推定）	長石微粒を少々含む	軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
56－4	須恵器	蓋	口径13.4 器高4.7	長石微粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
56－5	須恵器	坏	口径10.9　受部径13.6 器高4.35	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

T－2 出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
57－1	須恵器	蓋	口径12.4 器高4.0	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	ヘラ記号「×」あり
57－2	須恵器	甕	口径19.5 頸径14.5	長石粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

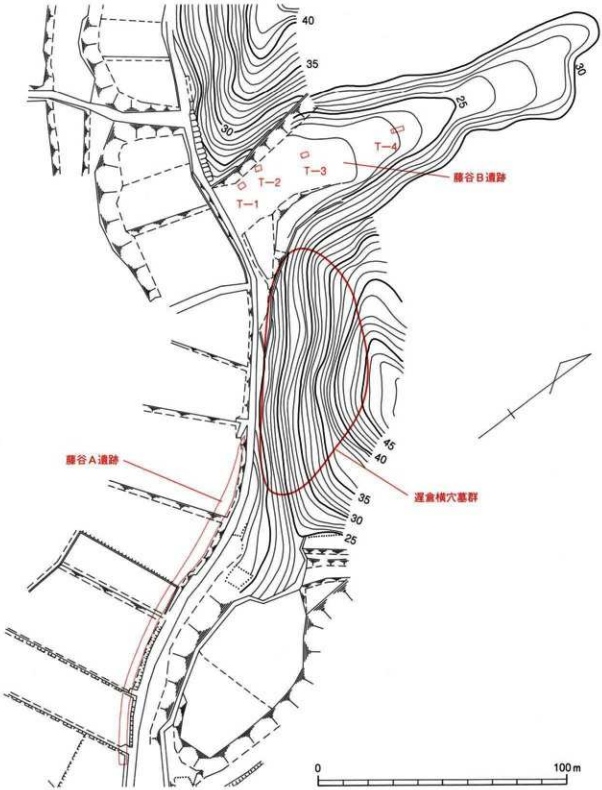
T－3 出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
58－1	須恵器	蓋	口径12.2	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
58－2	須恵器	甕	口径20.0 頸径18.0	長石微を多く含む 石英粒若干含む	良好	(内、外)灰色 (断)淡褐色	右回転	火ぶくれあり

T－4 出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
59－1	須恵器	蓋	口径13.2（推定） 器高3.85	長石粒多く含む 石英粒も少々あり	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
59 2	須恵器	坏	口径13.7（推定） 器高5.4　底径8.7	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
59－3	須恵器	坩	口径7.8（推定） 頸径7.4（推定）	長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	右回転	
59－4	須恵器	短頸壺（耳付）	口径12.0（推定） 頸径12.6（推定）	長石微粒を多く含む	良好	(内、外)灰色 (断)淡褐色	右回転	

藤谷A遺跡・藤谷B遺跡



第60図　藤谷A・B遺跡位置図

位置と環境

藤谷A・B遺跡は、松江市朝酌町226番地1他に所在する。

藤谷A遺跡は、遅倉横穴墓群が位置する丘陵の南東に隣接する低地の端で、現在は水田として活用されている。藤谷B遺跡は遅倉横穴墓群が位置する丘陵の北西に隣接する狭い谷で、現在は休耕地になっている。両遺跡とも遅倉横穴墓群の周縁の地といってよい。

調査の概要

両遺跡の調査は平成2年12月3日から平成3年1月25日まで、実質10日間を費やして実施した。

藤谷A遺跡は、重機を利用して142m×3mの範囲の表土を剥ぎ（第61図）、遺物出土面での人力による遺構の精査をおこなったが、遺構は検出できなかった。また、遺物も須恵器の小片や現代の陶磁器がわずかに出土したのみであった。

藤谷B遺跡は、4カ所にトレンチを設定して調査をおこなった（第61図）。以下、トレンチごとに概要を記す。

（T－1）

遺構は検出できなかった。セクションは、上から表土、厚い褐色土、暗褐色土、地山となっており、遺物は出土しなかった。

（T－2）

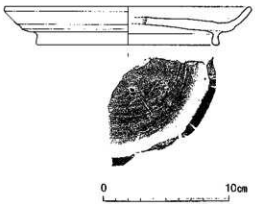
遺構は検出できなかった。セクションは、上から表土、礫を含む褐色土、地山となっており、表土中から須恵器と近代の陶磁器の破片が若干出土した。須恵器は、第60図に示した高台付皿で、復原口径19cm、復原底径14.6cm、器高3.1cmを測る。器面調整は全体に回転ナデで、底部は糸切り痕が残る。胎土は長石微粒を密に含み、焼成は良好、ロクロは右回転である。

（T－3）

遺構は検出できなかった。セクションは、上から表土、褐色土、地山である。表土中から須恵器小片が出土したが図面化はできなかった。

（T－4）

遺構は検出できなかった。セクションは、上から表土、地山である。遺物は出土しなかった。

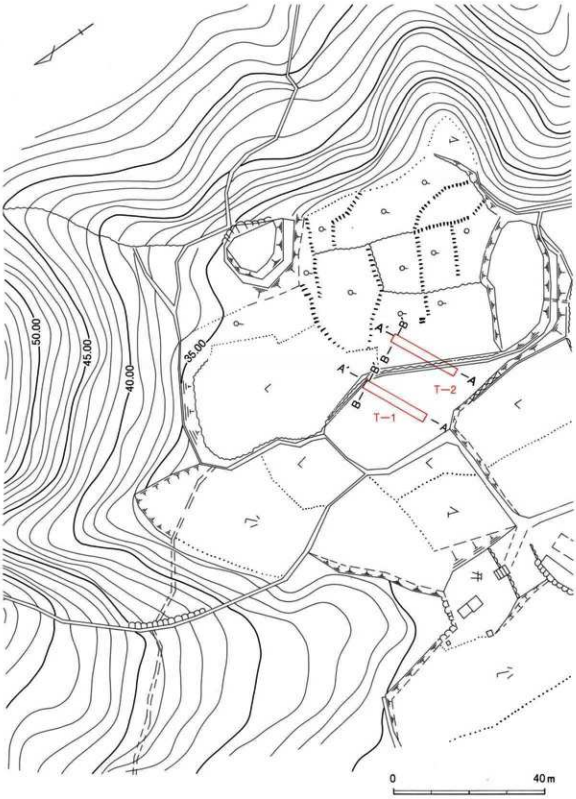


第61図　藤谷B遺跡出土土器実測図

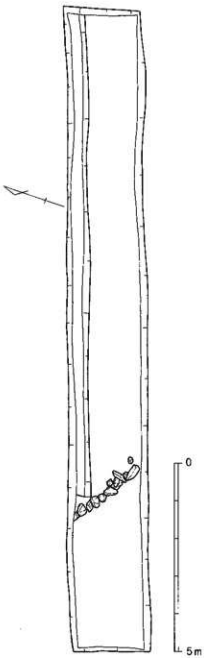
小結

藤谷A遺跡、藤谷B遺跡とも遺構は検出できず、遺物は近代の陶磁器がほとんどで、須恵器はわずかに出土したのみであった。したがって、両遺跡とも、遅倉横穴墓群と非常に近い位置関係から、遅倉横穴墓群から転落した、もしくは人為的に投げ捨てられた土器が埋もれていた可能性が高いと思われる。

安蔵主遺跡



第62図　安蔵主遺跡位置図



第63図　安蔵主遺跡Ｔ－１平面図

位置と環境

安蔵主遺跡は、松江市西尾町字安蔵主768外に所在する（第62図）。

和久羅山の山裾に位置しており、東、北、西側の三方を低丘陵に囲まれている。現況は陽当たりの良い畑地である。畑の耕作土中からは須恵器を中心とする土器片が表採されている。

周辺の遺跡としては、北西100ｍに古墳時代後期の集落跡、米坂遺跡がある。

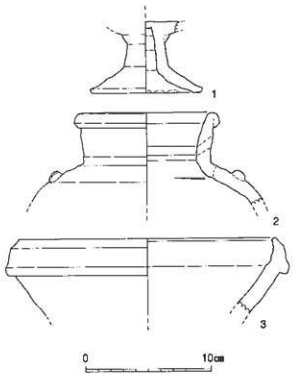
調査の概要

発掘調査は平成４年10月２日から同年10月23日の間、計15日間を費やして実施した。

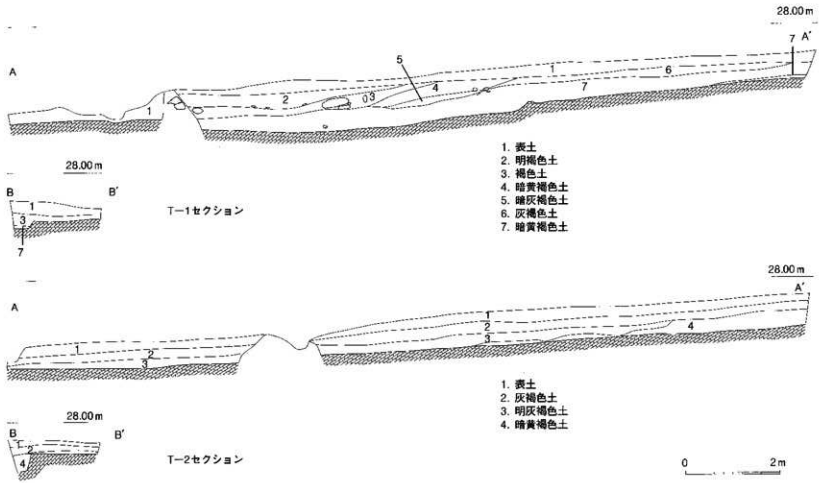
調査は、まず遺跡の性格を知るために、トレンチを２本掘って土層堆積状況を見ることにした。以下、トレンチごとに概要を記す。

（Ｔ－１）

石列を検出したが、その他の遺構は検出できなかった（第63図）。セクションを観察すると、上方は人為的な手が加えられているようで、２～５層中から遺物が大量に出土し、それ以下からは出土しなかった。石列は７層の上に作られていた（第65図）。



第64図　安蔵主遺跡Ｔ－１出土土器実測図



第65図　安蔵主遺跡トレンチセクション図

遺物の出土状況は、各層とも土師器、須恵器、陶磁器が混じりあい、新旧の秩序は見られなかった。どの土器片も風化が著しい小片ばかりで、図面化できたのは第64図に示した3点のみである。1は土師器の高坏の脚部で、脚高4.5cm、復原底径8.7cmを測る。焼成は良好で、色調は内外面とも灰褐色～暗灰色である。2は備前焼の壺で、復原口径11.6cmを測る。焼成は良好で、色調は内面灰色、外面濃灰褐色、断面紫灰色である。3は備前焼の擂り鉢で、復原口径20.4cmを測る。焼成は良好で、色調は内外断面とも紫灰色である。

（T－2）

遺構は検出できなかった。セクションは自然堆積に近く（第65図）、表土中から若干の土器片が出土した。

小結

2カ所のトレンチ調査をおこなった結果、石列以外の遺構は出土しなかった。遺物は、T－1から多く出土したが、遺構に伴うものではなく、上層を中心とする同一層中に幅広い時代の摩滅した土器の小片が混在する出土状況であった。

周囲を見渡すと、西から東にかけての丘陵の裾部分に削平したような崖が広く認められる。このことから、本来はもっと大きく張り出していた丘陵の裾に住居跡等の遺跡が存在したものが、いつの時代かは不明であるが、開墾、削平され、その土が本調査地を含む畑地に客土されたことが推察される。T－1で検出された石列は、おそらく客土がおこなわれる前の畑地にともなうものであろう。

したがって、安蔵主遺跡では、遺構は存在せず、客土中に遺物が混入している遺跡と判断され、また、遺物の残存状況も非常に悪かったことから、全面調査には至らなかった。

米坂遺跡

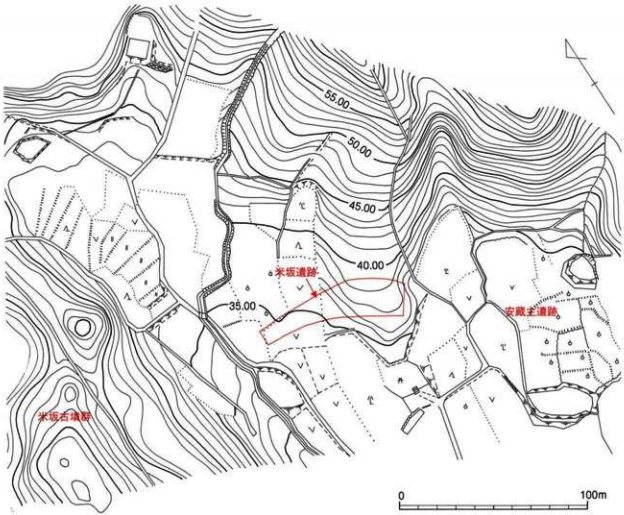
位置と環境

米坂遺跡は松江市西尾町字米坂750－3ほかに所在する（第66図）。

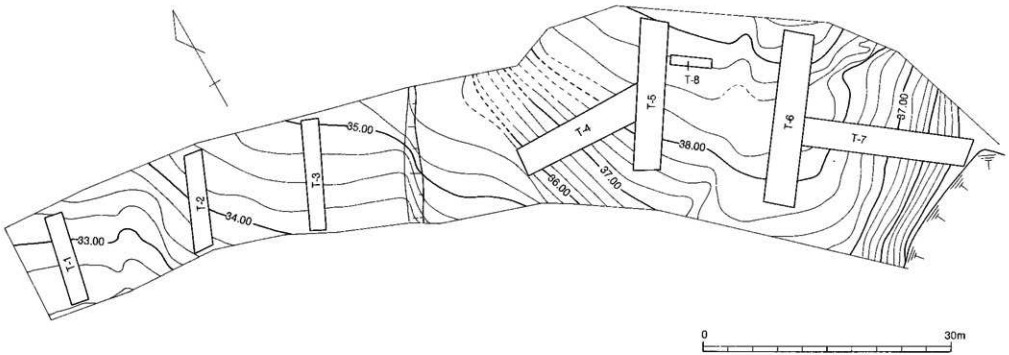
そこは和久羅山から派生する丘陵の先端部で、微高地と平坦地で構成されている。微高地では20年近く前までは畑地として大根などを作っていたというが、現在では荒廃してうっそうとした薄暗い竹林と化している。平坦地は比較的広い谷地形の一部分で、大きめの山石がごろごろしている。おそらく、鉄砲水による土石流の堆積が繰り返されてきたのであろう。現在は茶畑を中心に耕作がおこなわれている。耕作土中からは細かい土器片が多数表採される。

また、谷の西側には小川があり、和区羅山系から湧き出る冷たい清水が豊富に流れている。地元の人の話しでは、どんな渇水の年でもかれることがないそうである。

周辺の遺跡としては、北西100mの地点には古墳時代中期から後期半ばに築造された米坂古墳群があり、南東100mの地点には安蔵主遺跡がある。また、米坂遺跡と安蔵主遺跡の間は盛り土工事がお



第66図　米坂遺跡位置図



第67図　米坂遺跡試掘トレンチ配置図

こなわれて地形が変えられているが、山際付近で敲石を表採したことから、この付近の地面下にも人知れず埋もれている遺跡が存在する可能性が高いと思われる。

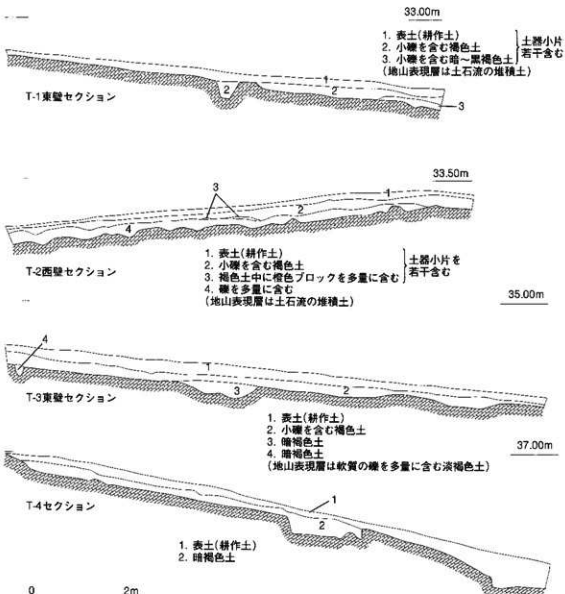
調査の概要

米坂遺跡周辺は広く土器片が散布していたため、まず、平成5年度に、開発予定地内における遺跡の範囲を確定するため約1カ月をついやしてトレンチによる試掘調査を実施した。トレンチは平坦地に3本、微高地に5本設定した（第67図）。

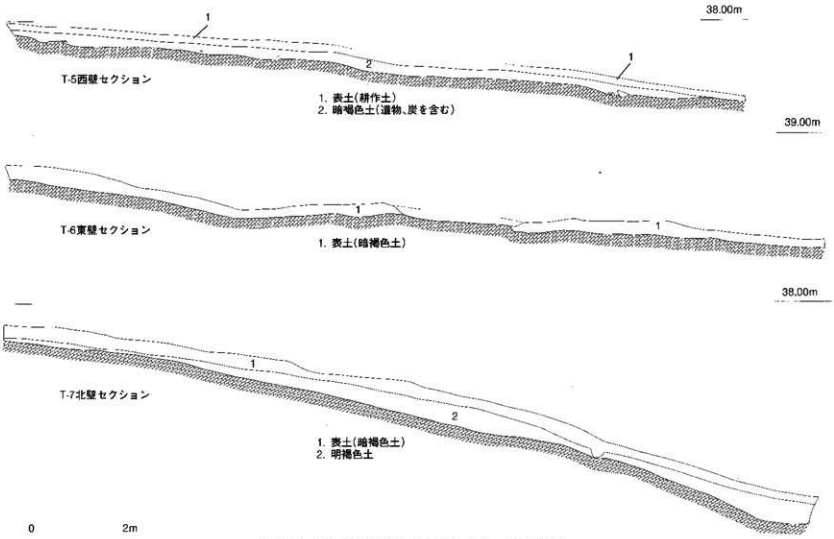
その結果、T－1・2は土石流の痕跡が顕著で、礫を多量に含む土層堆積がみられた。土器の細片が少々出土したが、遺構の検出はできなかった。

T－3もT－1・2とほぼ同様の状態であったが、ピットをわずかに検出した。

T－4・5では、住居跡と考えられる遺構を検出し、比較的残りが良い土器が出土した（第70図）。



第68図　米坂遺跡試掘トレンチセクション図（1）



第69図　米坂遺跡試掘トレンチセクション図（２）

土器を観察すると、須恵器の蓋は口縁端部が厚くて平坦面に近い段を有するものがあり、土師器の甕では二重口縁のなごりをとどめているものがあった（第70図）。

T－6・7・8は、いずれも地山が浅く、遺物、遺構とも検出できなかった。

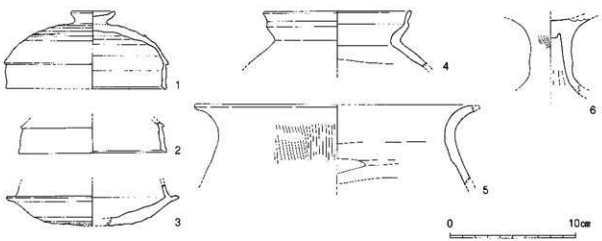
以上の試掘調査結果から、米坂遺跡は、T－5からT－3を含む約600㎡の範囲について全面発掘調査を実施することとなった。

全面調査は平成6年4月18日から同年8月31日まで、72日を費やして実施した。竹林であったため、まず重機を利用して表土除去とともに竹根の除去をおこない、その後人力による調査をおこなった（第71図）。

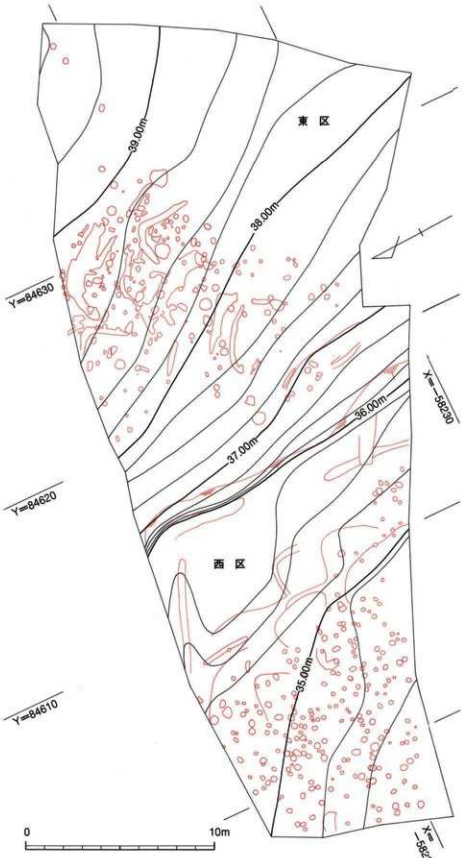
東区は西に傾斜する緩斜面で、遺構は調査区の北東を中心に、不整形な土壙や溝のほかピット多数を検出した。調査区の東側は遺構が少なく、試掘調査の成果からも遺構は東側へは広がらず、北側へはさらに広がっているものと推察された（第72図）。本調査区は地山が浅く、近年までおこなわれていた畑作のせいか、地山直上まで細片化した土器が多く出土した。原位置を保っている土器も一部見うけられたが、遺物の残存状況は極めて悪かった。

西区は平坦面で、東区との境には崖状の段差が見られる。かつて石垣を築いていたと思われる石材が出土し、これは後世の畑作に伴う遺構と判断されたが、古墳時代にはすでにこの崖状の地山加工がおこなわれていたようである。西区の東半分は東区とほぼ同様な状況であったが、西半分では土石流による堆積土の上から高密度のピット群を検出した（第73図）。おそらく掘立柱建物に関連するピット群と思われるが、構状の並びがところどころに見られるのみで、建物を構成するような配置は確認できなかった。このピット群は周囲にも広がっているようである。遺物はおもにピット群の東側で土器溜まりとして出土した。土器はほとんど細片化しており、特に西半分については残存状況は極めて悪かった。

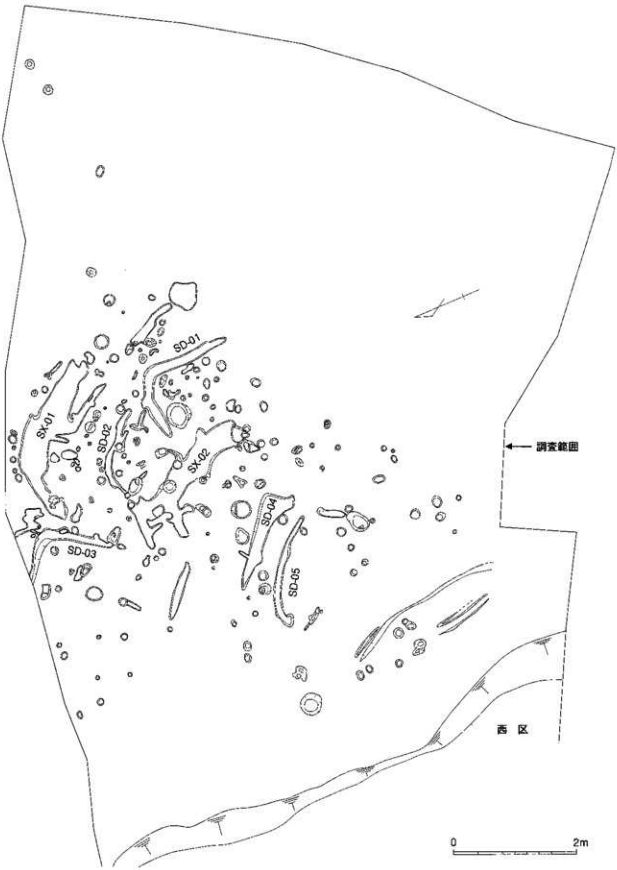
以上、東区と西区に分けて記したが、米坂遺跡は地山が浅い上に、後世の土地利用が盛んであったため遺跡の残りは非常に悪かった。それでも両区とも焼土や炭、竈片が多く出土し、ピットが多数検出されたことから、堀立柱建物の住居跡であることが判明した。以下、遺構ごとに説明する。



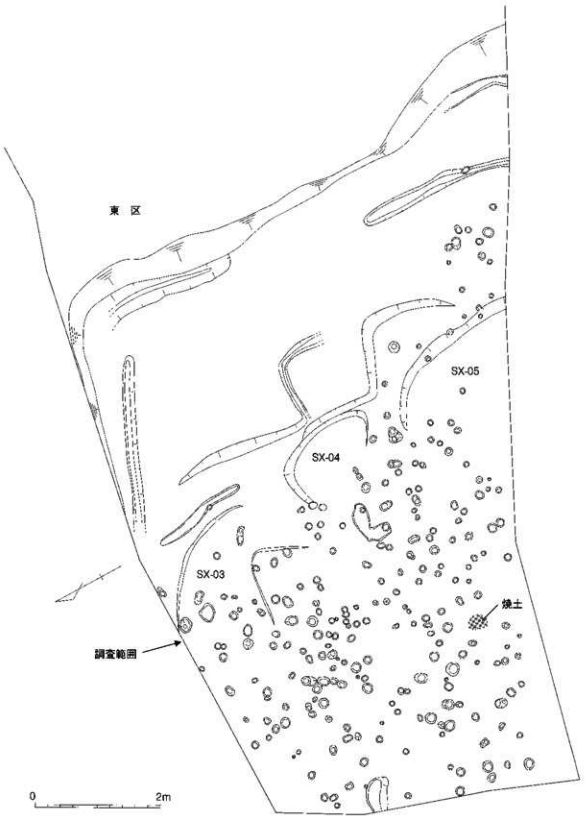
第70図　米坂遺跡T－5出土土器実測図



第71図　米坂遺跡本調査成果図



第72図　米坂遺跡東区遺構検出状況図

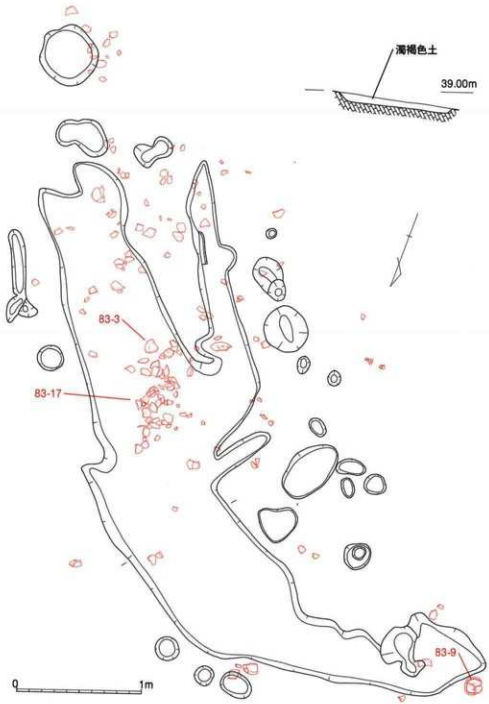


第73図　米坂遺跡西区遺構検出状況図

遺　構

・ＳＸ－01（第74図）

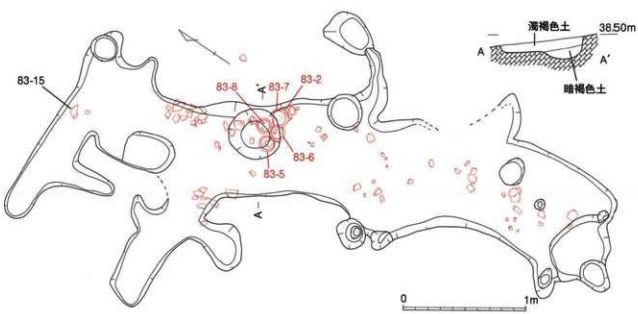
東区中央の北端の平坦地に位置する。地山を浅く掘り込んだ不整形な土壙で、深さは一番深いところで約10cmを測る。埋土は炭や土器小片を多く含んだ濁褐色土である。遺構面のほぼ中央からは、本来は完形を保っていたと思われる土師器の甕（第83図17）が出土した。遺構の性格は不明である。



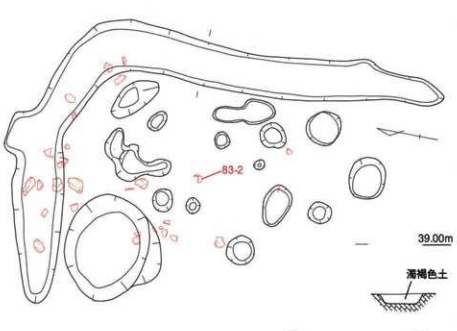
第74図　ＳＸ－01遺物出土状況図

・ＳＸ－02（第75図）

ＳＸ－01のやや南西に位置する。地山を浅く掘り込んだ不整形な土壙で、深さは約10㎝を測る。埋土は炭や土器小片を多く含んだ濁褐色土である。遺構面のほぼ中央にはさらに直径40㎝、深さ10㎝の円形の掘り込みがあり、若干浮いた状態で、須恵器の坏４点（第83図５～８）が原位置を保った状況で出土した。遺構の性格は不明であるが、完形の坏４点が整然と出土していることから、住居に付随する土間のような場所であったかもしれない。



第75図　ＳＸ－02遺物出土状況図



第76図　ＳＤ－01周辺遺物出土状況図

・ＳＤ－01（第76図）

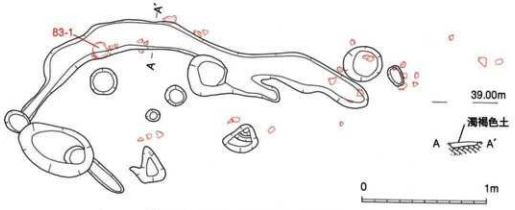
ＳＸ－02の東に位置する。平面Ｌ字形の溝で、東西約2.8m、南北約２m、深さ約15㎝を測る。形状からは、掘立柱建物にともなう溝の可能性が高いが、建物を構成するピットの配置は確認できなかった。溝の内側からは、土師器小片のほか手捏ね土器（第83図12）が出土した。

・ＳＤ－02（第77図）

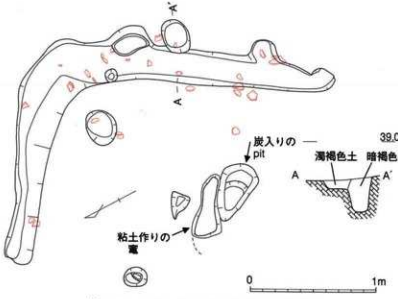
ＳＤ－01のやや北に位置する。湾曲した溝で東西約2.7m、深さ10㎝弱を測る。性格は不明である。

・ＳＤ－03（第78図）

ＳＸ－01の西に位置する。平面Ｌ字状の溝で、南北2.2m、東西1.9m、深さ約10㎝を測る。形状からは、掘立柱建物にともなう溝の可能性が高いが、建物を構成するピットの配列は確認できなかった。溝の内側には、地山直上に粘土による作り付けの竈の一部が残存していた。この竈は、粘土を平面Ｕ字形に積み上げてその内側を掘り下げたものである。かなり使い込まれたらしく、粘土はよく焼き締



第77図　ＳＤ－02周辺遺物出土状況図



第78図　ＳＤ－03周辺遺物出土状況図

まっており、内側の掘り込みには炭が詰まっていた。後世の耕作の影響か、竈の半分以上は削り取られており、残存部分も高さ8㎝程度しか残っていなかった。本来の高さは不明である。ＳＤ－03はこの竈を保護するための簡易な建物の排水施設とも考えられる。

・ＳＤ－04（第79図）

平面Ｌ字形で、北側がほぼ直線で長さ約３ｍを測る。性格は不明であるが、東区の中では傾斜が急な場所であるため、平坦面を作りだそうとしたものかもしれない。溝の肩付近には、砥石（第85図１）が落ち込んだ状態で出土した。

・ＳＤ－05（第79図）

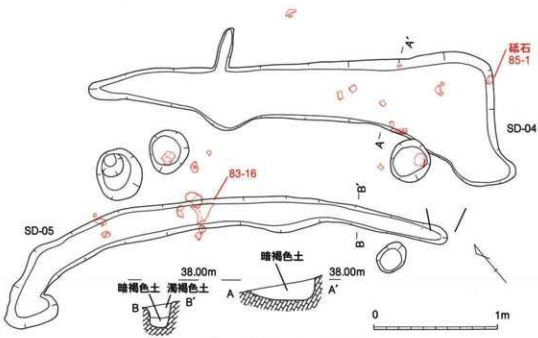
やや弧状の溝で、長さ約４ｍ、幅20～30㎝、深さ25㎝を測る。土師器の甕（第83図16）が落ち込んだ状態で出土した。性格は不明である。

・ＳＸ－03（第80図）

西区中央の北寄りに位置する。東側の高い方に溝を掘り、地山を弧状に20㎝程度削平して平坦面となしている。約４㎡の範囲から、焼土や多量の炭のほか甑か竈の把手（第84図９）が出土し、ここは煮炊きをおこなった場所であることがわかった。甑や甕の土師器片の出土量が多かったが、須恵器も坏（第84図３）や瓶（第84図５）が出土した。須恵器はＳＸ－02から出土したものよりも古いタイプである。周辺からは多数のピットを検出したが、建物を構成するピットの配置は確認できなかった。

・ＳＸ－04（第81図）

ＳＸ－03の南に位置する。3.2ｍ×２ｍの不整形な楕円状に地山を約30㎝掘り込んで平坦面となしている。床面からは多量の炭と焼け石のほか竈片（第84図８）も出土し、煮炊きをおこなった場所とわかった。東側の掘り込みの肩付近から土師器の破片がまとまって出土したが、掘り込まれた床面か

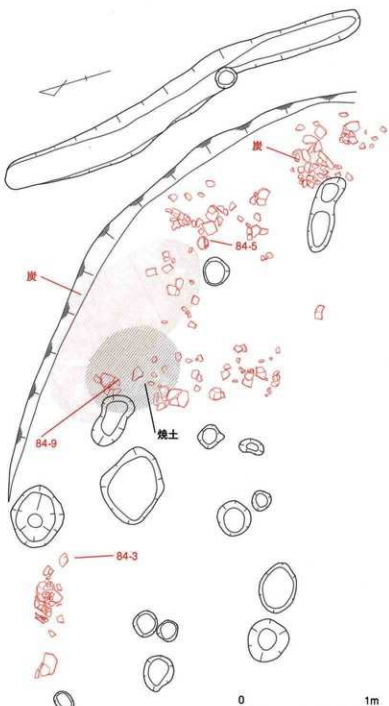


第79図　ＳＤ－04周辺遺物出土状況図

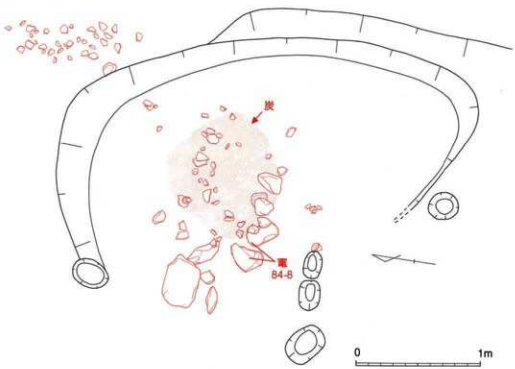
らは遺物はあまり出土しなかった。

・ＳＸ－05（第82図）

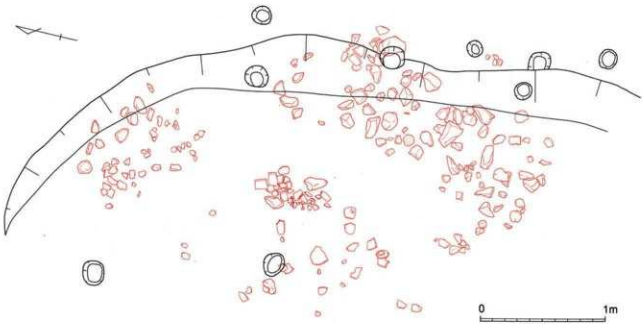
ＳＸ－04の南に位置する。東側の高い方を深さ約20cm、幅約５ｍにわたって掘り込んで平坦面となしており、調査範囲外の南方にも続いていると思われる。掘り込みの肩にピットが並ぶが性格は不明である。遺構内には若干の土器片のほか多量の山石が浮いた状態で散乱していた。



第80図　ＳＸ－03遺物出土状況図



第81図　ＳＸ－04遺物出土状況図

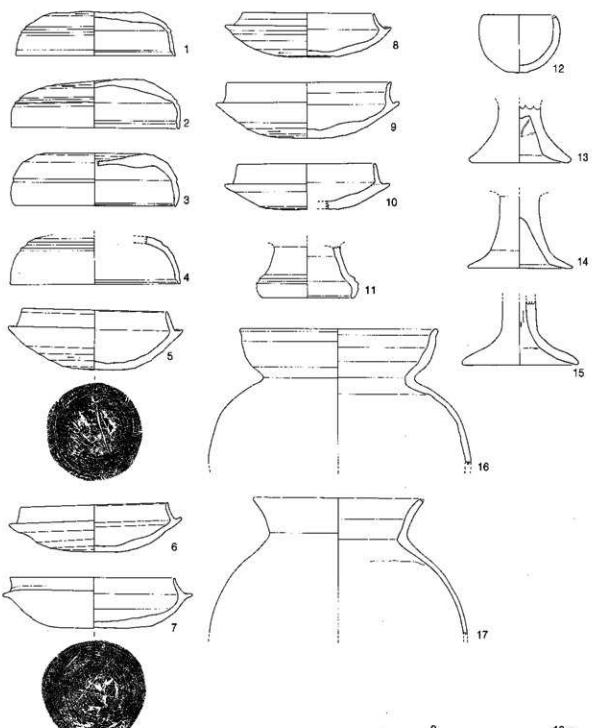


第82図　ＳＸ－05遺物出土状況図

遺　物

まず、東区の土器について記す（第83図）。

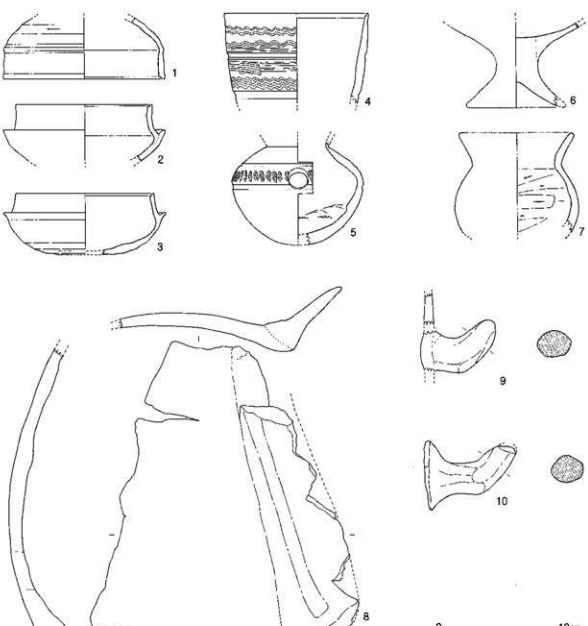
東区では多量の土師器の細片が出土したが、後世の畑作の影響か微細片化したものがほとんどであった。したがって、図面化できた土器は、少量出土した須恵器11点と、大量に出土した土師器のうちのわずか6点である。



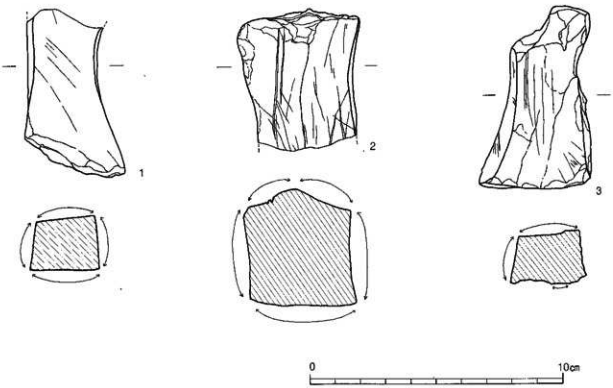
第83図　米坂遺跡東区出土土器実測図

須恵器は、器種としては蓋、坏、高坏が出土した。不思議と甕の破片は少なく、数点しか出土しなかった。坏は、いずれも底外面に明瞭な回転ヘラ削りを施し、立ち上がりはやや高いが内傾するものである。蓋は、天井に明瞭な回転ヘラ削りを施し、口縁端部内面には段をとどめているが、肩部の稜は凹線に移行しつつある段階のものである。11のようにやや古いタイプの高坏脚も出土しているが、5、6、7、8の坏は原位置を保って出土しているので、東区で生活が営まれた最終時期はこの土器を指標としてよいだろう。

土師器は、器種としては甕、手捏ね土器、高坏が出土したが、いずれも風化が著しく器面調整はほとんど不明である。



第84図　米坂遺跡西区出土土器実測図



第85図　米坂遺跡出土砥石実測図

次に西区であるが、さらに図面化できた土器は少なく、須恵器5点と土師器5点のみである（第84図）。

須恵器は、器種としては蓋、坏、ジョッキ形土器、甕がある。ここでも甕の破片は10数点しか出土しなかった。坏は立ち上がりが直立して高く、口縁端部は厚みがあって平坦面に近い段を有するもので、蓋は肩部の稜はシャープさを失っているが、口縁端部は坏と同様厚みがあって平坦面に近い段を有するものである。4のジョッキ形土器は、口縁端部内面にゆるい段を有している。底部や把手部分は欠損している。5の甕は胴部半分弱しか残存しないが、胴部が張るもので最大径は約10cmを測る。頸の付け根は約5cm程度で、伴出した蓋坏と同時期のものであろう。

土師器は、器種としては高坏、小壺、竈、甑または竈の把手がある。6の高坏は脚が低いタイプのものである。7の竈は一部しか残っていないが、二次的に火を受けた痕跡がある。

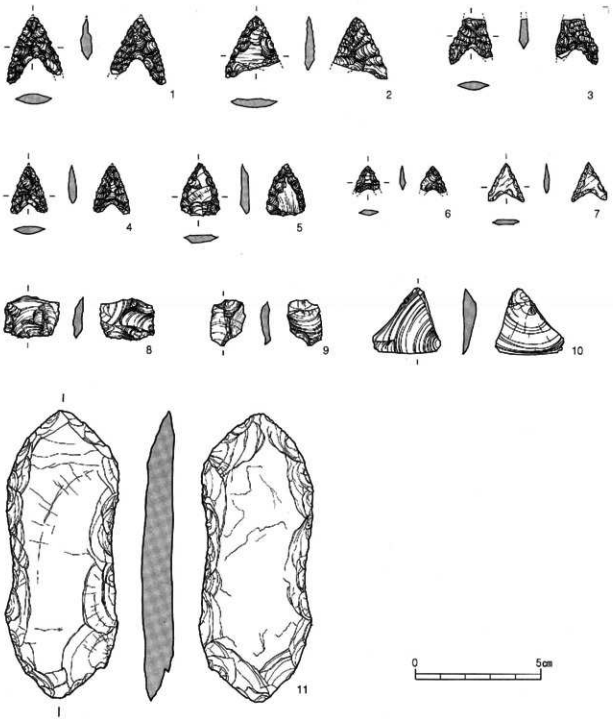
土器以外の遺物としては砥石、玉、石器が出土した。

砥石は3点出土した（第85図）。いずれも東区から出土したもので、1・2は遺構面、3は遺物包含層中から出土したものである。1と3はバチ形で、よく似た形状である。

玉は1点出土した（第86図）。西区の最西端やや南寄りの遺構面直上から出土したもので、材質は水晶である。切子玉に似ているが、側面のカットは無く、ソロバン玉と同じ形をしている。法量は、直径1.1cm、高さ0.8cm、重さ1.2gを測る。孔は、一方に軽く抉りを入れた後、反対側から錐で一気に穿っている。

第86図
米坂遺跡出土玉実測図
（実物大）

石器類（第87図）は古墳時代以前の遺物で、掘立柱住居跡の遺構とは直接関係ないものである。1～6は黒曜石製の鏃で、6は超小型品である。7は安山岩製の鏃である。そのほか黒曜石の剥片数十点も遺物包含層中から出土しており、当該地で石器を製作していたことがうかがえる。時期は不明である。11は玄武岩製の分銅形石器で、東区南西斜面の地山直上から出土した。これは縄文時代の遺物である。



第87図　米坂遺跡出土石器実測図

小　結

米坂遺跡は古墳時代中期から後期半ばにかけて営まれた、掘立柱建物の住居跡である。

調査の便宜上、東側の微高地を東区、西側の平地を西区として、まず東区から調査を開始した。東区では溝状遺構をともなう掘立柱建物があったと思われる。遺構の切り合い関係がほとんど見られないことから、短期間の営みであった可能性が高い。遺構にともない最終床面から原位置を保って出土した土器は、6世紀後半の須恵器であったことから、この時期をもって東区での営みは廃絶したと考えられよう。では、東区が営まれた時期の上限はというと、遺物包含層中から退化した二重口縁の甕小片が出土しているので、5世紀半ばまでさかのぼり得ると思われる。しかし、今回の調査ではその時期の遺構を確認することはできなかった。

西区では東区寄りに地山を加工して平坦面を作り出しており、そこでは煮炊きをおこなった痕跡が顕著に検出できた。ＳＸ－03では、持ち運び式竈が地山直上で出土したほか、やや浮いた位置から、6世紀初頭の須恵器の坏が出土した。また、西区西側半分については掘立柱建物があったと思われるが、ピット数が多すぎて、建物を復原することはできなかった。長期間にわたって小規模な掘立柱建物が建てかえられてきたのであろう。しかし、これらのピット群にともなう遺物は、玉が1点遺構面直上から出土したのみであり、そのほかは風化が著しい土師器の小片ばかりであったため時期を確定することはできなかった。

ところで、単純に東区と西区から出土した数少ない土器を比較すると、東区では6世紀半ばの遺物が目立ち、西区では、6世紀初頭の土器が目立つ。それは、東区が微高地であることから、当初東区にあった古い時期の遺物を、6世紀半ばになって居住区とする際に標高が低い西区へ廃棄された状況も考えられるが、主たる居住空間が西区の平地から東区の微高地に移ったことを示唆しているとも考えられよう。

米坂遺跡は、約100年間という長い期間にわたって営まれた集落遺跡である。西区の大量のピット群に対して東区では遺構が少ないことから、6世紀半ば近くに東区の微高地に居住域が移った可能性が高いと思われる。ただ、ここでの推察は、地形の面から判断して米坂遺跡の範囲は南北にかなり広がっているはずであるのに、調査を実施したごく一部から導きだした推論にすぎないことを付記しておきたい。

さて、米坂遺跡は後述する米坂古墳群と谷を挟んで向かい合っており、その間の距離は約100ｍである。また、米坂遺跡が営まれた時期と米坂古墳群が造営された時期はほぼ一致しており、両遺跡の在り方は居住域と墓域との関連の面で非常に興味深い。このことに関しては、米坂古墳群の欄で改めて触れたいと思う。

T－5 出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
70－1	須恵器	高坏蓋	口径12.8 器高6.1 つまみ径3.5 つまみ高1.0	密 1 mm未満の白色砂粒を少量含む	良好	(外)淡青灰色、黄緑色の自然釉(内)淡青灰色	右回転	
70－2	須恵器	蓋	口径11.8(推定)	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断)淡褐色	右回転	
70－3	須恵器	坏	受部径13.8	密、白色微砂粒を含む	良	(内、外)灰色 (断)淡灰色	右回転	火ぶくれ、歪みあり
70－4	土師器	甕	口径11.8	1 mm前後の砂粒を多く含む	良	(内、外)淡橙白色		
70－5	土師器	甕	口径23.0(推定)	1 mm前後の砂粒を含む	良	(内、外)淡橙白色		
70－6	土師器	高坏		密	良好	(内、外)橙褐色		

東区出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
84－1	須恵器	蓋	口径13.0	石英、長石微粒を少々含む	良好	(内、外)灰色 (断)褐色	右回転	
84－2	須恵器	坏 高坏か？	口径11.0 受部径13.0 器高不明	長石微粒を多く含む	良好	(外面口縁以外、断面)褐色(口縁、内面)淡灰色	右回転	
84－3	須恵器	坏	口径11.0 受部径13.0 器高4.9	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
84－4	須恵器	ジョッキ形土器	口径11.6(推定)	石英、長石粒を多く含む	良好	(内、外)淡灰色 (断)灰色	右回転	
84－5	須恵器	甑	頸径4.9	緻密、石英微粒をわずかに含む	底付近軟	(内、外、断)淡灰色	右回転	
84－6	土師器	高坏	底径8.0	石英、長石微粒を多く含むが緻密	良好	(外)橙色		
84－7	土師器	短頸壺	口径9.2 頸径7.2	1 mm前の石英及石粒を多く含む	やや良	(内、外、断)黒～褐色		
84－8	土師器	甕	不明	1 mm前後の石英長石粒を少々含む	良好	(内、外、断)淡褐色		
84－9	土師器	不明		石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断)淡明褐色		
84－10	土師器	不明		石英、長石微粒を多く含む	やや軟	(内、外、断)淡明褐色		

西区出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
83－1	須恵器	蓋	口径12.7 器高3.5	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外)青灰色 (断)褐色	右回転	
83－2	須恵器	蓋	口径13.5 器高3.9	長石、石英粒を少々含む	良好	(外)灰色 (内、断)淡灰色	右回転	
83－3	須恵器	蓋	口径12.8 器高4.15	石英、長石粒を多く含む	良	(内、外、断)淡灰色	右回転	
83－4	須恵器	蓋	口径13.6(推定)	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外)灰～黒灰色 (断)褐色	右回転	
83－5	須恵器	坏	口径11.6 受部径14.0 器高4.8	0.5mm前後の石英長石粒を密に含む	良好	(内)灰色 (外)濃灰色～淡灰色	右回転	
83－6	須恵器	坏	口径11.9 受部径13.8 器高4.0	石英、長石微粒を多く含む	悪い	(内、外、断)淡灰白色	右回転	
83－7	須恵器	坏	口径12.1～12.6 器高4.0 受部径15.1～14.8	石英、長石微粒を多く含む	良好	(内、外)濃青灰色	右回転	
83－8	須恵器	坏	口径10.6 受部径13.4 器高3.5	石英、長石微粒をわずかに含む	良	(内)赤褐色 (外)赤褐色～黒色	右回転	

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
83－9	須恵器	坏	口径13.2～9.8 器高4.5　受部径14.6～12.8	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 淡灰色	右回転	
83－10	須恵器	坏	口径11.0　受部径13.2 (復定)	緻密	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	火ぶくれ、至みあり
83－11	須恵器	高坏	底径7.2(復定)	緻密、長石微粒をわずかに含む	軟	(外)淡褐色 (内、断)白灰色	右回転	
83－12	土師器	手捏ね土器	口径5.6 器高4.6	1mm前の石英長石粒を少々含む	悪い	(内、外、断) 淡橙褐色		
83－13	土師器	高坏脚	底径8.2	石英、長石粒を少々含む	やや軟	淡橙色		
83－14	土師器	高坏	底径8.4	石英、長石微粒を少々含む	やや軟	(内、外、断) 橙褐色		
83－15	土師器	高坏	底9.4	石英、長石微粒を多く含む	良	(内、外、断) 橙色		
83－16	土師器	甕	口径15.8　頸径12.1 器高不明	1mm前後の石英粒を多く含む、ウンモも少々	やや軟	(内、外、断) 淡褐色		
83－17	土師器	甕	口径13.6(推定) 脚径10.9(推定)	1mm強の石英、長石粒を多く含む	悪い	(内、外、断) 淡褐色		

砥石観察表

図面番号	種類	法量(cm、g)	石材	備考
85－1	砥石	残存長縦6.0　横2.8　重さ98.85		片端を欠損
85－2	砥石	残存長縦5.5　横4.3　重さ154.34		約半分を欠損か？
85－3	砥石	縦7.2　横3.0　厚さ2.1　重さ100.46		一部欠損

玉観察表

図面番号	種類	法量(cm、g)	材質	備考
86	切子玉	最大径1.05　高さ0.8　重さ1.2	水晶	完形

石器観察表

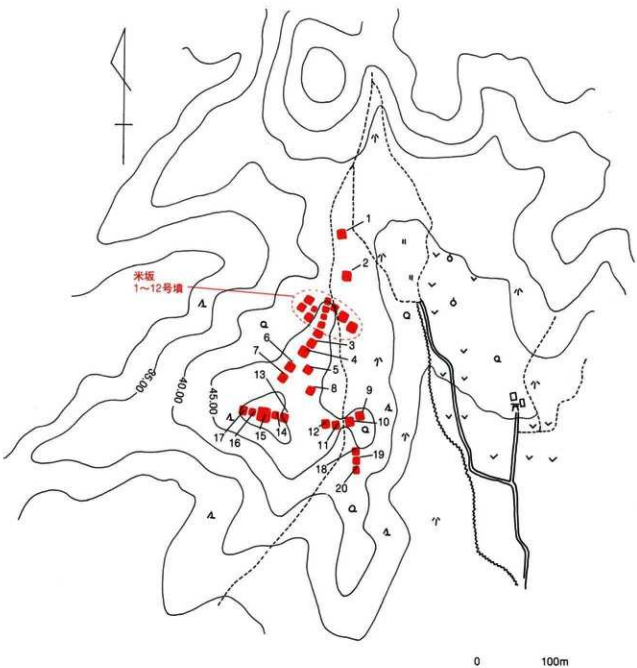
図面番号	種類	法量(cm、g)	石材	備考
87－1	石鏃	縦2.7　横2.2　厚さ0.4　重さ1.35	黒曜石	先端と片翼をわずかに欠損
87－2	石鏃	縦2.5　横(最大)2.4(推定)　厚さ0.3　重さ1.22	黒曜石	片翼を欠損
87－3	石鏃	残存長1.8　残存幅1.7　最大厚0.35　重さ0.97	黒曜石	先端と翼を欠損
87－4	石鏃	縦2.0(推定)　横(最大)1.4　厚さ0.3　重さ0.65	黒曜石	
87－5	石鏃	縦2.0　横1.5　厚さ0.3　重さ1.06	黒曜石	
87－6	石鏃	残存長1.1　残存幅1.0　最大厚0.2　重さ0.18	黒曜石	翼端をわずかに欠損
87－7	石鏃	縦1.5　横1.5　厚さ0.2　重さ0.33	安山岩	
87－8	剥片	縦1.6　横2.1　厚さ0.4　重さ1.69	黒曜石	
87－9	剥片	縦1.8　横1.4　厚さ0.3　重さ0.97	黒曜石	
87－10	剥片	縦2.8　横2.7　厚さ0.55　重さ2.37	黒曜石	
87－11	分銅形石器	縦11.5　横4.4　厚さ1.2　重さ97.01	玄武岩	

米坂古墳群

位置と環境

米坂古墳群は、松江市西尾町字垣1420－2他に所在する。

調査区は、和久羅山から南に派生する低丘陵尾根上とその東側緩斜面で構成されている。調査前は、樹高10mを越える大木や潅木、笹等が生い茂る山林であった。丘陵の東側は幅の広い谷になっており、なかば荒れているが、現在も畑地として利用されている。この谷から米坂古墳群より100mばかり北



第88図　米坂古墳群位置図および古墳分布図

方の地点で西方に向かう山道に入ると、いわゆる米坂越えのルートがある。このルートは幅1m前後の山道であるが比較的緩やかで、西尾町西谷と持田町を結ぶ最短距離の道として、自動車が普及する近年までは一般的に利用されていたという。古くは奈良時代の書物『出雲国風土記』に記された、国庁から朝酌の渡しを経て島根郡家へいたる駅路、枉北道にあたる可能性も高い。丘陵の西側は、大木が茂る深い谷になっている。丘陵尾根上の緩やかな道を南に下れば、多数の五輪塔が散乱している場所があり、常念寺の裏山にいたる。

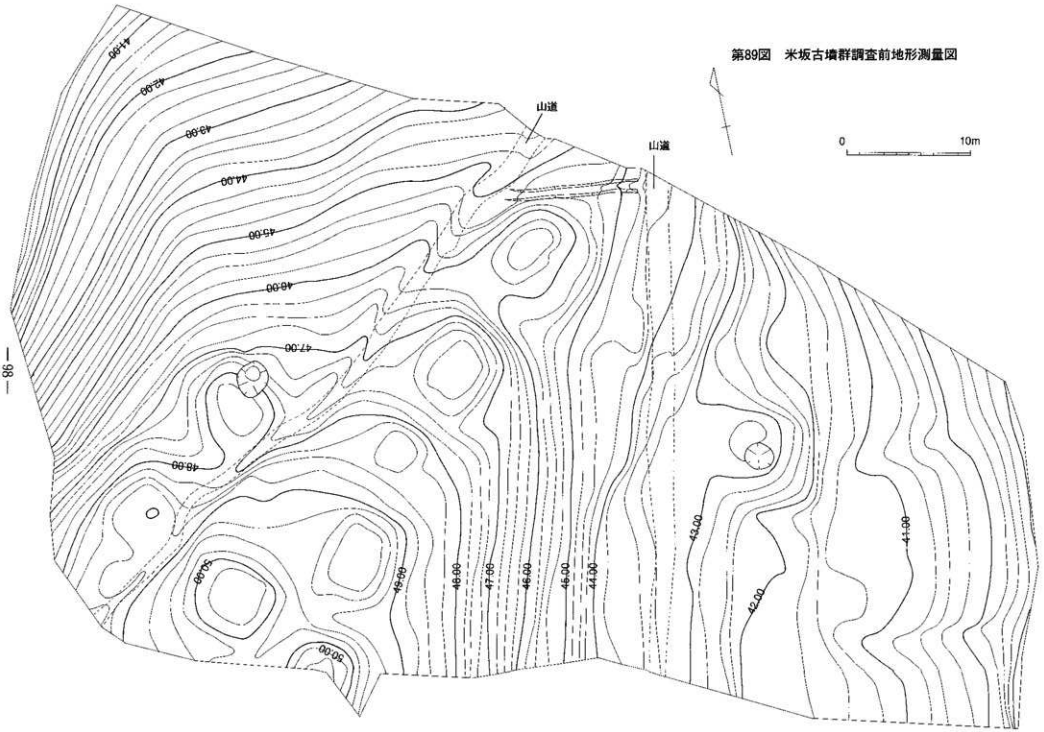
さて、米坂古墳群調査地周辺の分布調査をおこなったところ、今回の開発範囲に含まれる12基の他に、20基の古墳を確認した（第88図）。戦後の開墾によって斜面部分を中心に畑地として利用された痕跡がみられ、既に墳丘を失った古墳も存在しうることを考慮すると、米坂古墳群は30基以上の古墳で構成される古墳群といえよう。米坂古墳群の古墳は表面観察をした限りでは、ほとんどが小規模で比高が低い方墳、いわゆる“ザブトン古墳”であった。内部主体に横穴式石室を持ちそうな古墳は見られない。この古墳群の特徴は、小規模古墳が互いに墳裾を接するように、きわめて高密度に築かれていることである。

周辺の遺跡としては、谷を挟んで東方100mに、前記した古墳時代中期から後期後半にかけての住居跡、米坂遺跡がある。今回は開発範囲についてのみ調査を実施したが、遺構の検出状況や地形から判断すると、遺跡の範囲は南北に大きく広がっていると思われる。この遺跡は米坂古墳群とほぼ並行して営まれており、集落と墓域を考える上で貴重な遺跡といえる。また、直線距離にして東南400mの地点には一辺30mの方墳、廟所古墳があり、東南500mの地点には一辺30mの方墳、観音山古墳がある。両古墳とも未調査であるが、古墳時代中期の大型古墳ではないかといわれている。

その他に周知の遺跡は確認されていないが、西尾町周辺は和久羅山麓で低丘陵が広がり、低湿地もある。また、南は大橋川に面しており、漁労や水上交通にも至便の場所である。地面下に人知れず眠っている遺跡の数はまだまだ多いと推察される。

米坂古墳群各古墳観察表

仮番号	墳形	規　模	備　　考	仮番号	墳形	規　模	備　　考
1	方形	7×7m	墳頂に石材散乱	11	方形	9×9m	
2	〃	12×12m	第　図参照	12	〃	7×7m	
3	〃	9×9m		13	〃	8×8m	
4	〃	13×13m	盛土高い	14	〃	6×6m	わずかな高まり
5	〃	?	わずかな高まり	15	〃	16×16m	不整形
6	〃	9×9m		16	〃	5×5m	わずかな高まり
7	〃	9×9m		17	〃	7×7m	わずかな高まり
8	〃	7×7m		18	〃	7×7m	わずかな高まり
9	〃	10×10m	残存状況良好	19	〃	7×7m	わずかな高まり
10	〃	9×9m	残存状況良好	20	〃	6×6m	わずかな高まり


第89図　米坂古墳群調査前地形測量図
山道
山道
0
10m
41.00
42.00
43.00
44.00
45.00
46.00
47.00
48.00
48.00
50.00
49.00
46.00
47.00
46.00
45.00
44.00
43.00
42.00
41.00
50.00

調査の概要

米坂古墳群は、当初の分布調査では開発区域内に７基の古墳が確認されており、発掘調査は平成８年度事業として終了する予定であった。ところが、平成８年４月末の伐開作業途中の段階で、新たに３基の古墳の存在が確認された。松江市教育委員会と協議した結果、調査範囲を拡張する必要が生じた場所については、平成９年度に調査を実施することに決定した。また、墳丘の半分が開発範囲にかかっていた８号墳については、農道の設計を変更して保存することに決定し、調査は墳丘の盛り土を一部観察するにとどめることとなった。

平成８年度の調査は、平成８年５月31日から平成９年２月21日まで、実質140日間をついやして実施した。調査面積は約3,310㎡である。

調査は、まず重機を利用して、地形に変化が見られない場所についてのみ表土掘削をおこなった。その結果、尾根上古墳群の西の広い傾斜地は表土直下が地山となっており、遺跡が存在しないことがわかったので、調査範囲を丘陵尾根上から東側斜面に限定した。

次は人力に頼って、２号墳から順次、各古墳の表土剥ぎをおこない、同時に畦を残しながら周溝内の堆積土を除去して残丘の検出をおこなった。どの古墳も墳形は方墳で、残丘は低かったが、周溝は主としてコの字形に深く掘られたものが多かった。

次に墳頂における主体部検出にかかった。主体部は墳丘の比較的浅いところに作られていたらしく、残りが悪かった。２、６号墳では検出できず、３号墳では後世の道によって大半を失っており、５号墳は盗掘にあっていた。主体部を完掘できたのは、４、７号墳のみであった。

最後に墳丘の盛り土状況を観察し、墳丘を除去して墳丘下の遺構の有無を確認した後、２～８号墳の７基の古墳に関する調査を終了した。

また、古墳の調査に並行して、古墳が築かれていない場所についても精査を実施した。その結果、墳丘をすべて失っていた１号墳の周溝を検出した。そのほか墳丘を持たない、バラエティーに富んだ埋葬施設Ａ～Ｈの８基を検出し、これらについての調査もおこなった。

平成８年10月27日には、現地説明会を開催した。秋晴れの遺跡には約100人の人々が見学に訪れ、いつもは静寂な古墳群もこの日ばかりはにぎやかな一日となった。。

平成９年度の調査は、平成９年４月14日から平成９年６月30日まで、実質26日間実施した。調査面積は約210㎡である。

当初３基の古墳について調査をおこなう予定であったが、新たに周溝のみをとどめる10号墳を検出し、４基の古墳について調査を実施した。墳丘は４基とも方墳で、９、11号墳は比高が低かった。

主体部は３基の古墳について検出した。その後、墳丘の盛り土状況を観察し、墳丘を除去して墳丘下の遺構の有無を確認して、４基の古墳の調査を終了した。

以上、米坂古墳群発掘調査は２年度にわたり、実質166日をかけて、約3,520㎡について調査を実施し、12基の古墳と８基の墳丘をともなわない埋葬施設を検出し、調査を終了した。

第90図　米坂古墳群調査成果図

1号墳

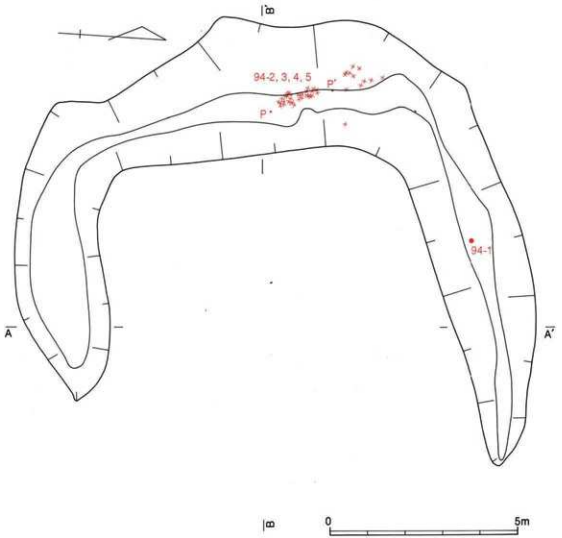
1号墳は米坂古墳群の中では一番東端の低い場所で、標高41.00mの緩傾斜地に築かれている。墳丘は後世の開墾によって削平されており、山道の凹部以外は平坦地と化していたが、地山面の精査中に初めて周溝の輪郭が見つかり、この古墳の存在がわかった。表土を除去した時点で、すでに盛り土の下の旧表土と思われる黒色土が露出しており、盛り土は全く残存していなかった（第92図）。旧表土以下は小炭を含む淡褐色砂質土で、その中から、古墳築造以前の土師器の甕片（第96図）と石鏃（第159図1）が出土した。

・墳丘（第91図）

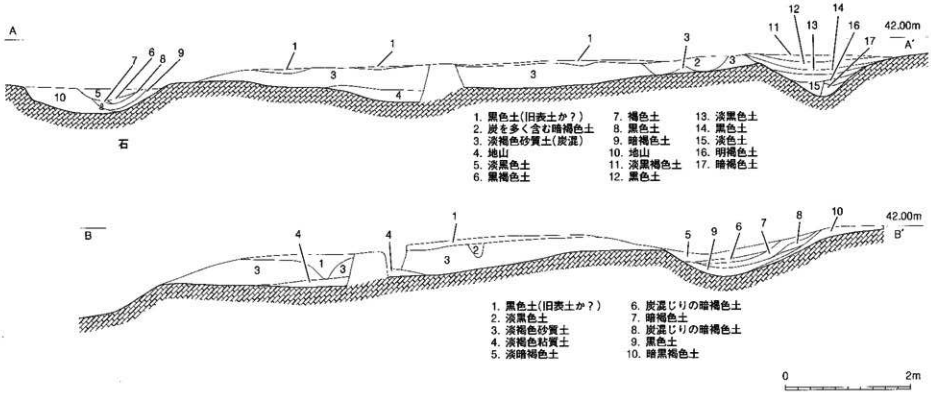
盛り土をすべて失っている。規模は、周溝から復原すると一辺11m、周溝を含めると一辺約13mを測る方墳である。

・周溝（第91図）

墳丘の北、西、南側に平面コの字状に掘られており、残存部のみで観察すると、深いところで地山



第91図　1号墳検出状況および遺物出土状況図



第92図　1号墳セクション図

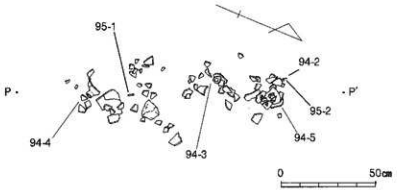
面から約0.8m近く掘り込まれていた。周溝の底近くからは、土師器の坏、高坏、壺、鉄製品が出土した。土師器類は完形のままその場で潰れて埋もれたような状態で出土した。

・主体部

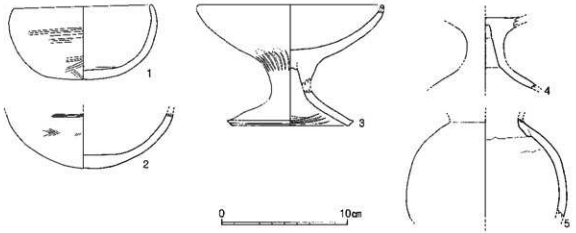
残存しなかった。

・遺物

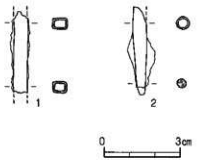
周溝内から、土師器の坏2点、高坏2点、壺1点、鉄鏃の茎部2点が出土した。第94図1の坏は外面にハケメ調整が残り、内外面とも赤色顔料が塗られていた。3の高坏は坏部が丸いタイプのものである。鉄鏃は95図1が茎部で、2が基部にあたり、同一個体になる可能性もある。



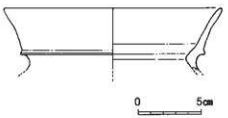
第93図　1号墳周溝出土遺物出土状況図



第94図　1号墳周溝出土土器実測図



第95図　1号墳周溝出土鉄製品実測図



第96図　1号墳墳丘下出土土器実測図

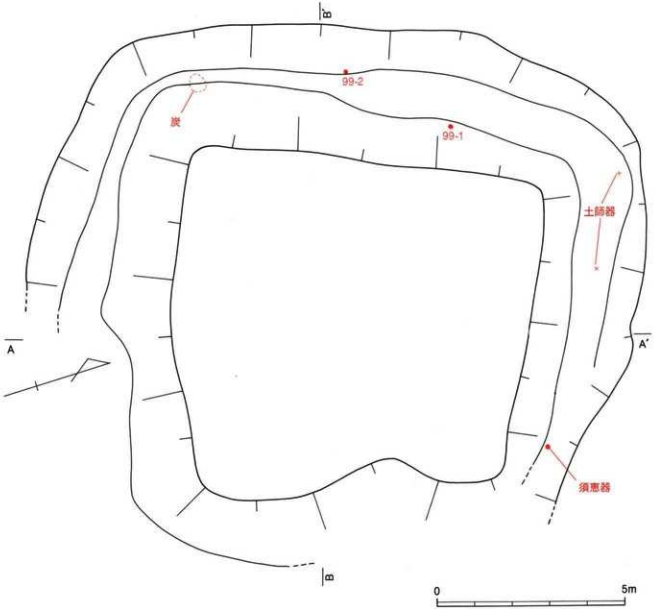
2号墳

2号墳は1号墳の北西で、2号墳の墳裾の南東の角が1号墳の周溝の北西の角に接するほどに、きわめて近接して築造されている。墳丘は標高43.00m前後の緩やかな斜面上に築かれている。

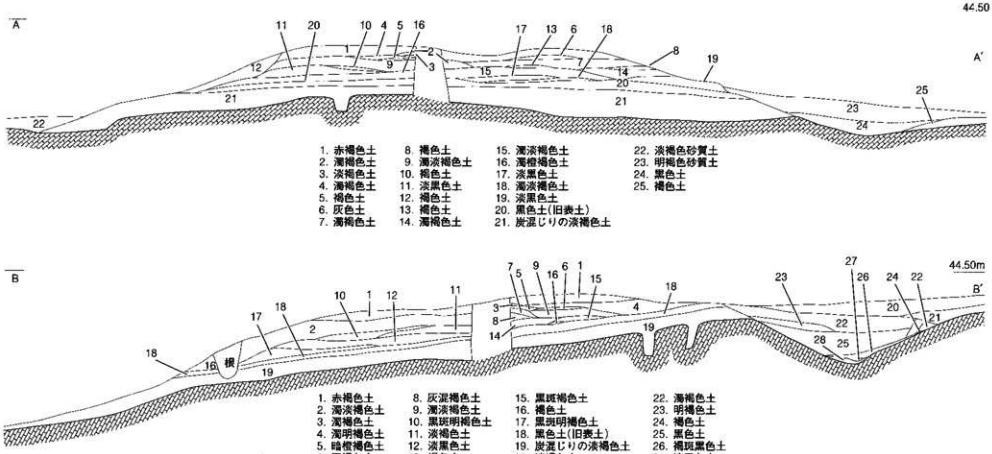
墳丘の頂部にはゴミ焼きの穴が掘られていたり、墳丘の南をかすめるように溝状に山道が通っていたりで、少々墳形が歪んではいたが、墳丘の残りは非常に良く、一見して方墳であることがわかる。

・墳丘（第97図、第98図）

規模は、一辺13m、周溝を含めると一辺16mを測る、調査区域内では一番大きい方墳である。盛り土は、旧表土の上から盛り始められており、一番残りがよい場所で約90cmの高さが残っていた。



第97図　2号墳検出状況および遺物出土状況図



第98図　2号墳セクション図

・周溝（第97図）

墳丘の北、西、南側に平面コの字状に掘られており、西側の一番深いところでは、旧表土面から約1.2m、地山面から約0.8m掘り込まれている。周溝内からは、底面にきわめて近いレベルで土師器の坏3個体が出土し、器種は定かではないが微細化して軟弱な土師器の破片が集中して出土する場所が1カ所みられた。須恵器も長頸壺の底部が出土したが、周溝内堆積土のかなり上方だったので、これは流れ込みの遺物と考えられる。周溝の南西の角付近では、底から約25cm上面において大量の炭が出土した。周溝が20cm以上埋もれた時期のものであるから、築造当初とはかなり時間的隔たりがあると思われるが、伴出遺物が無いため、時期やその意味するところは不明である。

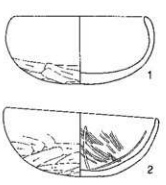
・主体部

主体部は見つからなかった。墳丘上や周辺にはかなり大きめな山石も含めて、山石の散乱が見られたことから、石材を利用した主体部が壊された可能性が高いと思われる。そうだとすると、主体部は墳丘のかなり高い位置にあったことが想像される。ちなみに、2号墳の南方平坦面を精査している時に、標高43.50mの2号墳に近い場所から鉄鏃の破片2点が出土した。これらは2号墳の副葬品であったかもしれない。

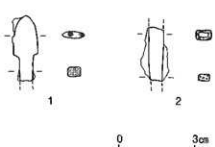
・遺物

周溝内から坏が3点出土したが、図面化できたのは第99図の2点である。1は、口縁端部がやや肥厚して内傾するもので、底部外面には手持ちのヘラケズリを施している。内外面には赤色顔料が塗布されている。2は、口縁が素直にのびるもので、内面にはヘラミガキ、外面は底部から器体の半ばまで、かなり広い範囲に手持ちのヘラケズリを施している。

1号墳南方平坦面からは鉄鏃片が2点出土した。1は、鏃身と茎の一部が残る長茎三角鏃である。2は、茎部のみの残存である。2点とも近位置から出土したので、同一個体の可能性もある。



第99図
2号墳周溝出土土器実測図



第100図
2号墳南側平坦面出土鉄製品実測図

3号墳

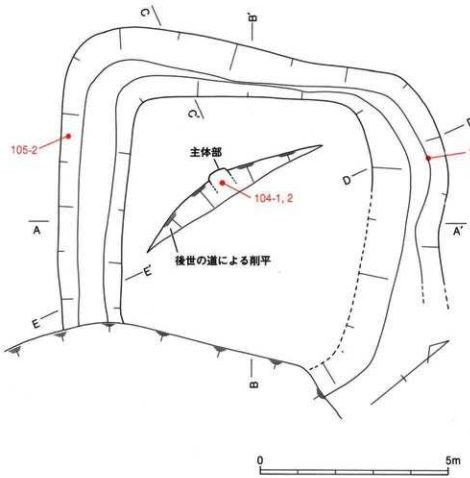
3号墳は2号墳の北西に位置する。墳丘は標高45m前後の緩傾斜地に築かれていたが、後世の山道によって墳丘の半分以上が削り取られていて残りが悪かった。

・墳丘（第101図、第102図）

規模は、8.5m×8.5mを測り、周溝を含めると10m×10mを測る方墳である。盛り土は旧表土上から盛られており、墳丘の西側では旧表土上に約70cmが残っていた。残存する一部分の観察でしかないが、盛り土は各層が水平に整然と盛られていた。墳丘の西側の盛り土はほとんど流されており、旧表土すら残っておらず、地山の上に二次的に堆積した層が観察できた。したがって、2号墳と3号墳の切り合い関係は土層面からは明確にできないが、3号墳の墳丘の東側墳裾を図面上で復原すると、2号墳の西側周溝の上に位置することから、3号墳が築かれた時期は、2号墳の周溝がかなり埋まった新しい段階であったことが推定される。

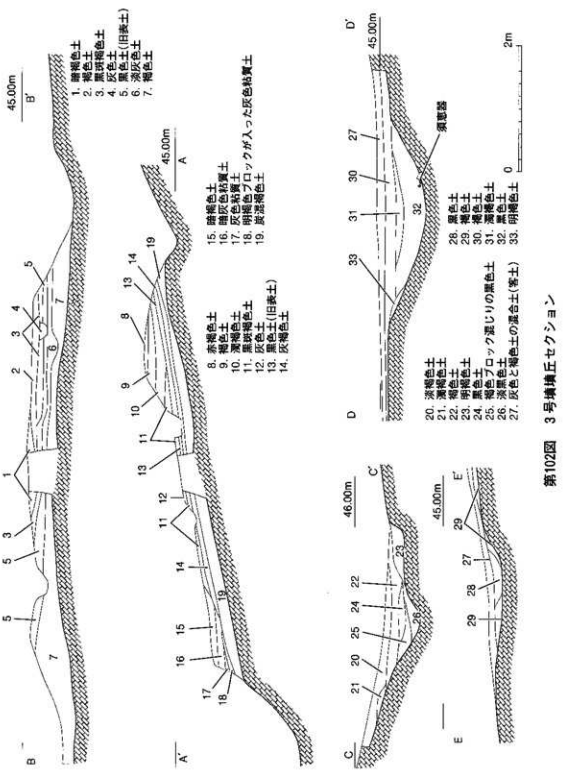
・周溝（第101図）

墳丘の北、西、南側に平面コの字状に掘られていた。西側の深いところでは、旧表土から約50cm、地山から約30cm掘りこんでおり、西側の断面はほぼV字形を呈していた。西側の周溝がやや狭く、鋭



第101図　3号墳検出状況および遺物出土状況図

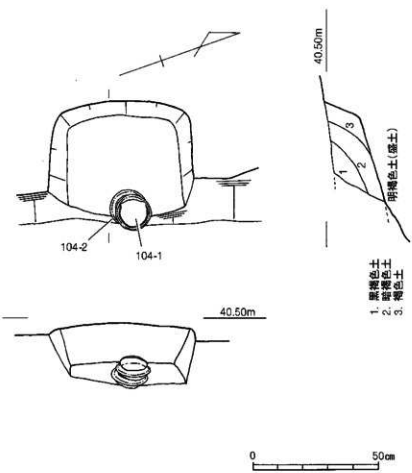
角に掘られているのは、４号墳の存在を意識していたのかもしれない。周溝の底面からは、須恵器の坏１点（第105図１）が出土した。周溝の肩部からも須恵器の坏１点（第105図２）が出土した。



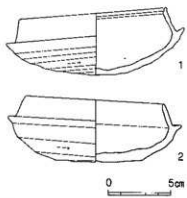
第102図　３号墳墳丘セクション

・主体部（第103図）

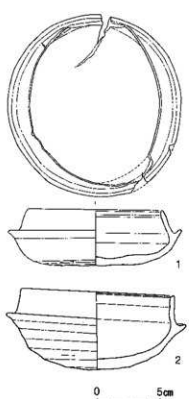
盛り土内に掘られた土壙で、わずかに残存していた。かつて、山道の切り通しで割石10点を確認したという報告があるが、今回の調査では、石材等の施設の痕跡は見られなかった。土壙の長さは不明だが、幅は残存部上場で60㎝、下場で46㎝を測る。一部分の観察でしかないが、西側がやや高くなっているようである。この主体部を図面上で復原すると、その主軸は方墳の辺と平行ではなく、対角線と一致する東西方向に位置している。主体部内の副葬品としては、墓壙西端から約30㎝の地点の中央に、須恵器の坏２点（第104図）がともに上向きに重ねられた状態で床面直上から出土した。



第103図　３号墳主体部および遺物出土状況図



第104図
3号墳主体部出土土器実測図



第105図
3号墳周溝出土土器実測図

・遺物

第104図は、主体部内から出土した須恵器である。1の坏は、立ち上がり端部の内側に段の痕跡を残し、内面の器壁は底から丸みをもって立ち上がりにつながっている。底外面には丁寧な回転ヘラケズリが見られる。2の坏は、立ち上がり端部に変化が見られず、内面の器壁は底と立ち上がりの境に凹稜がはいる。両者は土器編年上では別のタイプとして分けられるもので、この古墳の築造時期が、坏が1タイプから2タイプへ移行する時期にあたることが推察される。

第105図は、周溝底部および肩部から出土した須恵器である。1の坏は、立ち上がり端部の内面に凹線状に段の痕跡を残すもので、底部外面の回転ヘラケズリは面積が狭く、回転ナデの面積が広くなっている。焼成時のひび割れが著しい。2の坏は、丸みを帯びた器形で、立ち上がりが垂直で高く、やや平坦に近いしっかりした段を有している。明らかに他の3個体とは時期を異にするもので、尾根上の別の古墳から転落したものと考えられる。

4号墳

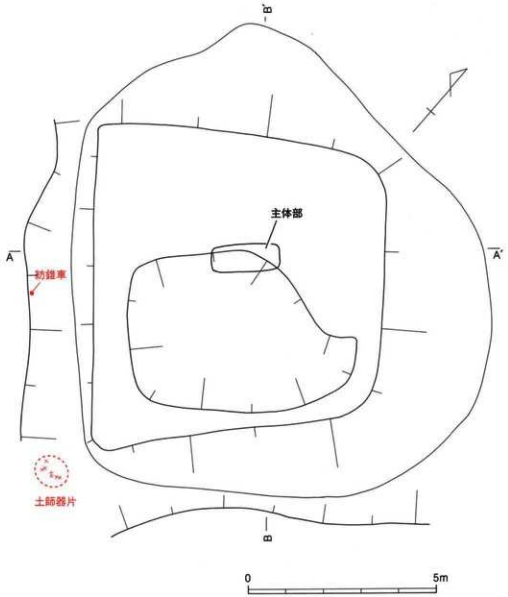
4号墳は3号墳の北西、5号墳の北東に位置している。尾根状古墳群の中では最北端、最低所で、標高45.50m前後の緩傾斜地に築かれている。

・墳丘（第106図、第107図）

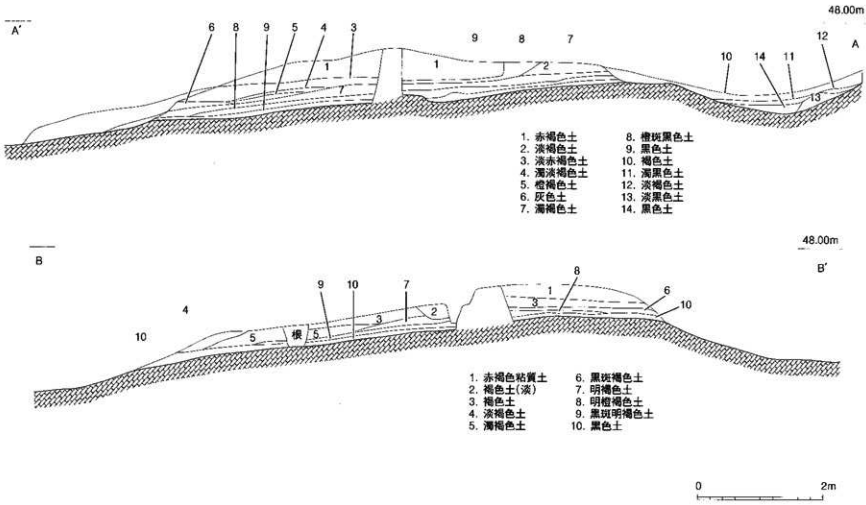
流土や採土によって残りが悪かったが、調査の結果、8.2m×8.2mを測る方墳であることがわかった。残丘の高さは0.7mである。盛り土は、旧表土の上から盛られており、旧表土上0.6mが残存していた。

・周溝（第106図）

墳丘の南東側にのみ直線状に掘られている。他の3辺側は自然地形が下がっているため、周溝を掘る必要がなかったのであろう。南東側の周溝は、深いところで地山面から約50cm掘り込んでいる。周



第106図　4号墳検出状況および遺物出土状況図



第107図　4号墳セクション図

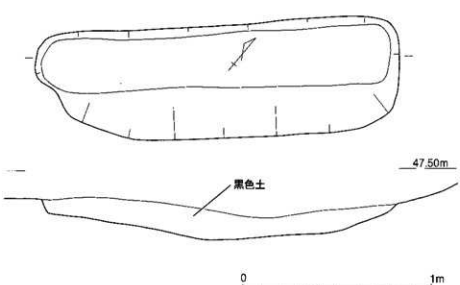
溝内からは紡錘車が1点出土した。また、南東の角付近からは同一個体と思われる土師器の小片が多数出土したが、風化が著しく器種の特定はできなかった

・主体部（第108図）

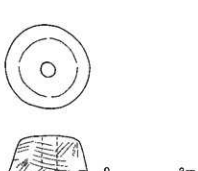
墳丘のほぼ中央に、墳丘の辺と平行の方向に掘られた土壙である。規模は、上場の長さ1.93m、幅0.6m、下場の長さ1.85m、幅0.3mを測り、不整形な長楕円の形状を呈している。墓壙は盛り土内に掘られており、検出面から床面までの深さは約20cmで、床面は中央部分がやや深くなっていた。副葬品は出土しなかった。

・遺物

周溝内から紡錘車1点と土師器片多数が出土した。第109図は紡錘車である。須恵質で、表面にハケメの痕跡が残る。やや浮いたレベルで5号墳寄りに出土したことから、5号墳にともなう可能性も高い。土師器片は多数出土したが、風化が著しく、薄い体部の小片ばかりで器種は特定できなかった。



第108図　4号墳主体部実測図



第109図　紡錘車実測図

5 号墳

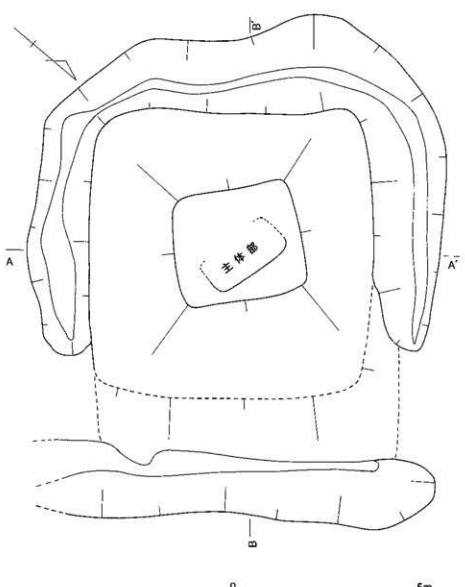
5 号墳は 4 号墳の南西、6 号墳の北東に位置し、墳丘は、標高47.00m前後の尾根上緩斜面に築かれている。墳丘の比高は高く残存状況が良さそうであったが、墳頂や墳丘斜面には内部主体に利用されていたと思われる大小の石材が散乱していた。

・墳丘（第110図、第111図）

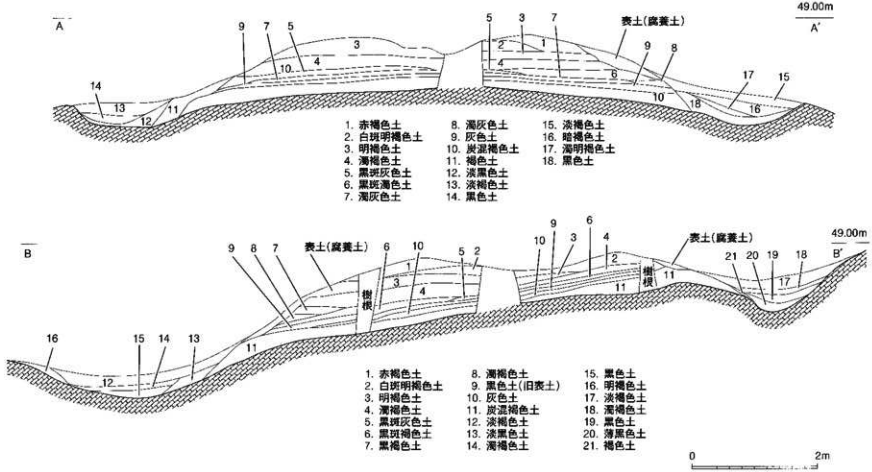
残存状況が良く、規模は9.5m×9.5m、周溝を含めると11m×11mを測る方墳であった。残丘は高く、1.1mを測る。盛り土は旧表土上から盛られており、一番高いところで旧表土上70cm強が残っていた。

・周溝（第110図）

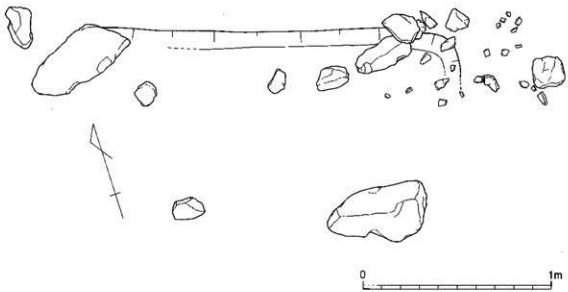
墳丘の北西側、南西側、南東側に、平面コの字状に掘られており、南西側の周溝は、6 号墳の墳丘



第110図　5 号墳検出状況図



第111図　5号墳セクション図



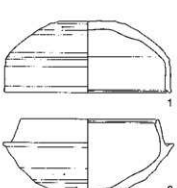
第112図　5号墳主体部実測図

を切って掘られたようである。なお、北東側に掘られた周溝は、4号墳にともなうものと思われる。周溝の深さは、深いところで旧表土面より70cm、地山面より40cmを測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

・主体部（第112図）

盗掘にあっているようで、墳頂の表土直下には石材や粉々になった須恵器片が散乱していた。大部分は撹乱されていたが、北側から東にかけての墓壙ラインがわずかに検出でき、それによると、主体部の方向は墳丘の辺の対角線方向に一致することがわかった。墓壙の規模は不明である。内部施設は、周辺に散在する石を見た限りでは、石棺状のものではなく、後に記す12号墳のようなタイプであったと考えられる。墓壙の東端付近の撹乱土中からは、須恵器の蓋2点分と坏2点分の細破片が出土した。

・遺物



第113図　0　5cm
5号墳主体部出土土器実測図

盗掘による撹乱土中から、須恵器の蓋2点、坏2点分の破片が出土した。第113図の1は蓋で、器形が丸みを帯びている。屑部の稜は鋭くないが、口縁端部はやや肥厚して内面には明瞭な段が施されている。2は坏で、これも器形が丸みを帯びている。立ち上がりはやや内傾するが高さがあり、口縁端部内面には明瞭な段を有し、底部外面には丁寧な回転ヘラケズリが施されている。

なお、他の蓋1点と坏1点は、風化が著しかったため復原、図面化ができなかった。形態は1、2と近似している。

6号墳

6号墳は尾根上古墳群の1つで、5号墳の南西、7号墳の北東に位置する。墳丘は、標高49.50m前後の緩斜面に築かれていた。

・墳丘（第114図）

規模は、6m×5mを測り、周溝を含めると7m×6m測る、方墳である。やや東西に長いようであるが、墳丘の北東側が一部5号墳の周溝によって削り取られているためであろう。盛り土は、旧表土上から盛られているが、調査時は1層しか残っていなかった（第115図）。旧表土中からは古墳時代前期の複合口縁の甕小片が出土した。

・周溝（第114図）

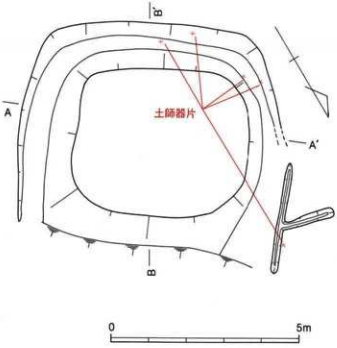
墳丘の東、南、西側に平面コの字状に掘られていた。南側の一番深い場所でも旧表土下30cm程度の浅い周溝であった。周溝内からは土師器の小片が出土した。

・主体部

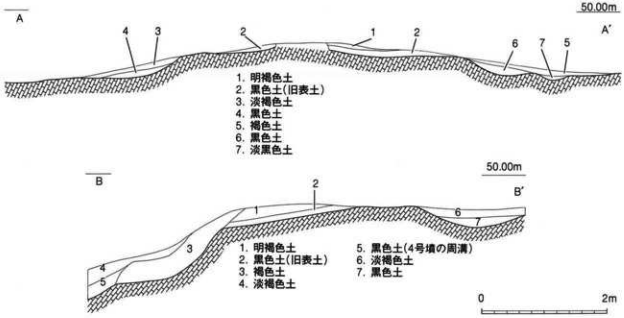
残存しなかった。

・遺物

周溝内から土師器の破片が出土したが、小片であるため器種は特定できなかった。



第114図　6号墳検出状況および遺物出土状況図



第115図　6号墳セクション図

7号墳

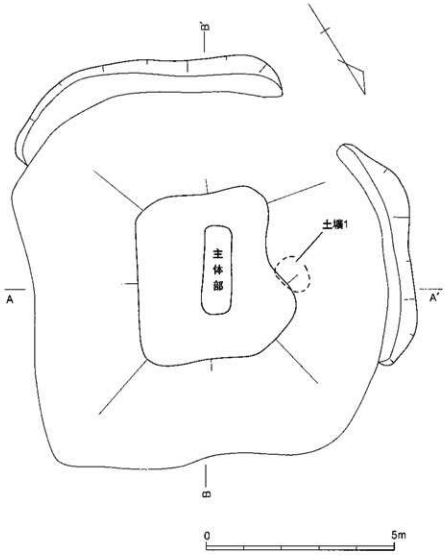
7号墳は尾根上古墳群の1つで、南西は6号墳に、南は8号墳に、南西は9号墳にそれぞれ墳裾が接している。墳丘は、標高49.50m前後のほぼ平坦地に築かれている。

・墳丘（第116図、第117図）

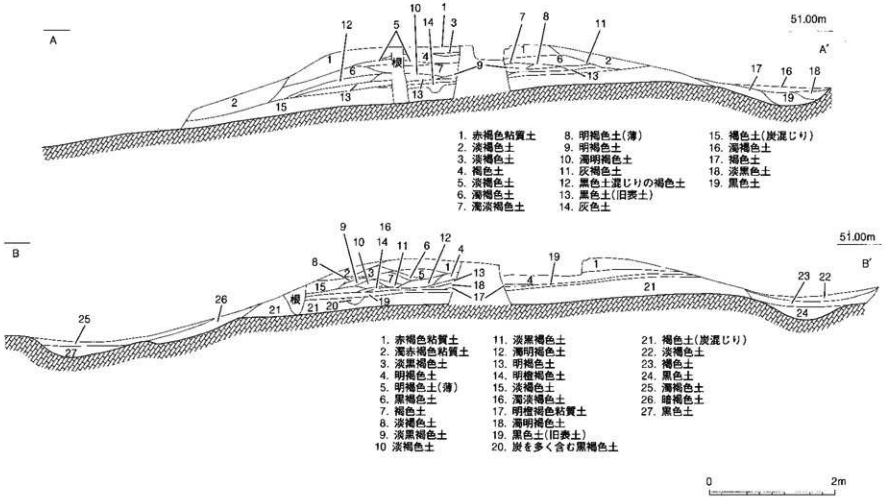
比較的残りが良好で、規模9.5m×9.5m、周溝を含めると10.5m×10.5mを測る方墳である。残丘の高さは約1mである。盛り土は旧表土上から盛られており、一番高いところで、旧表土上に70cmの盛り土が残っていた（第117図）。盛り土内からは、古墳時代前期の土師器、二重口縁の甕の微小片が数点出土したが、図面化はできなかった。これらは出土状況から、採土場にあったものが偶然混じりこんだものと思われる。

・周溝（第116図）

墳丘の南側と西側に掘られていた。深さは、南側では旧表土面から約60cm、地山面から約30cmを測り、西側では旧表土面から約40cm、地山面から約20cmを測る。南西の角だけを掘り残しているのは、



第116図　7号墳検出状況図



第117図　7号墳セクション図

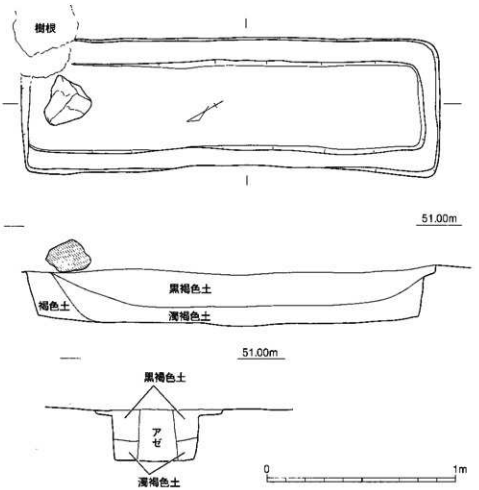
ちょうどそこが9号墳の墳裾の角にあたるからかもしれない。周溝内から遺物は出土しなかった。

・主体部（第118図）

墳丘の辺と平行の方向に掘られた土壙であった。墓壙プラン検出面では、北寄りの中央部から人頭大の石が出土した。墓壙は2段掘り状で、方形を呈している。規模は、上面で長さ2.2m、幅0.68m、下面での上場の長さ2.1m、幅0.44m、下場の長さ2.0m、幅0.44mを測る。墓壙検出面から床面までの深さは28cmで、床面はほぼ水平である。木棺等の痕跡は無く、副葬品は出土しなかった。

・遺物

出土しなかった。



第118図　7号墳主体部実測図

8号墳

8号墳は西は9号墳に接し、北は7号墳に接している。尾根状古墳群の最南端、最高所で、標高50.50m前後のほぼ平坦地に築かれている。墳丘の北半分が開発範囲内に入っていたが、その後の設計変更で保存されることが決まった。したがって、全面調査はおこなわず、一部トレンチ掘りをして盛り土の様子のみ観察した（第119、120図）。

・墳丘

表面の測量調査の結果、約9.5m×9.5mを測る方墳で、残丘の高さは比高約1.3mを測ることがわかった。盛り土は旧表土の上から盛られていた。

・周溝

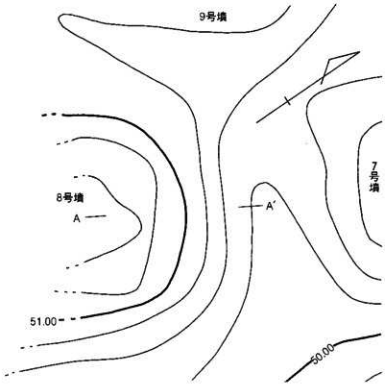
9号墳側で一部検出しており、9号墳の周溝を切ることがわかっている。

・主体部

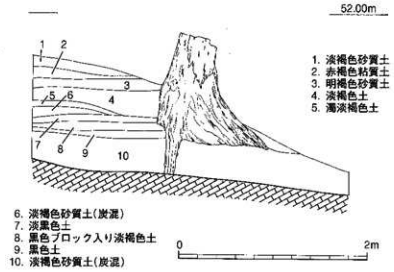
ボーリング棒で墳丘頂部を探ったところ、石にあたる場所があり、石材を利用した主体部が残っている可能性が高い。

・遺物

出土していない。



第119図　8号墳盛り土観察場所



第120図　8号墳セクション図

9号墳

9号墳は標高50.00mという尾根上で一番高い平坦面に築かれている。北東では7号墳、南東では8号墳、また北方では10号墳と墳裾が接している。

・墳丘（第121図、第122図）

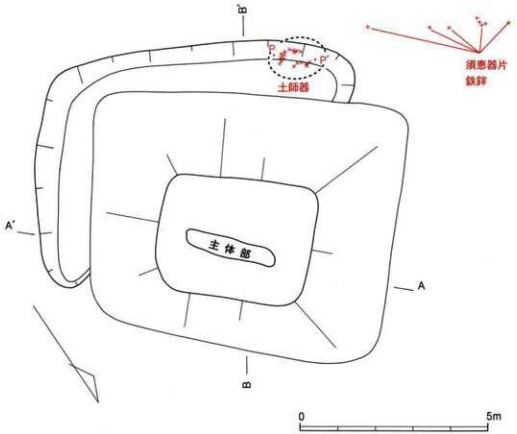
残存状況は良好で、調査前から方墳の形状が明瞭であった。規模は8m×7.5mを測り、東西方向にやや長い。盛り土は旧表土上から盛っており、一番高いところで旧表土上に約50cmが残っていた（第122図）。

・周溝（第121図）

平面L字形で比較的浅く、墳丘の東側と西側に掘られていた。東側の周溝は8号墳の周溝と重なっており、調査区の端の土層を観察したところ、8号墳の周溝はまだ南につづいており、8号墳の周溝が9号墳の周溝を切っていることがわかった。西側の周溝からは、土師器の坏1点、高坏3点が、その場で潰れたような状況で出土した（第123図）。

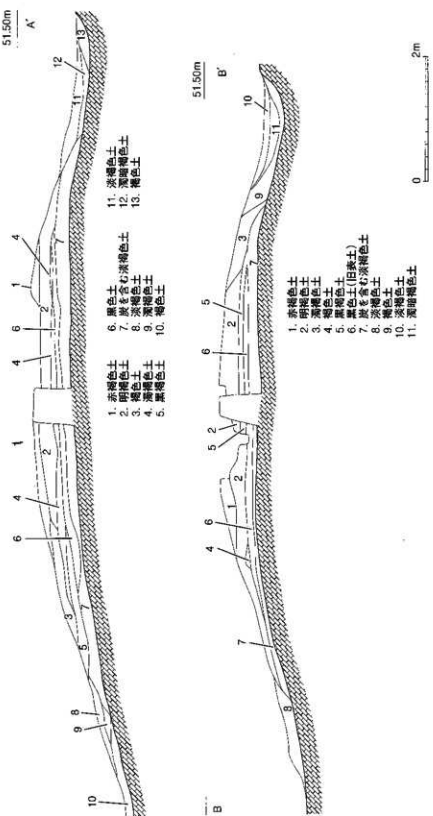
・主体部（第124図）

墳丘の辺と平行の方向に掘られた、不整形な長楕円の土壙で、盛り土中に掘られている。上場は長さ2.4m、幅0.5m、下場は長さ2.25m、幅0.46mを測る。プラン検出面から床面までの深さは0.24mを測る。床面は主軸方向は水平で、横断面は水平に近いが中央がやや低くなっている。墓壙は、十分木



第121図　9号墳検出状況および遺物出土状況図

棺が納まる大きさではあるが、木棺の痕跡は見られなかった。埋土中には角ばった小石が少々混入していた。



第122図　9号墳セクション図

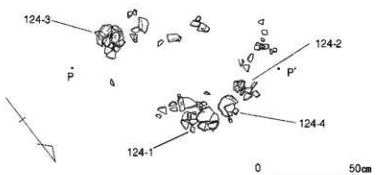
・その他

9号墳の南西には平坦面があり、この平坦面は調査区域外に広がっている。調査区内では遺構は検出できなかったが、調査区内の古墳からは出土しなかったような新しいタイプの須恵器片（第126図）や鉄鋌（図版105）が出土した。したがって、調査区外に広がっている平坦面には、製鉄遺跡やそれにともなう生活遺跡が埋もれている可能性が高いと思われる。

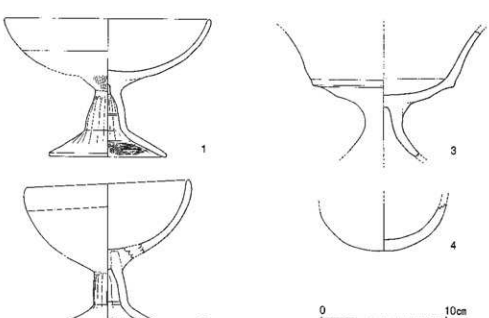
・遺物

周溝内から、坏1点、高坏3点が出土した。125図1、2はよく似た形状を呈する高坏である。1はやや坏部が歪んで口径が大きいが、どちらも坏部は丸く、坏部と脚部の接合方法や各部の器面調整は全く同じである。3は少々残りが悪いが、坏部に段を有するもので、内外面には赤色顔料が塗布されている。4の坏は風化が著しい。

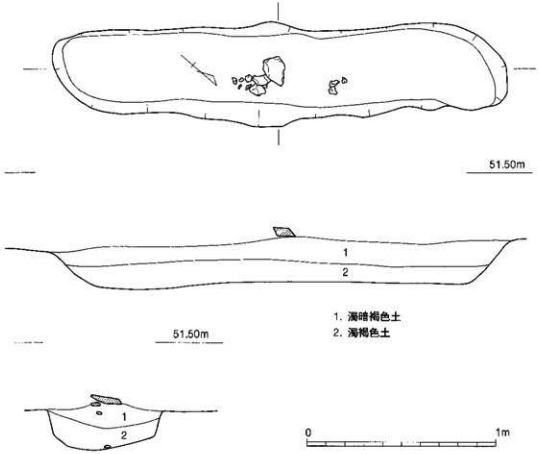
墳丘南西部の平坦面から、鉄鋌といっしょに、第126図の皿2点、高台付き皿2点が出土した。すべて底外面に同転糸切りの痕跡を残している。



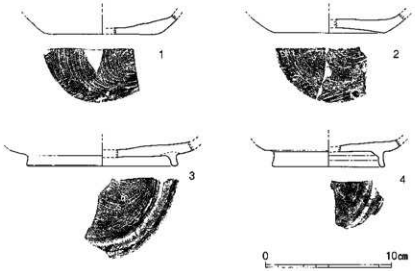
第123図　9号墳周溝遺物出土状況図



第124図　9号墳周溝出土土器実測図



第125図　9号墳主体部実測図



第126図　9号墳南西平坦面出土土器実測図

10号墳

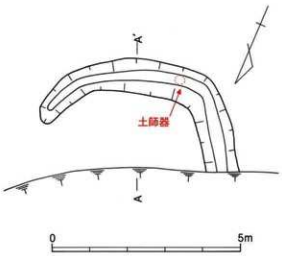
10号墳は、９号墳と12号墳の間の非常に狭い尾根上平坦地に位置している。墳丘は標高50.00ｍの地点に築かれている。

墳丘を失っていたため、当初はその存在はわかっていなかったが、地山の精査をおこなっている最中に周溝内に堆積した黒色土の一部を確認し、存在が明らかとなった。

・墳丘

後世の山道に削られて半分近くを失っており、盛り土はまったく残っていなかった。。

周溝から墳丘を復原すると、一辺4.5m、周溝を含めると一辺５ｍを測る、きわめて小規模な方墳である。



第127図　10号墳検出状況および遺物出土状況図

・周溝（第127図）

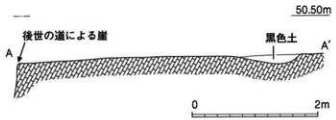
完存しないが、地形から判断すると平面コの字形に掘られていたと思われ、調査時では、地山面から10cm程度の深さが残っていた（第128図）。周溝の底面からは土師器の壺１点（第129図）が出土した。

・主体部

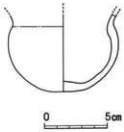
残存しない。

・遺物

土師器の小型丸底壺が１点出土した（第129図）。胴部最大径が９cmに対し、頸径が8.1cmと大きいのが特徴である。口縁部の立ち上がりは２cm強で外反するものである。



第128図　10号墳セクション図



第129図　10号墳周溝出土土器実測図

11号墳

11号墳は９号墳の北西、12号墳の南西に位置し、丘陵の尾根をやや西に下がった、標高49m前後の緩斜面に築かれている。11号墳の西側は急傾斜な谷である。

・墳丘（第130図、第131図）

規模は６ｍ×７ｍを測り、周溝を含めると6.5m×８ｍを測る、方墳である。盛り土は旧表土上から盛っており、一番高いところで旧表土上約40cmの盛り土が残っていた（第131図）。

・周溝（第130図）

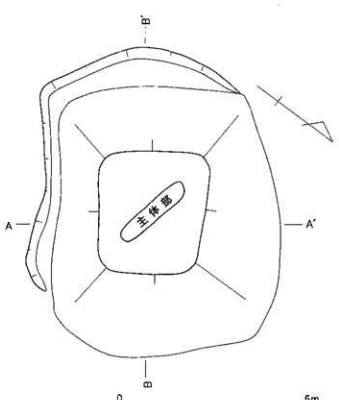
墳丘の南西側と南東側に、平面Ｌ字形に掘られている。南東側の周溝は本来はもっと幅広であったと思われるが、後世の山道によって掘り下げられており、正確には検出できなかった。周溝の深さは、南西側では旧表土面から約30cm、地山面からは約10cmで、他の古墳に比べると非常に浅い。周溝内から遺物は出土しなかった。

・主体部（第132図）

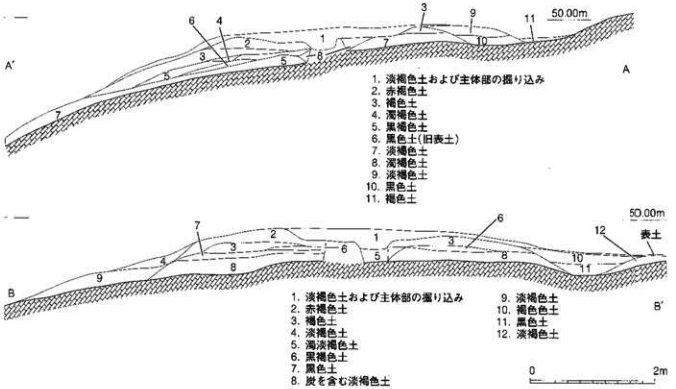
角丸方形の土壙で、上場の長さ２ｍ、幅0.44m、下場の長さ1.82m、幅0.32ｍを測る。プラン検出面から床面までの深さは18cmを測る。床面は、主軸断面は水平であるが、横断面はＵ字状を呈している。主体部の主軸は、墳丘の辺の対角線方向と一致している。副葬品は出土しなかった。

・遺物

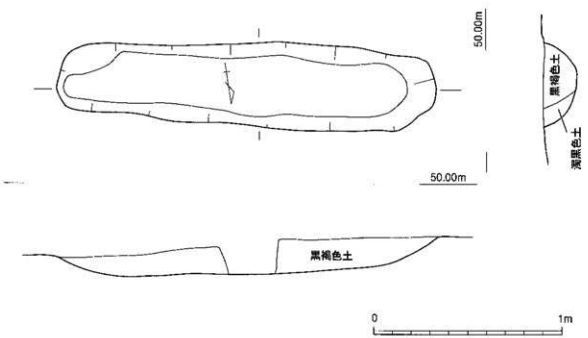
出土しなかった。



第130図　11号墳検出状況図



第131図　11号墳セクション図



第132図　11号墳主体部実測図

12号墳

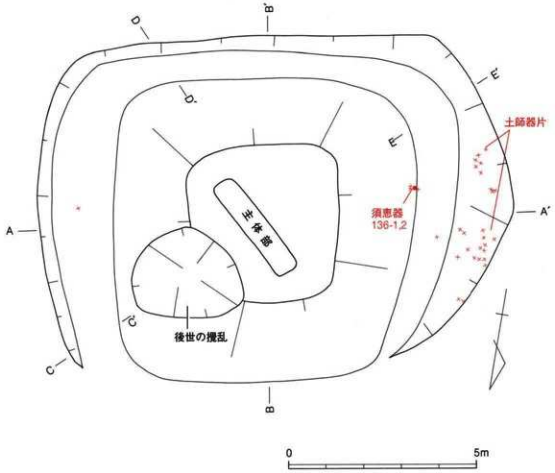
12号墳は10号墳の北、11号墳の北東に位置し、丘陵の尾根をやや西に下がった、標高47.50m前後の緩斜面に築かれている。12号墳の西側は急傾斜な谷である。

・墳丘（第133図、第134図）

一部後世の攪乱の跡を残しているが、残存状況は良好で、規模９m×8.5mを測り、周溝を含めると13m×9.5mを測る、方墳である。残丘の高さは、比高1.2mを測る。盛り土は、旧表土の上から盛っており、一番高いところで約１mが残っていた。盛り土方法について記すと、第134図のA－A´でA側を観察した場合、当時の旧表土面にかなり傾斜があったためか、まず28～31層を盛って墳丘の北端を決めると同時に、地形の低いところに土を盛って、敷地を水平面に近づけようとした意図がうかがえる。次に、地形が低いA側にさらに広い範囲で９～27層を集中して盛り土をし、このことは流土防止の意味も含んでいるのかもしれないが、さらに水平面に近づけた後、１～８層を水平に盛って仕上げている。このセクションは、傾斜が急な場所に墳丘を築く際の工夫が垣間見えて興味深い。

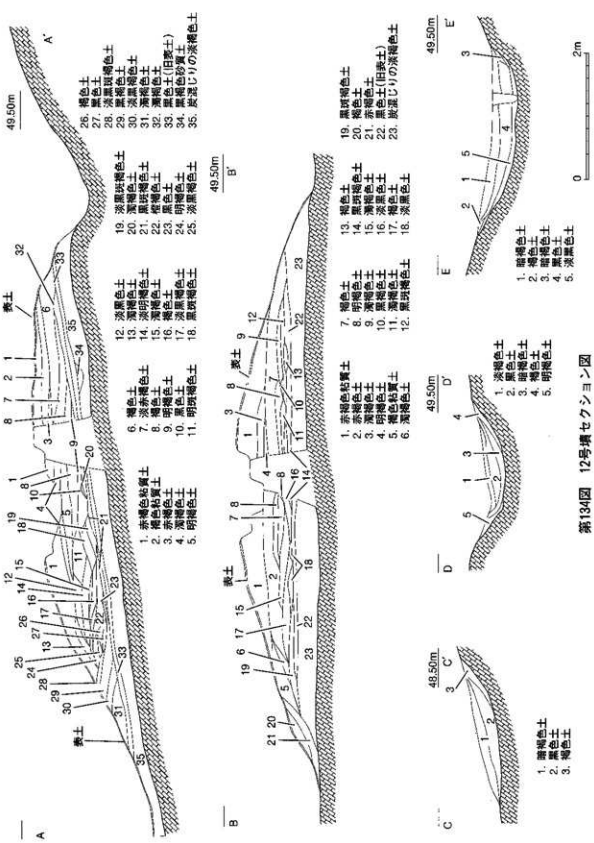
・周溝（第133図）

墳丘の東側、南側、西側に平面コの字状に掘られている。周溝の深さは、深いところで旧表土面か

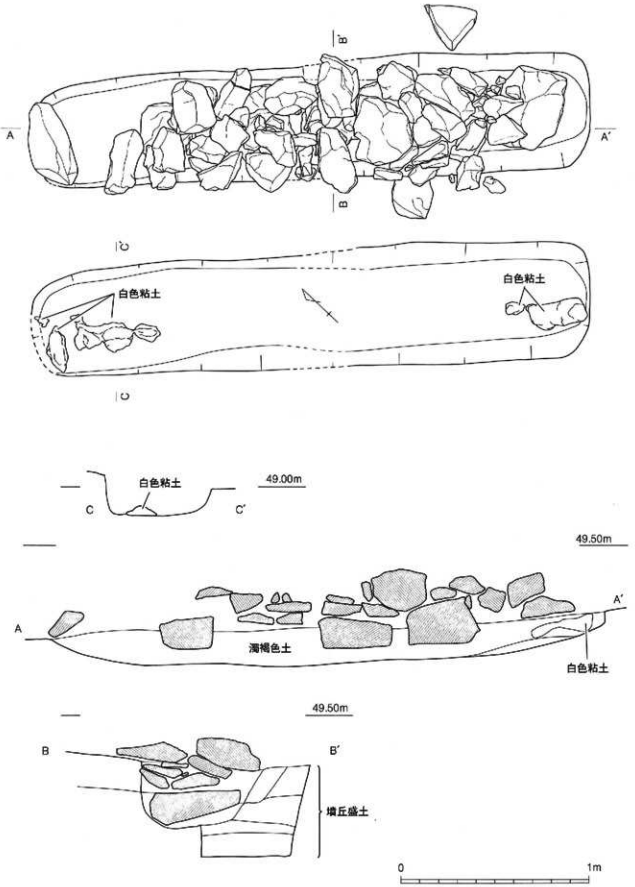


第133図　12号墳検出状況および遺物出土状況図

ら約60cm、地山面から40cm弱を測る。西側の周溝の床面近くからは、炭がかなり広範囲で出土したほか、多数の土師器細片や須恵器の壺坏各1点が出土した。



第134図　12号墳セクション図



第135図　12号墳主体部実測図

・主体部（第135図）

主体部上には、大小多数の山石が無秩序に積まれていた。まず、上の方の石を一次除去すると、大きめで上下が平坦な石ばかりが一列に並んで出土し（図版88）、そのレベルで、主体部の平面プランを検出した。

主体部は土壙で、角丸方形を呈しており、規模は上場で長さ2.95m、幅0.62mを測り、下場で長さ2.85m、幅0.42mを測る。平面プラン検出面から床面までの深さは約20cmである。また、石の一次除去で現れた、大きめの石の下場から床面までの深さは、中軸上ではわずか8cmで、場所によっては、石が床面に接しているところもある。石は土壙内に落ち込んだ状況である。墓壙の長軸断面は、中央がやや低くなっており、横断面はU字状を呈している。墓壙床面の標高は48.95mで、墳丘が高いわりには上方に位置している。墓壙の床面では、両端のほぼ中軸ライン上の細長い範囲から白色粘土が出土した。この白色粘土は床面直上と、やや浮いたレベルからも出土した。用途は不明である。副葬品は出土しなかった。

なお、主体部の主軸は、方墳の辺の対角線方向と同じ方向である。

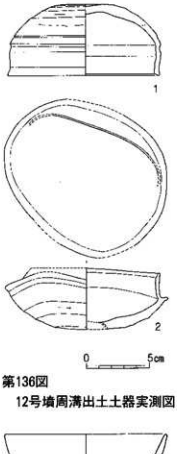
・遺物

周溝内から須恵器2点と土師器片多数が出土した。

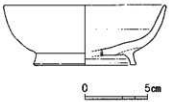
第136図の1は須恵器の蓋で、器形は丸みを帯びている。肩部の稜は鋭さがないが、口縁端部内面には明瞭な段を有している。天井部は丁寧な回転ヘラケズリを施している。2は坏で、焼き歪みが著しい。器形はやや偏平だが、立ち上がりは高く、口縁端の内面には明瞭な段を有している。底部は丁寧な回転ヘラケズリを施している。

土師器片は多数出土したが、体部の微細な破片がほとんどで復原、図面化はできなかった。

第137図は、12号墳の北東斜面から出土した、須恵器の高台付坏である。周溝から出土した須恵器とは、かなり時間的隔たりがあり、本古墳とは直接関係ないものと思われる。



第136図
12号墳周溝出土土器実測図



第137図
12号墳周辺出土土器実測図

埋葬施設A

埋葬施設Aは丘陵尾根上からやや東に下がった、標高48.50mの緩傾斜地に位置している。そこは、5号墳と6号墳の周溝の肩から約1m離れた場所である。

・遺構（138図）

一部2段掘りで、角丸方形の土壙墓である。

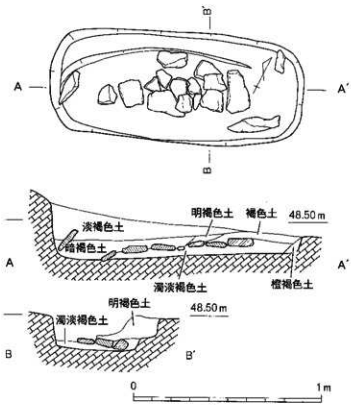
規模は、上場で長さ134cm、幅58cmを測り、下場で主軸126cm、幅42cmを測る。地山面からの深さは調査時で30cmを測る。

床面はほぼ水平に掘りこんでいるが、北東側が高くなるように貼り土をして、その上に平たい割り石をタイル状に敷いている。石材は和区礫石である。石の敷き方は、北東端に大きめの1枚石を置き、中央付近で広がり、南西側で萎んでいる。したがって、遺体は北東側に頭を向けて安置されていたと考えられる。

南西端で、やや内傾して立っている石は小口石であろう。北東端では側壁側に1つ立ち石があるが、小口側には無い。これは北東側が地形的に低くて流土が著しいため、失ってしまったものと思われる。

・遺物

出土しなかった。



第138図　埋葬施設A遺構実測図

埋葬施設B

埋葬施設Bは、丘陵尾根上の5号墳の北側墳裾に接するように、4・5号墳間の周溝の中に位置している。標高は約47.00mの地点である。

・遺構（第139図）

組合せ箱式石棺墓である。

石材は、すべて周辺で産出する和区羅石の自然石を利用している。

蓋石は、基本的には3個の大きな石であるが、中央の石の上にはさらに大小の石を高く積み上げている。

棺は、小口石を側石で挟み込むタイプで、基礎石には6個の大きな石を並べ、その上に小さな石を一段積んで高さをそろえている。積み石を持つという点で、石室の要素も感じられるが、自然石を利用しているためのやむを得ない手法とも考えられる。床面は地山のままで、副葬品は出土しなかった。

棺は、内法で長さ80cm、最大幅30cm、深さ18cmを測る。

掘り方は角丸方形で、上場は長さ140cm、幅76cm、深さ26cmを測る。下場はほぼ長方形で長さ1m、幅46cmを測り、周縁には、石材を固定するための幅15cm前後、深さ5～10cmの溝を巡らせている。

・遺物

出土しなかった。

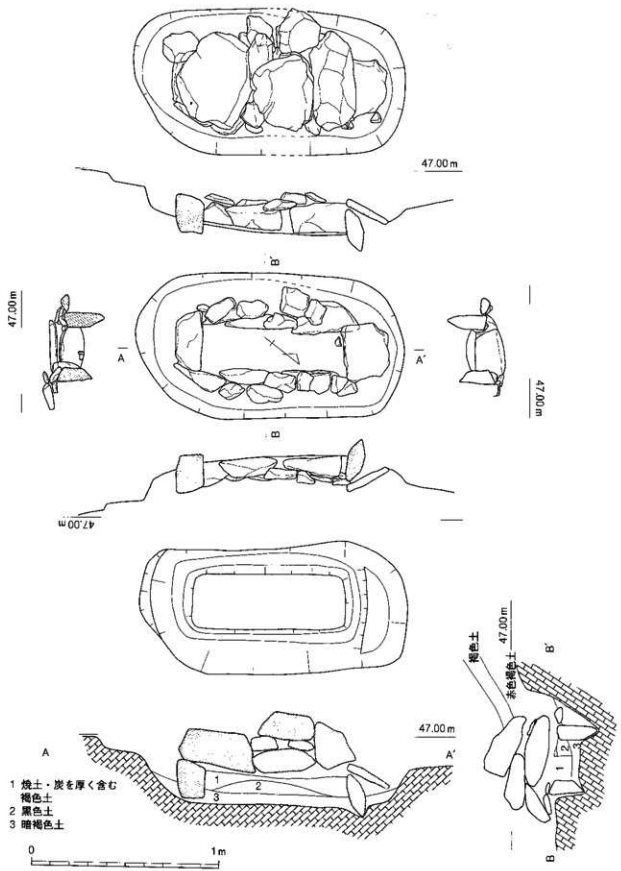
埋葬施設C・D・Eについて

第140図を見ると、丘陵の高い方に埋葬施設C、1m東方に埋葬施設D、0.5m東方に埋葬施設Eが、主軸を斜面の標高と平行のほぼ北東に向けて位置している。したがって、埋葬施設C・D・Eは、丘陵東側の急斜面に作られた一連の埋葬施設と考えられる。

埋葬施設群が位置する斜面の山手側には、弧状の周溝が2本掘られているが、どの埋葬施設も墳丘の痕跡はとどめていない。ただ、埋葬施設Dの作り方は、斜面の地山を削って平坦面を作り、そこに石を据えて石室状石棺を作り、周囲に盛り土をして石を支えているもので、この埋葬施設Dに関してのみは、盛り土が存在していた可能性は十分に考えられる。

さて、溝Ⅱは平面形が弧状で、両端を結んだ距離は4.5mを測る。埋葬施設DかEにともなうものであるが、遺構の配置を見ると、埋葬施設Eは周溝の中央部よりもやや北にずれて位置しているため、埋葬施設Dにともなうものと判断される。したがって、溝Ⅰは埋葬施設Cにともなうものである。溝Ⅰは、平面形がやや角丸方形がかった弧状で、両端を結んだ距離は4.3mを測る。深さは溝Ⅱに比べて深く、調査時で地山から35cmであった。

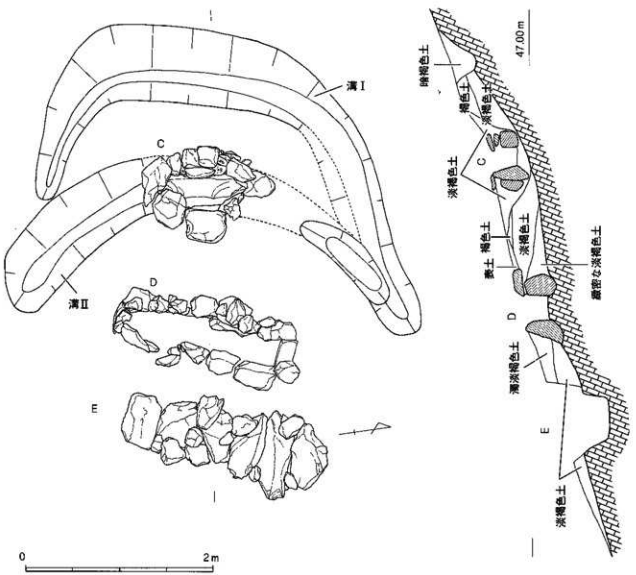
3基の埋葬施設をとおしたセクションを観察すると、まず、埋葬施設Dを作るために斜面の地山加工をおこなって平坦面を作り、盛り土をしながら石室状石棺を作っており、西側に周溝を掘っている。埋葬施設Cは、埋葬施設Dの周溝のほぼ中央部分の幅をやや拡張して、掘り方となし、石棺を据えて、さらに排水のための周溝を西側に掘っている。また、埋葬施設Eは、埋葬施設Dの盛り土を切って掘り方を掘っている。



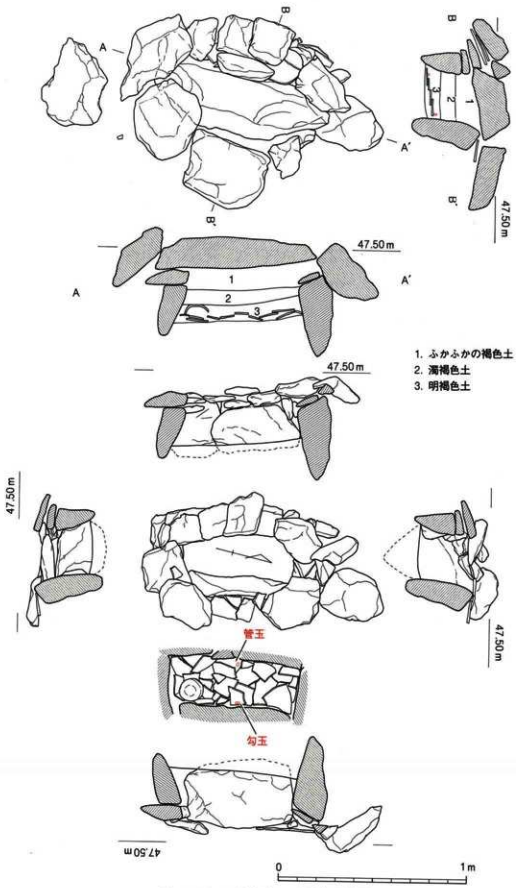
第139図　埋葬施設B遺構実測図

以上のことから、埋葬施設Dが一番最初にこの急斜面に作られ、その後埋葬施設C・Eが作られたことがわかるが、埋葬施設CとEの新旧関係はセクションからは判断できなかった。

出土遺物を観察すれば、埋葬施設Eの方が若干古い様相を呈しているが、埋葬施設Cからは焼き歪んだ蓋が1点しか出土しなかったため、確実な根拠とはいえない。



第140図　埋葬施設C・D・E遺構検出状況図



第141図　埋葬施設Cの遺構実測図

埋蔵施設C

丘陵東側の急斜面に作られた埋葬施設で、標高は47.50mを測る。調査前は自然地形のようで等高線に乱れは無かった。一連の埋葬施設C、D、Eの中では西端に位置する。

・遺構（第141図）

周溝をともなう、小型の組合せ箱式石棺墓である。

石材は、周辺で産出する和区羅石の自然石を利用している。

蓋石は1個の大きな石であるが、蓋石を据えた後、蓋石の周縁にかかるように、小さい石や須恵器の甕破片を並べている。蓋石を取るためには、まずこれらの石を取り除かねばならない。

石棺の基礎石は、5個の大きな石で構成されている。内訳は、小口に各1個、東側側石に1個、西側側石に2個である。基礎石の上には、さらに小さめの石や須恵器の甕片を1段積んでいる。基礎石が低い西側の側石では一部2段に積んで高さの調整をはかっている。

棺は、内法で長さ68cm、最大幅26cm、高さ26cmを測る。

床面は須恵器床で、須恵器の甕の破片が敷き詰められていた。使用された甕片は、焼成の具合やタタキ目痕の違いから、3個体の甕が使われていることがわかったが、破片はほとんど接合できず、破片の状態でこの場所に持ってきたと思われる。棺の南端には、やや東寄りに須恵器の蓋が置かれていた。枕に使用されたものと思われるので、遺体は頭を南側にして安置されていたと考えられる。

棺のほぼ中央の東端から勾玉、西端からは管玉が各1個出土した。

掘り方は、次で記す埋葬施設Dの周溝の幅をやや拡張して利用している。

また、この石棺墓の西側には周溝が掘られている。周溝の平面形は、やや角丸方形に近い弧状で、溝の最大幅は80cm、深さは40cmを測り、溝の両端部を結んだ距離は4m強を測る。墳丘の痕跡は見られない。

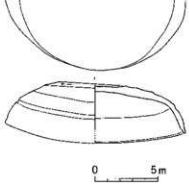
・遺物

須恵器（第142図）

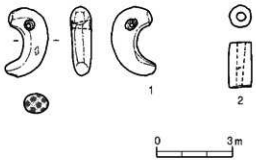
口縁端部内面に段の痕跡を有する。焼き歪みが見られる。

玉類（第143図）

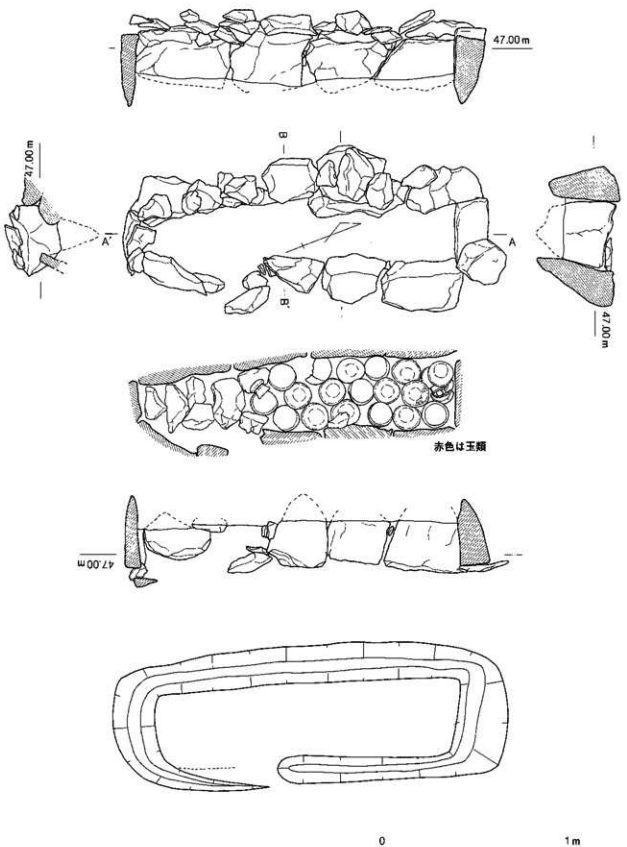
1は、赤瑪瑙製の勾玉で、2は碧玉製の管玉である。



第142図　埋葬施設C出土土器実測図



第143図　埋葬施設C出土玉類実測図



第144図　埋葬施設D遺構実測図

埋葬施設D

丘陵東側の急斜面に作られた埋葬施設で、標高は47.20mを測る。調査前は自然地形のようで等高線に乱れは無かったが、小さな石が1点若蒸して転がっていた。…連の埋葬施設C・D・Eの中では中央に位置する。

・遺構（第144図）

周溝をともなう、石室状組合せ箱式石棺墓である。

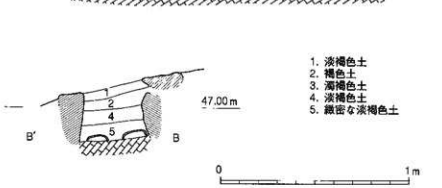
石材はすべて和久羅石で、自然石のほか、一部割り石にして利用している。

この埋葬施設を作るにあたっては、急傾斜の斜面の地山を削り込んで、狭いながらもフラット面を作り出している。そして石棺の基礎石を掘え、周囲を上でささえながら棺を作りあげている。その手法は横穴式石室に似ている。

蓋石は無い。表土直下が側石上面になっていたため、かつては存在していたかもしれないが、調査時にはその痕跡は残っていなかった。石棺の基礎石は、11個の大きな石で構成されている。小口側に各1個、西側側石に4個、東側側石は一部抜き取られているが推定5個である。小口側や西側の基礎石の上には、さらに小さめの石を数段積み上げている。東側の基礎石上に積み石が見られないのは、表土面が低くなっているため流されたものと思われる。

棺は、内法で長さ190cm、最大幅40cmを測る。棺内の平面形は、北端から中央付近までがほぼ同じ幅で、中央付近から南端にかけては両側石が内傾に入り込み、徐々に狭くなっている。遺体は、頭部を北に向けて安置されていたことがうかがえる。蓋材までの高さは不明だが、西側側石の高さから推定すると約40cmである。

床面は、南半分の地山がやや高く、北側約3分の2が須恵器床で、南側3分の1が礫床である。ただし、この埋葬施設の須恵器床は、砕いた甕片ではなく、完形の蓋坏が隙間無く敷かれたものである。使用された蓋坏の内訳は、蓋が9点で、坏が12点である（第146図、第147図、第148図1～3）。敷き



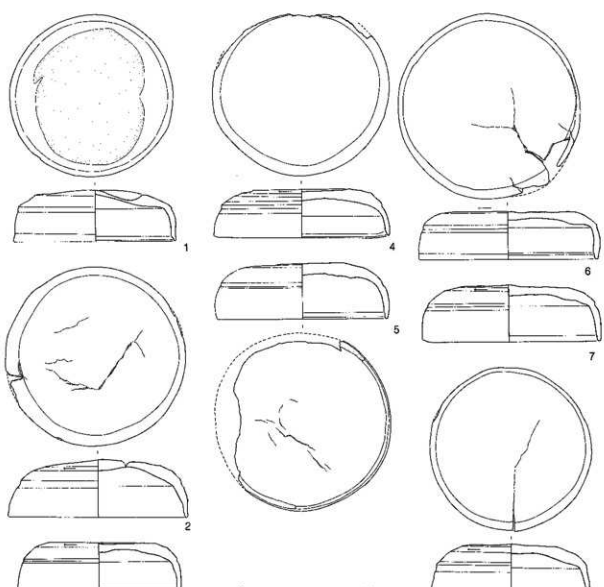
第145図　埋葬施設D埋土セクション図

方は、すべて口縁部を下に向けて、蓋の天井と坏の底部を上向きに置いていた。石棺の北端では蓋坏が2段に重ねられており、枕代わりにされていたようである。蓋と坏の配置には規則性は見いだせない。南側の礫床は、大きめな平石7個を敷いていた。棺材と同じ石の他に、紫色の丸みを帯びた石も1点混じっている。これらの平石は、蓋坏に比べて高さが低いため、あらかじめ南側の地山レベルを高くしていたと思われる。

棺の北端から20cm南の位置からは、かなり散乱した状態で碧玉製の丸玉、管玉（第149図）が出土した。遺体がつけていたネックレスであろう。

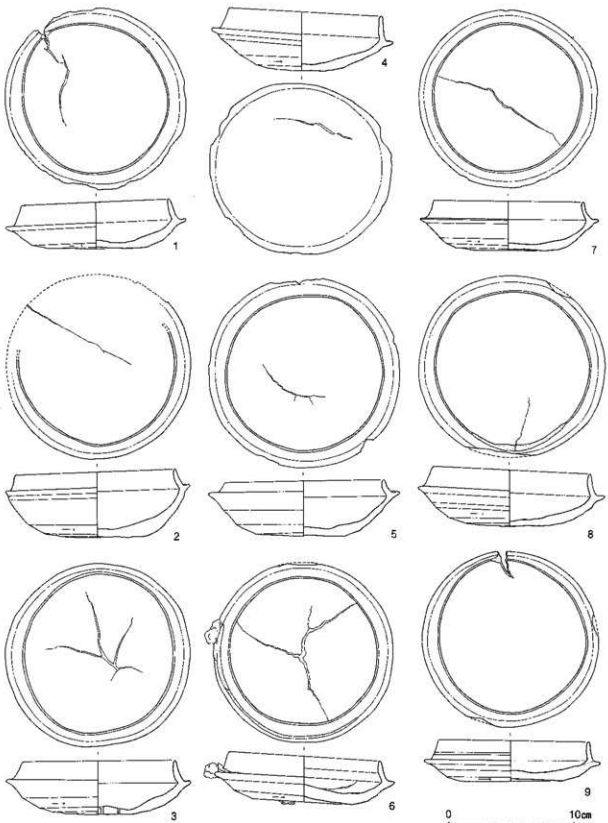
棺の南端から66cm北の位置からは、須恵器の壺（第148図4）が出土した。その下面は、礫床よりやや浮いていた。

掘り方は、石材を安定させるためだけの浅い溝のみを検出した。掘り方全体の法量は、長さ210cm、

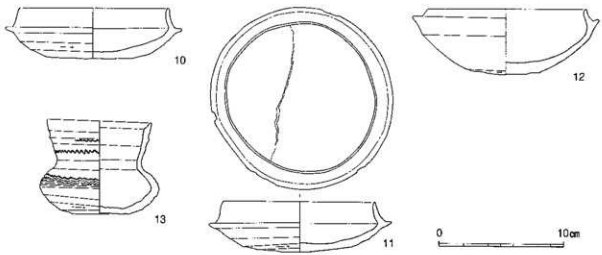


第146図　埋葬施設D出土土器実測図（1）

最大幅72cmを測り、溝は幅20cm前後、深さは５～15cmを測る。



第147図　埋葬施設Ｄ出土土器実測図（２）



第148図　埋葬施設Ｄ出土土器実測図（３）

また、この石室状組合せ箱式石棺墓の西側には周溝が掘られている。周溝の平面形は弧状で、最大幅は70cm、深さは30cm前後、周溝の両端部を結んだ距離は4.3mを測る。墳丘の痕跡は見られない。

・遺物

須恵器

須恵器床に利用された蓋は、すべて口縁端部内面に段の痕跡を有するものである。坏は立ち上がりが高めであるが内傾し、器形はやや偏平である。個々の遺物については後頁に遺物観察表を参照されたい。

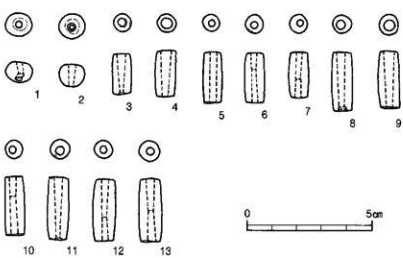
全体を概観すると、俯瞰図面で示したとおり、蓋の第146図１は焼成が悪く天井面が剥離しており、２、４、５、６、８は、焼成時の割れやひび割れが顕著なものである。坏では第147図１～９と第148図２は焼成時のひび割れが顕著で、第147図４、５、９と第148図３は焼成が悪く軟質である。

以上に記したとおり、屍床に敷かれていた蓋坏のほとんどは焼成時の不良品によって占められている。このことは被葬者の生前の環境を物語っているようで興味深い。

第148図４は副葬されていた小壺である。完形で出土した。

玉類

碧玉製の丸玉が２個、管玉が11個出土した。個々の詳細については後頁の遺物観察表を参照されたい。



第149図　埋葬施設Ｄ出土玉類実測図

埋葬施設E

丘陵東側斜面に作られた埋葬施設で、標高は46.70mを測る。調査前は自然地形のようで等高線に乱れは無かった。一連の埋葬施設C・D・Eの中では東端に位置する。

・遺構（第150図）

石蓋土壙墓である。

土壙は、埋葬施設Dの覆土上から掘られている（第140図）。

形状は2段土壙で、上場は角丸方形で長さ152cm、幅94cmを測る。上面から20cmの深さのところで段がつき、幅15cm前後の平坦面がめぐる。この平坦面の内法は長さ214cm、幅52cmを測り、下場までの深さは25cmを測る。下場はやや角丸方形で長さ212cm、幅50cmを測る。土壙の深さは50cmを測る。

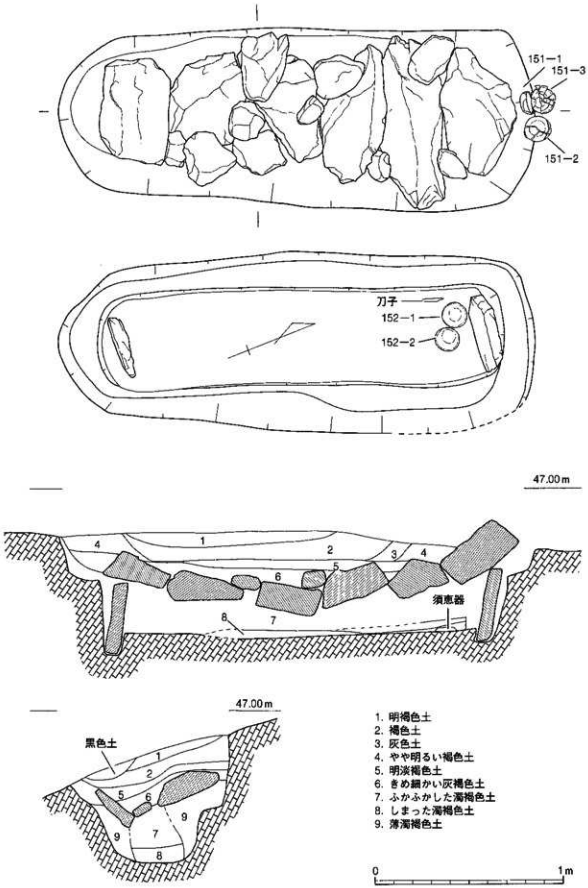
蓋石は、すべて周辺から産出する和久羅石の自然石で、基本的には6個の大石で蓋をして、隙間を小さめな石でうめている。蓋石は若干落ち込んでいたが、土壙の段部分に石の下場がくるように置いていた。

残存状況から石蓋土壙墓と呼称したが、埋葬時には棺が存在していたようである。

その棺は、南北の小口には板状の石を配置し、東西の側壁には板材等の有機物を利用していたらしい。横断セクションを観察すると、両脇の9層の薄濁褐色土に挟まれるように7、8層が堆積している。この両脇の9層部分が有機質の棺材の痕跡と考えられる。図面化はしていないが、蓋石を除去して埋土を平面的に観察した際には、左右の側壁側に薄濁褐色土が両端の小口を結ぶように細長く見られ、その間に7層のふかふかした濁褐色土が入り込んでおり、棺内の形状が明瞭にわかった。蓋石が落ち込んだのはこの両側壁側の有機質の棺材が朽ちた段階であろう。棺の内法を復原すると、長さ188cm、幅26cmを測る。

床面は、ほぼ水平な地山である。北端には中央よりやや西側に寄せて、坏が2点、上下を逆にして地山直上に置かれていた。これらは枕に使用されたと考えられるので、遺体は頭を北方に向けて安置されていたことがわかる。遺体の頭部が置かれていたと思われる場所の西側からは、刃先を南に向けた刀子が1点出土した。

棺に蓋をした後は、掘り方上部まで土を埋め戻している。埋土した後に、北端の掘り方上面に一部かかるように須恵器の蓋2点と坏1点を供献したようである。



第150図　埋葬施設E遺構実測図

・遺物

須恵器

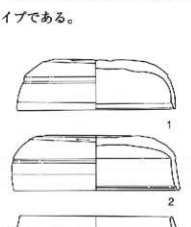
掘り方上面から、須恵器の蓋2点と坏1点が出土した。151図1、2は蓋で、口縁端部内面には段を有する。3は坏で、立ち上がりはやや高めで丸みを帯びた形状を呈している。

152図1、2は床面直上から出土した坏で、立ち上がりがやや高めで偏平な形状を呈している。

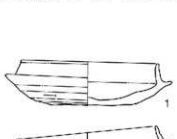
個々の詳細については後頁の遺物観察表を参照されたい。

鉄製品

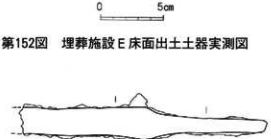
第153図は床面直上から出土した刀子で先端部を欠損している。中子から刃部へはバチ状に開くタイプである。



第151図　埋葬施設E供献土器実測図



第152図　埋葬施設E床面出土土器実測図



第153図　埋葬施設E出土鉄製品実測図

埋葬施設F

埋葬施設Fは、丘陵東側斜面に作られた埋葬施設で、標高は46.10mを測る。埋葬施設C・D・Eの一連の埋葬施設群の南東下方に位置している。主軸の方位が前記の埋葬施設群とは大きく違うため、独立した埋葬施設と考える。

・遺構（第154図、第155図）

組み合せ箱式石棺墓である。

石材は、床石以外は周辺で産出する和久羅石の自然石である。床石は丸みを帯びた偏平な石材を使用している。

蓋石の上には大小の石材が無秩序に積み上げられていた。それらの石を除去すると、実際に棺を覆っている４個の大石が出土した。

棺の基礎石は、12個の石で構成されている。内訳は、小口に各１個、北東側側石に５個、南西側側石に５個である。基礎石の上には、ところどころに小さい石を積んで高さの調整をはかっている。

棺は内法で、長さ134cm、最大幅30cm、高さ28cmを測る。

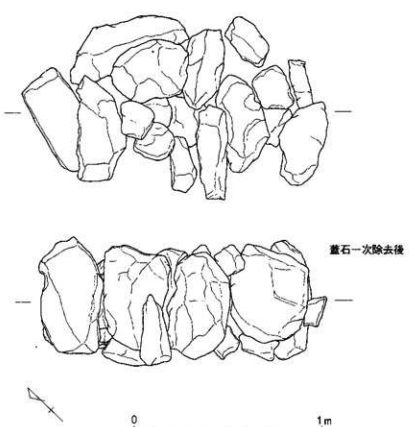
床面は、ほぼ水平の礫床で、棺材よりもやや丸みを帯びた石を敷いている。

北西側が地形的に標高が高いこと、床面の礫の敷き方が丁寧であることから、遺体は北西側に頭部を向けて安置されていたと思われる。

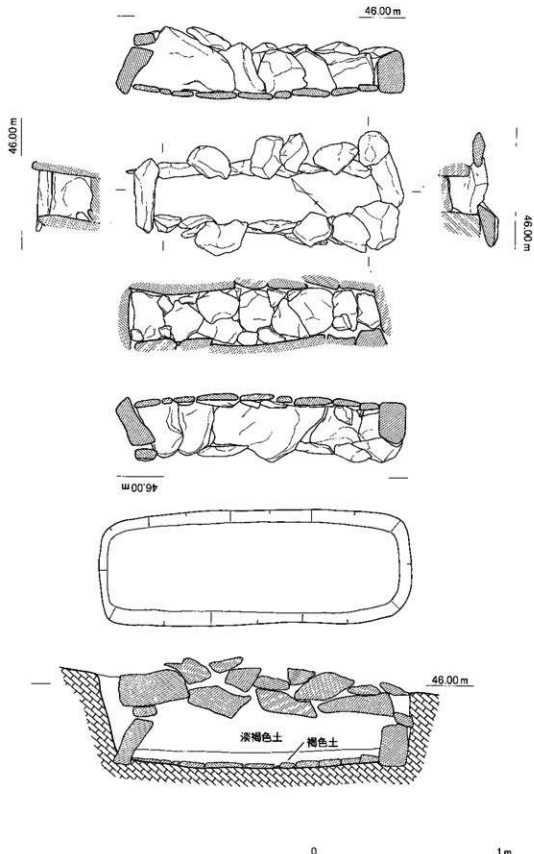
調査時での掘り方は角丸方形で、地山面から掘り込まれていた。上場は長さ166cm、幅58cmを測り、下場は長さ155cm、幅46cmを測る。深さは46cmを測る。

・遺物

出土しなかった。



第154図　埋葬施設Ｆ遺構（蓋石）実測図（１）



第155図　埋葬施設Ｆ遺構（蓋石下）実測図（２）

埋葬施設G

埋葬施設Gは2号墳南西の平坦面、標高43.70mに位置する。地山精査中に、角丸方形の淡褐色砂質土の平面プランを確認して、その存在がわかった。

・遺構（第156図）

断定はできないが、形状や大きさから判断して土壙墓と思われる。

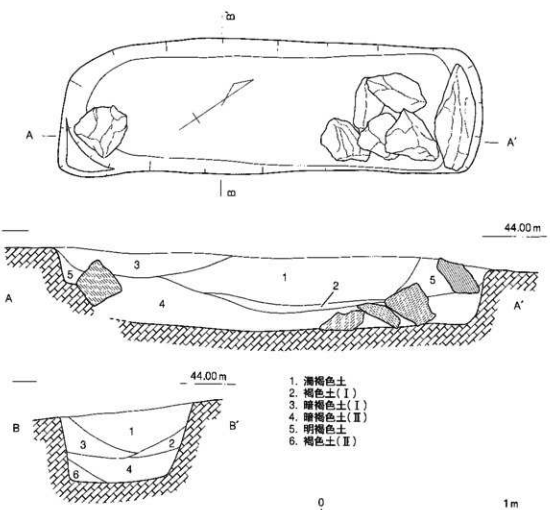
土壙は角丸方形で、上場は長さ224cm、最大幅72cmを測り、下場は長さ198cm、最大幅57cmを測る。地山面からの深さは36cmを測る。

土壙内からは和久羅石の自然石が7個出土した。北東端の1個は埋土中からの出土で、ほかの6個は床面直上からの出土である。

セクションを観察すると、弓なり状の七層が見えるのだが、埋葬時の状況が明瞭ではない。

・遺物

出土しなかった。



第156図　埋葬施設G遺構実測図

埋葬施設H

埋葬施設Hは1号墳の西の平坦面、標高42.30mに位置する。1号墳の周溝との距離はわずか1mである。地山精査中に蓋石を発見し、その存在がわかった。

・遺構

組み合せ箱式石棺墓である。

石材は周辺で産出する和久羅石の自然石である。蓋石は2個残っていたが、石棺の半分については抜き取られていた。復原すると、4個の蓋石があったと思われる。

石棺は、4個の大きな石で構成されている。内訳は、小口、側石に各1個ずつである。側石が小口石に挟まれるタイプで、側石は土圧のためか内傾が著しい。

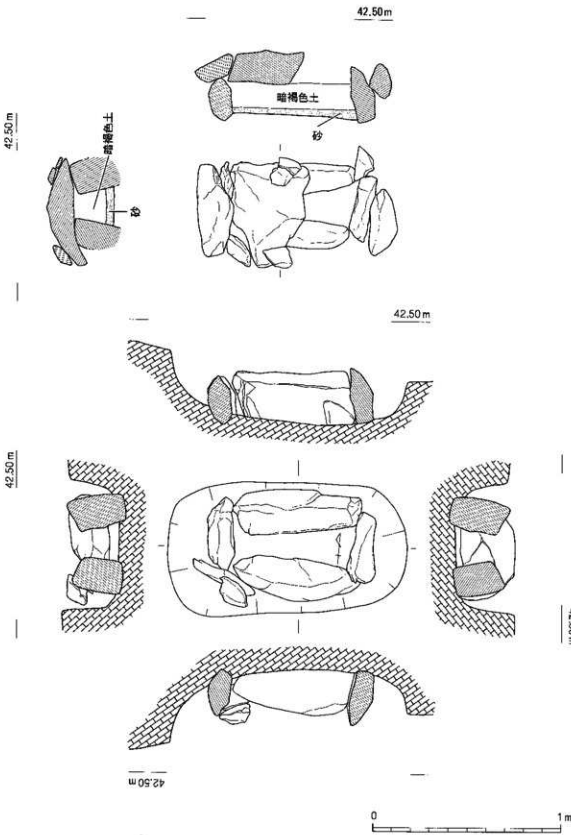
棺は小さく、内法で長さ66cm、幅20cm、高さ14cmを測る。

床面には、厚さ3～4cmの砂が一面に敷かれている。

掘り方は角丸方形で、上場で長さ130cm、幅70cmを測り、下場で長さ100cm、幅55cmを測る。地山面からの深さは30cmを測る。

・遺物

出土しなかった。



第157図　埋葬施設H遺構実測図

性確不明の土壙

7号墳の墳丘を除去し、地山面を精査している最中に楕円形の平面プランを検出した（121図）。標高は48.50mの地点である。

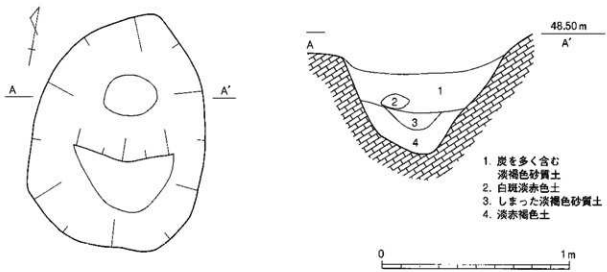
・遺構（第158図）

不整形な土壙である。上場は93cm×126cmのいびつな楕円形で、下場は21cm×28cmの楕円形である。深さは60cmを測る。埋土中には2～3cm大を中心とする炭を多く含んでいる。

9号墳築造時の旧表土面より下の地山面から掘り込まれている。

・遺物

炭以外は出土しなかった。



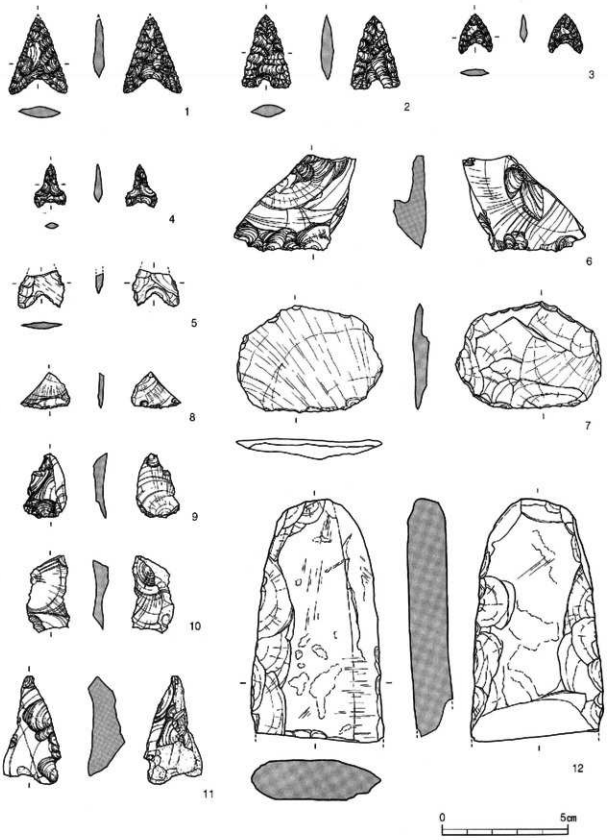
第158図　9号墳墳丘下の土壙実測図

石器

米坂古墳群調査中に約20点の石器が出土した。

第159図1～4は、黒曜石製の鏃で、5は安山岩製の鏃である。6は黒曜石製ののスクレイパーで、7は安山岩製のスクレイパーである。12は頁岩製の打製石斧である。8～11は、3号墳周辺から出土した黒曜石の剥片である。剥片数は少ないけれども、3号墳の周辺でかつて石器製作がおこなわれたことがうかがえる。

個々の詳細については後頁の遺物観察表を参照されたい。



第159図　米坂古墳群出土石器実測図

小結

西尾町には古墳時代中期と推定されている扇所古墳や観音寺山古墳があり、これらは一辺30mを測る大方墳である。この2基の大方墳が大橫川寄りの丘陵地に築かれているのに対し、米坂古墳群は北側の少し奥まった丘陵に位置している。

米坂古墳群は上記の2大古墳が単独で存在するのに対し、30基以上の小規模な方墳から構成されている。小規模古墳で構成される古墳群とはいえ、墳裾が接するほどに高密度に築かれた景観は実に壮観である。これほど高密度に築かれた古墳群は、面積的にははるかに違いがあるが、密度の点では松江市内の盾塚古墳群、そのすぐ南に位置する八雲村の増福寺古墳群に匹敵するであろう。

では、まず古墳群の築造時期について考えてみたい。出土遺物より、1、2、9、10号墳が古墳時代中期の築造である。続いて5、12号墳が後期初頭で、墳形が近似した8号墳もこの時期の可能性が高い。最後に築かれたのが3号墳で後期半ばである。4、6、7、11号墳については遺物が出土していないため時期は不明であるが、墳丘の切り合いから6号墳→5号墳、9号墳→7号墳の前後関係がわかる。このように築造時期を見てみると、尾根上にならぶ古墳群は規格性をもって順序よく築かれたのではなく、必要に応じてわずかな隙間をぬうように築かれたことがわかる。

墳丘を持たない埋葬施設についてみると、副葬遺物をともなうものが少なく時期不明なものが多いが、一連の埋葬施設C、D、Eについては、土層よりD→(C・E)の関係がわかる。主軸がほぼ同じ方向を向いていること、遺体の頭部がすべて北向きであることから、3基は後期後半のきわめて短期間の内につくられたと思われる。

以上が調査の結果として得られた、古墳群および墳丘を持たない埋葬施設の前後関係、築造時期である。要約すれば、調査区内の古墳群は5世紀に築造が開始され、6世紀半ばをもって築造が終了している。また、その後墳丘を持たない埋葬施設群が6世紀後半に造られている。

米坂古墳群は調査区以外にも多くの古墳が分布しており、調査区内の調査結果のみについて米坂古墳群の営造時期を語ることは危険かもしれないが、調査区外の古墳を表面観察すると、いずれも調査区内に見られたような“ザブトン古墳”であり、横穴式石室を内部主体に持つようなタイプの古墳は見られない。また、8世紀後半には9号墳の南側平坦面に製鉄関連の遺跡の存在が考えられることから、この丘陵における墓域としての性格は6世紀後半には早々と終焉をとげ、約2世紀の空白期間を経た後、生活域へと変化したものと考えられる。

次に、米坂古墳群における特徴をあげてみたい。

第1は、非常に高密度に古墳が築かれていることである。このことは前記したとおりである。

第2は、主体部の主軸が方墳の辺の対角線上に置かれている古墳が存在することである。

3、4、11、12号墳がこれにあたり、築造時期は6世紀初頭から6世紀中葉である。主体部の軸が辺と平行に置かれている古墳も見られるが、9号墳が5世紀末の築造であることが判るだけで、他は遺物が出土していないため時期不明である。他にこのような類例は少ないが、松江市周辺では14基の古墳について確認されている。時期はおおむね5世紀半ばから6世紀前半の間におさまるようである。米坂古墳群においてその状況がよくわかる12号墳は、墳形、規模、時期、遺物の出土状況において敷

屑谷5号墳[1]に最も近似している。

第3は、弧状の周溝を持つ、墳丘を持たない埋葬施設が存在することである。

埋葬施設C、Dがこれにあたり、時期は6世紀後半である。類例は、布志名大谷Ⅱ遺跡の4号墳[2]に見ることができる。報告書では「遺物が出土していない……前期古墳である可能性も否定できない。」と記され古墳として扱われているが、墳丘は無く、規模や形状が埋葬施設C、Dとよく似ている。

第4は、墳丘を持たない埋葬施設の組み合せ箱式石棺が、側石、小口石とも基礎石の上に小さい石を1段から数段積み上げて造られていることである。

各埋葬施設の説明欄では単に「組合せ箱式石棺墓」と記してきたが、この造り方は竪穴式石室や横穴式石室の構築方法に通じるものがあるが、時期的に考えると横穴式石室の影響を受けたものと思われる。この造り方は埋葬施設B、C、D、Fに見られるが、Dが最も顕著であり「石棺系竪穴式石室[3]」と呼ぶこともできるであろう。ただ、埋葬施設B、C、Fは、大きさや形状が不揃いの自然石を利用しているため、必然的にこのような形状にせざるを得なかった可能性も高い。

最後に、この古墳群の背景について考えてみたい。

西尾町における古墳の分布を見てみると、廟所古墳や観音山古墳が前期と推定されているほか、米坂古墳群で中期末から後期中葉までの古墳が確認された。単純に考えると廟所古墳や観音寺山古墳が首長クラスの古墳で、米坂古墳群はその下層クラスの古墳であろう。そうすると、古墳時代中期から後期中葉にかけて西尾町にはそれだけの古墳群を造り得る豪族の拠点があったことが考えられる。

その拠点の中心部は定かでないが、米坂遺跡においてほぼ同時期の集落跡が検出され、その集落範囲は今回調査を実施した範囲よりもかなり広がっているものと推察される。また、安蔵主遺跡周辺の丘陵端部に同時期の集落跡の存在が推測される。したがって、和久羅山から派生する低丘陵端部縁辺に広く集落跡が埋もれている可能性が高い。この地の豪族が背景に持つ主たる生業は推測の域を出ないが、この付近は畑作に適した微高地や、水田に適した低湿地が広いうえ、南側には漁労にも水運にも便利な大橋川が流れていること等を総合すると、人間の生活にとって非常に都合の良い場所であったと思われる。

ところが、後期後半にはいると米坂遺跡の集落は廃棄され、米坂古墳群における古墳の築造も見られなくなる。中期から後期初頭にかけてここを墓域としてきた豪族は、この時期において没落したか、もしくは他の場所に拠点を移したのであろう。ちなみに埋葬施設C、D、Eが後期後半に造られているが、これらは墳丘を持たない埋葬施設であり、これまで古墳を築いてきた豪族とは違う集団か、同じ豪族傘下にあったとしても、墳丘を造れないクラスの墓であったと思われる。

最後に、この大きな時代変換期をむかえた原因のヒントとなる遺構として埋葬施設Dをあげておきたい。埋葬施設Dの屍床には、明らかに焼成時に不良品となった須恵器の壺坏ばかりが敷き詰められていた。時はおりしも大井浜で須恵器の生産量が飛躍的に増加した時期である。

註　（1）松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団『竪穴古墳群』（1997年）
（2）島根県教育委員会『布志名大谷Ⅰ遺跡、布志名大谷Ⅱ遺跡、布志名オノ神遺跡』（1997年）
（3）松本岩雄氏によって仮称されている。

付編

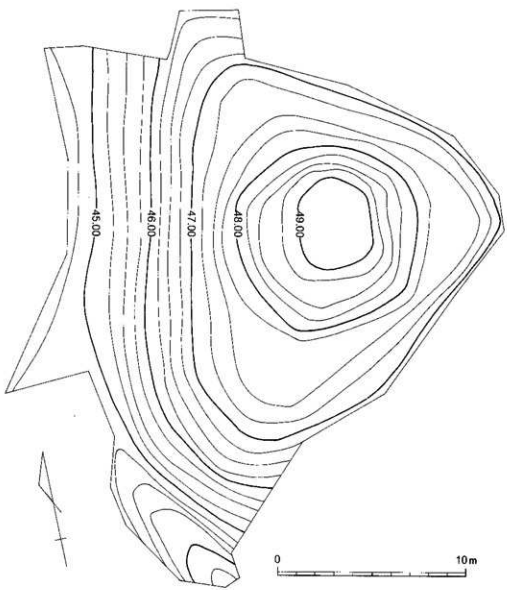
発掘調査の合間をぬって2号墳北東の古墳（第88図－2）の墳丘測量を実施した。

当初は、比高4mの高まりが2段築成状に観察されたことから、廟所古墳に匹敵する規模の古墳かと意気込んで測量にかかったのだが、結果は第160図のとおりである。

2段築成かと思われた平坦面は、平面オムスビ形で自然地形そのものであった。

この古墳は、小さな独立丘陵状の高まりという地形を利用して、上部を方形に削りだし、かつ削った土を盛り土して一辺12mの方墳を築いたもののようである。墳丘の高さは1.5mを測り、残りが良い。墳頂部をピンポールで突き刺すと石にあたる。

降りしきる雪の中、平板の上に積もる雪をアリダードで払い除けながらの測量であったが、大古墳が小古墳に化けたとき、測量3人組はからだも心も冷えきってしまったのである。



第160図　2号墳北東の古墳測量図

1号墳周溝出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
94－1	土師器	坏	口径11.2 器高6.0	石英、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 淡橙褐色	
94－2	土師器	坏		長石微粒を多く含む	軟	(外面) 赤橙色 (内断面) 淡褐色	
94－3	土師器	高坏	口径14.9　器高9.7 底径10.0	長石微粒を多く含む	不良	(内、外、断) 赤褐色	
94－4	土師器	高坏		長石微粒をわずかに含む	軟	(外) 橙色 (内、断) 淡褐色	
94－5	土師器	壺	頸径5.8	長石微粒を多く含む	悪い	(内、外、断) 淡橙褐色	

1号墳出土鉄製品観察表

図面番号	種類	法量(cm)	備考
95－1	鏃		茎部のみ残存
95－2	鏃		茎部のみ残存

1号墳墳丘下出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
96	土師器	壺	口径17．4（復元） 頸径13.2	石英、長石微粒を多く含む	やや軟	(内、外、断) 淡褐色	

2号墳周溝出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
99－1	土師器	坏	口径10.6　器高5.4 最大径11.8	石英、長石微粒を多く含む	やや軟	(内、外、断) 淡褐色	内外面に赤色顔料付着
99－2	土師器	坏	口径12.2 器高5.5	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 明橙～淡褐色	

2号墳南側平坦面出土鉄製品観察表

図面番号	器種	法量(cm)	備考
100－1	鏃	刃部長1.5　幅0.95　厚0.3 残存長2.55	基部を欠損
100－2	鏃	残存長2.2 断面0.6×0.4～0.45×0.25	茎部のみ残存

3号墳主体部出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
104－1	須恵器	坏	口径11.7 受部径14.25 器高5.45	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
104　2	須恵器	坏	口径11.1 受部径13.8 器高5.2	長石微粒を多く含む	やや軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	

3号墳周溝出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
105－1	須恵器	坏	口径10.7 受部径13.8 器高4.5	長石微粒を多く含む	良	(内、外、断) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れあり
105－2	須恵器	坏	口径12.2 受部径14.3 器高6.5	緻密あまり砂粒を含まない	悪い軟	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	

3・4墳間周溝出土遺物観察表

図面番号	器種	法量(cm)	備考
109	紡錘車	上径3.3　下径2.4　高さ2.0　孔径2.6　重さ26.08	須恵質

5号墳主体部出土土器観察表

図面番号	種別	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
113－1	須恵器	蓋	口径13.4 (推定) 器高5.7	長石、石英微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
113－2	須恵器	坏	口径11.0 受径部13.6 器高6.2	長石微粒を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

9号墳周溝出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
124－1	土師器	高坏	口径(推定)16.5 脚径3.0 底径9.4 器高11.0	長石、石英粒を少々含む	良	(内、外、断) 淡橙褐色	
124－2	土師器	高坏	口径13.4 脚径2.25 底径9.6 器高12.2	石英、長石粒を少々含む	良	(内、外、断)橙褐色 (外面一部)黒色	
124－3	土師器	高坏	口径(推定)16.5 脚径3 底径不明 器高不明	長石、石英微粒を少々含む	悪い	(内、外、断)淡橙褐色 (内、外面)赤色顔料	内、外面に赤色顔料残存
124－4	土師器	坏		1㎜弱の石英長石粒を密に含む	悪い	(内、外、断) 明橙色	

9号墳南西平坦面出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
126－1	須恵器	皿	底径9.4	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
126－2	須恵器	皿	底8.8	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	不明	
126－3	須恵器	高台付皿	底径12.00 (推定)	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
126－4	須恵器	高台付皿	底径9.0 (推定)	長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	

10号墳周溝出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	備考
129	土師器	壺	頸径8.0（推定）	石英、長石微粒を多く含む	黒い	(内、外) 淡褐色 (断) 黒色	

12号墳周溝出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
136－1	須恵器	蓋	口径12.1 器高5.7	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
136－2	須恵器	坏	口径 歪みが著しい 器高4.9 受部径13.5～11.2	長石粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色 外面一部自然釉	右回転	焼き歪みが著しい

12号墳周辺出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
137	須恵器	高台付坏	口径13.0 底径8.2 器高4.8	長石微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	左回転	

埋葬施設C出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
142	須恵器	蓋	口径14.4～11.7 器高4.9	石英微粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼き歪みあり

埋葬施設C出土玉類観察表

図面番号	種類	法量(cm／g)	材質	色調	備考
143－1	勾玉	長2.7 重さ4.18 断面0.95×0.8	赤めのう	薄橙色	
143－2	管玉	長1.8 重さ2.18 断面0.9×0.85	緑玉	薄青緑色	

埋葬施設D出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
146－1	須恵器	蓋	口径13.05 器高4.1	長石微粒を わずかに含む	天井部は 軟	(内、外、断) 淡灰色	右回転	天井 面調整
146－2	須恵器	蓋	口径14.4 器高1.6	長石、石英微粒 を多く含む	やや 軟	(内、外、断) 白灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
146－3	須恵器	蓋	口径13.05 器高	長石微粒を 少々含む	良好	(内、外、断) 灰～淡灰色	右回転	
146－4	須恵器	蓋	口径14.1 器高3.9	長石微粒を 多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	口径端を約1／3所 欠損
146－5	須恵器	蓋	口径13.7 器高4.5	1mm前後の長石 石英粒を多く含む	悪い	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
146－6	須恵器	蓋	口径14.3 器高3.8	長石、石英微粒 を多く含む	良好	(内、外、断) 淡灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ 焼き歪みあり
146－7	須恵器	蓋	口径14.3 器高4.55	長石、石英細粒(1 mm微粒)を多く含む	やや軟	(外)灰色～白灰色 (内)淡灰色	右回転	
146－8	須恵器	蓋	口径12.95 器高4.55	長石微粒を わずかに含む	やや軟	(内、外、断) 白っぽい灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－1	須恵器	坏	口径11.8　受部径14.4 器高4.0	長石微粒を 多く含む	良 (やや軟)	(内、外、断) 淡灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－2	須恵器	坏	口径12.3～10.3 受部径14.5～13.2	1mm前の長石 粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ 焼き歪みあり
147－3	須恵器	坏	口径12.0　受部径14.3 器高3.9	長石微粒を 多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－4	須恵器	坏	口径12.8　受部径14.6 器高5.45	長石、石英粒を 少々含む	悪い	(内、外、断) 淡褐色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－5	須恵器	坏	口径12.7　受部径15.3 器高4.5	長石微粒を 岩干含む	悪い	(内、外、断) 淡灰褐色	不明	焼成時のヒビ割れ あり
147－6	須恵器	坏	口径12.6　受部径14.9 器高4.8	1mm前後の長石、 石英粒を多く含む	悪い	(内、外、断) 淡灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－7	須恵器	坏	口径12.2　受部径14.7 器高4.35	1mm前の長石 石英粒を少々含む	悪い	(内、外、断) 淡灰褐色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－8	須恵器	坏	口径12.1　受部径14.3 器高4.1	1mm前の石英、 長石粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
147－9	須恵器	坏	口径12.0　受部径14.1 器高3.35	石英、長石微粒 を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
148－1	須恵器	坏	口径11.9　受部径14.1 器高4.1	1mm前後の石英 長石粒を微に含む	良好 やや軟	(内、外、断) 灰色	右回転	
148－2	須恵器	坏	口径12.1　受部径14.6 器高4.05	石英、長石微粒 を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼成時のヒビ割れ あり
148－3	須恵器	坏	口径12.8　脚径15.0 器高5.35	長石微粒を 少々含む	悪い	(外)淡灰色 (内、断)褐色	右回転	
148－4	須恵器	壺	口径7.3　頸径6.6 器高7.6　胴部最大径9.43	石英、長石微粒 を少々含む	良好	(内、外)淡いレンガ色 (断)淡褐色	右回転	

埋葬施設D出土玉類観察表

図面番号	種類	法　量（cm／g）	材質	備　考
149－1	丸玉	高さ0.85　径1.0×1.0　重さ0.87	碧玉	一方穿孔
149－2	丸玉	径1.08　高0.75　重さ0.94	碧玉	不整形、一方穿孔、実にいい加減な作り
149－3	管玉	長さ1.6　径0.75×0.8　重さ1.34	碧玉	割れ防止のえぐりを入れた後、一方穿孔
149－4	管玉	長さ1.85　径0.85×0.8　重さ1.55	碧玉	一方穿孔
149－5	管玉	径0.78×0.76　長2.04　重さ1.38	碧玉	
149－6	管玉	長さ2.0　径0.8×0.8　重さ1.75	碧玉	両側穿孔
149－7	管玉	長さ1.8　径0.85×0.8　重さ1.64	碧玉	両側穿孔
149－8	管玉	長さ2.35　径0.85×0.8　重さ2.03	碧玉	
149－9	管玉	長さ2.26　径0.84×0.85　重さ2.02	碧玉	
149－10	管玉	長さ2.36　径0.84×0.85　重さ2.14	碧玉	
149－11	管玉	長さ2.5　径0.88×0.85　重さ2.39	碧玉	
149－12	管玉	長さ2.5　径0.9×0.9　重さ2.62	碧玉	
149－13	管玉	長さ2.5　径0.95×0.95　重さ2.90	碧玉	

埋葬施設E供献土器観察表

図面番号	種類	器種	法　量（cm）	胎　土	焼成	色　調	ろくろ	備　考
151－1	須恵器	蓋	口径12.7 器高4.05	長石微粒を わずかに含む	良好	（内、外、断） 灰色	右回転	
151－2	須恵器	蓋	口径13.3 器高4.4	長石微粒を 多く含む	軟	（内、外、断）淡灰色 天井部のみ淡褐色	右回転	
151－3	須恵器	坏	口径12.1　受部径14.5 器高4.3	長石微粒を わずかに含む	良好 やや軟	（内、外）淡褐色 （断）褐色	右回転	

埋葬E主体部出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法　量（cm）	胎　土	焼成	色　調	ろくろ	備　考
152－1	須恵器	坏	口径11.0　受部径13.25 器高3.6	長石微粒を 少々含む	良好	（内、外） 灰色	右回転	
152－2	須恵器	坏	口径11.2　受部径13.4 器高3.8	長石微粒を 少々含む	良好	（内、外、断） 灰色	右回転	

埋葬施設E出土鉄製品観察表

図面番号	種類	法　量（cm）	備　考
153	刀子	残存長9.8	先端を欠損

米坂古墳群出土石器観察表

図面番号	種　類	法　量（cm／g）	材　質	備　考
159－1	石錐	長さ残存部3.0　幅2.3　厚さ0.45　重さ2.05	黒曜石	先端をわずかに欠損
159－2	石錐	縦2.9　横1.95　厚さ0.5　重さ1.84	黒曜石	
159－3	石錐	縦1.5　横1.3　厚さ0.25　重さ0.41	黒曜石	
159－4	石錐	全長1.75　最大幅1.25　最大厚0.3　重さ0.37	黒曜石	
159－5	石錐	残存長1.4　最大幅1.8　最大厚0.35　重さ0.64	安山岩	先端を欠損
159－6	スクレイパー	縦3.8　横4.8　厚さ1.3　重さ18.76	黒曜石	
159－7	スクレイパー	縦4.2　横5.8　厚さ0.65　重さ18.75	安山岩	
159－8	剥片	縦1.4　横1.9　厚さ0.2　重さ0.56	黒曜石	
159－9	剥片	縦2.5　横1.5　厚さ0.3　重さ1.47	黒曜石	
159－10	剥片	縦3.0　横1.7　厚さ0.6　重さ2.59	黒曜石	
159－11	剥片	縦3.9　横1.6　厚さ1.1　重さ8.44	黒曜石	
159－12	折袋石斧	残存長9.6　最大幅6.3　最大厚1.5　重さ136.15	流紋岩	刃部を欠損

柴尾遺跡

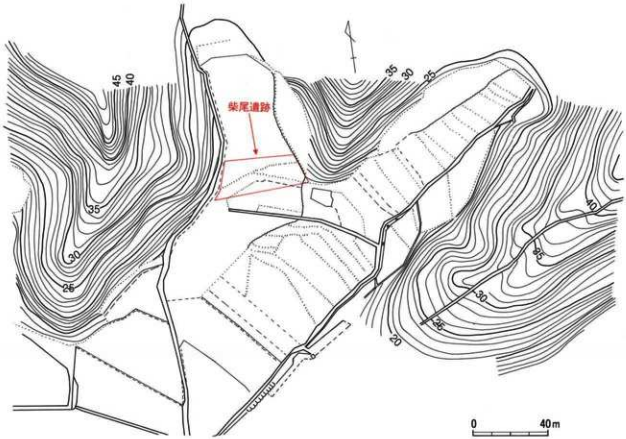
位置と環境

柴尾遺跡は松江市西尾町390－１ほかに所在する（第161図）。

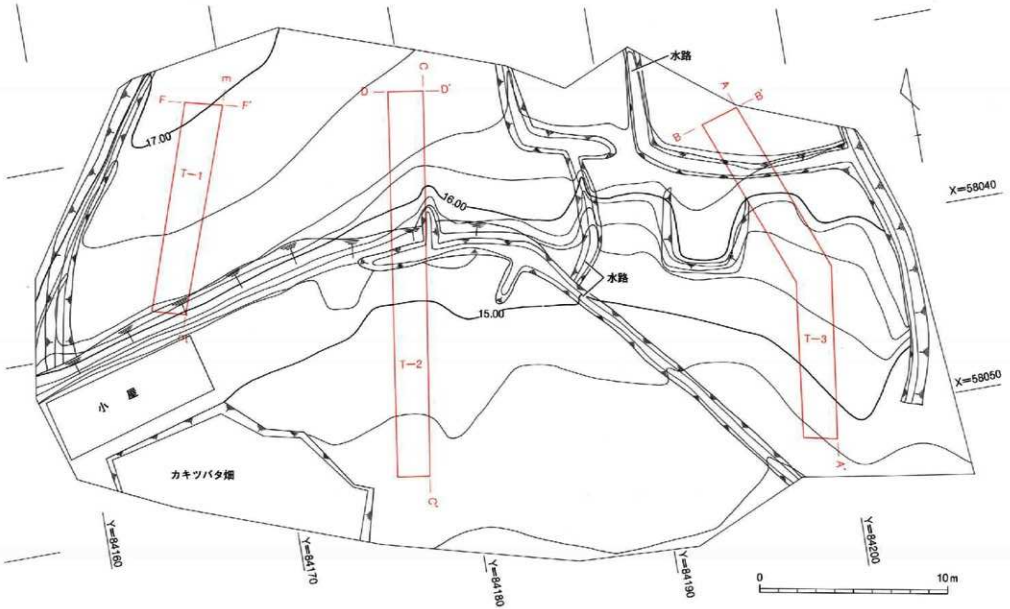
そこは和久羅山から派生している丘陵先端で、低丘陵に挟まれた狭い谷間の地形である。この谷には豊富な湧水がこんこんと流れ出しており、その水量は、狭い谷間状地形にはいく筋もの水路が作られているのもかかわらず、あちこちで氾濫した痕跡が見られるほどである。現在ではその豊富な湧水を利用して調査区南東ではかきつばた畑が作られている。調査区は、かつては水田として耕作されていたようであるが、現在は荒地化してなかば湿地となっている。

周辺の遺跡としては、直線距離にして約400m東方に米坂古墳群があるほか、約150m東方の丘陵状にも古墳状の高まりが確認される。また、すぐ西の低丘陵上には中世の小規模な山城があり、その山頂部に井戸が存在することは地元の作業員の間でも有名な話しであった。

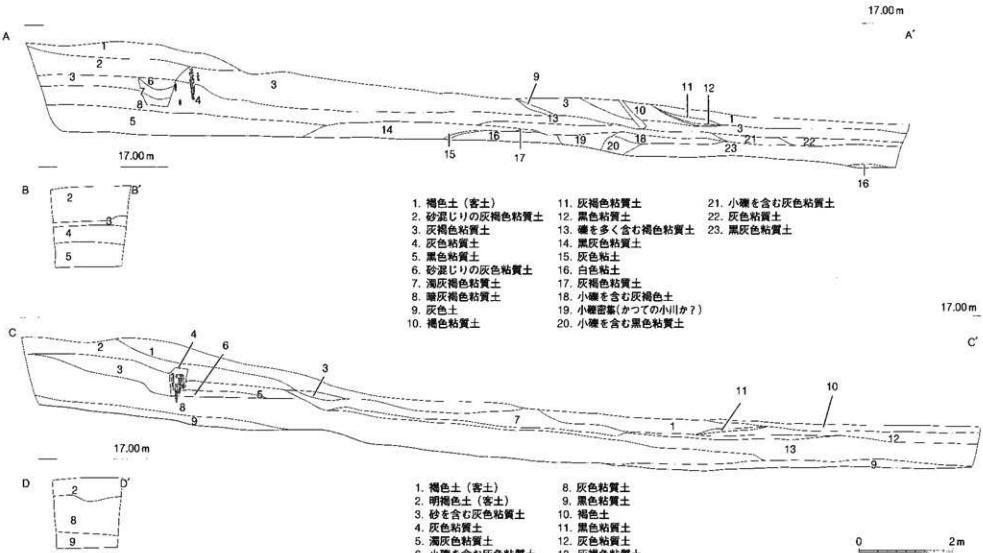
さて、柴尾遺跡を調査することになった発端は、平成２年度に松江市教育委員会が柴尾遺跡周辺で土器片を表面採集したことによる。したがって、柴尾遺跡を遺物散布地と考え、平成９年度において開発予定地1000㎡全面について発掘調査を実施することとなった（第162図）。



第161図　柴尾遺跡位置図



第162図　柴尾遺跡調査区地形測量



第163図　柴尾遺跡トレンチセクション図（1）

第164図　柴尾遺跡トレンチセクション図（２）

調査の概要

発掘調査は、平成９年８月21日から平成９年９月１日まで、実質７日間を費やして実施した。当初は、湧水が多い遺物散布地ということで、遺物包含層が深いことが考えられたため、まず重機で試掘トレンチを掘って土層を観察することにした。トレンチは調査区の両端と中央に３本、東からＴ－１、Ｔ－２、Ｔ－３と設定した。以下、トレンチごとに概要を述べる（第163、164図）。

（Ｔ－１）

地形の制約上「く」の字状のトレンチにした。まず、重機で２～1.5m掘り下げたところ、上部には褐色の客土層があり、その下は灰色粘質土を中心とする水田耕作土層があった。水田耕作時の水路と畦の杭も見つかった。その下も基本的には同じ様な灰色粘質土が見られたが、それ以下は黒色粘質土を中心とする層に変わり、沼地の底泥の様相を呈していた。また、その層を切って純粋な深さ不明の角丸小礫の層があり、小川が流れていた様子が見受けられた。黒色土の下は部分的に白色粘土層が見られたため、遺物包含層は無いものと判断し、それ以上の掘り下げは中止した。以上、層序について記したが、遺物はまったく出土しなかった。水田耕作土中からも遺物が出土しなかったため、水田耕作の時期についても不明である。

（Ｔ－２）

ここも２～1.5m掘り下げたところ、上部には褐色の客土層があり、その下には灰色粘質土を中心とする水田耕作土層があった。Ｔ－１から続くような位置には畦に使用したと思われる杭が検出された。耕作土の下も深い灰色粘質土があり、さらにその下は黒色粘質土が見られた。したがって、Ｔ－２もＴ－１とほぼ同様の層序であると判断されたため、それ以上の掘り下げは中止した。遺物はまったく出土しなかった。

（Ｔ－３）

建物があったため、北側のやや地形が高くなっている場所についてのみトレンチを掘った。ここは土地を１段高くするために褐色土を中心とする客土層がかなり厚く、客土層を切るようにして作られた水路の痕跡が見られた。層序は客土層の下に灰色粘質土があり、その下に黒色粘質土が見られた。したがって、Ｔ－１、２とほぼ同様の層序と判断されたため、それ以上の掘り下げは中止した。遺物はまったく出土しなかった。

小結

全面調査にはいる前に、試掘トレンチを3本掘って地面下の様子を観察したところ、基本的な土層はいずれも同じで上から客土層、耕作土層、灰色粘質土層、黒色粘質土層であった。客土層は近年のものである。水田耕作が行われた下限の時期は遺物が出土していないため不明であるが、土層が細分できないことからあまり遡るとは考えられない。それ以下の灰色粘質土層は若干の木片を含んでいたが、木製品の類は出土しなかった。黒色粘質土層は木片すら含んでいなかった。したがって、灰色粘質土層以下は人間の活動の痕跡が見られない泥地状の無遺物層と解釈される。

分布調査の際に土器片が表採されているが、それは東方に隣接する圃場整備された水田の客土中に混在していた可能性が高い。以上のことから当該地は遺跡とは断定しがたく、本遺跡の調査はトレンチ調査3本にとどめることとなり、全面調査には到らなかった。

岩汐遺跡

位置と環境

岩汐遺跡は、松江市大井町字岩汐68－1外に所在する。

そこは大きな谷の出口付近で、西に岩汐峠をのぞみ、北、西、南方を低丘陵に囲まれ、東側は大橋川河口を埋め立てた広い水田地帯に面している。調査地の北側半分は谷の水田で、南側半分は丘陵先端の斜面にあたる。この水田部分からは、かねてより多数の土器が出土していた。

大井町は、733年に勘造された『出雲国風土記』に「大井浜……、また陶物を造れり。」と記されているように、出雲地域の須恵器の一大生産地で、これまでの調査によって、6世紀初頭から9世紀代まで須恵器が生産されていたことがわかっている。したがって、周辺には、須恵器生産とそれにかかわる人々の生活遺跡や墳墓等が非常に多くかつ広範囲に分布している。

調査地周辺の遺跡としては、調査区の谷を挟んで北側の丘陵東端に、6世紀後半から奈良期にかけて生産がおこなわれたババタケ窯跡があり、この窯跡から西方約300mの同丘陵南側斜面には岩汐窯跡がある。岩汐窯跡は4基の窯跡が知られており、操業時期についてはババタケ窯跡とほぼ重なる。また、この両者の窯跡の中程の地点には後廻遺跡があり、窯跡特有の遺物が採取されて窯跡推定地と考えられている。また、調査区の南側の丘陵には岩汐南窯跡が位置している。このように、岩汐遺跡周縁の丘陵は須恵器窯の密集域となっているのである。

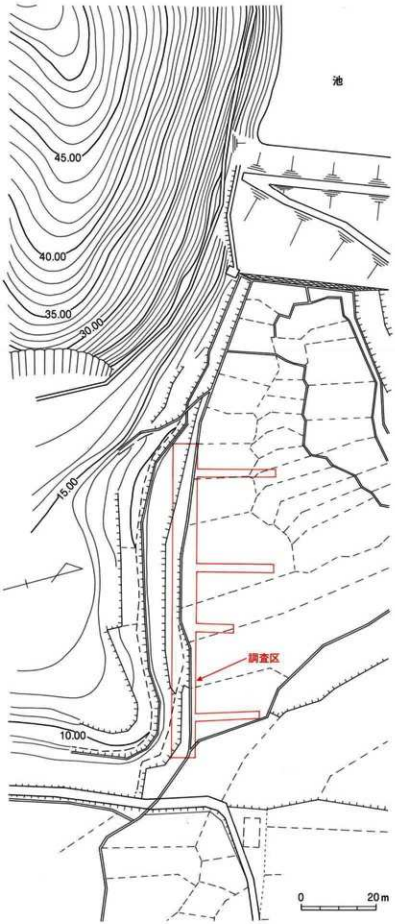
調査の概要

岩汐遺跡の調査は、平成4年10月2日から平成5年1月14日の間、実質51日間を費やして実施した。調査面積は578m²である。

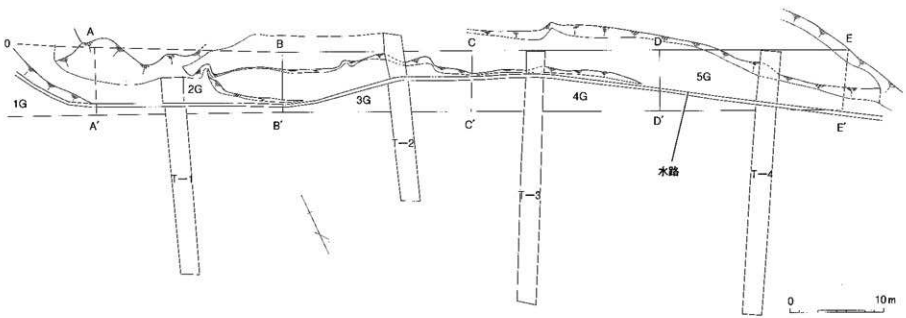
調査は、まずトレンチ4本を設定して、遺跡の性格を確認することにした。その結果、T－1では、青灰色～灰褐色砂礫層の上に小石、須恵器片を含む暗褐色土が南側丘陵から流れ込んだように堆積しており、遺構は存在しなかった。また、T－2でも、灰白色～黄褐色土層の上に礫、須恵器を中心とした多量の遺物含む灰色～灰褐色～褐色土層が、南側丘陵から流れ込んだように堆積しており、遺構は存在しなかった。

したがって、T－1、2から出土した遺物はすべて南側丘陵からの流れ込みと考えられたため、丘陵先端部を東側より、G－1、2、3、4、5の5区画に分けて全面調査を実施し、遺構の有無やその性格を確かめることにした。

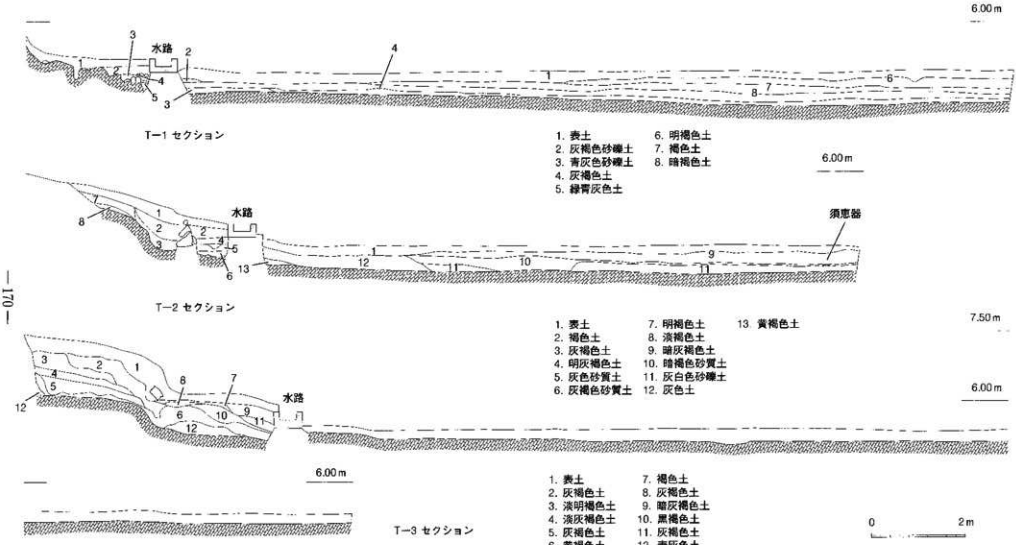
各調査区の南北の土層堆積状況を観察すると、G－1は、地山の上に礫、小石、土器を含む褐色～明褐色土層が調査範囲外の南側丘陵部から流れ込んだように堆積していた。G－2は、地山の上に礫、小石、土器を含む黒褐色～灰褐色～茶褐色土層が調査範囲外の南側丘陵部から流れ込んだように堆積していた。G－3は、地山の上に礫、小石、土器を多量に含む茶褐色～灰褐色土層が調査範囲外の南側丘陵部から流れ込んだように堆積していた。G－4は、地山の上に白灰色砂礫層が堆積し、その上に礫、小石、土器を多量に含む茶褐色～灰褐色土が整地されたように堆積していた。G－5は、地山の上に土器を含む灰褐色土と黄褐色土が調査範囲外の南側丘陵部から流れ込んだように堆積していた。



第165図　岩汐遺跡位置図



第166図　岩汐遺跡トレンチおよび調査区配置図

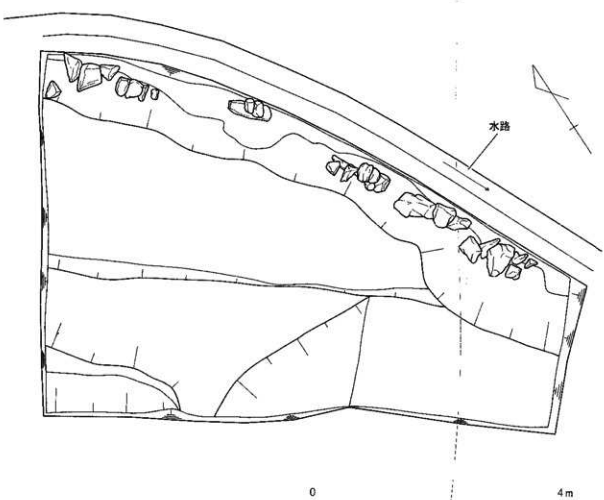


第167図　岩汐遺跡トレンチセクション図

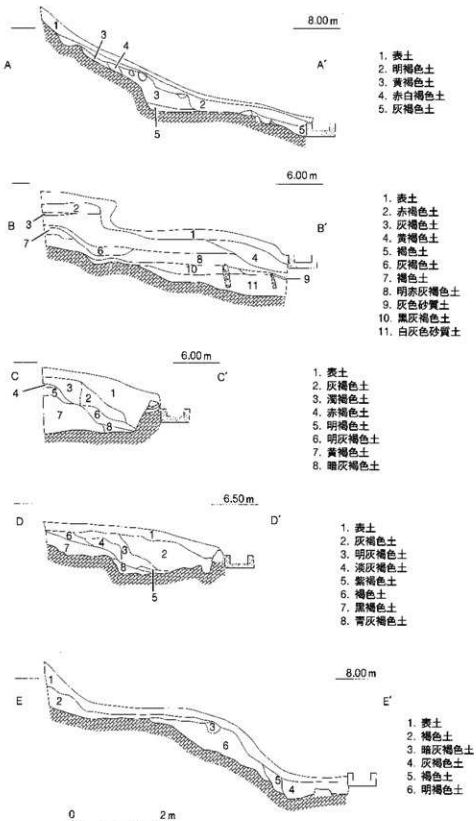
次に、東西方向の土層堆積状況を観察すると、G－1、2では、地山の上に黒褐色土～黒色土が堆積しており、ところどころで黒褐色土～黒色土が後世の撹乱を受けたように層位的に複雑に乱れていることが確認された。G－3～5では、地山の上に礫、小石、土器を含む黄褐色土、茶褐色～灰褐色土が自然的に堆積している状況を呈していた。

一方、遺物の出土状況および構成を見ると、各グリッドから土師器、須恵器、陶磁器、土錘等の破片が多量に出土するとともに、須恵器窯の窯体片、炭、焼土塊も調査区の南端付近のG－1、2を中心として多数出土した。

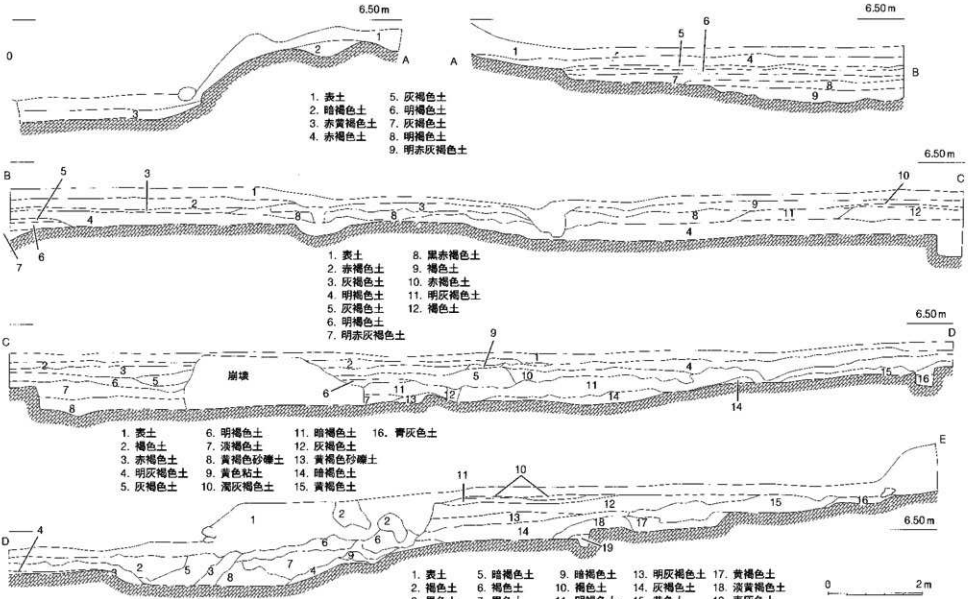
遺構は、G－1で石列を検出したが、これは後世のコンクリート水路とほぼ一致しているので、コンクリート水路が作られるまでの水路に関連する遺構と考えられる。石列以外の遺構は検出できなかった。



第168図　岩汐遺跡G－1平面図



第169図　岩汐遺跡セクション図（1）



第170図　岩汐遺跡セクション図（2）

遺物

試掘調査で出土した遺物を概観すると、小さな破片が大部分を占めているが、6世紀初頭から9世紀代の大量の遺物が出土した。中でも6世紀半ばから後半にかけての須恵器の量が多い。

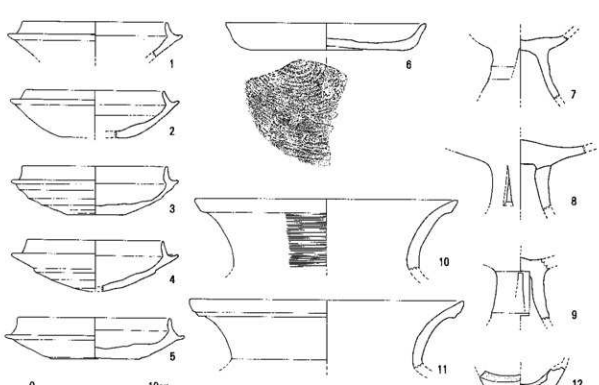
出土遺物を概観すると、第172図10、第173図2、3のように、明らかに焼き損じと見られる個体も混じっており、南側丘陵に窯跡や灰原が存在することを示唆している。また、図面化できる点数は少なかったが、第172図11～13の土師器の高坏や第172図15の土製支脚、第172図16の土錘など、生活遺跡に関連する遺物も多く出土した。

全面調査で出土した遺物を概観すると、基本的には試掘調査で得られた結果と同じ様相を呈していた。以下、グリッドごとに観察する。

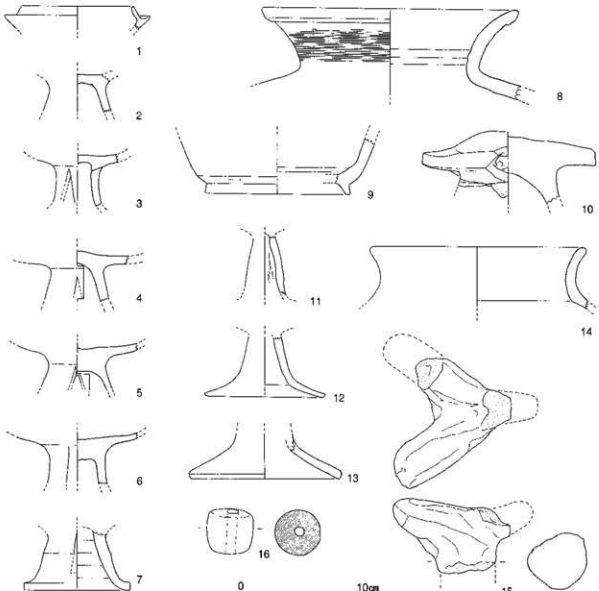
1Gから出土した遺物を見ると（第175図）、大量の破片に混じって、8割近く復原できた整形な横瓶（5）が出土した。おそらく近辺で実用品として使用されていたものであろう。甕か甑の把手（4）や紡錘車（6）も出土し、生活遺跡にともなう遺物が目立つ一方、焼き膨れが著しい高坏（2）も出土した。

2Gから出土した遺物を見ると（第176図）、完形の土器は無く、いずれも破片ばかりである。甕か甑の把手が2点（11、12）出土したほか、甕の前面底部分（13）が出土した。

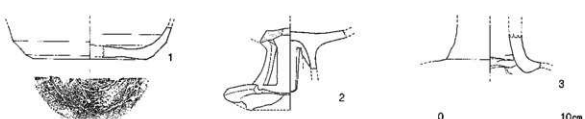
3Gから出土した遺物を見ると（第177図）、完形の土器はなく、いずれも破片ばかりである。焼成時に窯台と癒着した須恵器（15）や、別個体の土器と癒着した須恵器（16）が出土し、灰原の存在が近いことがうかがわれる。また、土製支脚（17）や漁労関連の土錘も5点（18～22）出土し、生活遺



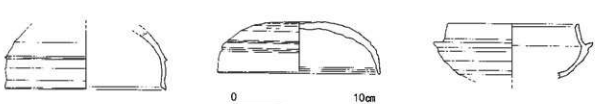
第171図　岩汐遺跡T－1出土遺物実測図



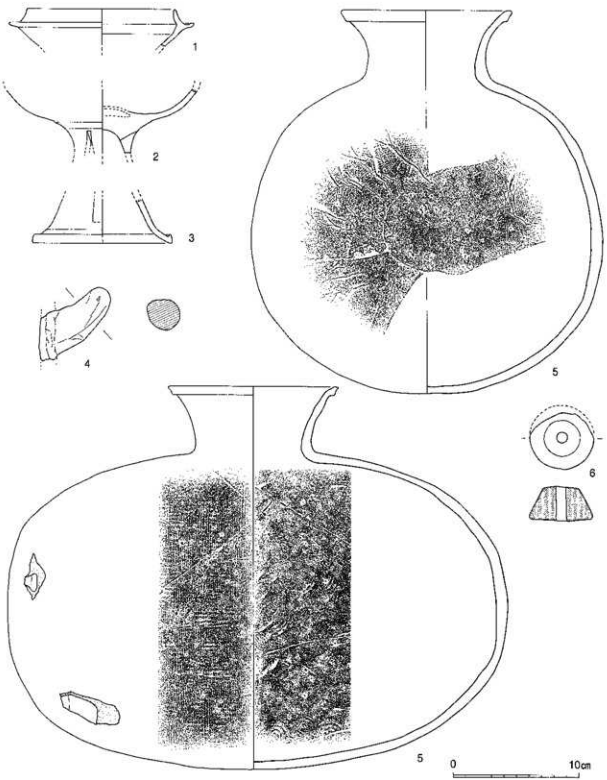
第172図　岩汐遺跡Ｔ－２出土遺物実測図



第173図　岩汐遺跡Ｔ－３出土遺物実測図



第174図　岩汐遺跡Ｔ－４出土遺物実測図

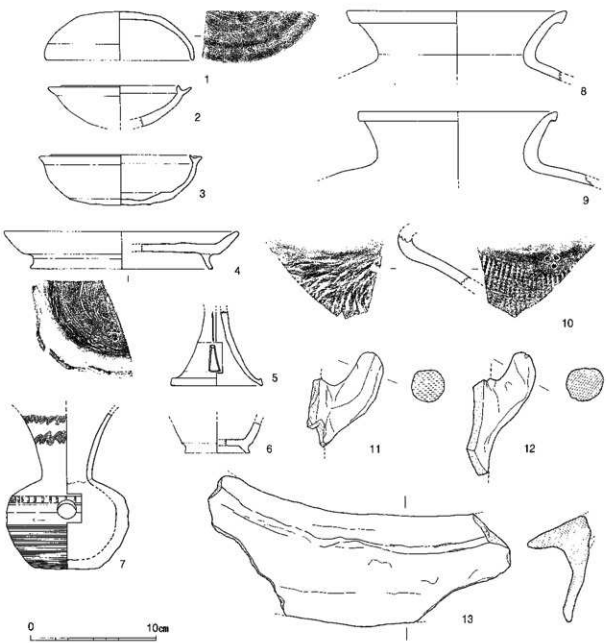


第175図　岩汐遺跡１Ｇ出土遺物実測図

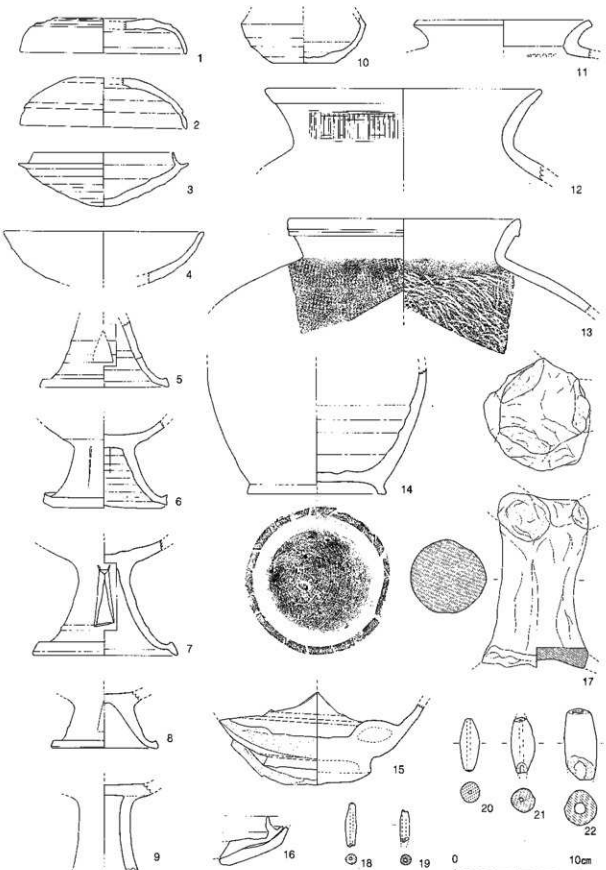
跡の存在もうかがわせる。

4Gから出土した遺物を見ると、いずれも破片ばかりである。灰原関連の遺物は見られず、土製支脚（8）や土錘2点（9、10）が出土した。

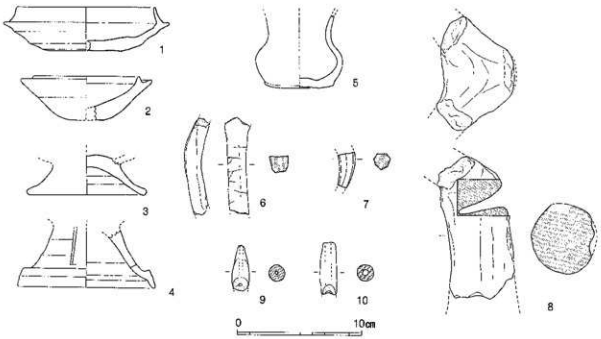
5Gから出土した遺物を見ると、完形に近い土器が多い。例外もあるが、他のグリッドより古いタイプの須恵器の量が多い。



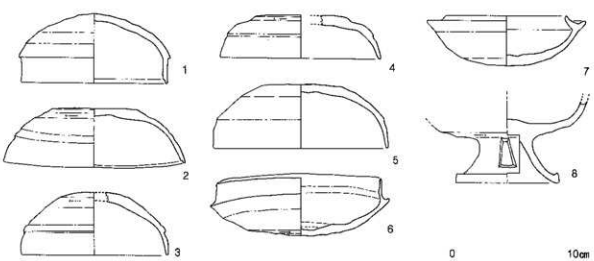
第176図　岩汐遺跡2G出土遺物実測図



第177図　岩汐遺跡３Ｇ出土遺物実測図



第178図　岩汐遺跡４Ｇ出土遺物実測図



第179図　岩汐遺跡５Ｇ出土遺物実測図

小結

岩汐遺跡には遺構が存在しなかったが、須恵器を中心とする大量の土器片が出土した。これらの土器片は、土層堆積状況から判断して、遺跡の南側低丘陵から土砂とともに流れ込んだ状態で出土したことが判明した。

南側低丘陵は非常になだらかな地形で、現在は茶畑として利用されており、いつの時代かは不明であるが、開墾して整地された様相を呈している。その開墾のおりに、丘陵上にあった遺跡の遺物包含層、さらには遺構面の土砂までを、丘陵端部に押しやってなだらかな地形を作ったのであろう。その丘陵先端部に岩汐遺跡が位置していると推察する。

したがって、T－2、T－3、3G調査区から、焼き損じの須恵器や窯体片など灰原関連の遺物が出土したことより、この調査区の南側丘陵には、6世紀後半を中心に操業された須恵器窯が存在したことが明らかとなった。また、G1からG4にかけては大量の生活関連の遺物も出土していることから、須恵器窯の周辺には須恵器工人達の居住地域もあったものと思われる。土錘や紡錘車も出土していることから、工人達は須恵器生産のかたわら、漁労や機織りもおこなっていたようである。

ところで、T－5Gから出土した須恵器は、1～4Gよりも古い6世紀前半代のものが多いことから、丘陵の西側には東側に先行する時代の遺跡が存在すると考えられる。遺跡の性格は、出土遺物のみでは判断できない。

少し大きな視野からながめてみると、位置と環境の欄で記したとおり、岩汐遺跡が位置する谷の北側丘陵には、6世紀後半を中心に操業された須恵器窯跡が、少なくとも6基は存在することがわかっている。また、今回の調査によって、南側丘陵にも6世紀後半の須恵器窯が存在したことがほぼ確実となった。これが周知の遺跡、岩汐南窯跡と重なるものであるのか、また別の窯であるのかについては不明と言わざるをえない。。

6世紀後半といえば、大井地区において須恵器の生産量が飛躍的にのびた時期といわれている。言い換えれば、須恵器窯数が以前にも増して増加した時期である。まさにその時期に、岩汐遺跡が位置する谷に面した南北の丘陵において、多数の須恵器窯が作られ、生産が開始されたのである。

T－1出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
171－1	須恵器	坏	口径11.4 受部径14.0	密、砂粒をわずかに含む	良好	（内、外、断）灰色	右回転	
171－2	須恵器	坏	口径11.0 受部径13.6	密、砂粒をわずかに含む	良好	（内、外、断）灰色	右回転	
171－3	須恵器	坏	口径11.4　器高3.8 底径4.6　受部径13.4	長石微粒を含む	良好	（内、外、断）灰色	右回転	焼き歪みあり
171－4	須恵器	坏	口径10.8 受部径13.4	長石粒を含む	良好	（内、外、断）灰色	右回転	焼き歪みあり
171－5	須恵器	坏	口径12.0　器高3.3 受部径14.4	密	良	（内、外、断）灰色	右回転	火ぶくれ、焼き歪みあり
171－6	須恵器	皿	口径16.0　器高2.15 低径12.0	密、長石微粒を含む	良好	（内、外、断）茶褐色	右回転	
171－7	須恵器	高坏		密、長石微粒をわずかに含む	良好	（内、断）灰色 （外）暗灰色	右回転	
171－8	須恵器	高坏		密、長石微粒をわずかに含む	良好	（内、外、断）灰色	右回転	
171－9	須恵器	高坏		密	良好	（内、外、断）灰色	右回転	
171－10	須恵器	壺	口径21.0	密	良好	（内、外、断）灰色 （釉）うすい緑	右回転	
171－11	須恵器	壺	口径22.0	密	良好	（内、断）灰色、（外）茶褐色 （釉）うすい緑	右回転	
171－12	須恵器	壺		密、長石粒を含む	良好	（内、外、断）灰色	右回転	

T－2出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
173－1	須恵器	坏	口径8.8 受部径11.6	密、砂粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－2	須恵器	高坏		長石粒を含む	普通	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－3	須恵器	高坏		密、砂粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－4	須恵器	高坏		密、長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－5	須恵器	高坏		密、長石微粒をわずかに含む	やや不良	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－6	須恵器	高坏		密	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－7	須恵器	高坏		密、長石粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－8	須恵器	壺	口径20.6	密、長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－9	須恵器	高台付坏		密、長石粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
172－10	須恵器	不明	円盤底径13.8	密	良好	(外)暗灰色 (断)灰色	右回転	焼き台か？ 焼き歪み著しい
172－11	土師器	高坏		0.1～1mm大の砂粒を含む	良	(内、外、断) 淡黄褐色		
172－12	土師器	高坏		密、0.1～5mm大の砂含をわずかに含む	良	(外)赤みがかった褐色 (内、断)淡黄褐色		
172－13	土師器	高坏	底径11.8	長石粒をわずかに含む	良	(内、外、断) 淡黄褐色		
172－14	土師器	甕	口径17.2	長石微粒を含む	不良	(内、外、断) 淡黄褐色		
172－15	土師器	土製支脚		1mm大の長石粒を多く含む	良	(内、外、断) 暗褐色		
172－16		土錘	幅3.7 長さ3.6 孔径0.8	長石微粒を密に含む	良	(内、外、断)褐色 黒褐色の部分有		

T－3出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
173－1	須恵器	坏		密、長石粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
173－2	須恵器	高坏		密、長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	焼き歪み著しい
173－3	須恵器	長頸壺		密	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	ひび割れ 焼き歪みあり

T－4出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
174－1	須恵器	蓋	口径12.8	密、1mmまでの白色細砂粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	左回転	
174－2	須恵器	蓋	口径13.0 器高4.0	1mm大の白色砂粒も多く含む	良好	(内)暗灰色 (外)黒灰色	右回転	
174－3	須恵器	坏	口径10.4 受部径12.8	密、1mmまでの白色細砂粒を多く含む	良好	(内、断)灰色 (外)明青灰色	右回転	

1G出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
175－1	須恵器	坏	口径11.8 受部径14.8	密、長石粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
175－2	須恵器	高坏		密、長石粒を含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	火ぶくれあり
175－3	須恵器	高坏	脚部底径11.2	密、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
175－4	須恵器	(把手)		長石粒を含む	やや不良	褐色～茶褐色	右回転	
175－5	須恵器	横瓶	口径13.2 器高30.5	密、長石粒を含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
175－6		肪繭車	上部径2.85　下部径5.1 器高2.7　孔径0.85	密、0.5～1mm大の長石粒を含む	良好	(内、外、断)灰色		紡車質

2G出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
176－1	須恵器	蓋	口径11.8 器高3.9	密	良好	(内、外)灰色	右回転	
176－2	須恵器	坏	口径9.2 受部径11.4	密0.5mm大の長石粒を含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
176－3	須恵器	坏	口径11.0　器高4.0 受部径12.8	密	良好	(内、外)灰色	右回転	
176－4	須恵器	高台付皿	口径18.4　器高3.0 底径12.6	密	良好	(内、外)灰色	右回転	
176－5	須恵器	高坏		密0.5～1mm大の長石を含む	良好	(内、外)灰色	右回転	
176－6	須恵器	台付壺		密、砂粒を含む	良好	(内、断)灰色 (外)暗灰色	右回転	
176－7	須恵器	壺		密、0.5～1mm大の長石を含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
176－8	須恵器	壺	口径17.4	密、長石粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色	右回転	
176－9	須恵器	壺	口径16.0	密、0.5mmの砂粒をわずかに含む	良好	(内、外、断)灰色 (釉)うす緑	右回転	
176－10	須恵器	壺		密、長石粒を含む	良好	(内、外)灰色	右回転	
176－11	須恵器	(把手)		密	良好	(内、外、断)灰色		
176－12	須恵器	(把手)		密	良好	(内、外、断)灰色		
176－13	上師器	甕		0.5～1mm大の砂粒を多く含む	良好	(内、外、断)淡黄褐色		

3G出土土器観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
177-1	須恵器	蓋	口径13.4 器高2.8	長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色 一部黒有	右回転	
177-2	須恵器	蓋	口径13.2 器高3.9	密、長石、石英を含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
177-3	須恵器	坏	口径11.1 器高4.3 受部径13.6	長石粒を含む	良好	(内、外) 明灰色 (断) 灰色	右回転	
177-4	須恵器	高坏	口径16.0	密、長石粒を含む	良好	(外) 暗灰色 (内、断) 灰色	右回転	
177-5	須恵器	高坏	脚部径10.4	密、長石を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-6	須恵器	高坏	脚底径9.9 脚高4.8	長石、石英を少々含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-7	須恵器	高坏	底径11.6	2～5mmの長石を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-8	須恵器	高坏	脚底径8.6 脚高3.2	密、長石微粒を含む	良好	(内、断) 灰色 (外) 明灰色	右回転	
177-9	須恵器	高坏		長石、石英を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-10	須恵器	小壺	底径5.0	長石、石英を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-11	須恵器	壺	口径14.4	長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-12	須恵器	甕	口径22.2	長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-13	須恵器	甕	口径18.6	密、長石微粒をわずかに含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
177-14	須恵器	長頸壺	底径10.9	長石粒を多く含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
177-15	須恵器	壺	底径8.7	長石微粒を含む	良好	(内、断) 灰色 (外) 黒、(重複痕) 灰色		焼き台の使者あり
177-16	須恵器	坏		長石微粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色		重ね焼き土器の痕着あり
177-17		土製支脚	脚部底径6.05	長石微粒を多く含む	良	褐色		
177-18		上錘	長さ3.5 幅0.9 孔径0.2	密、長石微粒をわずかに含む	良好	暗灰色		
177-19		土錘	幅0.8 孔径0.3	密	良好	灰褐色		
177-20		土錘	長さ4.2 幅1.5 孔径0.3	長石粒を含む	普通	黄褐色～黒褐色		
177-21		土錘	長さ4.4 幅1.9 孔径0.3	0.5mm大の砂粒を含む	良	褐色		
177-22		土錘	幅2.5 孔径0.9	0.5～1mm大の砂粒を含む	普通	淡黄褐色		

4G出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
178－1	須恵器	坏	口径11.0 器高3.5 受部径13.2	密、長石粒を含む	良好	(内、外) 暗灰色	右回転	焼き歪みあり
178－2	須恵器	坏	口径8.4 受部径10.6	密、長石粒を含む	良好	(内、断)灰色 (外)灰色、(釉)黒色	右回転	
178－3	須恵器	高坏		密、1mm大の長石粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
178－4	須恵器	高坏	底径10.8	密、長石粒を含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
178－5	須恵器	小壺		長石粒を多く含む	良好	(内、外、断) 灰色	右回転	
178－6	須恵器	壺の肩子		長石粒をわずかに含む	良	(外) 灰褐色	右回転	
178－7	須恵器			密、長石粒を含む	良好	(外) 灰色	右回転	
178－8		土錘支脚		長石粒を多く含む	良	(外)褐色 (断)灰色		
178－9		土錘	幅1.3 孔径0.25	長石粒を含む	良好	淡黄褐色一部暗褐色		
178－10		土錘	幅1.3 孔径0.5	密、長石微粒をわずかに含む	良好	淡褐色一部暗褐色		

5G出土遺物観察表

図面番号	種類	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
179－1	須恵器	蓋	器高5.5 口径11.8	密	良好	(内、外) 灰色	右回転	
179－2	須恵器	蓋	口径14.6 器高4.7	長石粒を含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	焼き歪みあり
179－3	須恵器	蓋	口径11.7 器高5.0	密1mm大の長石粒を含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
179－4	須恵器	蓋	口径12.8 器高3.45	密	良好	(内、外) 灰色	右回転	焼き歪みあり
179－5	須恵器	蓋	口径14.1 器高5.1	長石を含む	不良	(内)白褐色 (外)黒褐色～褐色	右回転	
179－6	須恵器	坏身	口径最大13.1 最小10.0 器高4.6 受部径最大14.4 最小12.5	密、長石粒を含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	焼き歪みあり
179－7	須恵器	坏	口径9.6 受部径12.7 器高4.0	密、長石粒を含む	良好	(内、外) 灰色	右回転	
179－8	須恵器	高坏	脚部底径8.3	密、長石をわずかに含む	良好	(内)灰色 (外、断)暗灰色	右回転	自然釉かかる

岩汐峠遺跡

位置と環境

岩汐峠遺跡は、松江市大井町字岩汐野山108－1ほかに所在する。

岩汐峠の峠頂は、山が断層をおこしてできたV字形地形の谷間にあたり、東北側と南西側は急傾斜な山になっている。岩汐峠は大井町と朝酌町の町境にあたり、ここから南東に緩やかな斜面を下れば大井町の集落に至り、北西に下れば朝酌町の集落に至る。幅1m前後の細い道であるが、近年まで大井町と朝酌町を結ぶ最短距離の生活道として活用されてきたということである。岩汐峠は現在では背の高い笹や潅木が生い茂っているが、約50年前までは茶畑として利用されていたらしく、峠頂から東にかけては石垣や地形加工をみることができる。

周辺の遺跡は、近いところでは確認されていない。大井町側では古代の須恵器窯跡が数多く分布しており、朝酌町側では特に古墳時代後期以降の遺跡が非常に多く分布している。地理的な面から考えると、当時の人々は中海や大橋川といった水上交通を活発に利用して往来していたと思われるが、岩汐峠越えの道は陸路を歩く人にとっては重要なルートであったに違いない。

調査の概要

平成2年度の試掘調査の結果、峠頂付近と少し東に下がった場所で遺物、遺構を検出していたため、そこを全面調査し（第180図）、朝酌町へ下がる緩斜面にもトレンチを3本設定して、古代からの道の痕跡を探ろうと試みた。

調査は、平成5年11月16日から平成6年2月1日にかけて、実質40日間をかけて実施した。

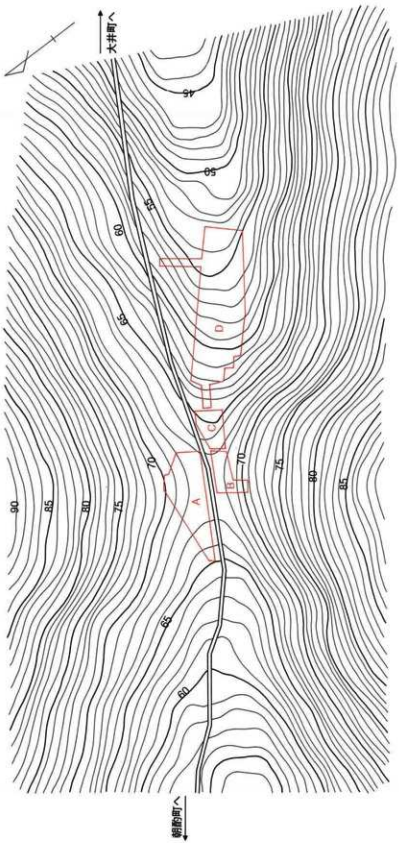
A区は試掘調査の時点で円礫や須恵器片が出土していた場所で、150㎡について調査を実施した。土層は上から表土、褐色砂質土、黒色土、地山であった。試掘調査で見つかった石敷遺構は、当初性格がわからなかったが、雨上がりに断層のボーリング調査に来ていた人から「字を書いた石があるよ」との指摘を受け、恥ずかしながら初めて礫石経塚であることが判明した。冬季で天候の悪い日が多かったうえ、朝霜などで円礫はいつも泥まみれ状態で発見が遅れた次第である。遺構は礫石経塚1カ所のみであった。周辺からは、幅広い時代の須恵器片が点々と出土した（第193図）。

B区は50㎡、C区は60㎡について調査を実施した。いずれも層序はA区と同じであった。B区では、直径1m弱、深さ約80cmを測る底に炭が堆積した土壙2カ所を検出したが、地元の作業員の話しから、これらは戦後に家庭用の炭を焼いた簡易な炭焼き穴、小炭焼きの土壙であることがわかった。ほかに遺構、遺物は出土しなかった。

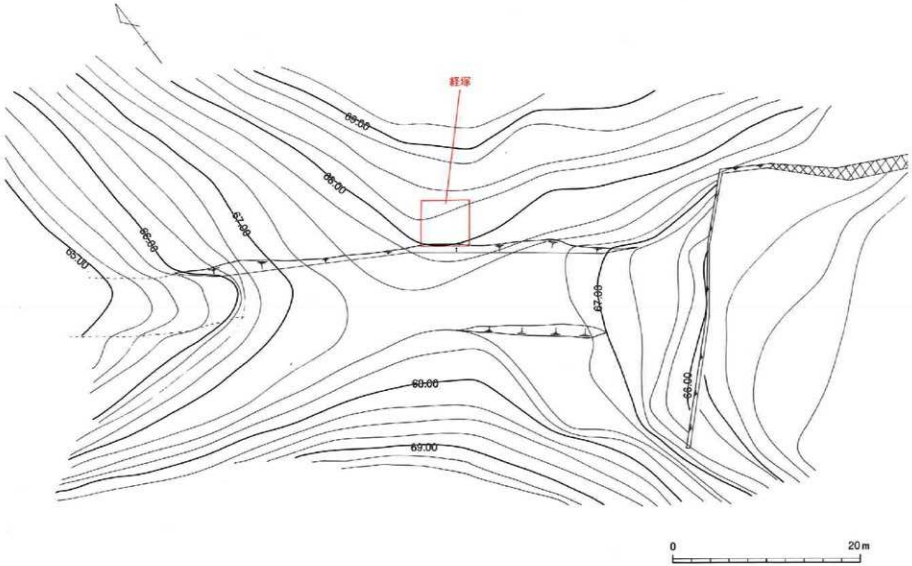
D区は、480㎡について調査を実施した。かつて耕作がおこなわれていた痕跡として表面には石垣や水路の痕跡が残っていた。層序は、暗褐色土の下が地山である。全面を地山まで掘り下げたところ、調査区中央付近は巨大な岩石がゴロゴロしており、遺構は検出できなかった。南西側ではピット群が検出されたが、このピット群は不整形な形状のものがほとんどで、大部分が樹根の痕跡である可能性が高いと思われる。遺物は風化が著しい須恵器小片数点が出土したのみである。

峠から北西に下った緩斜面に設定したトレンチは、いずれも整然とした層序で、遺物は出土せず、

古い道の痕跡等なんら遺構は検出できなかった。



第180図　岩沙峠遺跡位置図および調査区



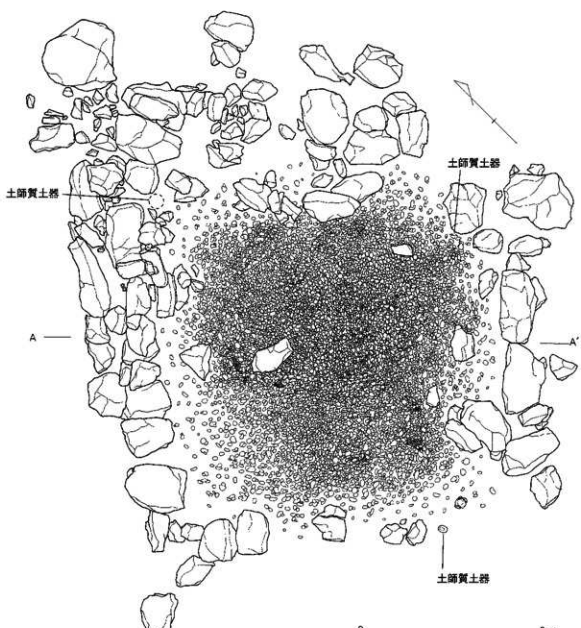
第181図　岩汐遺跡経塚周辺の地形図

礫石経塚

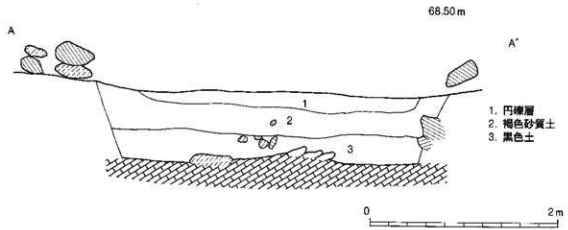
A区の遺構としては唯一、礫石経塚を検出した。礫石経塚は峠頂の最高部の平坦地をややはずれた、標高68.00m前後の東北側の緩斜面に築かれていた（第181図）。おそらく峠頂の道端にあたる場所であろう。

・遺構（第182図）

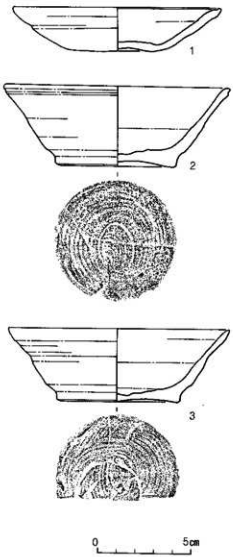
遺構は平面方形で、周囲は長辺40cm前後の大きめな山石を積み上げて囲いを作っている。山石は周辺で産出する石を利用している。囲い石は当時の地表面の上から積み上げており、北西側の積み石は2～3段が残っていたが、そのほかは崩落や抜き取りで残りが悪かった。復原すると、外法は一辺約5m、内法は一辺約3.5mを測る。経石を含む円礫は5cm前後のものが多く、経塚周辺にも散乱して



第182図　経塚平面図



第183図　経塚セクション図



第184図　経塚出土土器実測図

いたが、当初は石囲いの内側の2.5×2.5mの範囲を、地表面から15cm程度掘り下げて、その中に納めていたようである。円礫層は、厚いところで約20cmを測る（第183図）。経石が埋納された回数は、セクションからから判断すると、一度か、数度にわたったとしてもきわめて短い期間内であったと思われる。

・遺物

礫石経塚の石囲いの内側からは、経石に混じって中世土師器、古銭が出土した。

中世土師器

皿や坏6～7点分の破片が出土し、そのうち復原できたものは第184図に示した3点である。1は完形品の皿で、口径11cm、器高2.4cmを測る。器面調整は内外面とも回転ナデで、底部はナデた後上へ押し上げている。2は坏で、口径12cm、底径6cm、器高4.3cmを測る。器面調整は内外面とも回転ナデで、底部は糸切りである。3は坏で、口径11.7cm、底径6.6cm、器高3.9cmを測る。器面調整は内外面とも回転ナデで、底部は糸切りである。

1～3とも口縁端部にススが付着しており、灯明皿として使われていたことがうかがえる。。

古銭

7点が出土した。第185図の1は咸平元寶（初鋳998年）、2は景徳元寶（初鋳1004年）、3は嘉祐通寶（初鋳1056年）、4は熙寧通寶（初鋳1068年）、5は元豊通寶（初鋳1078年）、

6は聖宋元寶（初鋳1101年）、7は腐食のため解読不明である。1～6はすべて宋銭である。

経石

経石は川原石を主とする円礫に、墨で経文の文字を1石につき1文字ずつ書いた一字一石が大半で、多字一石も4点出土した。円礫は非常に大量に出土し、総数は数えていないが、そのうち墨書文字が確認できた円礫の総数は全体の1割にもはるかに満たないと思われる767点であった。長い年月を経て、墨書文字が消えてしまった経石もあるであろうが、大部分は文字が書かれていない円礫が納められていたようである。

一字一石は、経文を一石につき一字ずつ書いたものと思われるが、どの教典を書いたものかについては不明である。判読できた文字とその出土個数は、199頁の表で示したので参照されたい。

また、この経塚の性格を判断するためには、多字一石の文が大きなヒントになると思われる。赤外線を照射しても読めない部分があって非常に残念なのだが、その文は第186図の1が「[illegible]法界万霊」、2が「[illegible]松吉[illegible]」[註(1)]、3が「[illegible]●●乃母●[illegible]」、4が「…●吉[illegible]」であった。1以外は人名が書かれているようである。

円礫に書かれた墨書文字は、墨の濃さや筆跡等に若干の違いが認められ、素人目に判断して下記のように5タイプの字に分けることができた。

a．墨が薄めで、線が太く大きめで大胆な字……第187図

b．墨が濃く、線が細く小さめで達筆の字……第188、189図

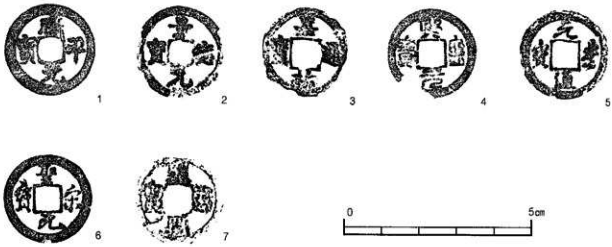
c．線に細い太いの強弱がある、小さめな字……第190図

d．線がやや太めで、流れに欠ける字……第191図

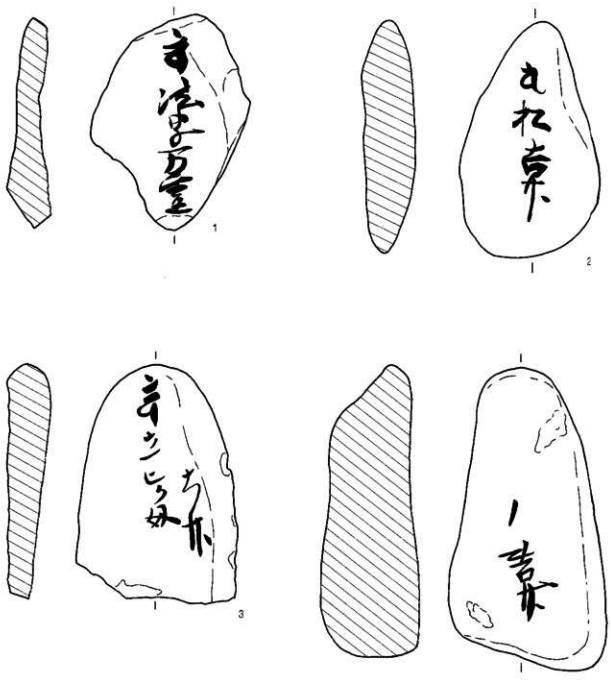
e．全体に角ばった字……第192図

このことから、経石は5人前後の複数の人の手によってかかれたことが推定される。

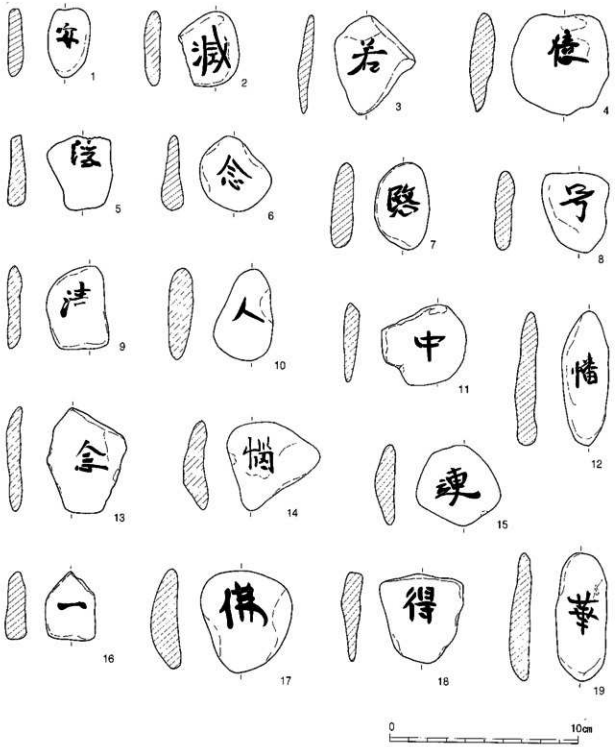
註（1）[illegible]は菩の略字である。



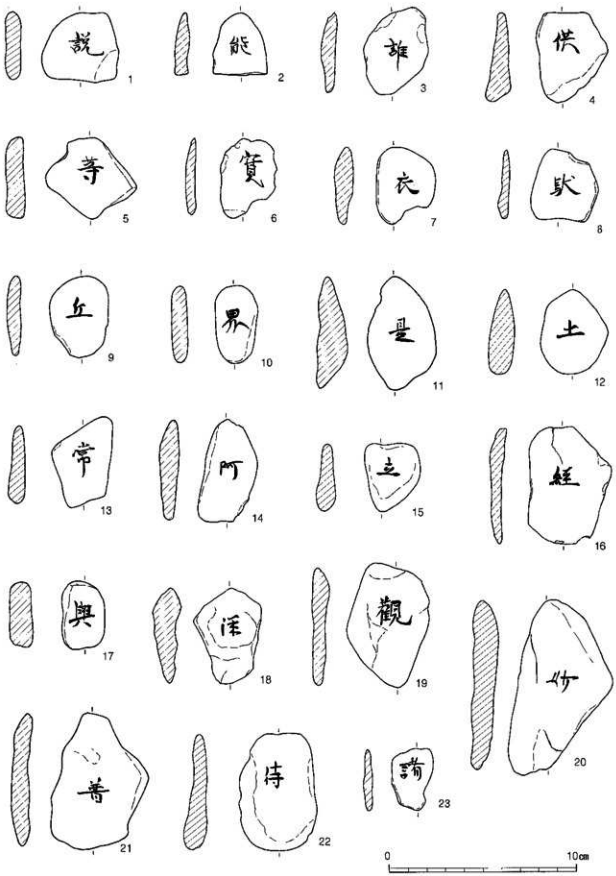
第185図　経塚出土古銭拓影



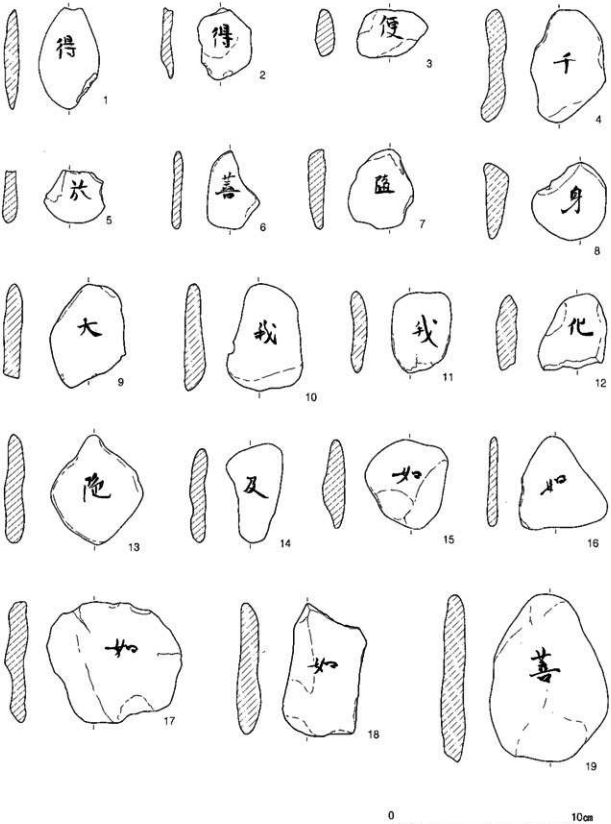
第186図　経石実測図（１）



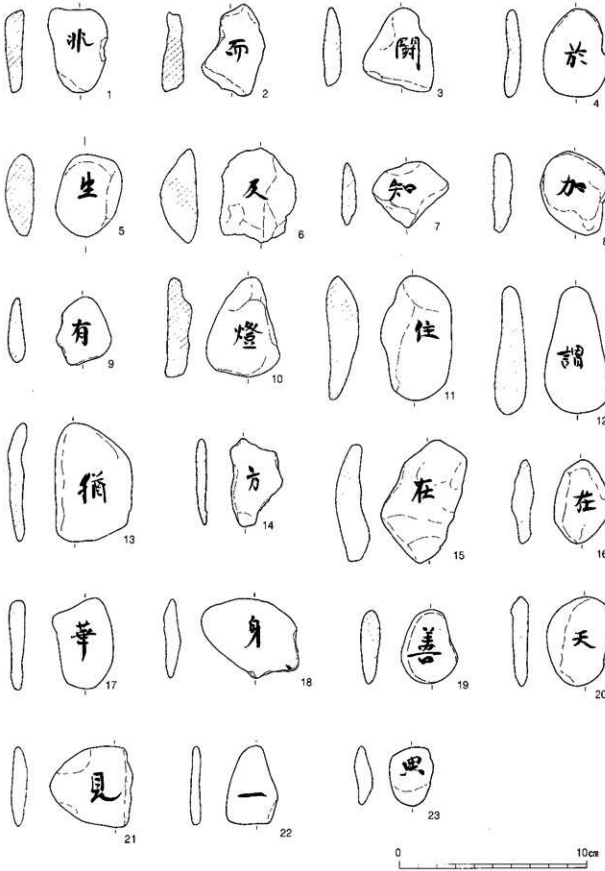
第187図　経石実測図（２）



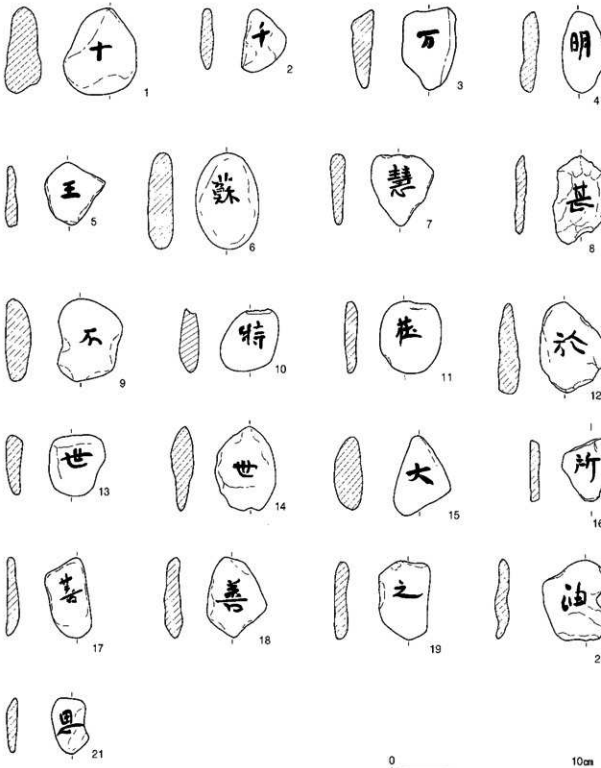
第188図　経石実測図（３）



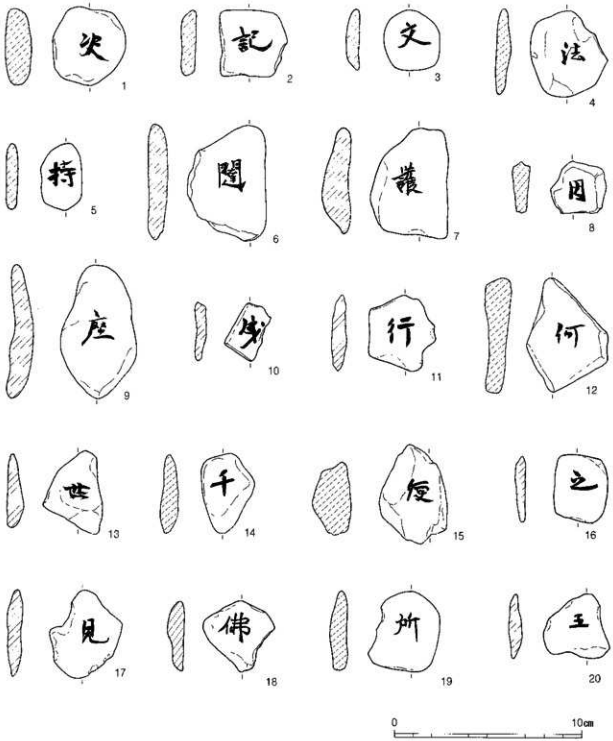
第189図　経石実測図（４）



第190図　経石実測図（５）



第191図　経石実測図（6）



第192図　経石実測図（７）

墨書文字の種類と個数

文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数	文字	個数
佛	8	駄	2	天	1	速	1	忍	1
若	6	之	2	蘇	1	説	1	来	1
菩	5	而	2	普	1	寛	1	飛	1
法	5	生	2	深	1	禁	1	演	1
諸	5	或	2	黄	1	品	1	却	1
衆	4	前	2	待	1	局	1	貨	1
大	4	能	2	観	1	度	1	時	1
得	4	典	2	阿	1	池	1	量	1
於	4	有	2	妙	1	猶	1	人	1
如	4	念	2	何	1	品	1	清	1
見	3	及	2	行	1	西	1	滅	1
我	3	一	2	座	1	上	1	亦	1
供	3	華	2	因	1	海	1	号	1
所	3	與	2	界	1	浮	1	安	1
便	3	王	2	常	1	衣	1	覚	1
身	3	在	2	護	1	土	1	悩	1
世	3	特	2	闍	1	立	1	霊	1
千	3	兆	1	持	1	養	1	家	1
善	3	上	1	決	1	尽	1	証	1
是	2	十	1	思	1	悩	1	商	1
記	2	占	1	油	1	尊	1	梵	1
摩	2	方	1	荘	1	丘	1	吉	1
不	2	僧	1	文	1	祈	1	須	1
誰	2	住	1	門	1	向	1	義	1
慧	2	方	1	遊	1	過	1	隆	1
経	2	願	1	利	1	歳	1	縦	1
随	2	煙	1	済	1	蔵	1		
明	2	闘	1	解	1	牧	1		
知	2	加	1	面	1	仁	1		
為	2	飽	1	衆	1	当	1		
幡	2	化	1	悠	1	中	1		

・A区の礫石経塚に伴わない遺物

表土や褐色砂質土層から、須恵器破片が若干出土した。

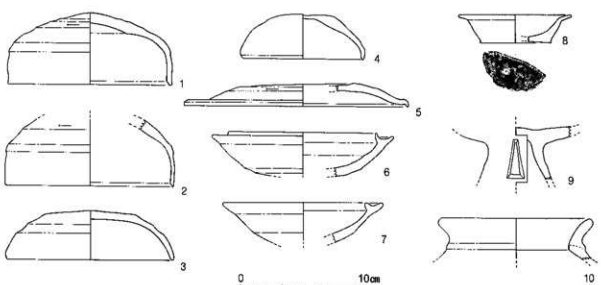
第193図の1～5は蓋、6・7は坏、8は灯明皿、9は高坏、10は壺である。個体数が少ないわりに、時期幅が広いことが特徴であり、峠の路傍というこの場所の性格を物語っているようである。

・D区遺構（第194図）

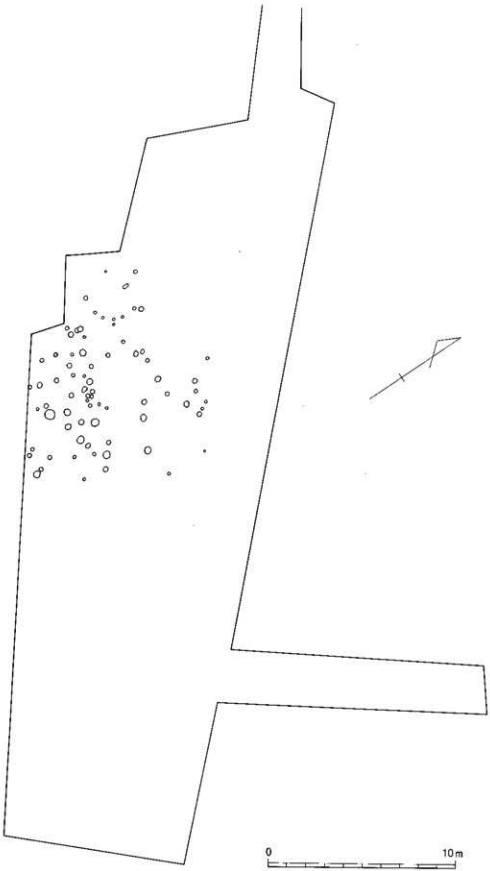
調査区の南西角を中心に、若干のピットを検出した。これらのピットは不整形のものが多く、大部分は樹根の痕跡と思われる。D区付近はかつて茶畑として利用されていたので、それにともなう掘立小屋のようなものがあったかもしれないが、ピットから建物跡を復原することはできなかった。

調査区の中央から南西方向は、高さ1m近い人力では動かせないような転石がゴロゴロしており、遺構は存在しなかった。

遺物は、須恵器の小片が数点出土したが、いずれも2～4cm四方くらいの甕の器壁部分で、割れ口は風化して丸くなっていた。



第193図　A区出土土器実測図



第194図　区ピット検出状況図

小結

岩沙峠は大井町と朝酌町の町境であり、両町を結ぶ峠越えの道が通っている。この峠頂で、道の北東脇と考えられる緩斜面で礫石経塚を1所検出した。

この礫石経塚は、外法5mの石囲いの中に経石を納めたもので、当初は地表面に露出していたと思われる。石囲い遺構の中には、数え切れないほど大量の円礫が納められており、その中に混じって経石767点が出土した。円礫は5cm前後の大きさで、墨書があるものと無いものでの違いは見られなかった。経石は、円礫に墨で経文を一石につき一字ずつ書いた一字一石が大半で、4点だけ多字一石も出土した。教典の種類は不明である。

墨書の筆跡を観察すると、複数の人の手によって書かれたことがわかり、墨書されていない円礫はあるいは文字を書けない人が他の人と一緒に経文を唱えながら納めたものかもしれない。

多字一石を見ると、「[illegible]法界万霊」のほかは、「[illegible]松吉[illegible]」など、人名がしるされたもので、この経塚の性格は、祖先の追善供養の意味合いが強いと思われる。

この礫石経塚の時期については、年号が墨書されていないため明確ではない。しかし、経塚内から出土した灯明皿を観察すると、12世紀にさかのぼってよいような土師質土器も出土しているが、それらは、いわゆる“ヘソ皿”と呼ばれる中世土師器と共伴しているので、16世紀代の経塚と考えてよいであろう。また、経塚内から出土した古銭はすべて北宋銭で、17世紀になって急速に普及した寛永通寶が混じっていない点からも16世紀代と考えて差し支えないものと考える。

ところで、16世紀代の出雲地方といえば戦乱の時代である。この経塚にはこのような時代背景も関与しているのであろうか、この点に関しては推測の域を出ない。

多字一石観察表

図面番号	墨書文字	石材	法量(cm/g) 縦	横	厚	重	備考
186－1	〃法界万霊	流紋岩	5.7	4.2	1.2	23.0	
186－2	〃松吉本	〃	6.3	3.8	1.3	39.4	
186－3	〃○○乃仁○本	〃	6.2	4.2	1.1	35.8	
186－4	……墓	〃	8.0	4.2	2.6	123.3	

一字一石観察表（Ⅰ）

図面番号	墨書文字	石材	法量(cm/g) 縦	横	厚	重	備考
187－1	安	流紋岩	3.6	2.2	0.85	8.5	
187－2	滅	〃	4.0	3.2	0.9	17.1	
187－3	若	〃	5.3	4.4	0.65	16.5	
187－4	僅	〃	5.2	5.2	1.2	40.3	
187－5	洋	〃	4.0	3.5	0.9	14.5	
187－6	企	〃	4.0	3.7	1.15	15.6	
187－7	塾	〃	4.6	3.9	1.2	15.5	
187－8	号	〃	4.2	3.6	1.0	20.9	
187－9	清	〃	4.4	3.0	0.75	17.2	
187－10	人	〃	4.9	3.1	1.3	20.2	
187－11	中	〃	4.2	4.5	0.8	19.7	
187－12	舗	〃	7.2	2.5	1.4	22.0	
187－13	企	〃	5.6	4.0	0.75	21.9	
187－14	俱	〃	4.7	4.9	1.2	27.7	
187－15	運	〃	4.3	4.4	1.05	23.0	
187－16	一	〃	3.6	2.6	1.1	16.1	
187－17	佛	〃	5.4	4.9	1.7	41.2	
187－18	得	〃	4.7	4.5	1.0	25.5	
187－19	掌	〃	6.8	2.7	1.1	24.9	
188－1	説	〃	3.7	4.1	0.9	18.7	
188－2	能	〃	3.5	2.9	0.8	9.1	
188－3	誰	〃	4.6	3.4	0.8	16.2	
188－4	偶	〃	4.8	3.8	1.4	19.9	
188－5	?	〃	4.3	4.9	1.0	22.6	
188－6	寛	〃	4.2	3.0	0.5	8.7	
188－7	衣	流紋岩	4.1	3.2	1.2	13.9	
188－8	駄	〃	3.7	3.5	0.6	11.6	
188－9	正	〃	4.4	3.2	0.7	12.8	
188－10	界	〃	4.2	2.3	0.9	11.1	
188－11	是	〃	6.0	3.6	1.7	31.8	
188－12	土	〃	4.5	3.5	1.5	26.2	
188－13	常	〃	4.8	3.3	0.9	15.5	
188－14	阿	〃	5.5	3.2	1.0	17.1	
188－15	立	〃	3.5	2.9	1.0	12.2	
188－16	経	〃	6.2	4.3	0.8	25.5	
188－17	興	〃	3.6	2.3	1.2	13.3	
188－18	源	〃	5.1	3.6	1.5	20.2	
188－19	鏡	〃	6.6	4.3	0.9	28.3	
188－20	妙	〃	9.0	5.0	1.3	80.0	
188－21	普	〃	7.2	5.2	1.1	47.4	
188－22	神	〃	6.2	4.0	1.15	37.2	
188－23	諸	〃	3.3	2.2	0.45	4.4	
189－1	得	〃	5.4	3.3	0.8	18.1	
189－2	得	〃	2.9	3.8	0.6	8.5	
189－3	便	〃	2.6	3.8	1.1	9.2	
189－4	千	〃	6.0	4.0	1.1	32.6	
189－5	於	〃	2.8	3.15	0.75	7.6	
189－6	善	〃	4.2	2.8	0.5	7.0	
189－7	脇?	〃	4.2	3.4	0.9	17.1	
189－8	身	4.1	4.0	1.3	17.7		

一字一石観察表（Ⅱ）

図面番号	墨書文字	石材	法量（cm／g） 縦	横	厚	重	備考
189 9	大	流紋岩	5.0	4.0	1.0	29.2	
189−10	我	〃	5.7	4.0	1.2	32.2	
189 11	我	〃	4.3	3.0	0.8	15.6	
189−12	化	〃	3.6	2.9	1.05	20.4	
189 13	飽	〃	5.8	4.9	0.95	29.5	
189−14	及	〃	5.3	3.0	0.8	13.9	
189 15	如	〃	4.7	4.3	1.2	28.7	
189−16	如	〃	5.1	4.8	0.6	17.8	
189 17	如	〃	6.4	7.0	1.0	61.9	
189−18	如	〃	7.1	4.0	1.3	48.8	
189 19	青	〃	8.9	6.3	1.4	88.0	
190− 1	青	〃	4.4	3.1	1.0	18.1	
190 2	面	〃	4.9	3.4	1.1	17.4	
190− 3	面	〃	4.5	3.8	1.0	16.0	
190 4	於	〃	4.7	3.4	0.8	16.5	
190− 5	生	〃	4.5	3.3	1.5	24.2	
190− 6	及	〃	5.0	4.0	2.1	33.4	
190− 7	如	〃	3.5	4.1	0.8	12.0	
190− 8	加	〃	4.5	3.6	1.1	21.1	
190− 9	有	〃	3.5	2.9	0.9	10.2	
190−10	益	〃	5.3	3.9	1.25	28.4	
190−11	住	〃	6.6	3.8	1.6	40.4	
190 12	調	〃	6.8	3.5	1.7	36.5	
190−13	調	〃	6.3	4.0	0.75	28.8	
190−14	万	〃	4.8	2.8	0.6	7.9	
190−15	在	〃	6.5	4.7	1.7	39.6	
190−16	在	〃	4.4	3.0	1.0	16.9	
190−17	幸	〃	4.8	3.2	0.9	15.3	
190−18	身	〃	4.2	4.6	0.8	22.5	
190−19	雪	〃	3.9	3.0	1.0	14.3	
190−20	天	〃	4.7	3.5	0.95	19.6	

図面番号	墨書文字	石材	法量（cm／g） 縦	横	厚	重	備考
190 21	見	流紋岩	4.3	4.4	1.0	21.2	
190−22	一	〃	4.2	2.8	0.6	7.8	
190 23	典	〃	3.2	2.3	0.8	7.9	
191− 1	十	〃	4.6	3.9	1.9	32.8	
191− 2	千	〃	3.3	2.5	0.7	6.1	
191− 3	万	〃	4.3	2.8	1.2	16.2	
191 4	明	〃	4.4	2.3	0.9	9.7	
191− 5	王	〃	3.3	3.2	0.7	7.5	
191 6	寮	〃	5.1	3.4	1.4	25.4	
191− 7	量	〃	3.75	3.3	0.8	9.6	
191 8	其	〃	4.7	2.8	0.6	8.6	
191− 9	不	〃	4.4	3.5	1.4	25.1	
191 10	特	〃	3.3	2.8	1.05	11.4	
191−11	芥	〃	3.8	3.3	0.7	13.6	
191−12	於	〃	4.8	3.6	1.15	21.1	
191−13	世	〃	3.0	3.3	0.8	10.4	
191−14	世	〃	4.4	3.2	1.15	15.9	
191−15	大	〃	4.2	3.0	1.6	18.8	
191−16	所	〃	3.4	2.4	0.5	6.1	
191−17	菩	〃	4.2	2.5	0.7	8.7	
191−18	善	〃	4.3	3.2	0.95	14.9	
191−19	之	〃	4.2	2.8	0.8	12.2	
191−20	油	〃	4.3	3.4	0.7	12.6	
191−21	思	〃	3.0	2.0	0.7	4.7	
192− 1	決	〃	4.1	3.9	1.35	27.8	
192− 2	記	〃	3.55	3.5	0.8	18.4	
192− 3	文	〃	3.2	3.2	0.7	9.8	
192 4	法	〃	4.6	4.1	0.8	18.2	
192− 5	浄	〃	3.5	2.2	0.7	7.1	
192− 6	聞	〃	6.1	4.2	1.1	41.1	
192− 7	願	〃	5.9	4.2	1.6	44.5	

一字一石観察表（Ⅲ）

図面番号	墨書文字	石材	法量（mm／g）				備考
			縦	横	厚	重	
192－8	用	流紋岩	2.2	3.0	1.0	8.7	
192－9	座	〃	7.1	4.0	1.25	42.2	
192－10	成	〃	3.1	2.0	0.5	4.8	
192－11	行	〃	4.0	3.6	0.8	12.6	
192－12	何	〃	6.1	4.3	1.3	32.1	
192－13	世	〃	4.4	3.2	0.9	12.2	
192－14	千	〃	4.3	2.9	1.0	12.3	
192－15	候	〃	5.3	3.7	2.1	36.2	
192－16	之	〃	3.5	2.8	0.5	9.0	
192－17	見	〃	4.7	3.9	0.9	16.2	
192－18	佛		3.7	3.8	0.9	11.0	
192－19	所	〃	4.2	3.0	0.9	19.9	
192－20	工	〃	3.5	3.5	0.7	9.9	

岩汐峠遺跡Ａ区出土土器観察表

図面番号	種別	器種	法量（cm）	胎土	焼成	色調	ろくろ	備考
193－1	須恵器	蓋	口径13.1 器高5.7	密（長石粒をわずかに含む）	良好	（内、外、断）灰色	右回転	
193－2	須恵器	蓋	口径13.3	密	良好	（内、外）灰色	右回転	
193－3	須恵器	蓋	口径13.2 器高3.9	密	良好	（内、外）灰色	右回転	
193－4	須恵器	蓋	口径9.5 器高4.6	密（長石粒を含む）	良好	（内）灰色 （外）白灰色～灰色	右回転	
193－5	須恵器	蓋	口径16.8 器高1.8	砂粒を多く含む	良好	（内、外）灰色	右回転	
193－6	須恵器	坏	口径11.7 受部径14.6	2mm～1mm大の長石粒を含む	良好	（内、外）灰色	右回転	
193－7	須恵器	坏	口径10.0 受部径12.6	密	良好	（内、外）灰色	右回転	
193－8	須恵器	皿	口径8.8 器高2.25	密	良好	（内、外、断）灰色	右回転	底部糸切り
193－9	須恵器	高坏		密	良好	（内、外）灰色	右回転	
193－10	須恵器	甕	口径11.8	長石粒を含む	良好	（内、外）灰色	右回転	

第4章　結　　語

平成5年度から平成9年度にかけて、西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業にかかる発掘調査として西尾町、朝酌町における発掘調査を実施した。また、今回の事業に先立って大井2期地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業にかかる発掘調査として朝酌町、大井町における発掘調査を実施している。上記の2事業は、中海大橋から川津町まで、和久羅山南麓に農道を建設しようとするものであって、発掘調査は道路建設の幅に限って実施した。

西尾町付近の『出雲国風土記』の記載は必ずしも明確ではないが、天和3年編纂の『出雲国風土記抄』によれば、現在の西尾町は奈良時代には島根郡山口郷に含まれ、大井、朝酌町は島根郡朝酌郷に含まれるという。しかし、加藤義成氏の『出雲国風土記参究』[1]では、今回調査を実施した遺跡はすべて朝酌郷の内に含まれている。また、服部氏も？としながらも西尾町を朝酌郷の中に含めておられる[2]。後者の説に従うとすれば、今回の発掘調査は古代の朝酌郷を東西に横断して調査したことになり、興味深い結果を得ることができた。

朝酌郷に関する一番古い文献は、『出雲国風土記』である。

それによると、朝酌郷の地名伝承については「朝酌郷、郡家正南一十里六十四歩。熊野大神命詔、朝御饌勘養、夕御饌勘養、五贄緒之處定給。故云朝酌。」と記されている。加藤氏の通釈によると、熊野大神の仰せによって、大神の朝夕の神センに奉仕する部族をここにお定めになった。そこで朝の御膳に奉仕する部族の意で朝酌というのである[3]。一般人が利用した朝酌渡の項には「朝酌促戸渡、東有通道、西有平原、中央渡。則筌亘東西、春秋入出大小雑魚、臨時來湊筌邊、駱駿風水壓衝、或破壊筌、或製日魚、於鳥被捕。大小雑魚、濱譟家閭、市人四集、自然成廓矣。」とあり、賑わいの様子が記されているほか、枉北道の項では「朝酌渡、廣八十歩許、自國庁通海邊道矣。」と記されている。また大井濱の項では「大井濱。則有海鼠海松。又造陶器也。」とあり、漁労をおこなうとともに須恵器を生産していたことが記されている。

以上が西暦733年、8世紀前半の朝酌郷の様子である。

今回の発掘調査を実施した遺跡は9遺跡で、時期は5世紀から16世紀にわたるが、特に古墳時代後期における興味深い調査成果を得たのでここで改めて概観してみたい。

西尾町地内には、廟所古墳や観音寺山古墳といった一辺30mを測る大方墳が大橋川に近い低丘陵上に築かれている。発掘調査はなされていないが、現時点では墳形等から中期古墳と推測されている。

これに対し、約30基の小規模古墳から構成される米坂古墳群がやや北の奥まった低丘陵上に築かれている。調査の結果、その築造時期は5世紀後半から6世紀半ばということがわかった。いわゆる古式群集墳である。単純に考えると、前記の二大古墳が豪族の首長層の古墳であり、後者がその下層有力者の古墳群と考えられよう。そうすると、古墳時代中期から後期半ばにかけて、西尾町にはこれだけの古墳群を造り得る豪族の拠点があったことが考えられる。

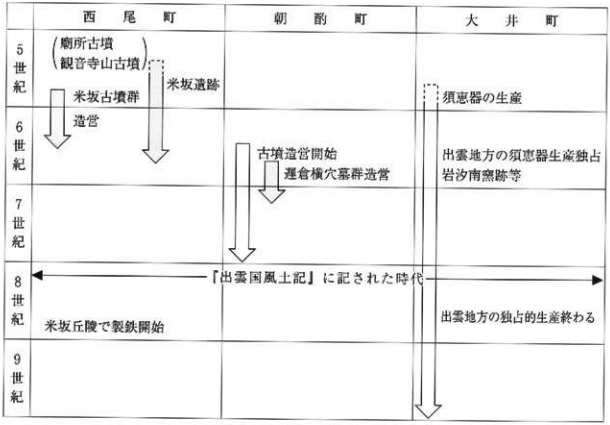
その拠点の中心部は定かでないが、米坂遺跡において、古墳時代中期から後期後半にかけての遺物が出土し、米坂古墳群が造営された時期とほぼ同時期の集落跡を検出した。米坂遺跡で検出した集落

跡は、地形の面から考えると、調査区外にも南北方向に長く広がっているものと推測される。また、米坂遺跡の約200m東方の安蔵主遺跡では、遺構は検出できなかったが、客土層中から現代の陶磁器に混じって古墳時代中期から後期を中心とする土器の小片が大量に出土した。この客土はどこから持ってこられたのかは明確ではないが、安蔵主遺跡をとりまく周囲の丘陵端部には、土を削り採った痕跡を崖状の地形として観察することができる。丘陵端部を削り取って平地面を広げ、かつ削り取った土を地形の低い場所に客土したものと思われるが、おそらくその削り取られた丘陵端部に集落跡の遺跡が存在していたのであろう。

このように見てくると、米坂遺跡や安蔵主遺跡周辺といった、和久羅山から派生する低丘陵南端部縁辺には古墳時代中期から後期にかけての住居跡が広く埋もれている可能性が高い。

西尾町を拠点とした豪族が背景に持っていた生業は不明であるが、この付近は生活に適した低丘陵が広がっているうえ、畑作や水田に適した微高地や低湿地が広がっており、南側には漁労にも水運にも便利が良い大鳩川が東西方向に流れている。これらのことを総合すると、西尾町近辺は人間の生活にとって非常に都合が良い場所であったと思われる。

ところが、古墳時代後期後半にはいると突然米坂遺跡の集落は廃絶され、米坂古墳群の築造も見られなくなる。その後、西尾町では米坂古墳群で6世紀後半の墳丘を持たない埋葬施設が造られたのを最後に、それ以降はしばらく遺跡の空白地域となる。そして、8世紀後半には米坂丘陵は墓域としてではなく、製鉄関連の生活域として利用されているのである。



古代朝酌郷（一部）の動向

これに対し、朝酌町では6世紀中葉頃から多くの古墳が築かれ始めている。全長60mという巨大な前方後円古墳の魚見塚古墳や、墳丘は失っているが精美な石棺式石室を内部主体に持つ朝酌岩屋古墳が首長墓的存在としてあげられるだろう。そのほかにも廻原古墳群、九日宮古墳群など数多くの小規模古墳が7世紀後半まで連綿と造営され続けている。

また、朝酌町では6世紀後半には遅倉横穴墓群が造られている。朝酌町は横穴墓掘削に適さない土質であるにもかかわらず、古墳ではなくあえて横穴墓という埋葬形態をとっていることには何らかの理由があるだろう。今回の発掘調査では多数存在すると推測される横穴墓群の内、5穴について調査を実施したが、2号横穴墓と5号横穴墓から耳環や刀子、太刀が出土したほかは、須恵器類の遺物しか出土しなかった。屍床はすべて須恵器床で、2号横穴墓の屍床墓片を観察したところ、焼成時に焼き歪みが生じて製品とならなかった不良品を利用していることがわかった。被葬者は須恵器製作工人と密接な関係があったことが推測される。遅倉横穴墓群の調査では6世紀後半に造営が開始され、7世紀前半まで追葬がおこなわれていたことが確認できた。

この付近における集落遺跡は見つかっておらず、朝酌町で古墳群を造営し続けた豪族の生活拠点は現時点では不明である。ただ、朝酌町を南北に流れる清水川周辺の谷地形は水田耕作に適した地形であり、この縁辺部に集落が埋もれている可能性は高い。

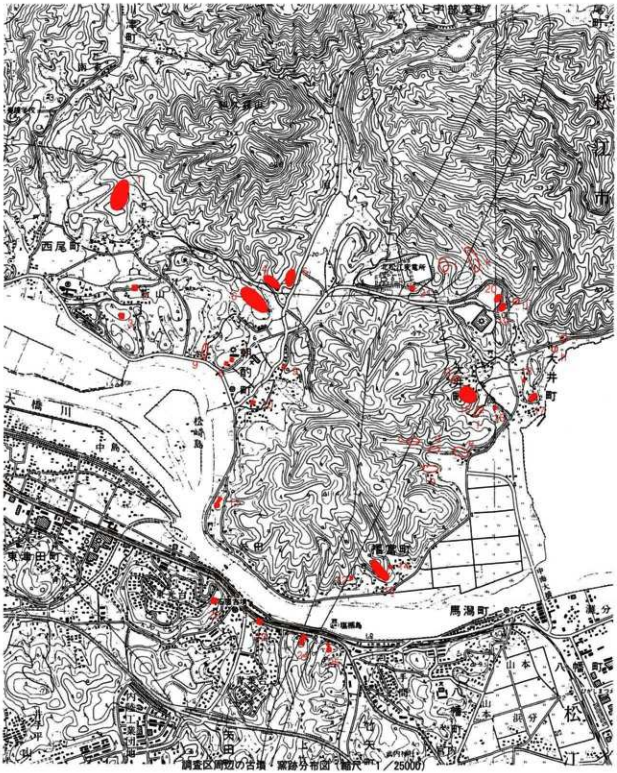
ちなみに朝酌町の古墳の特徴をあげるとすれば、石棺式石室もしくは石棺式石室の亜流と称される内部主体を持つ古墳がほとんどを占めていることであろう。石棺式石室を内部構造に持つ古墳の分布が、大庭町に続いて朝酌町に集中が見られることから、朝酌の豪族は出雲東部の在地首長、オウ勢力の影響を強くうけていたことが窺える。

このように、朝酌郷では6世紀中葉を境に大きな歴史的変動を見ることができるのである。

では、この時期はどのような時期であったかを考えてみたい。朝酌町近辺で一番大きな出来事といえば、6世紀後半に出雲地域に散在していた須恵器生産地が大井町1カ所に集中し、独占的な須恵器生産が開始されたことであろう。

岩汐遺跡が位置する谷を取り巻く丘陵縁辺は、まさにこの時期の須恵器窯跡が特に多く分布している。現時点で存在が明確となっているのは、岩汐南窯跡、ババタケ窯跡、後廻谷窯跡である。岩汐遺跡を調査した際には、6世紀後半を中心とする灰原関連の遺物、生活関連の遺物が大量に出土した。須恵器生産には薪集めに始まり、粘土採取、粘土精製、器物成形、陰干し、焼成、各地への輸送など多くの過程が必要であり、専門工人のほか多くの労働力を必要としたであろうことは想像に難くない。したがって、6世紀後半に大井町で飛躍的な須恵器の増産がおこなわれると同時に、大井町周辺の人口も以前に増して膨れあがっていたことは間違いない。筆者は、この時期の大増員に際して集められた人々が、米坂周辺に居住していた人々であったと考える。

米坂遺跡が廃絶する6世紀後半に造られた、米坂古墳群内の埋葬施設Dを見てみると、その屍床はほとんど焼成時においてひび割れた、不良品の蓋坏ばかりが敷かれた須恵器蓋坏床であった。この埋葬施設の被葬者は焼き損じの須恵器をまとまって入手することができる環境にあり、かつ良質の玉類を身につけることができる人物であった。これらのことにより、埋葬施設Dの被葬者は、須恵器生産



1. 米坂古墳群　2. 廟所古墳　3. 観音寺山古墳　4. 遥倉横穴墓群　5. 旭宮古墳群　6. 園原古墳群　7. 朝酌小学校校庭古墳　8. 朝酌小学校前古墳　9. 朝酌上神社跡古墳　10. 朝酌岩屋古墳　11. 魚見塚古墳　12. 明事山古墳　13. 阿弥陀寺裏山古墳群　14. 阿弥陀寺古墳群　15. 大井古墳群　16. 山巻古墳　17. イズキ山古墳群　18. 向山古墳　19. 池ノ奥古墳群　20. イガラビ古墳群　21. 別所古墳　22. 石屋古墳　23. 荒神畑古墳　24. 手間古墳　25. 岩舟古墳

a. 松ケ鼻窯跡　b. 岩汐南窯跡　c. 岩汐窯跡　d. 後園谷窯跡　e. ババタケ窯跡　f. 園谷窯跡　g. 寺尾窯跡　h. ジャバン窯跡　i. 山津窯跡　j. 池ノ奥窯跡　k. 明曽窯跡　l. 勝田谷窯跡

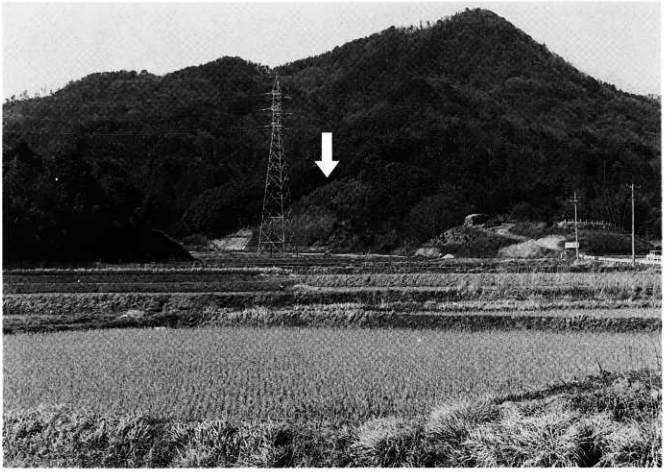
に関与した人物の中でもある程度階層の高い人物であったことが推察されるのである。

最後に、朝酌町では石棺式石室を内部構造に持つ古墳が多いこと、7世紀末まで連綿と古墳が造り続けられていることより、朝酌町の豪族はオウ勢力とのつながりが深く、また、遅倉横穴墓群の内部施設の状況から大井の須恵器生産とも関わりが深かったこと、さらに想像を膨らませて、6世紀後半頃から『出雲国風土記』に記載されているような、後の出雲国造が信奉した熊野大神へ仕える部族として位置づけられていた可能性があることを指摘して稿を終えたい。

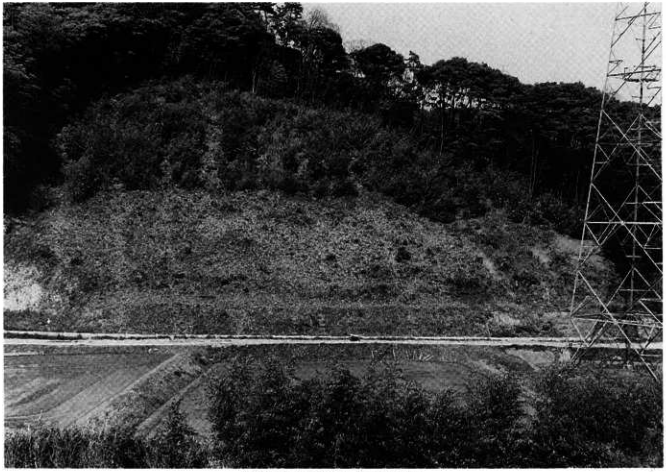
以上、調査の結果をふまえながらも、かなり推測を混じえて古代朝酌郷の古墳時代後期の動向について述べてきた。しかし、これだけの推論を導き出せる調査成果を得ることができたということで、今回の発掘調査は有意義であったと考える。

註　1）加藤義成『出雲国風土記参究』（1957年）
2）服部旻「朝酌地区と『出雲国風土記』」『しまねの古代文化』第1号（1993年）
3）註1に同じ。
4）魚見塚古墳「八雲立つ風土記の丘№140」（1996年）の説にしたがう。

図　　版



遥倉横穴墓群遠景（南より）



遥倉横穴墓群近景（南西より）

図版2

遅倉横穴墓群調査後全景

1号横穴墓（左）と2号横穴墓（右）の位置関係

3号横穴墓（左）と4号横穴墓（中）と5号横穴墓（右）の位置関係

作業風景